作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第206集

北田遺跡

主要地方道石岡下館線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第206集

北田（きただ）遺跡

主要地方道石岡下館線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県
財団法人　茨城県教育財団

序

茨城県は，21世紀の社会を展望し，産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と，県全域にわたる調和のとれた発展を図るために，県内の交通体系の整備を進めています。主要地方道石岡下館線道路改良事業も，そうした交通体系の整備と県土の一体的な振興を図るため，計画されたもので，その予定地内に，北田遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び，平成13年11月から平成14年２月まで北田遺跡の発掘調査を実施いたしました。この調査によって貴重な遺構と遺物が確認され，郷土の歴史を解明する上で多大な成果を上げることができました。

本書は，北田遺跡の調査成果を収録したものです。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，郷土への理解を深めると共に，教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査から報告書の刊行に至るまで，委託者である茨城県から多大なる御協力を賜りましたことに対し，深く感謝申し上げます。

また，茨城県教育委員会，真壁町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成15年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　齋藤佳郎

例　　言

1　本書は，茨城県下館土木事務所の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成13年度に発掘調査を実施した，茨城県真壁郡真壁町大字山尾字北田834番地ほかに所在する北田（きただ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間と整理期間は，以下のとおりである。

調　査　　平成13年11月１日～平成14年２月28日

整　理　　平成14年12月１日～平成15年３月31日

3　当遺跡の発掘調査は，調査第二課長鈴木美治の指揮のもと，調査第２班長矢ノ倉正男，主任調査員黒澤秀雄，調査員梅澤貴司が担当した。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第一課長川井正一の指揮のもと，主任調査員黒澤秀雄が担当した。

5　本書の作成にあたり，流路跡出土の木製品及び住居跡出土の柱材の樹種同定については，独立行政法人森林総合研究所の能城修一氏に御教示いただいた。流路跡出土の種子のモモとスモモについては，農林水産省果樹試験場核果類育種研究室の山口正己氏，オニグルミについてはミュージアムパーク茨城県自然博物館の小幡和男氏に御教示いただいた。

6　発掘調査及び整理に際し，御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，Ｘ軸＝＋29,880，Ｙ軸＝＋24,960の交点を基準点（A1a1）とした。なお，この原点は，日本測地系による基準点である。

調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。さらに，大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ…ｊ，西から東へ１，２，３…０とし，名称は，大調査区の名称を冠し，「A1a1区」「B2b2区」のように呼称した。

2　抄録の北緯及び東経の欄には，世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付して併記した。

3　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　流路跡－Ｒ

遺物　土器－Ｐ　土製品－ＤＰ　石器・石製品－Ｑ　木器・木製品－Ｗ　拓本記録土器－ＴＰ

土層　撹乱－Ｋ

4　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

炉―　粘土―　焼土―　黒色処理―　赤彩・繊維土器―

●土器・拓本記録土器　○土製品　□石器・石製品　★木器・木製品　―・―・― 硬化面

5　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

6　土層解説中の含有物については，各々総量で記述した。

7　遺構・遺物実測図中の掲載方法については，次のとおりである。

（１）　遺構全体図は400分の１，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを基本とした。

（２）　遺物は原則３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，その場合は個々に縮尺スケールで表示した。

8　「主軸」は，住居跡については炉や竈を通る軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線とし，その他については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は，主軸・長軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例　Ｎ－10°－Ｅ）

9　遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

（１）　土器の計測値の単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

（２）　備考欄は，土器の現存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

（３）　遺物番号については，土器・拓本のみ掲載の土器片，土製品，石器・石製品，金属製品，木製品ごとに通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

10　遺構一覧表における計測値は，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。

抄　　録

ふりがな	きただいせき
書名	北田遺跡
副書名	主要地方道石岡下館線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第206集
著者名	黒澤　秀雄
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029－225－6587
発行機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　　TEL　029－225－6587
発行日	2003（平成15）年3月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
北田遺跡（きただいせき）	茨城県（いばらきけん）真壁郡（まかべぐん）真壁町（まかべまち）大字（おおあざ）山尾（やまお）字（あざ）北田（きただ）834番地（ばんち）ほか	08503 － 045	36度 16分 07秒 （36度 16分 18秒）	140度 06分 43秒 （140度 16分 31秒）	44 ～ 46m	20011101 ～ 20020228	6,155.80㎡	主要地方道石岡下館線道路改良事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
北田遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡　6軒 土坑　45基 配石遺構　2基 遺物包含層1か所	縄文土器（深鉢・器台形土器），石器・石製品（石鏃・磨製石斧・凹石・石錐）	縄文時代から平安時代にかけての集落跡である。今回の調査区からは，平安時代の3条の流路跡が確認されている。
		古墳	竪穴住居跡　13軒 土坑　2基	土師器（坏・高坏・甕・甑）	
		奈良・平安	竪穴住居跡　2軒 流路跡　3条	土師器（坏・甕），須恵器（坏・盤・蓋・円面硯），木製品	
		不明	土坑　28基		

目　　次

序
例言
凡例
抄録
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 2
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 2
第3章　調査の成果 …… 7
　第1節　遺跡の概要 …… 7
　第2節　基本層序 …… 7
　第3節　遺構と遺物 …… 8
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 8
　　(1)　竪穴住居跡 …… 8
　　(2)　土坑 …… 25
　　(3)　配石遺構 …… 32
　　(4)　遺物包含層 …… 33
　　2　古墳時代の遺構と遺物 …… 36
　　(1)　竪穴住居跡 …… 36
　　(2)　土坑 …… 67
　　3　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 68
　　(1)　竪穴住居跡 …… 68
　　(2)　流路跡 …… 71
　　4　その他の遺構と遺物 …… 83
　　(1)　土坑 …… 83
　　(2)　遺構外出土遺物 …… 85
　第4節　まとめ …… 89
付章　北田遺跡の自然科学分析
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

茨城県は，真壁郡真壁町山尾地区において，主要地方道石岡下館線の改良事業を進めている。

平成12年6月1日，茨城県下館土木事務所長から茨城県教育委員会宛に，主要地方道石岡下館線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。

これに対して茨城県教育委員会は，平成12年10月20日に現地踏査を行い，平成12年12月4・5日に試掘調査を実施した。そして，平成13年1月17日，茨城県教育委員会教育長から茨城県下館土木事務所長宛に，事業地内に北田遺跡が所在する旨を回答した。

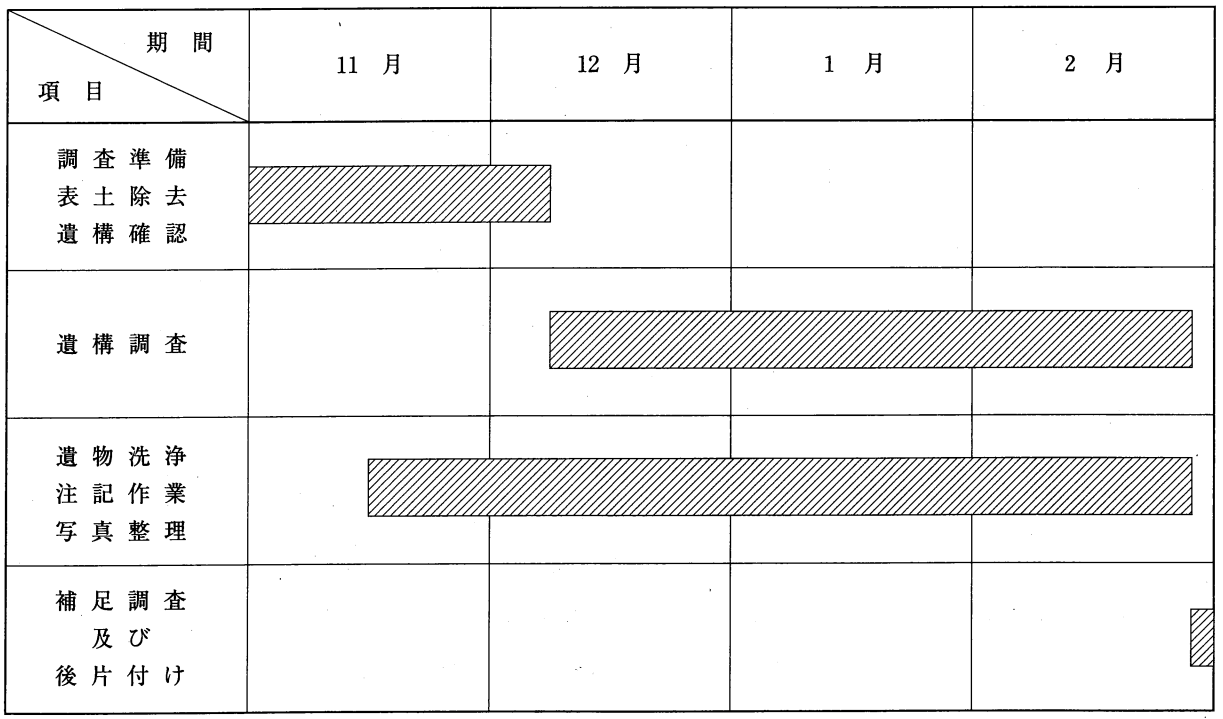
平成13年3月23日，茨城県下館土木事務所長から茨城県教育委員会教育長宛に，事業地内における埋蔵文化財（北田遺跡）の取り扱いについて協議書が提出された。

その結果，現状保存が困難であることから，平成13年3月26日，茨城県教育委員会教育長から茨城県下館土木事務所長宛に，事業地内における北田遺跡について，記録保存のための発掘調査を実施する旨回答し，併せて，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は，茨城県下館土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け，平成13年11月1日から平成14年2月28日まで発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

北田遺跡の調査は，平成13年11月1日から平成14年2月28日までの4か月間実施した。以下，調査の経過について，その概要を表で記載する。



第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

北田遺跡は，茨城県真壁郡真壁町大字山尾字北田834番地ほかに位置している。

真壁町の地形は，茨城県と福島県境にある八溝山から南に伸びる八溝山地の南端部に位置する筑波山を中心とする筑波山塊に接し，東側を南流して霞ヶ浦に流入する桜川と，西側を緩流して利根川に合流する小貝川の低地及びそれらに挟まれた，桜川低地と真壁台地からなる。桜川には，観音川や山口川をはじめとする多くの支流が注いでいる。筑波山塊西縁にも，断片的に段丘面が分布しているが，山地からの土石流や扇状地性堆積物の流入・堆積によって，その分布は不明瞭となり，また，露頭も不明瞭である。山麓緩斜面の構成層は，やや厚く堆積した花崗岩の巨礫層である。

北田遺跡は，筑波山塊と真壁台地に挟まれた桜川左岸の標高44～46mの沖積低地に立地している。当遺跡の調査前の現況は，水田及び畑地である。

第2節　歴史的環境

北田遺跡が立地する桜川流域には数多くの遺跡が所在し，特に古墳及び古墳群が数多い。

旧石器時代の遺跡は，南椎尾小山遺跡[1]〈41〉から頁岩製のナイフ形石器・剥片が，隣接する南椎尾八幡前遺跡〈40〉からチャート製の尖頭器・頁岩製の石核等が出土している。

縄文時代の遺跡は，早期の御祓立場遺跡[2]〈38〉がある。前期から後期にかけての遺跡は，台地上あるいは低地に立地している。吾妻塚遺跡からは前期の浮島式土器が，日月遺跡〈22〉・鞘戸遺跡〈23〉・大夫台遺跡〈24〉・高内遺跡[3]〈25〉からは中期の加曽利E式土器が，中坪遺跡〈37〉からは後期の堀之内式土器が，高内遺跡からはわずかに晩期の大洞式土器が出土している。

弥生時代の遺跡では，熊宮遺跡[4]〈21〉・中坪遺跡・日月遺跡・鞘戸遺跡・大夫台遺跡・高内遺跡等が確認されている。熊の宮遺跡では後期の住居跡が2軒，南椎尾小山遺跡では後期の住居跡が2軒調査されている。

古墳時代の遺跡は，当遺跡の中心となる時期であるが，町内では古墳及び古墳群が多く，集落の調査事例は少ない。古墳では，加波山西麓には，若林古墳群〈3〉・車塚古墳〈4〉・十石塚古墳〈5〉・隠坊塚古墳〈6〉・白井中坪古墳群〈7〉・端上古墳群〈8〉がある。筑波山麓には，おふじ権現古墳〈12〉・吾妻塚古墳〈13〉・平塚古墳〈14〉・北椎尾天神塚古墳[5]〈15〉・仙原塚古墳〈16〉・北原古墳〈17〉・大柳古墳〈18〉・松石古墳群〈19〉・羽鳥天神塚古墳〈20〉・元寺家古墳群〈35〉・南椎尾小山遺跡がある。北椎尾天神塚古墳は中期（5世紀中葉）の円墳で，二つの粘土槨の埋葬施設から鉄鏃・鉄鉾・大刀・鉄剣・鉄斧や県内初例で，関東地方では3例目といわれる三角板皮綴衝角付甲等が出土している。南椎尾小山遺跡からは，後期の円墳が1基確認されている。観音川流域には原方円鏡塚〈2〉・八幡山古墳〈9〉・鹿島宮古墳〈10〉・三の塚古墳〈11〉がある。八幡山古墳からは銅鋺が出土している。このうち前方後円墳はおふじ権現古墳・仙原塚古墳・北原古墳の3基だけである。集落は，熊の宮遺跡では中期の住居跡が4軒，南椎尾小山遺跡では前期の住居跡が1軒，南椎尾八幡前遺跡では中期から後期にかけての住居跡が26軒調査されている。南椎尾八幡前遺跡からは6世紀前半に位置付けられる置き竈が出土している。

奈良・平安時代は当遺跡の流路跡の時期であり，町内では寺院跡や館跡が多い。特に寺院跡は筑波山の山岳信仰との関わりが考えられ，修験道の拠点としての建立と思われる。寺院跡では，山尾権現山廃寺〈39〉・下谷貝廃寺（谷貝廃寺）〈27〉・源法院廃寺（源法寺廃寺跡）〈26〉がある。山尾権現山廃寺では，1980年に地表面のみの確認調査が実施されており，中門・金堂・講堂・塔といった主要伽藍の礎石が確認されている。下谷貝廃寺から新治廃寺と同笵の軒丸瓦が出土している。源法院廃寺からは，熨斗瓦が多く出土している。城館跡では，平良兼の館とされる平良兼館跡〈30〉がある。集落は，熊の宮遺跡では平安時代初頭の住居跡が1軒，南椎尾小山遺跡では平安時代の住居跡が4軒，南椎尾八幡前遺跡では平安時代の住居跡が3軒調査されている。

鎌倉・室町時代には，真壁城[6]〈29〉を中心に城館がつくられている。真壁城跡関連遺跡としては，椎尾城跡〈31〉・亀熊城跡〈32〉・谷貝城跡〈33〉・谷貝峯城跡〈34〉等がある。真壁城については，1174（承安3）年に多気重幹の四男真壁六郎長幹が入部したとの説があり，それ以降1602（慶長7）年に十七代房幹が出羽角館に移されるまで真壁氏の居城であった。

※　遺跡名の次の〈　〉内の数字は，表1・第1図の該当遺跡番号と同じである。

註

1）　吹野富美夫「(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書－小山遺跡・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第99集　1995年3月

2）　長岡芳「御祓立場遺跡の資料－主として縄文早期中後葉の土器について」『真壁町史料　考古資料編Ⅰ』1980年10月

3）　長岡芳「高内遺跡縄文後期の土器」『真壁町史料　考古資料編Ⅱ』1982年12月

4）　長岡芳・川崎純徳『茨城県真壁郡真壁町熊の宮遺跡発掘調査報告書』真壁町教育委員会　1984年3月

5）　川崎純徳『北椎尾天神塚古墳とその時代』ふるさと真壁文庫　2001年3月

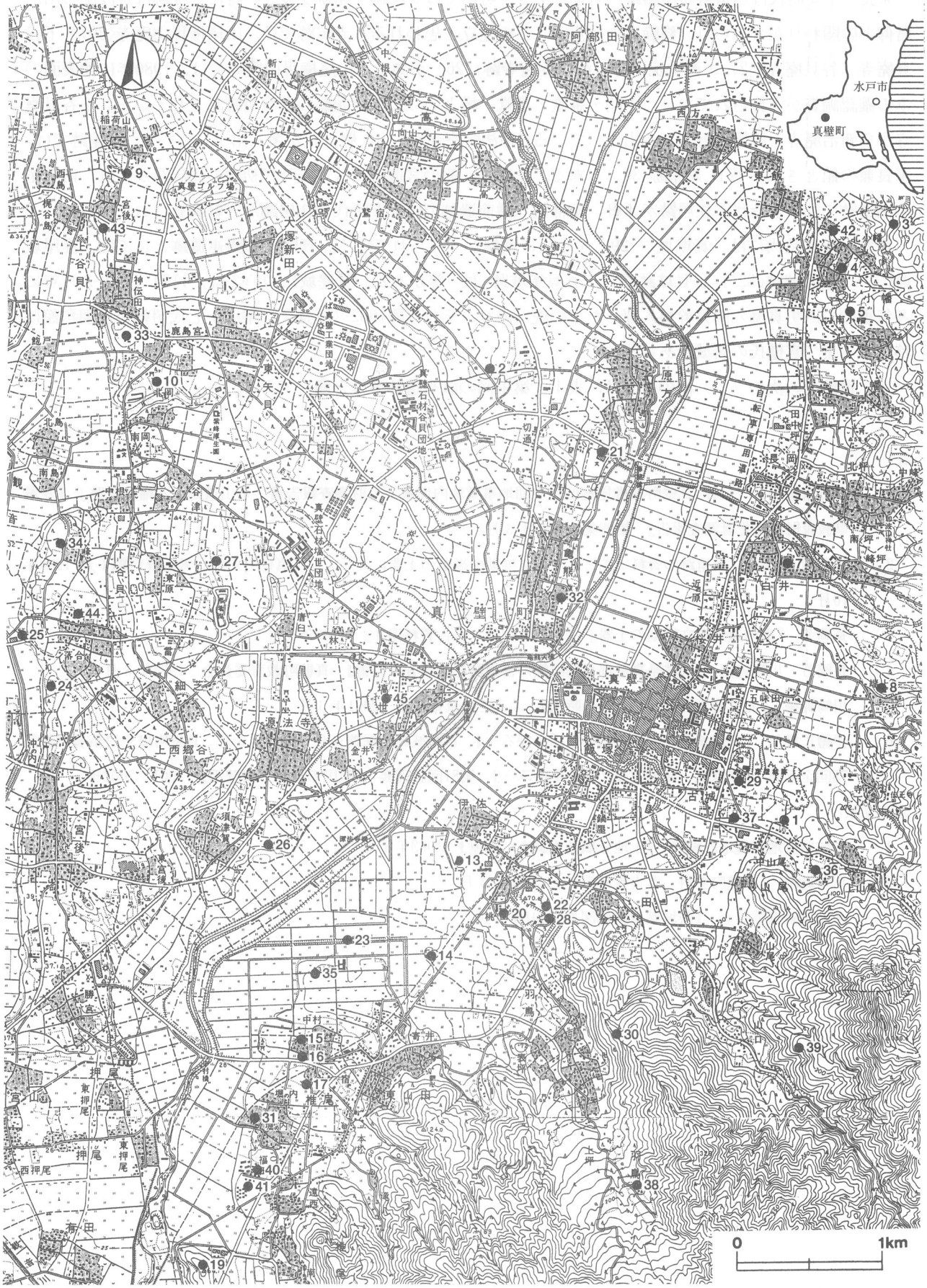
6）　伊禮正雄他『真壁城跡－中世真壁の生活を探る－』真壁城跡発掘調査会　1983年3月　真壁町歴史民俗資料館第78回企画展『真壁城－発掘調査7年のあゆみ－』第81回企画展『戦国の終焉と真壁氏』2001・2002年

参考文献

1）　茨城県農地部農地計画課『土地分類基本調査　真壁』1983年1月

2）　川崎純徳『真壁町史料　考古資料編Ⅳ』2000年3月

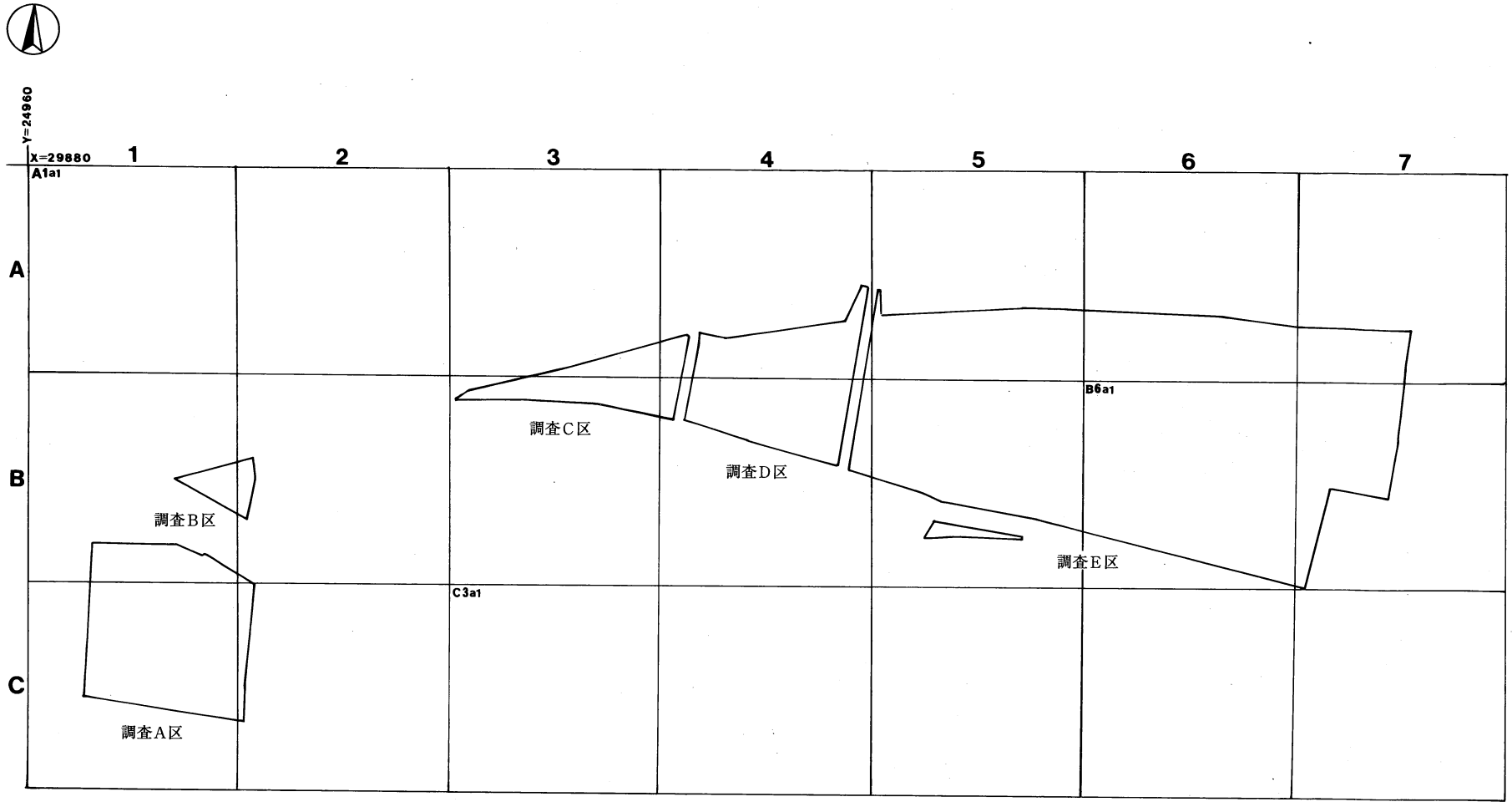
3）　茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』2001年3月

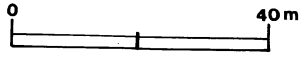


第１図　北田遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院２万５千分の１『真壁』）

表１　北田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世
1	北田遺跡（当遺跡）				○	○	○		24	太夫台遺跡		○					
2	原方円鏡古墳				○				25	高内遺跡		○					
3	若林古墳群				○				26	源法寺廃寺跡					○		
4	車塚古墳				○				27	谷貝廃寺跡					○		
5	十石塚古墳				○				28	日月廃寺跡					○		
6	隠坊塚古墳				○				29	真壁城跡						○	
7	白井中坪古墳群				○				30	平良兼館跡					○		
8	端上古墳群				○				31	椎尾城跡						○	
9	八幡山古墳				○				32	亀熊城跡						○	
10	鹿島宮古墳				○				33	谷貝城跡						○	
11	三の塚古墳				○				34	谷貝峯城跡						○	
12	おふじ権現古墳				○				35	元寺家古墳群				○			
13	吾妻塚古墳				○				36	真壁氏墓地					○		
14	平塚古墳				○				37	中坪遺跡		○					
15	北椎尾天神塚古墳				○				38	御祓立場遺跡		○					
16	仙原塚古墳				○				39	山尾権現山廃寺跡					○		
17	北原古墳				○				40	南椎尾八幡前遺跡	○	○	○	○	○	○	
18	大柳古墳				○				41	南椎尾小山遺跡	○	○	○	○	○	○	
19	松石古墳群				○				42	弁天様古墳				○			
20	羽鳥天神塚古墳				○				43	鹿島神社古墳群				○			
21	熊の宮遺跡	○		○					44	市村家						○	
22	日月遺跡		○						45	塙世城跡						○	
23	鞘戸遺跡		○														





第2図　北田遺跡調査区設定図

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

北田遺跡は，八郷町との境に位置するきのこ山西麓の緩斜面から桜川にかけての低地に立地する縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。調査前の現況は水田と畑地で，調査面積は6,155.80㎡である。

今回の調査によって，縄文時代の竪穴住居跡6軒・土坑45基・配石遺構2基・遺物包含層1か所，古墳時代の竪穴住居跡13軒・土坑2基，奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒，平安時代の細い川筋と思われる流路跡3条，時期不明の土坑28基が確認されている。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20㎝）で60箱分が出土した。出土した主な遺物は，縄文土器，土師器，須恵器，土師質土器，陶器，石器・石製品（石錐・砥石・凹石・磨石・打製石斧・磨製石斧），土製品（土器片円盤・支脚），木製品，古銭，種子等である。

第2節　基本層序

調査D区のB3d6区にテストピットを設定し，約2m掘り下げて，土層の堆積状況の観察を行った（第3図）。遺構確認面及び土取り部断面を観察するとE区の標高46.2m付近に鹿沼パミス（KP）が堆積しており，それ以下の標高のところでは流失している。1～11層は水田であった影響を受けている層と考えられる。12～16層がハードローム層である。

1層は，砂を少量，礫を微量含んだ褐灰色の耕作土である。

2層は，砂と礫を中量，炭化物を微量含んだ灰褐色土である。

3層は，砂を少量，礫を微量含んだ黒褐色土である。

4層は，粘土を中量，砂を少量，礫を微量含んだオリーブ黒色土である。

5層は，砂と粘土を中量含んだ黒褐色土である。

6層は，粘土を中量，砂を少量，炭化物を微量含んだ黒褐色土である。

7層は，砂を多量，礫を中量含んだ灰白色である。

8層は，粘土を中量，砂を少量含んだ褐灰色土である。

9層は，炭化物と礫を微量含んだ黒褐色土である。

10層は，炭化物を少量含んだ黒褐色土である。

11層は，ローム粒子を少量含んだ黒色土である。

12層は，暗褐色ロームで，ややしまりがある。

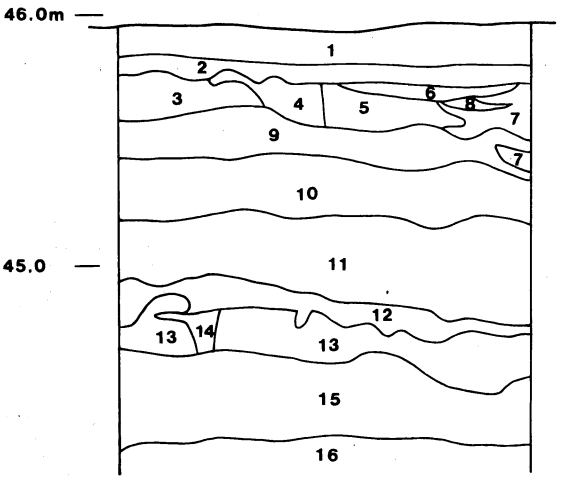
13層は，明黄褐色ロームブロックで，ややしまりがある。

14層は，にぶい黄褐色ロームで，ややしまりがある。

15層は，黄橙色ロームで，粘性もしまりも弱い。

16層は，明黄褐色ロームで，しまりがある。

遺構は，第11層の上面で確認した。



第3図　基本土層図

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された縄文時代の遺構は，竪穴住居跡6軒，土坑43基，配石遺構2基，遺物包含層1か所である。これらの遺構は，調査区A・B・D区で確認されている。それぞれの遺構の特徴と，出土した遺物について記述していく。土坑については，特徴のあるものや遺存状態の良好なものについて解説し，それ以外は実測図と一覧表に示すことにする。

（1）　竪穴住居跡

第6号住居跡（第4～8図）

位置　調査D区の北部，A4i8区。標高29.5mの平坦部に位置している。

重複関係　北部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。南部の西側は第61号土坑を掘り込み，南部の中央部は第62号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　確認できた長軸7.0m，短軸6.20mの隅丸長方形である。南側に拡張したような1.4mほどの広がりがみられる。壁は高さ8～42cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－25°－Wである。

床　やや凹凸がみられる。硬化面は確認できなかった。壁溝は全周している。上幅12～22cm，下幅4～12cm，深さ4～10cmで，断面形はU字形である。

炉　確認できなかった。

ピット　浅い窪みを除き18か所。P1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P6・9・15・16は配置から補助柱穴と考えられる。そのほかのピットの性格は不明である。深さはP1が48cm，P2が61cm，P3が46cm，P4が70cm，P6・9・15・16が30～65cm，P5・7・8・10～14・17・18が14～46cmである。

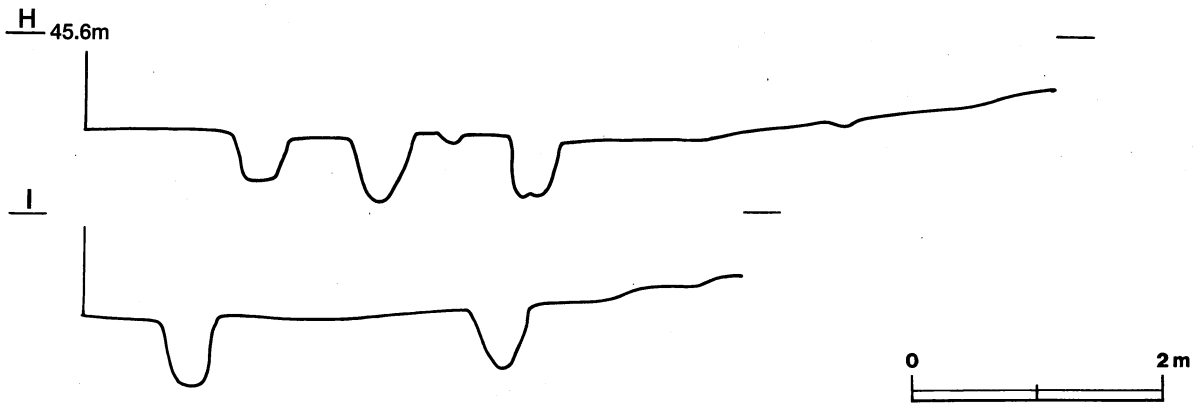
覆土　6層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

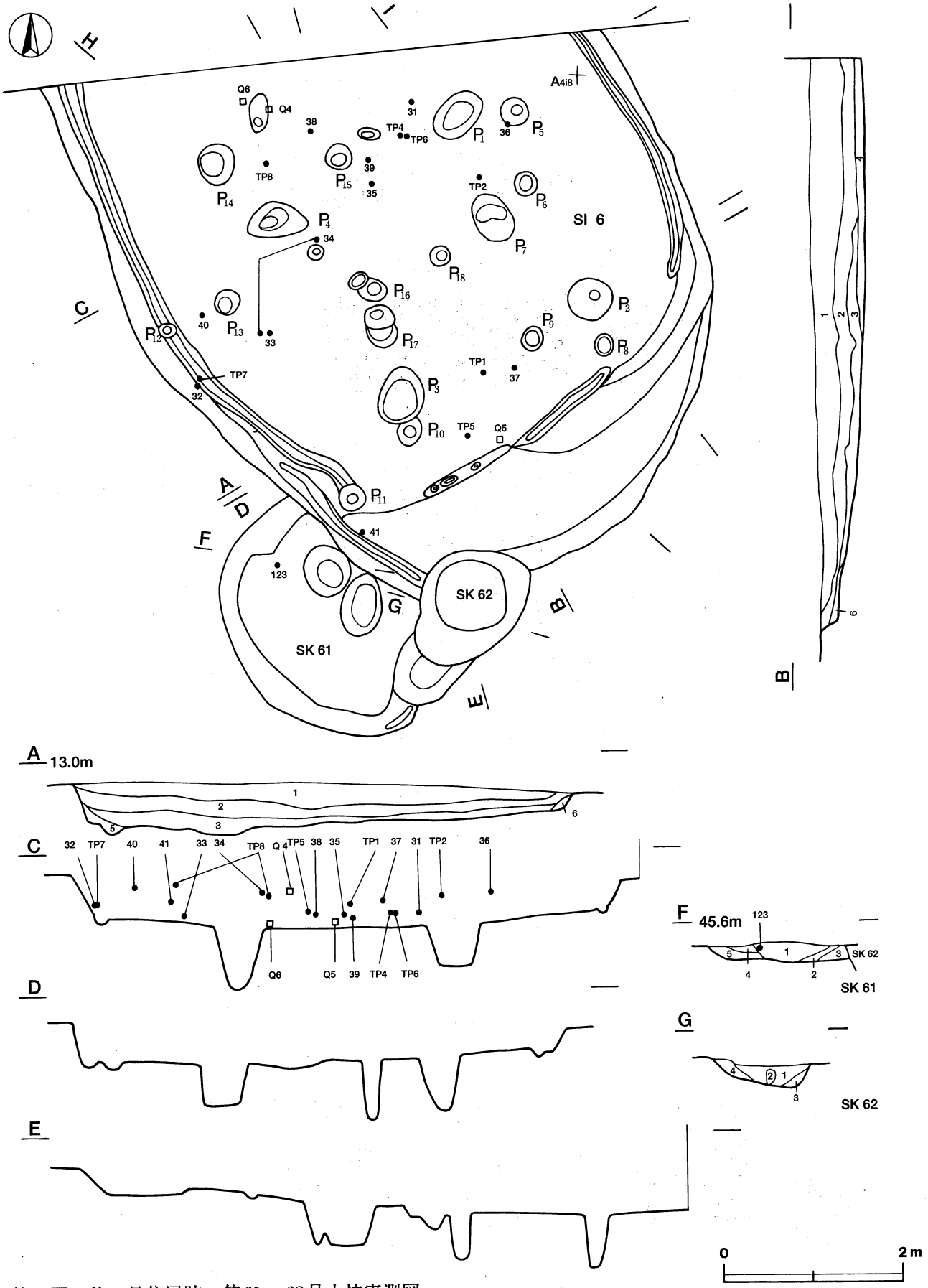
1	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	4	黒褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量	5	灰黄褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック中量，炭化物微量	6	黒褐色	ロームブロック中量

遺物出土状況　縄文土器片754点，土器片円板1点，磨石3点，礫10点のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片24点が出土している。31縄文土器深鉢は中央部の覆土下層から，40の縄文土器器台形土器は南西部の覆土中層から出土している。

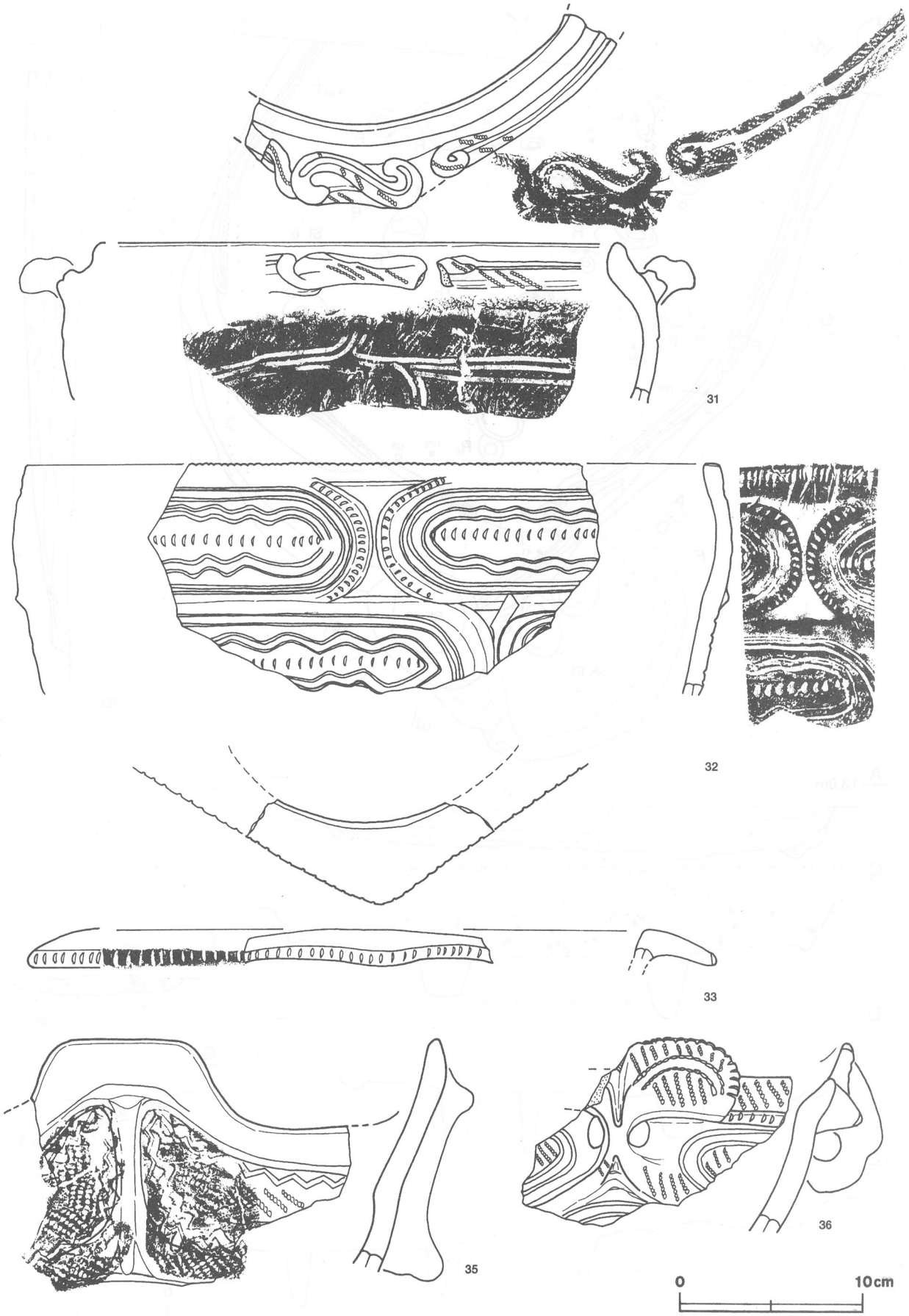
所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期中葉と考えられる。



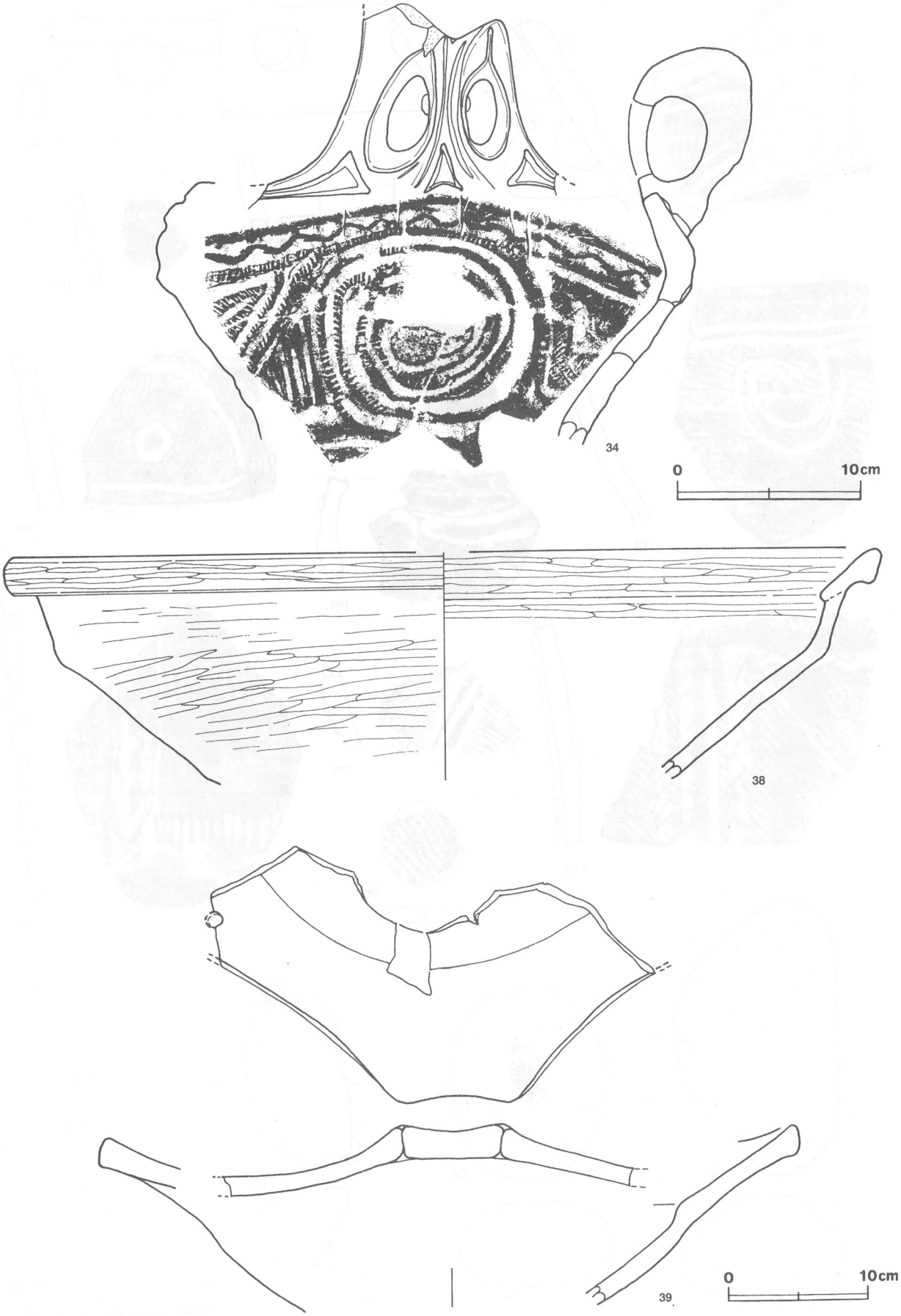
第4図　第6号住居跡実測図



第5図　第6号住居跡，第61・62号土坑実測図



第6図　第6号住居跡出土遺物実測図（1）



第７図　第６号住居跡出土遺物実測図（２）

第８図　第６号住居跡出土遺物実測図（３）

第６号住居跡出土遺物観察表（第６～８図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	縄文土器	深鉢	[28.6]	(8.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部のＳ字状の突起上に単節ＬＲの縄文 胴部は単節ＬＲの縄文を沈線で区画	中央部 覆土下層	15%
32	縄文土器	深鉢	[37.8]	(12.5)	－	石英多・長石多・雲母多	褐	普通	口唇部にキザミ目　口縁部に沈線が巡り，沈線内に爪形文	南西部 覆土下層	10%
33	縄文土器	浅鉢	[30.0]	(2.0)	－	長石・金雲母	にぶい褐	普通	口縁部の舌状の突起にキザミ目	南西部床面	5％
34	縄文土器	深鉢	[25.0]	(23.8)	－	石英・長石・金雲母多	にぶい赤褐	普通	口縁部に橋状の突手　胴部隆帯上キザミ目　隆帯に沿って沈線で区画　区画内を条線で充填	中央部 覆土中層	20%
35	縄文土器	深鉢	－	(13.0)	－	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	隆帯に沿って沈線が巡り，沈線内に単節ＲＬの縄文	中央部 覆土下層	10%
36	縄文土器	深鉢	－	(10.3)	－	石英・長石・金雲母多	にぶい褐	普通	口縁部に橋状の突手　口縁部は単節ＲＬの縄文を地文　隆帯上は爪形文　突手の端部はキザミ目	北東部 覆土中層	10%
37	縄文土器	深鉢	－	(10.9)	－	石英・長石・金雲母	にぶい褐	普通	口縁部に橋状の突手　口縁部は単節ＲＬの縄文を地文　隆帯上は爪形文	南東部 覆土中層	10%
38	縄文土器	浅鉢	[62.8]	(16.4)	－	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部内・外面及び胴部外面ヘラ磨き　無文	北西部 覆土下層	30%
39	縄文土器	浅鉢	[49.6]	(12.8)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	補修孔あり　無文	中央部 覆土下層	20%
40	縄文土器	器台	17.8	5.8	22.5	石英・長石・雲母・小礫	灰褐	普通	内・外面ナデ　側面に均等でないが２個１単位で３単位の６孔を穿つ　煤付着	南西部 覆土中層	90%　PL12
41	縄文土器	手捏	－	(7.1)	7.0	石英多・長石多・雲母	にぶい橙	普通	内面輪積み痕強い	南西部 覆土下層	80%　PL12
TP１	縄文土器	深鉢	－	(12.7)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	単節ＬＲの縄文を地文に　沈線	南東部 覆土中層	
TP２	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	口縁部に孔を穿つ　隆帯を施す	中央部 覆土中層	
TP３	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部に孔を穿つ　隆帯を施す	覆土中	
TP４	縄文土器	深鉢	－	(8.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	単節ＲＬの縄文を地文に　沈線	北東部 覆土下層	
TP５	縄文土器	鉢	－	(6.1)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆帯と沈線を施す	南東部 覆土下層	
TP６	縄文土器	深鉢	－	(12.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	単節ＲＬの縄文を地文に　隆帯を貼り付け，隆帯上にも単節ＲＬの縄文　隆帯に沿って沈線	北東部 覆土下層	
TP７	縄文土器	深鉢	－	(15.2)	－	石英・長石・雲母	明褐	普通	隆帯上を指頭による押圧　隆帯に沿って沈線　区画内に爪形文	南西部 覆土下層	
TP８	縄文土器	深鉢	－	(4.7)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	隆帯上及び隆帯に沿って沈線　区画内に条線文	北西部 覆土中層	

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP１	土器片円盤	4.7	4.5	0.9	21.4	土	表面に単節ＲＬの縄文　側面研磨	北西部覆土中	PL19
Ｑ４	磨石	15	9.2	5.7	992	安山岩	自然石を素材	北西部 覆土中層	
Ｑ５	磨石	10.5	8.5	4.7	564	安山岩	自然石を素材	南東部床面	
Ｑ６	磨石	(10.2)	(6.0)	(4.3)	(339.5)	安山岩	自然石を素材　半分欠損	北西部床面	

第８号住居跡（第９・10図）

位置　調査Ａ区の南西部，C1f0区。標高44.2mの平坦部に位置している。

規模と形状　壁は削平され，南部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。長径5.95m，確認できた短径4.60mの円形または楕円形と考えられる。主軸方向はＮ－８°－Ｗと推定される。

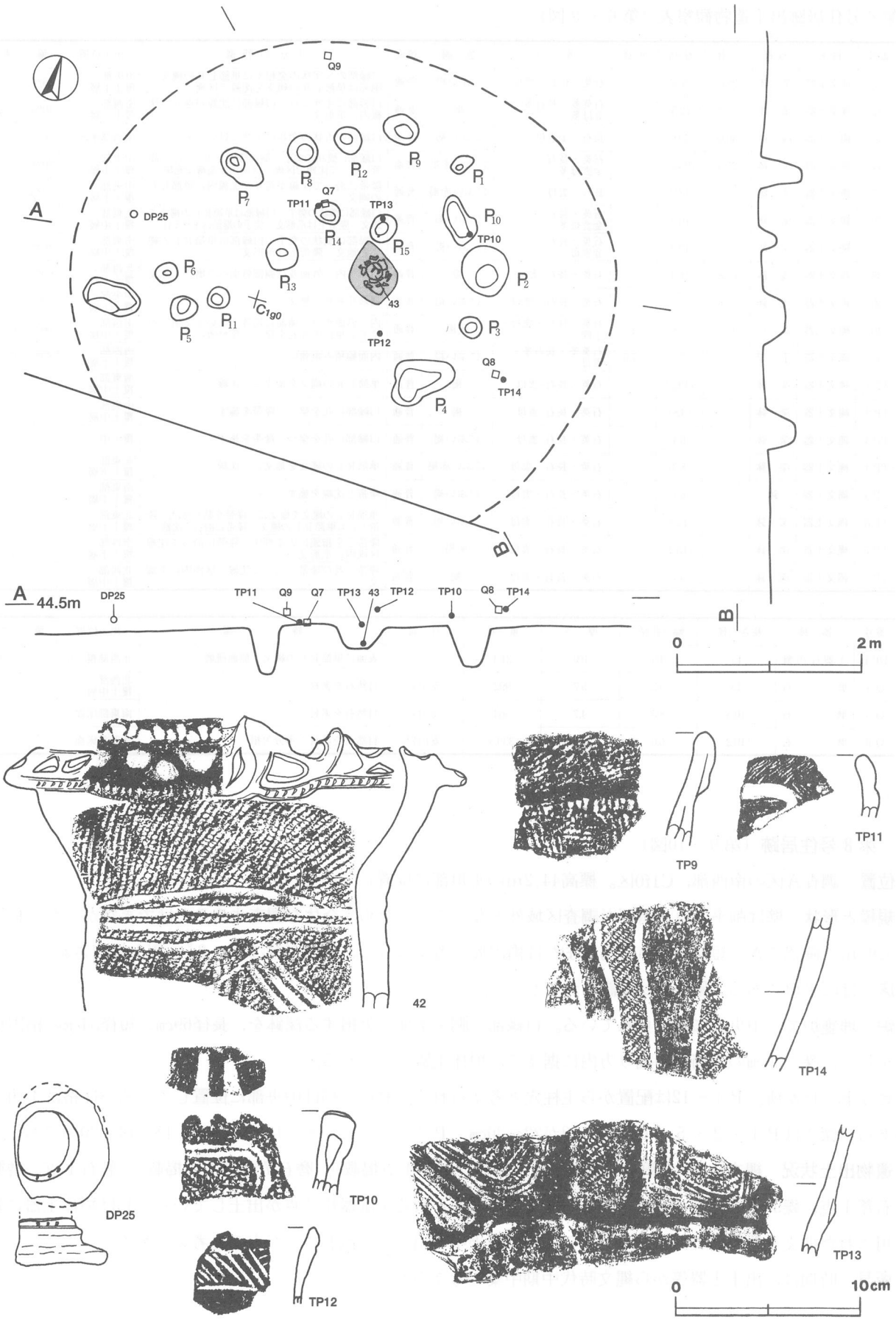
床　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。

炉　埋甕炉で，中央部に設けられている。口縁部と胴下半部を欠損する深鉢を，長径69cm，短径54cmの楕円形をした，深さ30cmの円筒形の掘り方内に据えて，炉体土器としている。

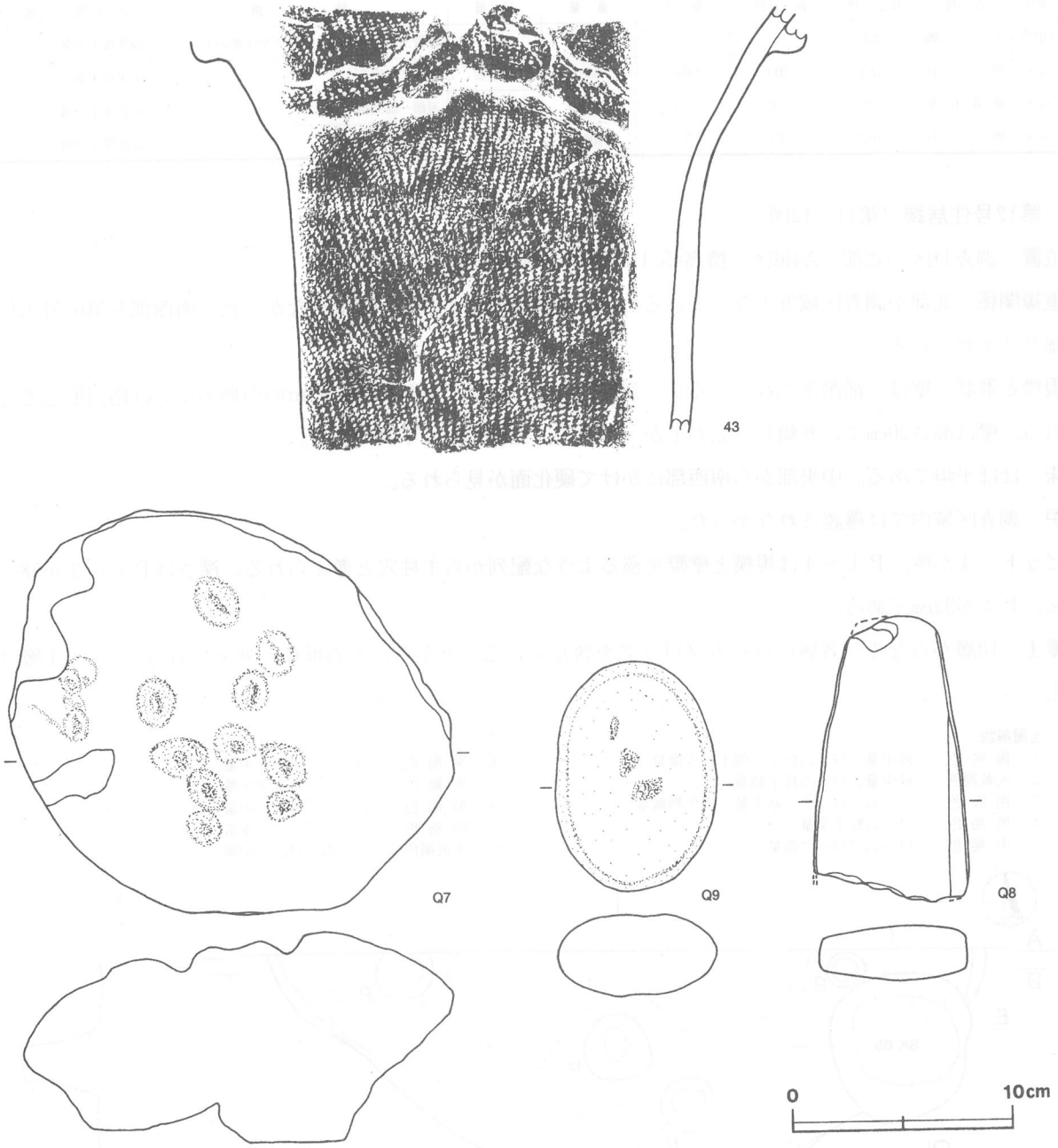
ピット　15か所。Ｐ１～12は配置から主柱穴と考えられる。Ｐ13～15は中央部に位置しているが性格は不明である。深さはＰ１・２・５・６・９・13が22～30cm，Ｐ３・４・７・８・10～12・14・15が14～20cmである。

遺物出土状況　縄文土器片789点，土偶１点，凹石５点（１点掲載），磨石７点（１点掲載），敲石１点，磨製石斧１点，礫54点のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片３点が出土している。43は炉体土器に転用された縄文土器深鉢である。ＤＰ25の土偶は覆土中の出土で，流れ込んだものと考えられる。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期中葉と考えられる。



第9図　第8号住居跡・出土遺物実測図



第10図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡出土遺物観察表（第９・10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	縄文土器	深鉢	[20.2]	(15.7)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆帯上にキザミ目　頸部から胴部単節ＬＲの縄文	覆土中	50%
43	縄文土器	深鉢	－	(18.9)	－	石英・長石・小礫	灰褐	普通	隆帯上に単節ＲＬの縄文　隆帯に沿って沈線　胴部単節ＲＬの縄文	炉跡内	50%　炉体土器　PL12
TP９	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	石英・長石・雲母	灰褐	普通	単節ＲＬの縄文の地文　頸部に１列の結節沈線文	覆土中	
TP10	縄文土器	深鉢	－	(4.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	単節ＲＬの縄文　半截竹管による平行沈線　口縁部に粘土を包み込み，口唇部に棒状工具による押圧	北東部覆土下層	
TP11	縄文土器	深鉢	－	(3.4)	－	石英・長石・雲母	褐灰	普通	撚糸文の地文に沈線	中央部床面	
TP12	縄文土器	深鉢	－	(4.1)	－	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	口縁部を沈線で区画　区画内に斜位に沈線	中央部覆土中層	
TP13	縄文土器	深鉢	－	(6.7)	－	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	隆帯貼り付け後沈線と半截竹管による平行沈線文	中央部床面	
TP14	縄文土器	深鉢	－	(8.4)	－	石英・長石	にぶい橙	普通	沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文と磨消縄文	東部覆土中層	

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP25	土偶	(2.5)	−	−	(65.9)	土	隆帯上にキザミ目　ハート形土偶の左足	西部覆土中層	
Q 7	凹石	18.1	(20.1)	9.4	(3683.8)	花崗岩	表面に12穿孔	中央部床面	
Q 8	磨製石斧	(12.6)	7.0	2.5	(37.23)	蛇紋岩	刃部一部欠損	東部覆土中層	PL19
Q 9	磨石	10.2	7.1	3.7	406.2	安山岩	自然石を素材	北部覆土中層	

第12号住居跡（第11・12図）

位置　調査D区の北部，A4i6区。標高45.1mの平坦部に位置している。

重複関係　北部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。南西部を第65号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　壁は一部削平されているが，長径6.45m，確認できた短径2.05mの円形あるいは楕円形と考えられる。壁は高さ20cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向は不明である。

床　ほぼ平坦である。中央部から南西部にかけて硬化面が見られる。

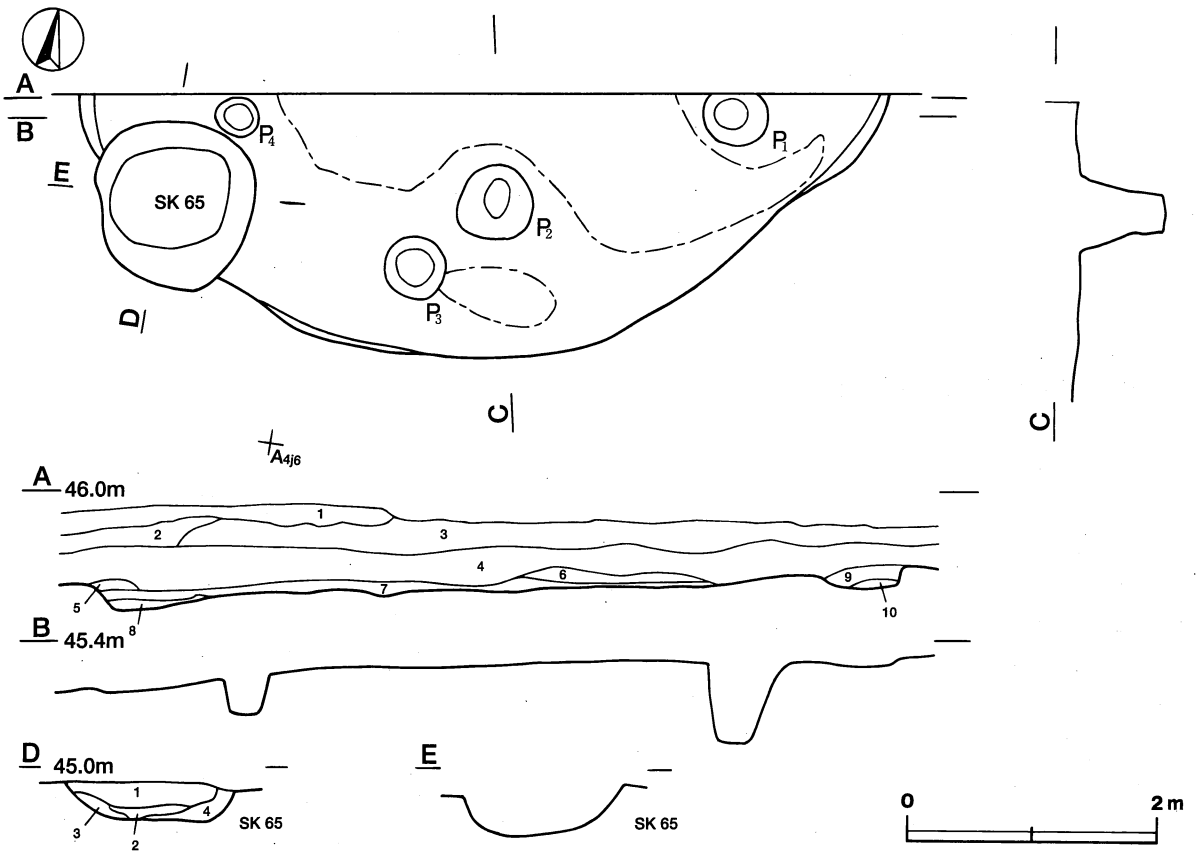
炉　調査区域内では確認されなかった。

ピット　4か所。P 1～4は規模と壁際を巡るような配列から主柱穴と考えられる。深さはP 1～3が58～68cm，P 4が32cmである。

覆土　10層からなる。各層にロームブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。（1～4層は表土）

土層解説

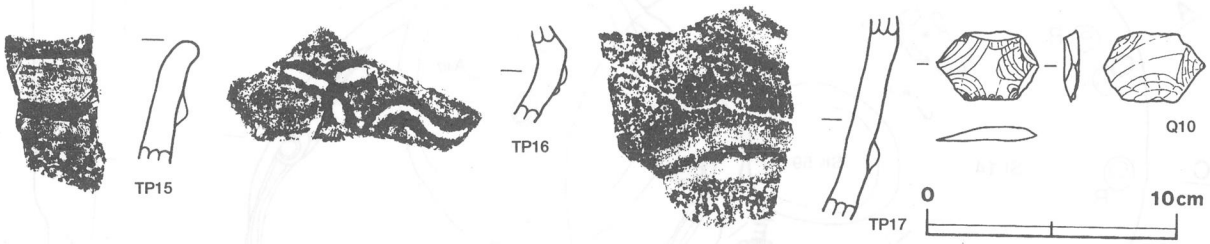
1	褐灰色	砂中量，ローム粒子・焼土粒子微量	6	黒褐色	ロームブロック中量
2	灰黄褐色	砂少量，ローム粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック少量
3	褐灰色	ロームブロック・砂少量，炭化物微量	8	黒褐色	ロームブロック中量
4	黒褐色	ローム粒子少量	9	黒褐色	ロームブロック少量
5	黒褐色	ロームブロック微量	10	灰黄褐色	ロームブロック中量



第11図　第12号住居跡，第65号土坑実測図

遺物出土状況　縄文土器片370点，礫14点のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片35点，須恵器片6点が出土している。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。



第12図　第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	－	(4.8)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	隆帯で区画　区画内に単節ＬＲの縄文	覆土中	
TP16	縄文土器	鉢	－	(3.8)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	隆帯上に沈線	覆土中	
TP17	縄文土器	深鉢	－	(8.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	隆帯で区画　区画内に単節ＬＲの縄文	覆土中	

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	剥片	2.7	4	0.6	7.6	チャート	横長剥片　二次調整痕	南西部覆土中	

第14号住居跡（第13～15図）

位置　調査Ｄ区の北西部，A4j6区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係　南部を第13号住居跡に，東部を第47号土坑に，中央部を第59号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　壁は一部が遺存しているのみであるが，長径5.00m，短径4.40mの楕円形と考えられる。壁は高さ20cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－55°－Ｗと考えられる。

床　やや凸凹している。硬化面は確認されなかった。

炉　埋甕炉で，中央部南寄りに設けられている。口縁部と胴下半部を欠損する２個の深鉢を，長径114cm，短径65cmの楕円形をした，深さ50cmの円筒形の掘り方内の両端に据えて，炉体土器としている。

ピット　８か所。Ｐ１～８は壁際を巡っていることから主柱穴と考えられる。深さはＰ１～４が30～34cm，Ｐ５～８が40～48cmである。

覆土　７層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

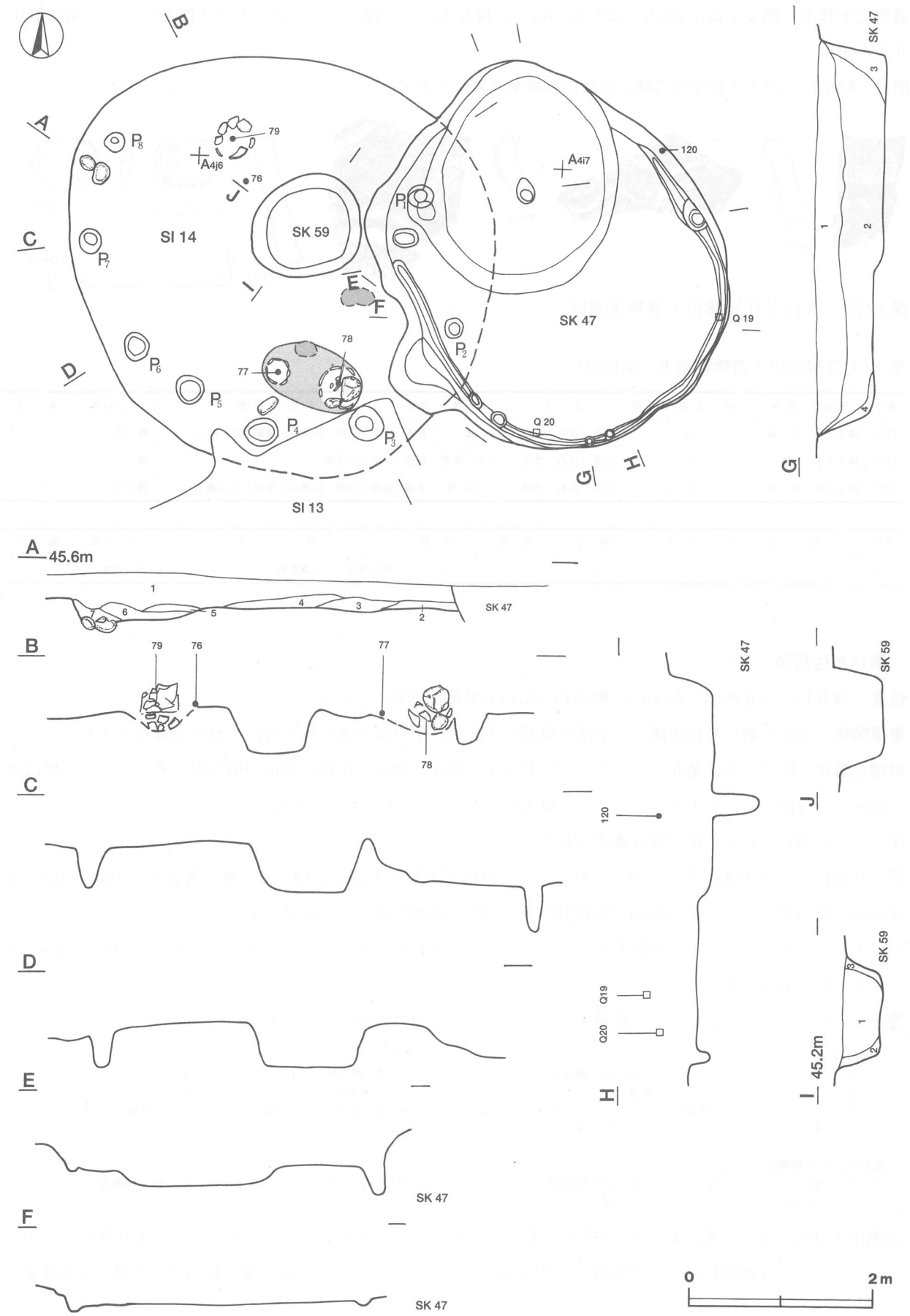
1　黒褐色　ロームブロック・炭化物・礫微量
2　褐色　ロームブロック中量
3　黒色　炭化物多量，ロームブロック・焼土粒子少量
4　黒褐色　ロームブロック・炭化物少量
5　灰黄褐色　ロームブロック中量
6　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
7　灰黄褐色　砂中量，ロームブロック微量

第59号土坑土層解説

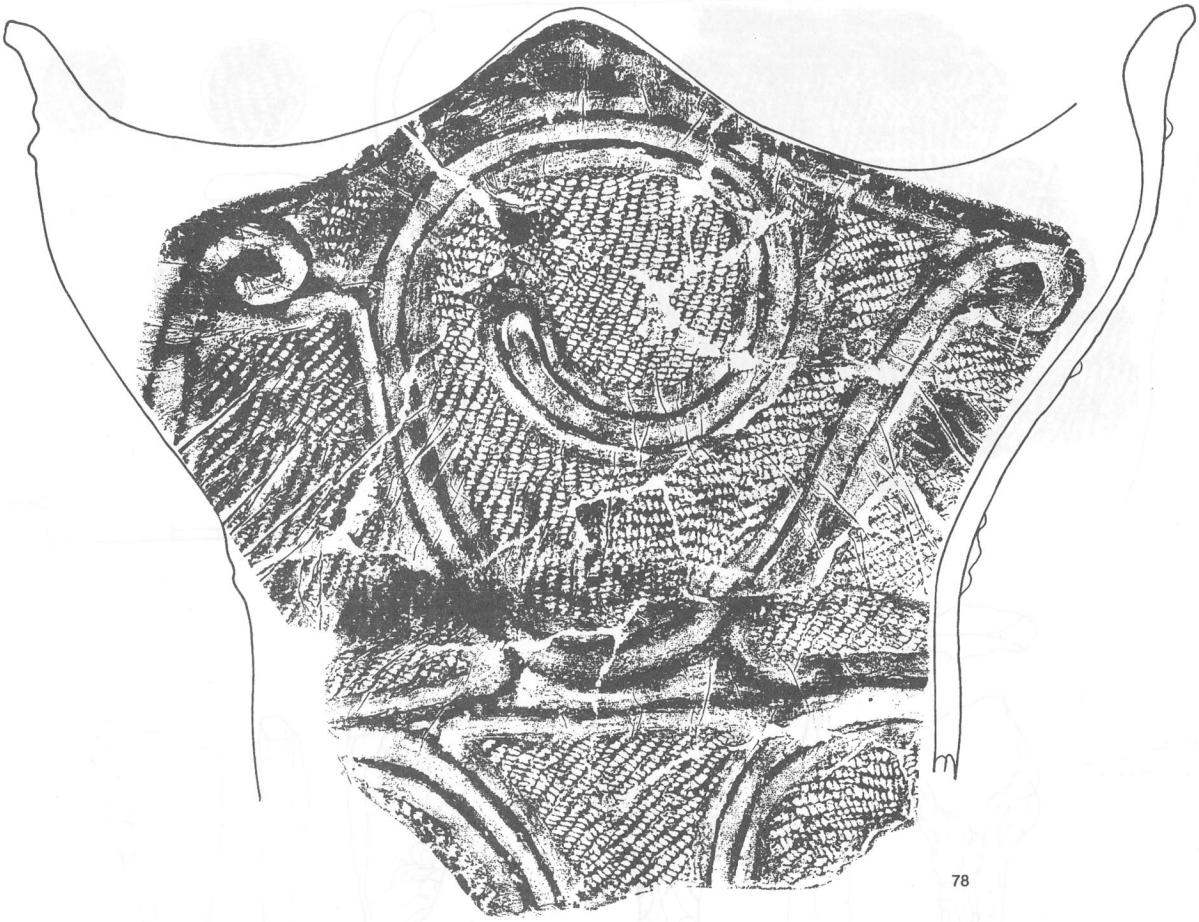
1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック・砂少量
3　黒褐色　ローム粒子中量，炭化物・砂微量

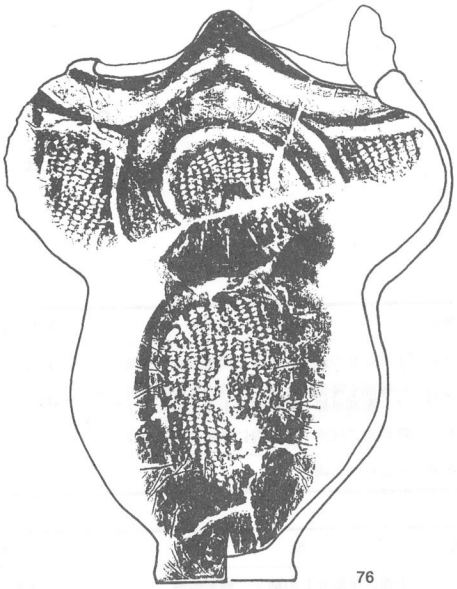
遺物出土状況　縄文土器片157点，土器片円盤３点，石錐１点，削器１点，礫２点のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片20点，須恵器片33点が出土している。77と78は炉体土器に転用された縄文土器深鉢である。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期中葉から後葉にかけてと考えられる。

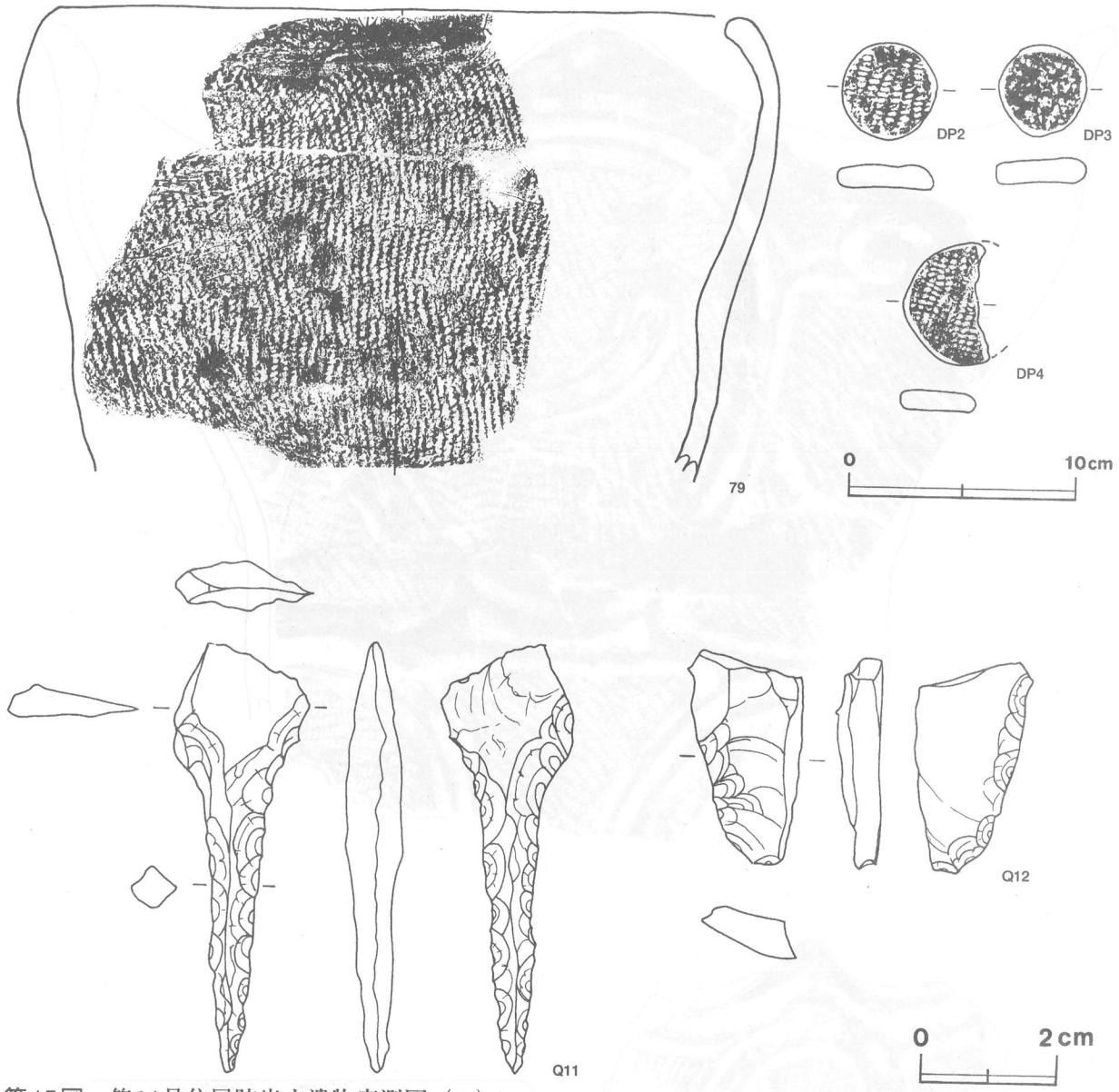


第13図　第14号住居跡，第47・59号土坑実測図





第14図　第14号住居跡出土遺物実測図（1）



第15図　第14号住居跡出土遺物実測図（2）

第14号住居跡出土遺物観察表（第14・15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	縄文土器	深鉢	12.5	22.7	5.7	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節ＬＲの縄文の地文を微隆起線で区画	中央部床面	40%　PL15
77	縄文土器	深鉢	20.6	(11.5)	－	石英・長石・雲母・小礫	橙	普通	口縁部を隆帯で区画　区画内に単節ＬＲの縄文　胴部単節ＬＲの縄文上を沈線が垂下	炉跡内	20%
78	縄文土器	深鉢	[48.0]	(31.7)	－	石英・長石・雲母・小礫	橙	普通	隆起線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文	炉跡内	20%　PL15
79	縄文土器	深鉢	30.8	(20.3)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	単節ＬＲの縄文	北部床面	20%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 2	土器片円盤	4.3	4.2	0.9	22.3	土	表面に単節ＲＬの縄文　側面研磨	北東部覆土中	PL19
DP 3	土器片円盤	4.0	3.9	1.1	19.1	土	被熱を受け摩滅のため表面の縄文施文不明　側面研磨	炉跡中	PL19
DP 4	土器片円盤	5.4	(3.4)	0.9	(19.3)	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	南東部覆土中	
Q 11	石錐	6.2	2.1	0.9	5.1	チャート	逆三角形状を呈し，先端部かなり突出	覆土中	PL19
Q 12	削器	3.1	1.7	0.7	3.3	黒曜石	左側縁に調整痕	覆土中	PL19

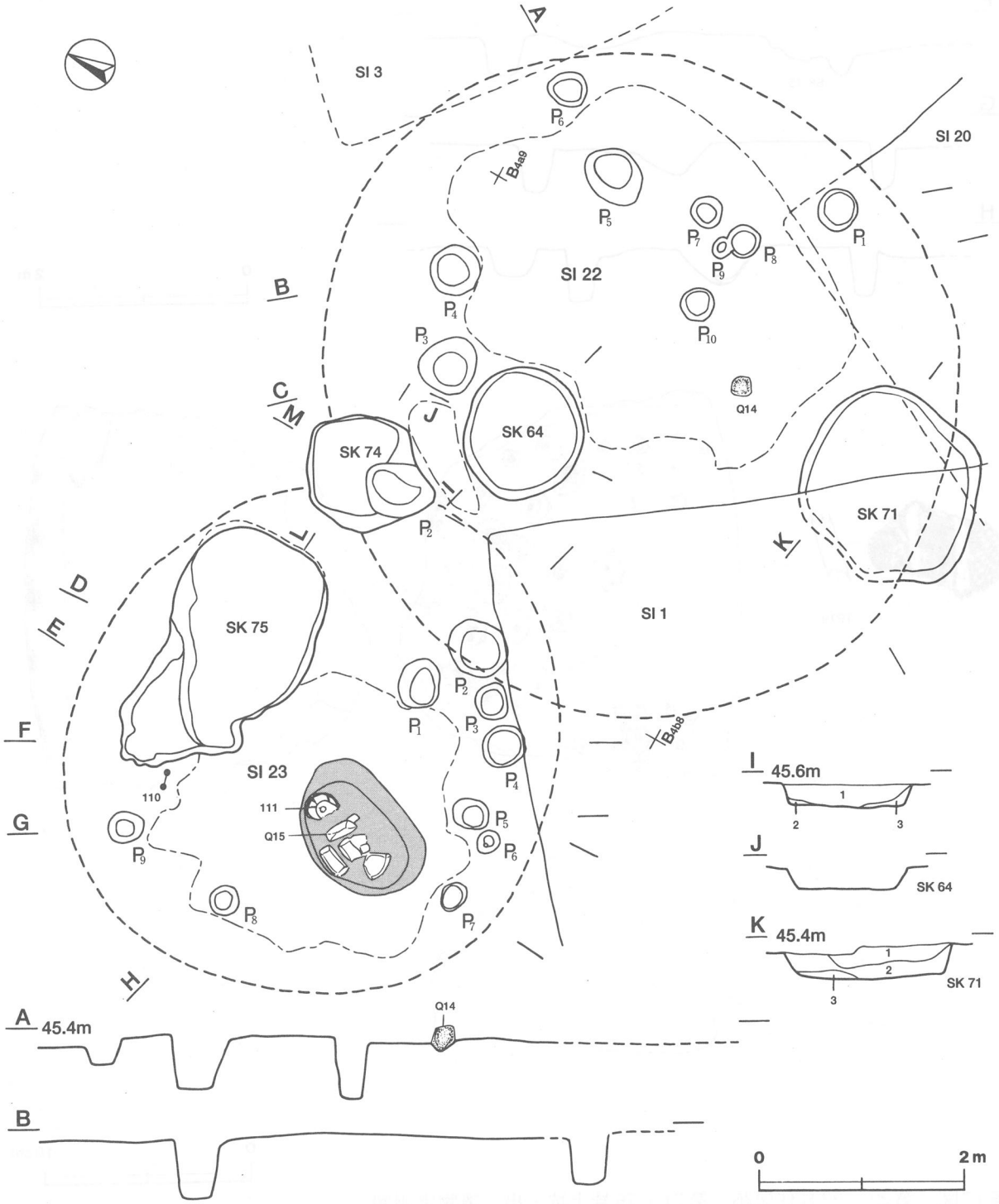
第22号住居跡（第16・17図）

位置　調査D区の東部，B4a8区。標高45.4mの平坦部に位置している。

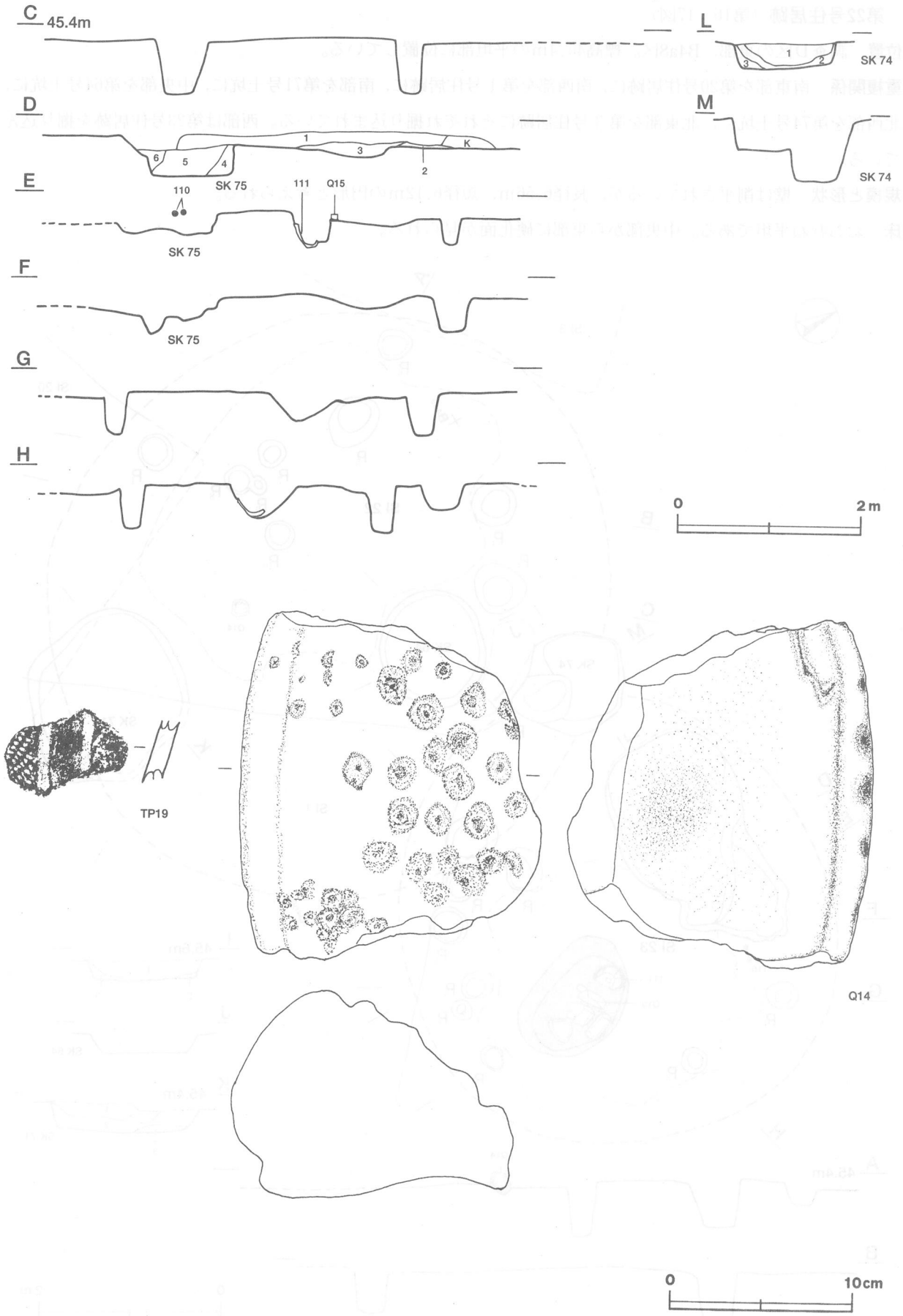
重複関係　南東部を第20号住居跡に，南西部を第１号住居跡に，南部を第71号土坑に，中央部を第64号土坑に，北西部を第74号土坑に，北東部を第３号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。西部は第23号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　壁は削平されているが，長径6.56m，短径6.12mの円形と考えられる。

床　おおむね平坦である。中央部から東部に硬化面が見られる。



第16図　第22・23号住居跡，第64・71・74・75号土坑実測図



第17図　第22・23号住居跡，第74・75号土坑・出土遺物実測図

炉　確認できなかった。

ピット　10か所。Ｐ１～５は推定される壁際を巡るように確認されていることから主柱穴と考えられる。Ｐ６～10の性格は不明である。深さはＰ１・５が45cm前後，Ｐ２～４が60cm前後，Ｐ６が24cm，Ｐ７～９は10～14cm，Ｐ10が54cmである。

覆土　壁は削平されていて，堆積状況は不明である。

第64号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　にぶい黄橙色　ローム粒子少量
3　暗　褐　色　ロームブロック中量

第71号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　にぶい黄褐色　ローム粒子多量，砂少量

第74号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，砂微量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック少量
3　にぶい黄褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片４点，凹石１点が炉跡の南東部から出土している。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。

第22・23号住居跡出土遺物観察表（第17・18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢	－	(3.1)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文と磨消縄文	SI22覆土中	
110	縄文土器	注口	10.7	(17.9)	－	石英・長石・金雲母	にぶい橙	普通	地文は単節ＲＬの縄文	SI23西部床面	45%
111	縄文土器	深鉢	－	(29.5)	6.2	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部単節ＬＲの縄文	SI－23炉跡内	50%　PL17

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q14	凹石・石皿	(18.9)	(16.8)	11.9	(3873.4)	安山岩	表面に48穿孔 裏の機能面の周囲に縁を有し，機能面が凹む	SI22中央部床面	PL20
Q15	凹石・石皿	31.6	(20.0)	11.0	(9340.0)	花崗岩	表面に14穿孔 裏の機能面の周囲に縁を有し，機能面が凹む　縁に７孔	SI23炉跡内	

第23号住居跡（第16～18図）

位置　調査Ｄ区の中央部，B4a7区。標高45.3mの平坦部に位置している。

重複関係　南東部を第１号住居跡に，東部を第22号住居跡と第74号土坑に掘り込まれている。中央部床面は第75号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　壁はほとんど削平されているが，推定長径5.1m，短径4.74mの円形と考えられる。炉跡から判断して主軸方向はＮ－26°－Ｅと考えられる。

床　やや凸凹である。炉跡の周囲に硬化面が見られる。

炉　炉体土器を伴う石組炉で，中央部から南西寄りに設けられている。長径142cm，短径100cmの長方形で，深さ40cmの掘り方内の北東際に深鉢を据えて，炉体土器としている。石組の石は，長さ30cm前後の凹石４個と10cmほどの川原石２個を使用している。

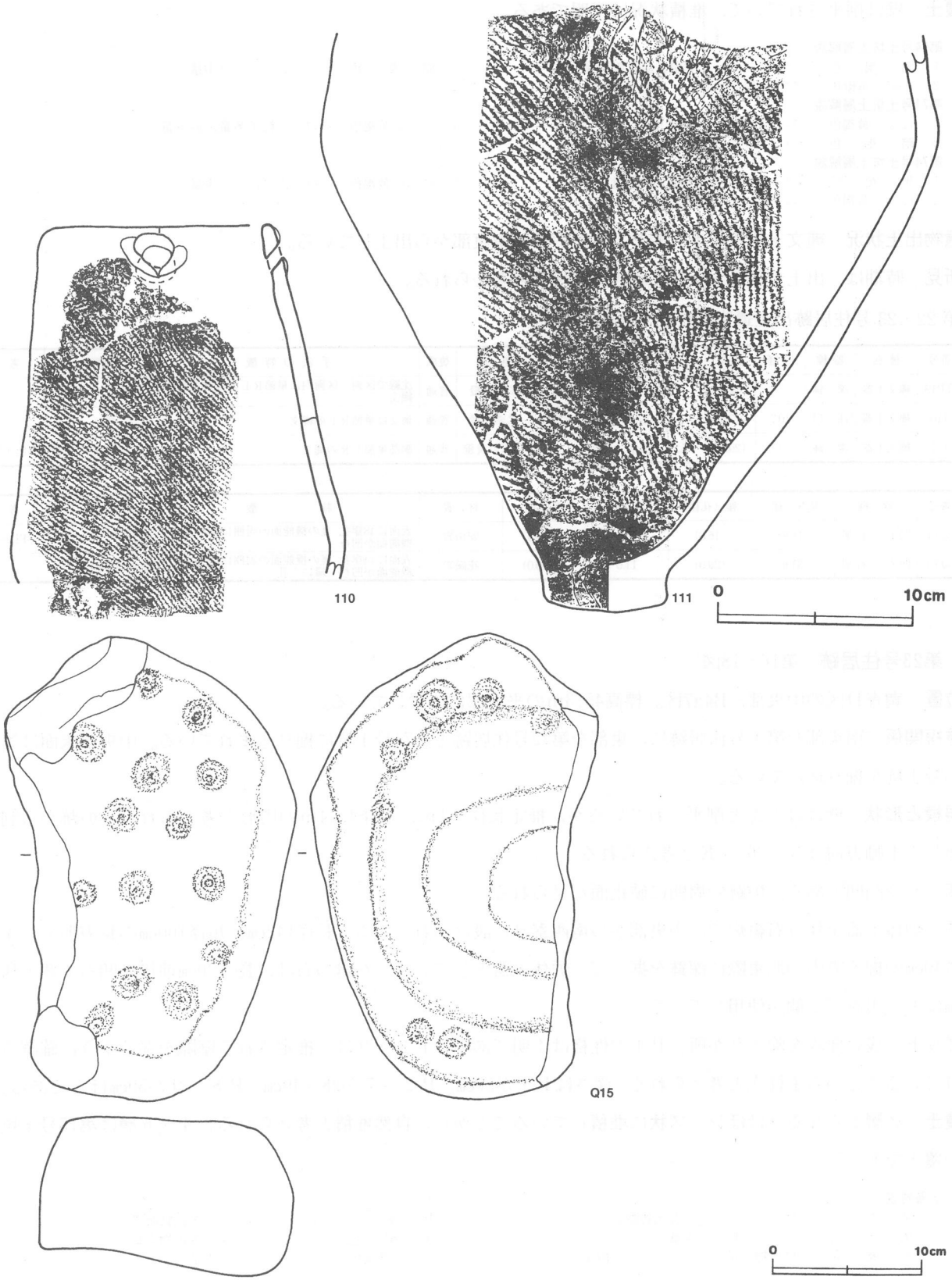
ピット　浅い窪みを除き９か所。Ｐ１の性格は不明である。Ｐ２～９は，推定される壁際を巡るように確認されていることから主柱穴と考えられる。深さはＰ１が50cm，Ｐ２～７が28～40cm，Ｐ８・９が50cmほどである。

覆土　３層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。４～６層は第75号土坑の覆土である。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
2　褐　灰　色　ロームブロック少量
3　黒　褐　色　炭化物少量，ロームブロック微量
4　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量
5　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
6　にぶい黄褐色　ロームブロック少量

遺物出土状況　縄文土器片81点，石皿を兼用した凹石１点，花崗岩製の凹石３点（未掲載）のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片29点が出土している。110の縄文土器壺形土器は西部の床面から出土している。111は炉体土器に転用された縄文土器深鉢である。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。



第18図　第23号住居跡出土遺物実測図

（2） 土坑

第4号土坑（第19図）

位置 調査A区の中央部，C1d9区。標高44.2mの平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.52m，短径2.05mの楕円形で，確認面からの深さは94cmで，壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。長径方向はN－27°－Eである。底面は段状である。

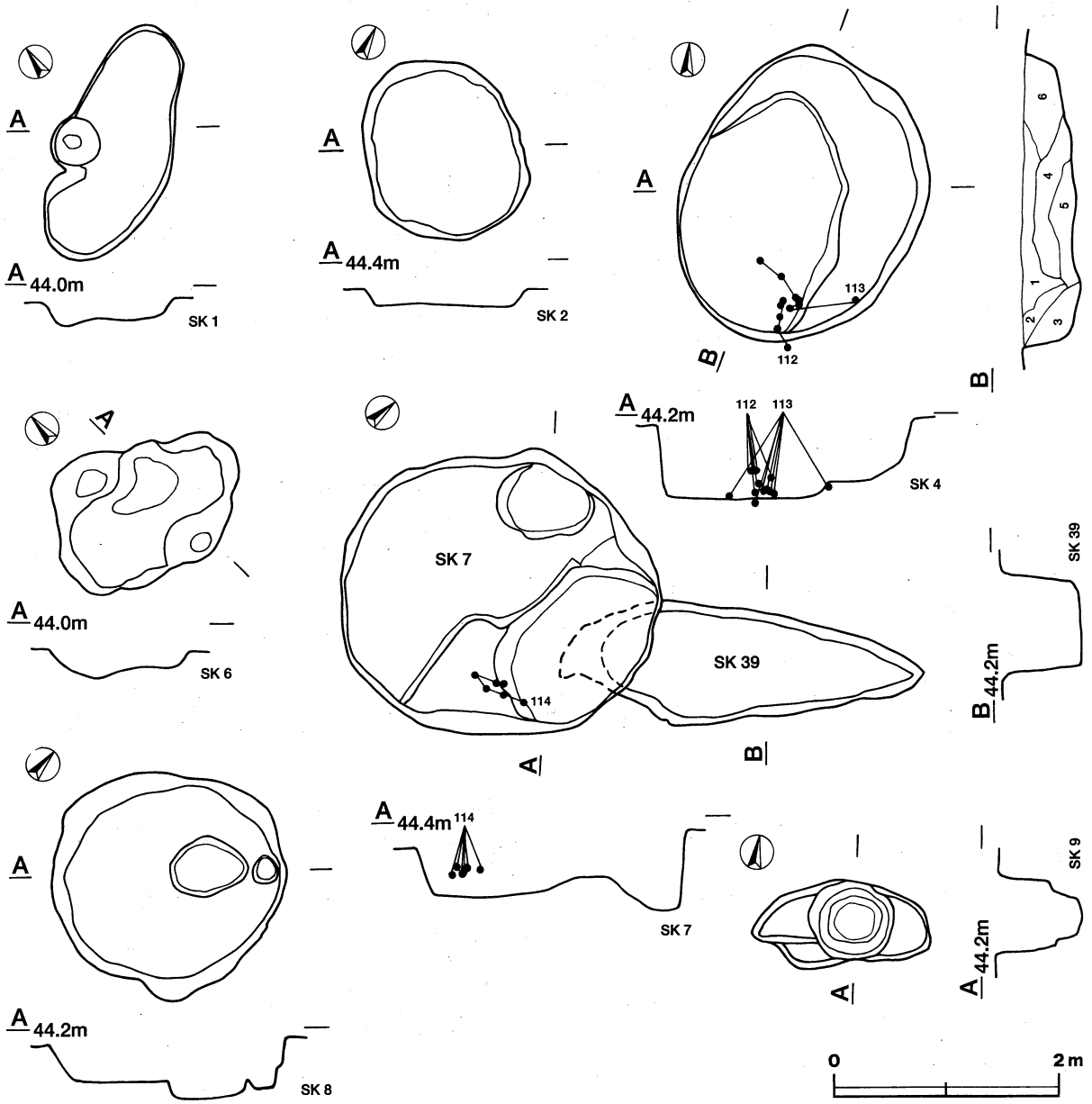
覆土 6層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

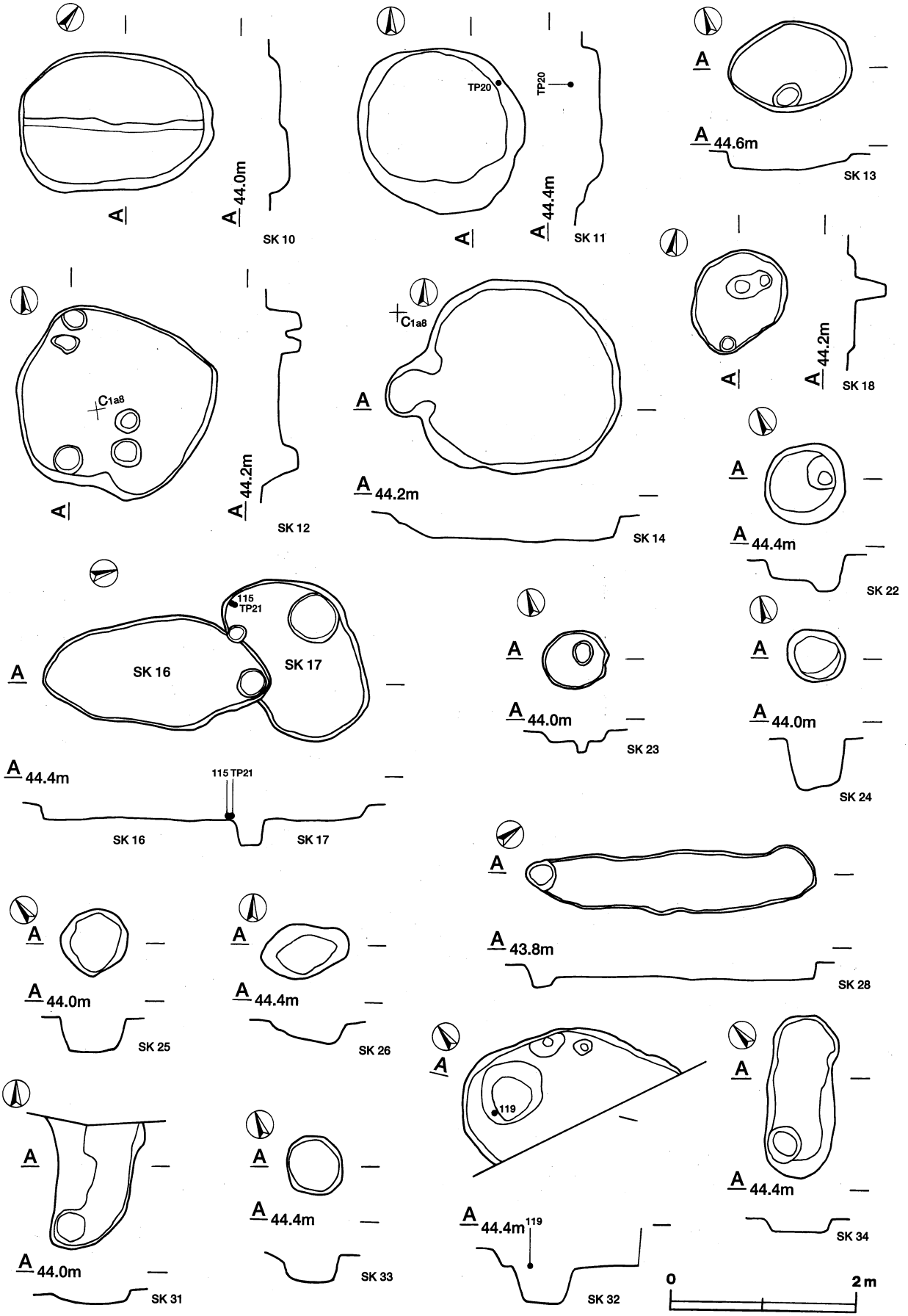
1	黒褐色	砂多量	4	褐灰色	砂多量，ロームブロック少量
2	褐灰色	砂多量，ロームブロック少量	5	黒褐色	砂多量，ロームブロック少量
3	褐灰色	砂多量	6	黒褐色	砂多量

遺物出土状況 縄文土器片138点，礫5点，凹石1点（未掲載），磨石1点（未掲載）のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片27点が出土している。112の縄文土器深鉢と113の縄文土器浅鉢が南部底面から出土している。

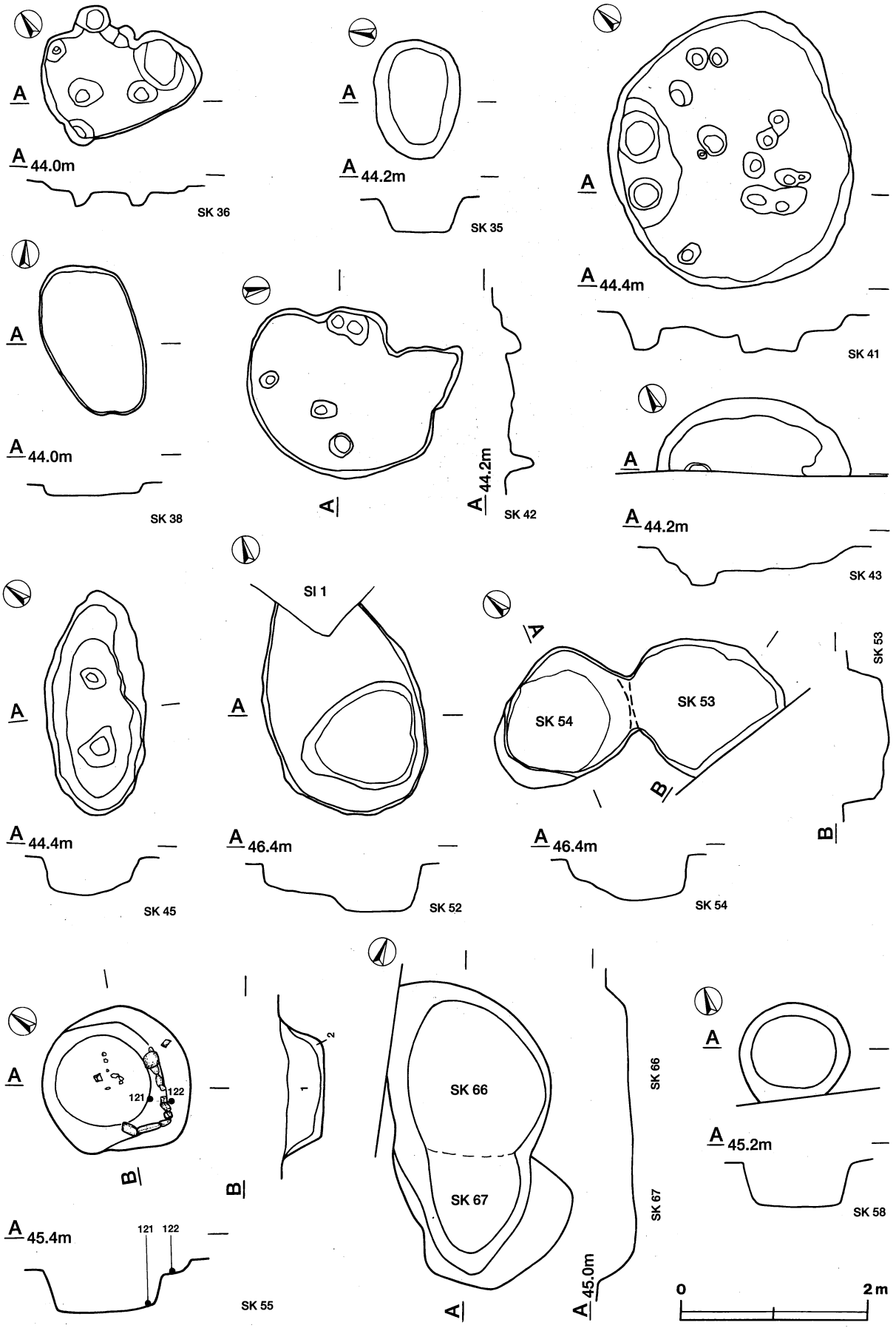
所見 時期は，出土土器等から縄文時代中期中葉と考えられる。



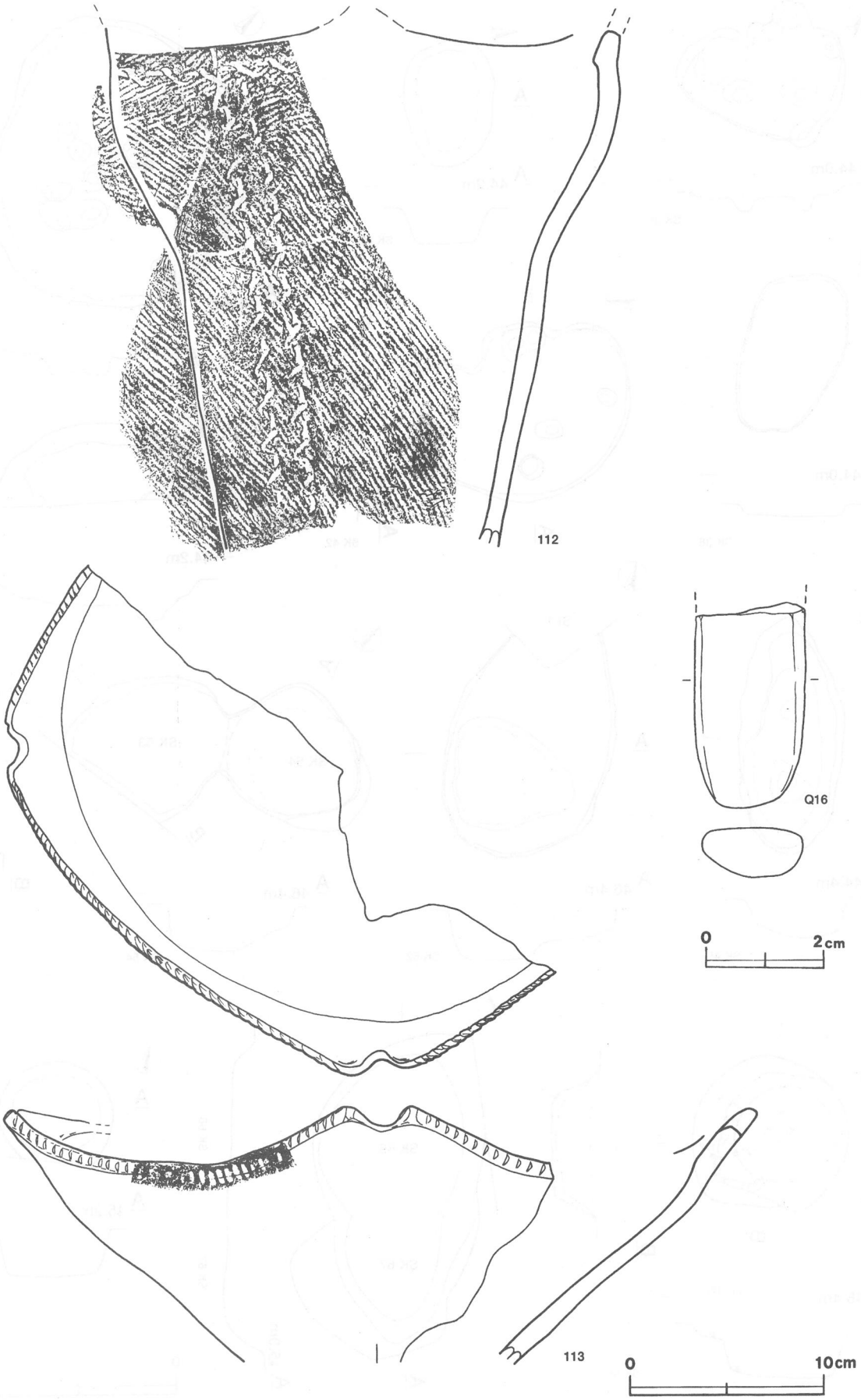
第19図 縄文時代土坑実測図（1）



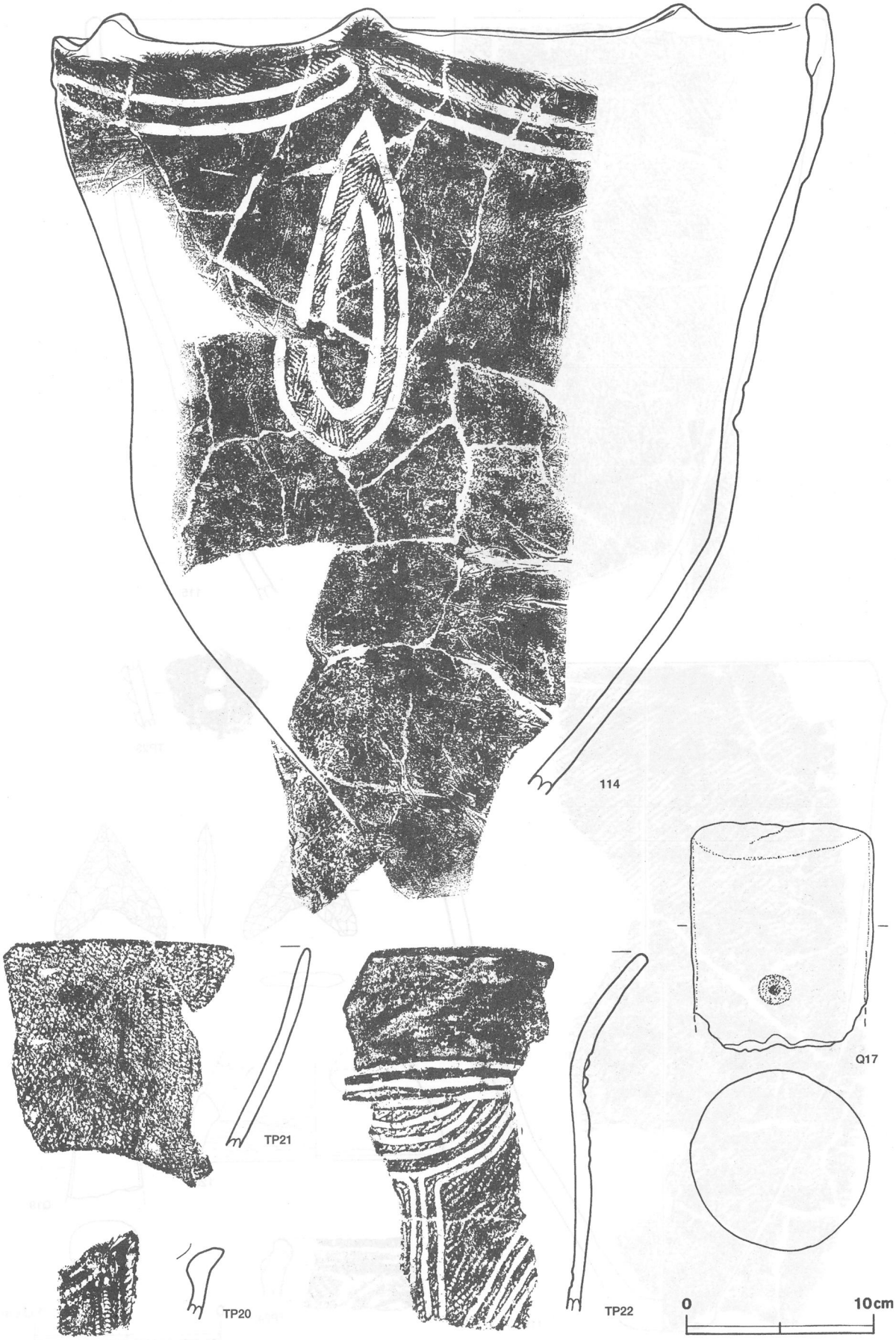
第20図　縄文時代土坑実測図（2）



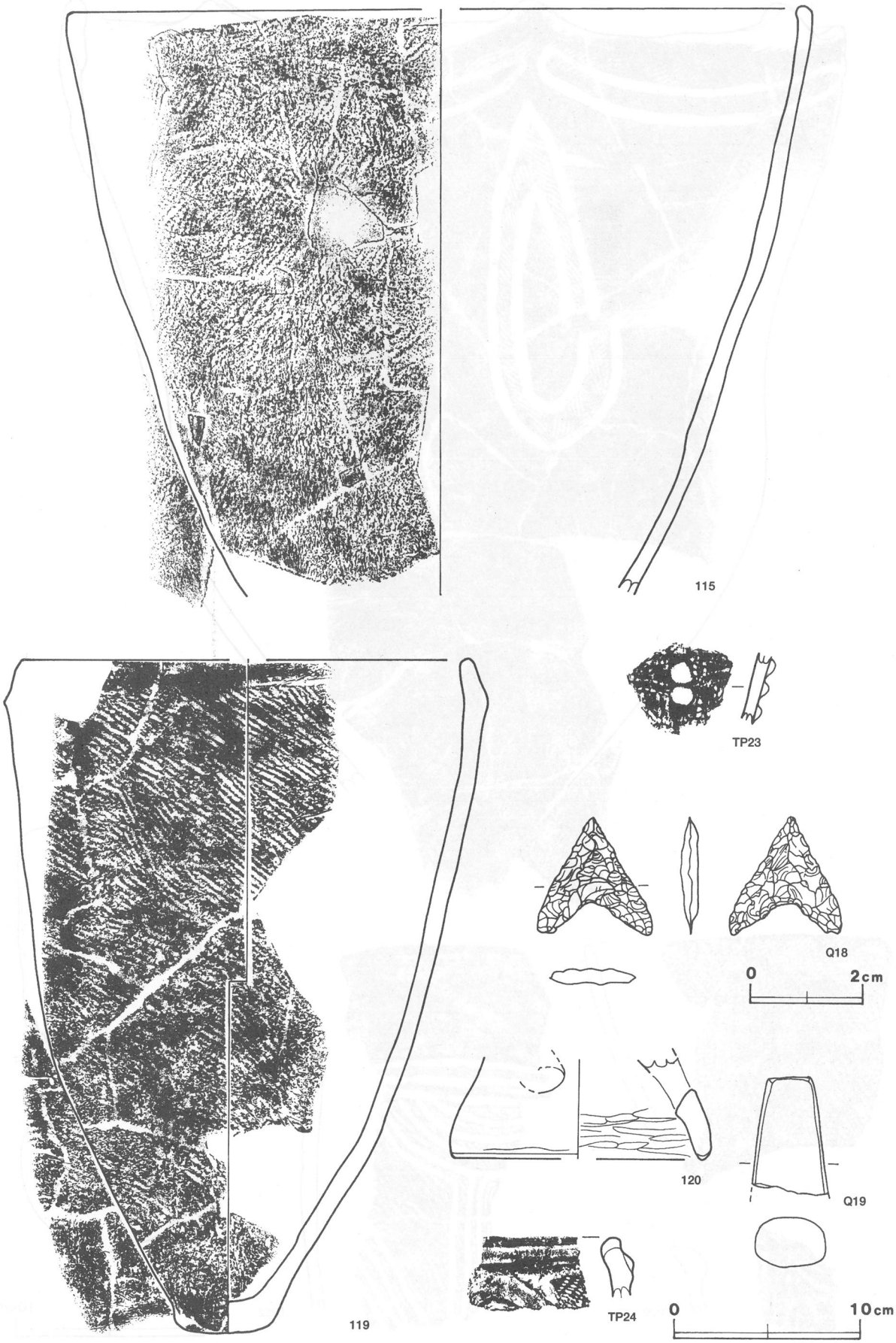
第21図　縄文時代土坑実測図（3）



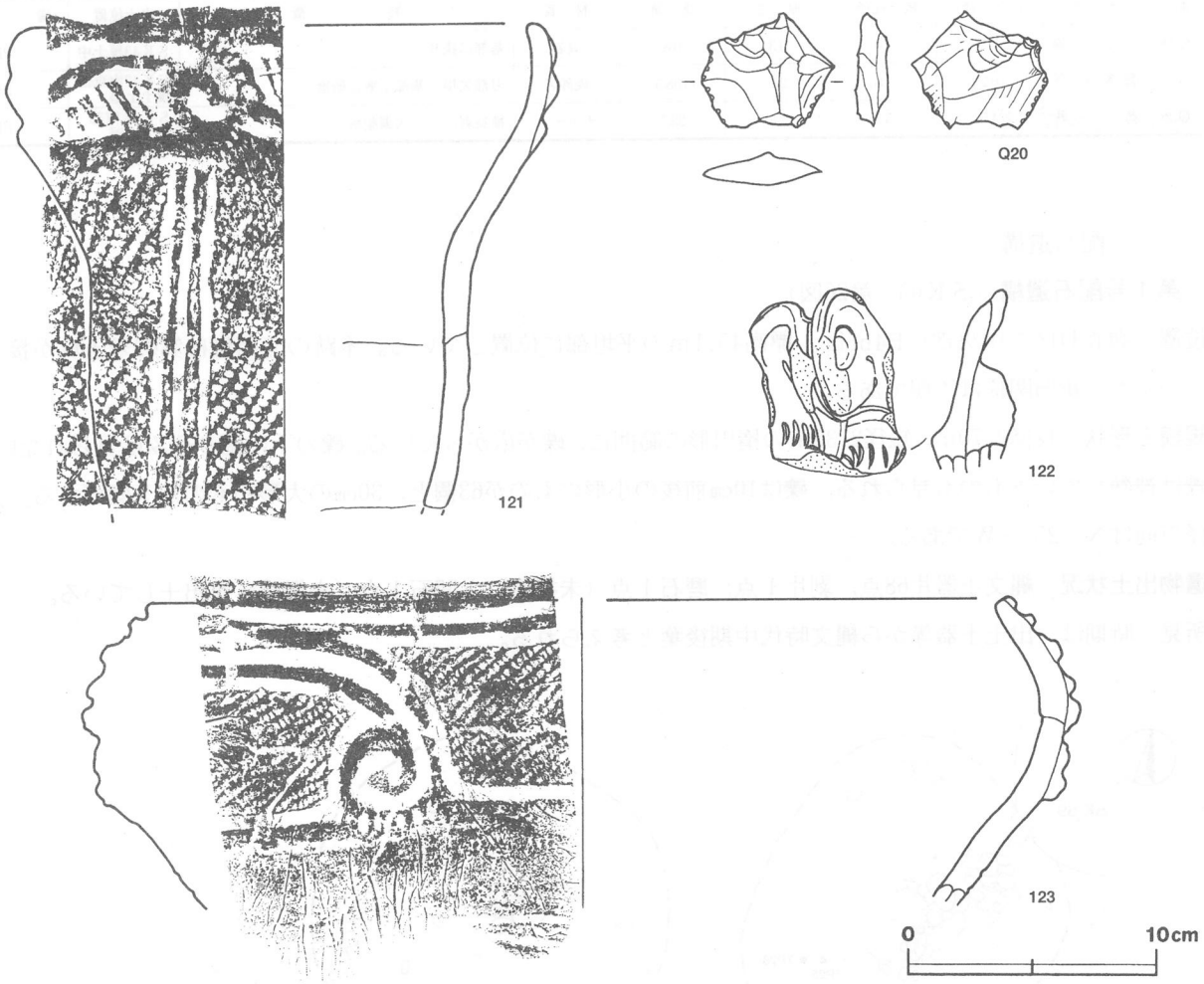
第22図　縄文時代土坑出土遺物実測図（1）



第23図　縄文時代土坑出土遺物実測図（2）



第24図　縄文時代土坑出土遺物実測図（3）



第25図　縄文時代土坑出土遺物実測図（４）

縄文時代土坑出土遺物観察表（第22～25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
112	縄文土器	深鉢	－	(16.2)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	単節ＲＬの縄文を地文に波状の沈線が横位と縦位に施文	SK４南部底面	15%
113	縄文土器	浅鉢	[38.0]	(13.1)	－	石英・長石	にぶい褐	普通	口唇部にキザミ目　無文	SK４南部底面	25%
114	縄文土器	深鉢	40.5	(42.2)	－	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	７単位の波状口縁　単節ＲＬの縄文を地文に縦長状の楕円形の沈線	ＳＫ７南東部覆土中層	40%　PL17
TP20	縄文土器	深鉢	－	(3.7)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	隆帯に沿って２列の結節沈線文	ＳＫ11東部覆土上層	
115	縄文土器	深鉢	[39.2]	(31.2)	－	長石･雲母	にぶい黄橙	普通	単節ＲＬの縄文	ＳＫ17南西部底面	90%
TP21	縄文土器	深鉢	－	(10.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	単節ＲＬの縄文	ＳＫ17南西部底面	
TP22	縄文土器	深鉢	－	(18.9)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	沈線で区画　区画後単節ＬＲの縄文	ＳＫ21覆土中	
TP23	縄文土器	深鉢	－	(3.5)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	隆帯上指頭による押圧　隆帯に沿って２列の結節沈線文	ＳＫ31覆土中	
119	縄文土器	深鉢	[24.2]	(35.5)	5.2	石英・長石･小礫	にぶい橙	普通	口縁部無文帯　胴部単節ＬＲの縄文	ＳＫ32北西部覆土中層	90%　PL18
120	縄文土器	器台	－	(6.3)	[13.4]	石英・長石	明赤褐	普通	内面ヘラ磨き　側面に孔を穿つ　孔数は不明	ＳＫ47北東部覆土上層	20%
TP24	縄文土器	深鉢	－	(3.1)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆起線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文	ＳＫ47覆土中	
121	縄文土器	深鉢	[20.8]	(19.3)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部文様帯と区画　胴部単節ＲＬの縄文を地文に３本沈線が垂下	ＳＫ55中央部底面	70%
122	縄文土器	深鉢	－	(7.5)	－	石英・長石･雲母	灰褐	普通	突手　爪形文が施文	ＳＫ55南部底面	５%
123	縄文土器	深鉢	[34.0]	(12.3)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	隆帯で口縁部文様帯と頸部無文帯を区画　口縁部文様帯は隆帯に沿って沈線が巡り，区画内に単節ＬＲの縄文	ＳＫ61北西部覆土上層	10%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	磨製石斧	(3.4)	1.9	0.9	(9.4)	硬砂岩	刃部欠損　基部丁寧に研磨	ＳＫ２覆土中	
Q17	石棒	(17.2)	9.8	9.5	(1571.2)	安山岩	１か所凹痕　外面被熱	ＳＫ21覆土中	

番号	器　種	長さ（径）	幅（孔径）	厚　さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q18	石　　鏃	2.1	2.0	0.3	0.8	頁岩	基部に抉り	ＳＫ43覆土中	PL20
Q19	磨製石斧	(6.2)	(3.8)	2.7	(108.5)	硬砂岩	刃部欠損　基部丁寧に研磨	ＳＫ47南東部覆土上層	PL20
Q20	剥　　片	4.5	5.3	1.3	28.1	チャート	横長剥片　二次調整痕	ＳＫ47南部覆土上層	PL20

（3）　配石遺構

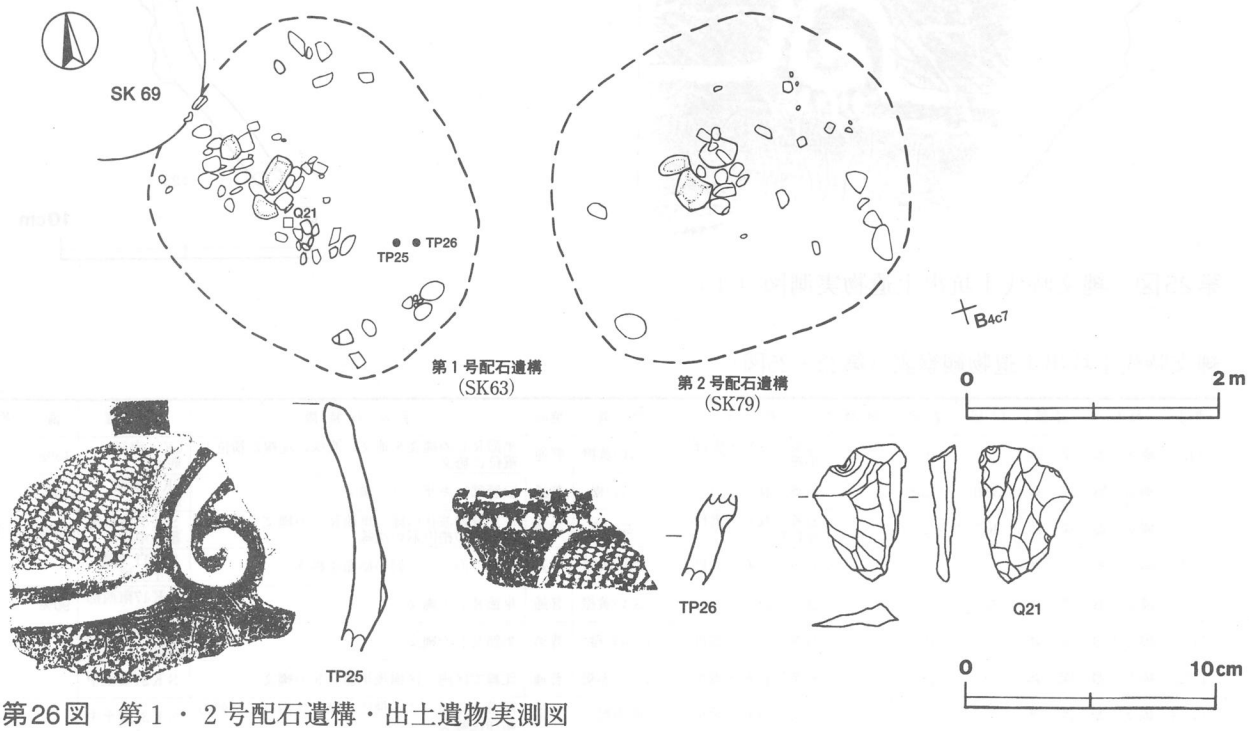
第１号配石遺構（ＳＫ63　第26図）

位置　調査Ｄ区の中央部，B4b5区。標高45.1mの平坦部に位置している。本跡の北西側に第69号土坑が接しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　長径2.70m，短径2.35mの楕円形の範囲に，礫が広がっている。礫の下に掘り込みは見られない。礫は被熱しているものも見られる。礫は10cm前後の小形のものが63個と，30cmの大形のものが３個である。長径方向はＮ－25°－Ｗである。

遺物出土状況　縄文土器片68点，剥片１点，磨石１点（未掲載）と凹石１点（未掲載）が出土している。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。



第26図　第１・２号配石遺構・出土遺物実測図

第１号配石遺構出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手法の特徴	出土位置	備　考
TP25	縄文土器	深　鉢	－	(9.9)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	隆帯と沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文	南東部底面	
TP26	縄文土器	深　鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆帯上下に刺突文　沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文と磨消縄文	南東部底面	

番号	器　種	長さ（径）	幅（孔径）	厚　さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q21	剥　　片	5.4	3.8	1.1	12.8	チャート	縦長剥片　部分的に二次調整痕	中央部底面	

第２号配石遺構（ＳＫ79　第26図）

位置　調査Ｄ区の中央部，B4b6区。標高45.1mの平坦部に位置している。

規模と形状　長径2.90m，短径2.50mの楕円形の範囲に，礫が広がっている。礫の下に掘り込みは見られない。礫は被熱しているものも見られる。礫は10cm前後の小形のものが29個と，30cmの大形のものが７個である。長径方向はＮ－88°－Ｅである。

遺物出土状況　縄文土器片７点が出土している。

所見　時期は，出土土器等から縄文時代中期後葉と考えられる。

（４）　遺物包含層

第１号遺物包含層（第27～29図）

位置　調査Ｂ区全体の範囲が包含層と考えられる。

規模と形状　調査Ｂ区全体から縄文土器片の分布が見られるので，調査区域外にまで延びていると考えられる。遺物を取り上げた後，底面を精査したが，遺構と考えられるものは確認できなかった。

覆土　調査区域内の端の部分にトレンチを入れ，土層観察を行った。ほぼレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

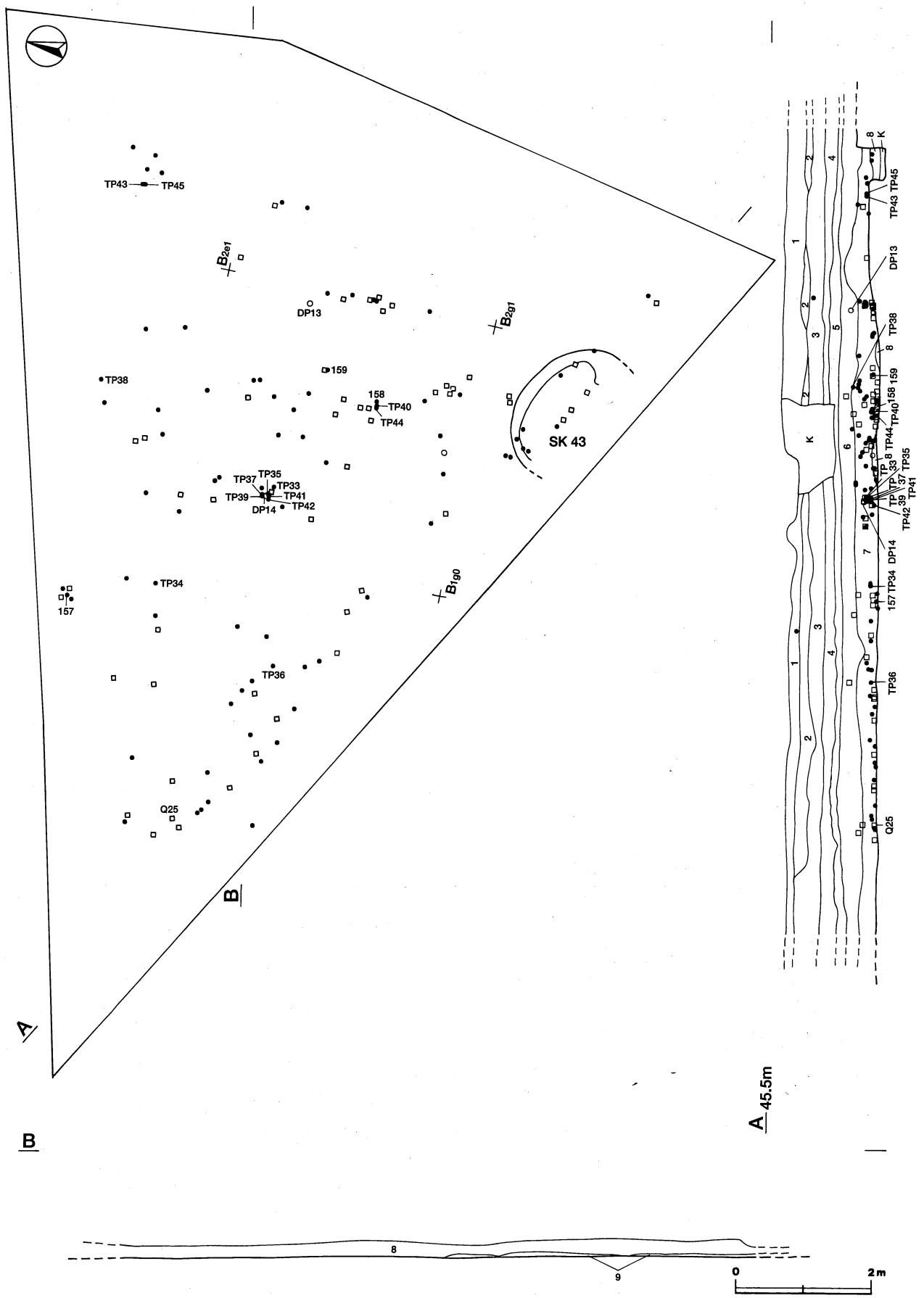
1　灰　黄　色　　砂中量，礫少量，粘土粒子微量
2　にぶい褐色　　砂・礫中量，炭化物・粘土粒子少量
3　暗　褐　色　　砂・礫中量，粘土粒子少量
4　暗　褐　色　　砂・礫中量，粘土粒子少量
5　黄　灰　色　　砂・粘土粒子中量，炭化物微量
6　暗灰黄色　　砂・粘土粒子中量，炭化物少量
7　黒　褐　色　　砂・粘土粒子中量
8　黒　褐　色　　砂少量
9　褐　灰　色　　砂中量

遺物出土状況　縄文土器片3377点，磨製の不明石製品１点，礫47点，磨石１点（未掲載），石皿１点（未掲載）のほか，撹乱等により混入したとみられる土師器片62点，須恵器片20点，陶器片10点が出土している。調査Ｂ区全体に縄文土器片の分布が見られる。

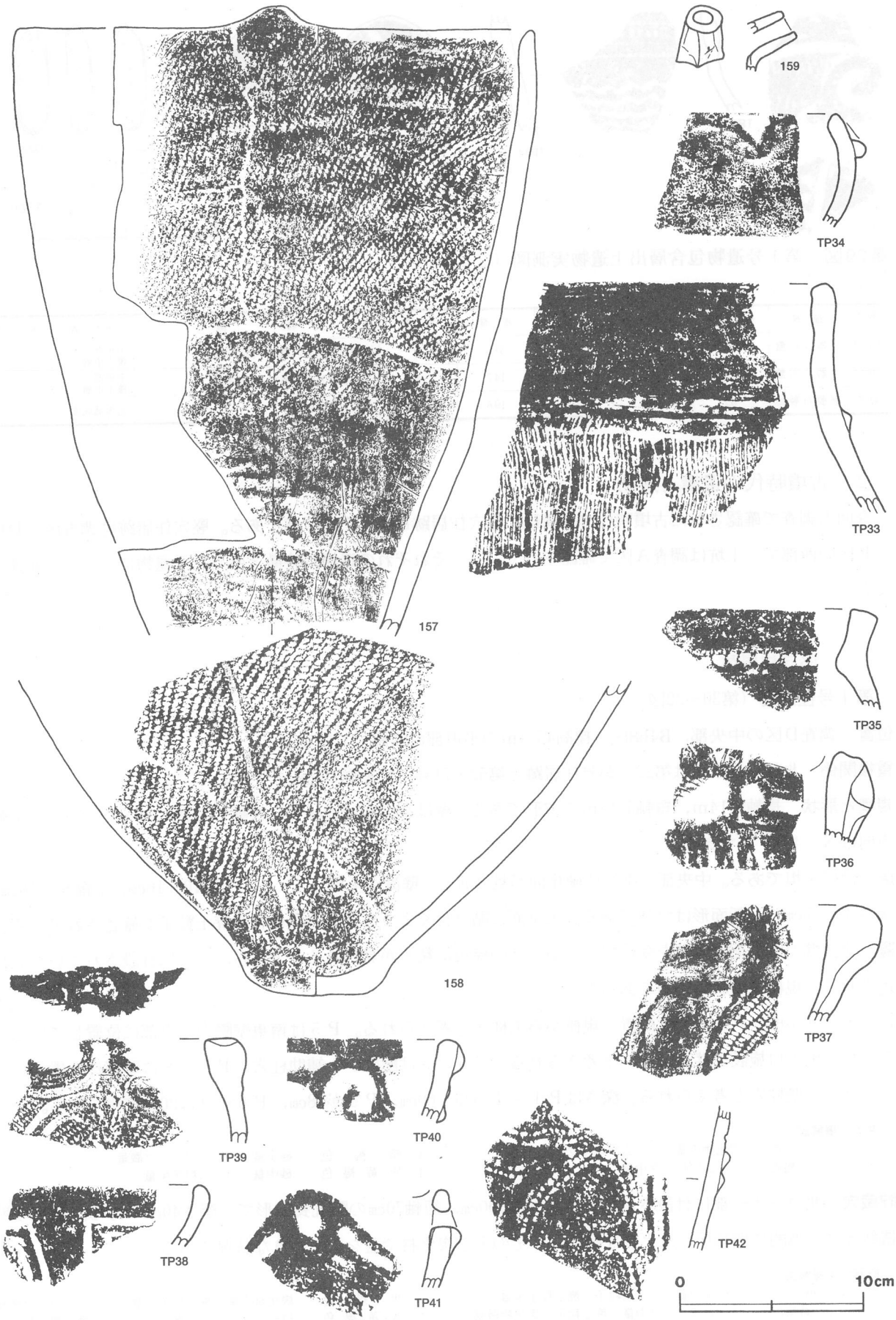
所見　出土した縄文土器片のほとんどは中期のもので，本跡の時期と考えられる。その他の土器片は流れ込んだものと考えられる。

第１号遺物包含層出土遺物観察表（第28・29図）

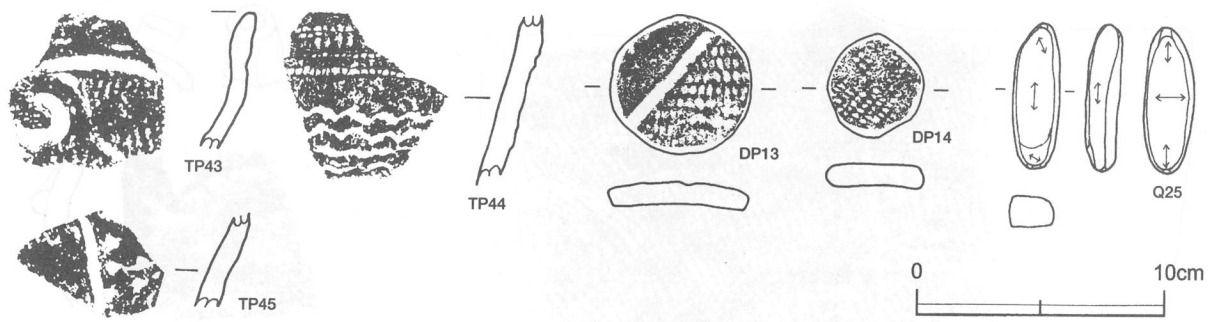
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
157	縄文土器	深鉢	[28.4]	(33.0)	－	石英・長石・小礫	にぶい橙	普通	単節ＲＬの縄文	北部底面	20%　PL18
158	縄文土器	深鉢	－	(17.2)	7	石英・長石・赤色粒子・小礫	にぶい黄橙	普通	単節ＲＬの縄文後沈線が垂下	中央部底面	20%　PL18
159	縄文土器	注口	－	(3.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	注口部ナデ　注口部赤彩	中央部覆土下層	5％
TP33	縄文土器	深鉢	－	(12.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	隆帯貼り付け　胴部条線文	中央部覆土下層	
TP34	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部にＶ字状の隆帯　無文	北部覆土下層	
TP35	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部下位に刺突文	中央部覆土下層	
TP36	縄文土器	深鉢	－	(5.0)	－	石英・長石・雲母	褐	普通	口縁部に隆帯貼り付け　沈線が垂下	北西部覆土下層	
TP37	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	隆起線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文と磨消縄文	中央部覆土下層	
TP38	縄文土器	深鉢	－	(3.8)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	沈線で区画　区画内に磨消縄文と単節縄文（磨滅）	北部覆土下層	
TP39	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文	中央部覆土下層	
TP40	縄文土器	深鉢	－	(4.3)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部隆帯貼り付け	中央部覆土下層	
TP41	縄文土器	深鉢	－	(5.1)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	橋状の突手	中央部覆土下層	
TP42	縄文土器	深鉢	－	(7.7)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	隆帯に沿って２列の結節沈線文	中央部覆土下層	
TP43	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	石英・長石・雲母	灰褐	普通	沈線で区画　区画内に単節ＲＬの縄文	北東部底面	
TP44	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	押し引き竹管文・山形文が横走	中央部底面	
TP45	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	－	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	沈線で区画　区画内に刺突列点文	北東部底面	



第27図　第１号遺物包含層実測図



第28図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（１）



第29図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（２）

番号	器　種	長さ（径）	幅（孔径）	厚　さ	重　量	材　質	特　　徴	出土位置	備　　考
DP13	土器片円盤	5.5	5.6	0.9	31.5	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	中央部 覆土中層	
DP14	土器片円盤	4.2	3.9	0.9	14.7	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	中央部 覆土下層	
Q25	磨製石製品	5.7	1.9	1.3	19.8	安山岩	表面丁寧に研磨	北西部底面	

2　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された古墳時代の遺構は，竪穴住居跡13軒，土坑２基である。竪穴住居跡は調査区のＤ区とＥ区の西部で，土坑は調査Ａ区で確認されている。それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について，記述していく。

（１）　竪穴住居跡

第１号住居跡（第30～32図）

位置　調査Ｄ区の中央部，B4b8区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係　北部から東部は第22・23号住居跡と第52・71号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸5.14m，短軸5.12mの方形である。壁は高さ10～22cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－42°－Ｗである。

床　ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。壁溝は全周している。上幅10～16cm，下幅６～10cm，深さ４～６cmで，断面形は∪状である。床全面に貼り付くように多量の炭化材や焼土粒子が確認されている。

竈　北西壁の中央部は撹乱を受けているが，その周辺に粘土が見られることから，ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット　９か所。Ｐ１～４は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ５は南東壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６・９は配置から補助柱穴，Ｐ７・８は壁際に位置していることから壁柱穴と考えられる。深さはＰ１～４が43～60cm，Ｐ５が38cm，Ｐ６～９は20cm前後である。

Ｐ５土層解説

1	黒　　色	炭化物少量，ロームブロック微量	3	暗　褐　色	砂少量，ロームブロック微量
2	にぶい黄褐色	ロームブロック中量	4	灰 黄 褐 色	砂中量，ローム粒子少量

貯蔵穴　北コーナー部に付設されている。長軸100cm，短軸70cmの隅丸長方形で，深さ40cmである。覆土の堆積状況は人為的に埋め戻したような様相で，その上を炭化材で蓋をしたような状況である。

貯蔵穴土層解説

1	黒　褐　色	炭化材中量，ローム粒子・焼土粒子少量	3	黒　褐　色	炭化材中量，焼土粒子少量，ロームブロック微量
2	にぶい黄褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量	4	灰 黄 褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量

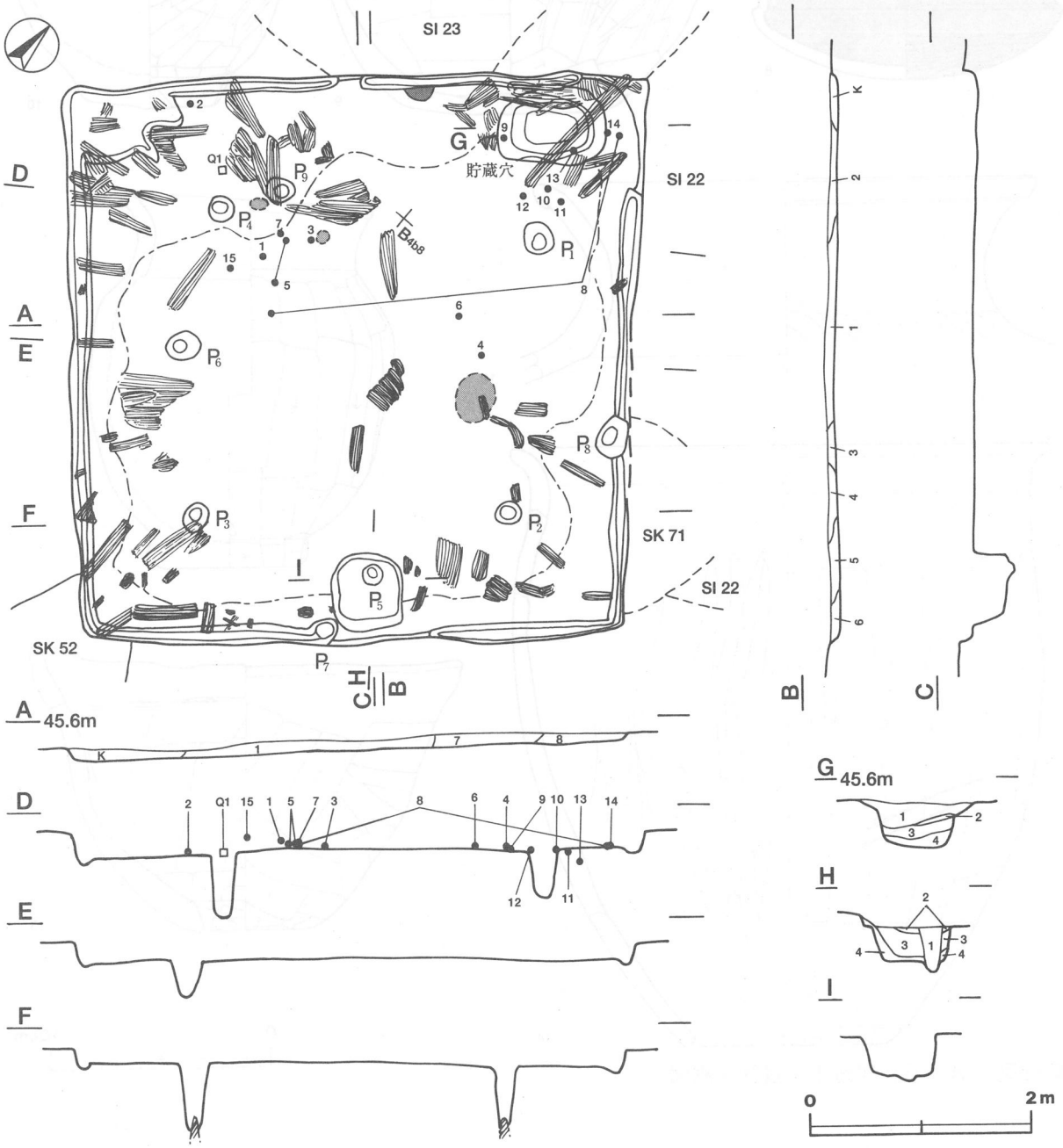
覆土　8層からなる。各層がブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

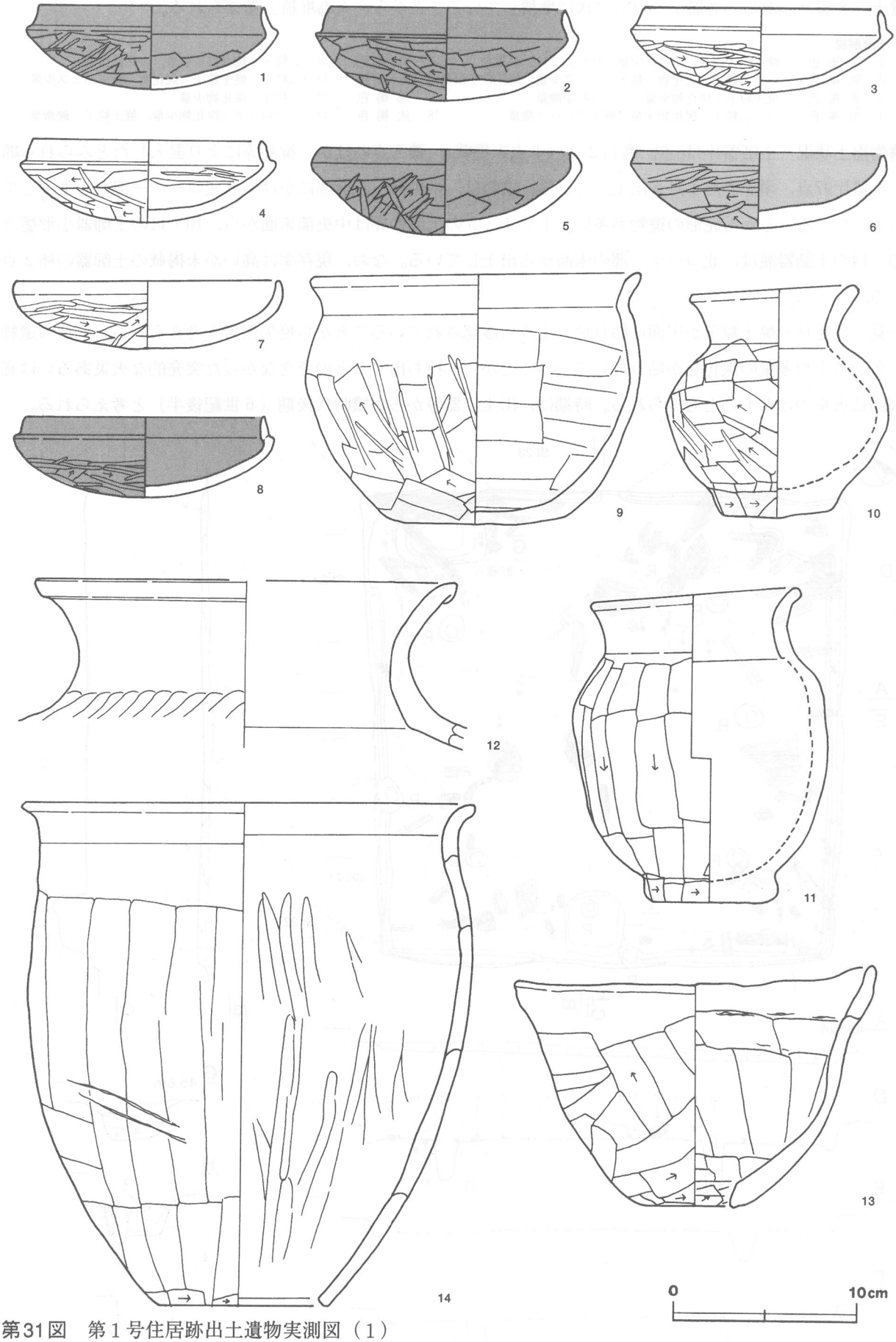
1	黒褐色	焼土粒子中量，炭化材少量，ロームブロック微量	5	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量，炭化物微量
2	灰褐色	ローム粒子・炭化物・粘土ブロック少量，焼土粒子微量	6	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物・鹿沼パミス少量
3	黒褐色	焼土粒子・炭化物少量，ローム粒子微量	7	黒褐色	ローム粒子・炭化物少量
4	黒褐色	ローム粒子・炭化物少量，焼土ブロック微量	8	灰褐色	ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子・礫微量

遺物出土状況　土師器片118点，磨石2点（1点未掲載），礫5点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片97点，須恵器片1点が出土している。遺物は，中央部から西部にかけてと北コーナー部から集中して出土している。しかも完形の遺物が多い。1・3・5の土師器坏は中央部床面から，10・11の土師器小形甕と13・14の土師器甑は，北コーナー部の床面から出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏2点ある。

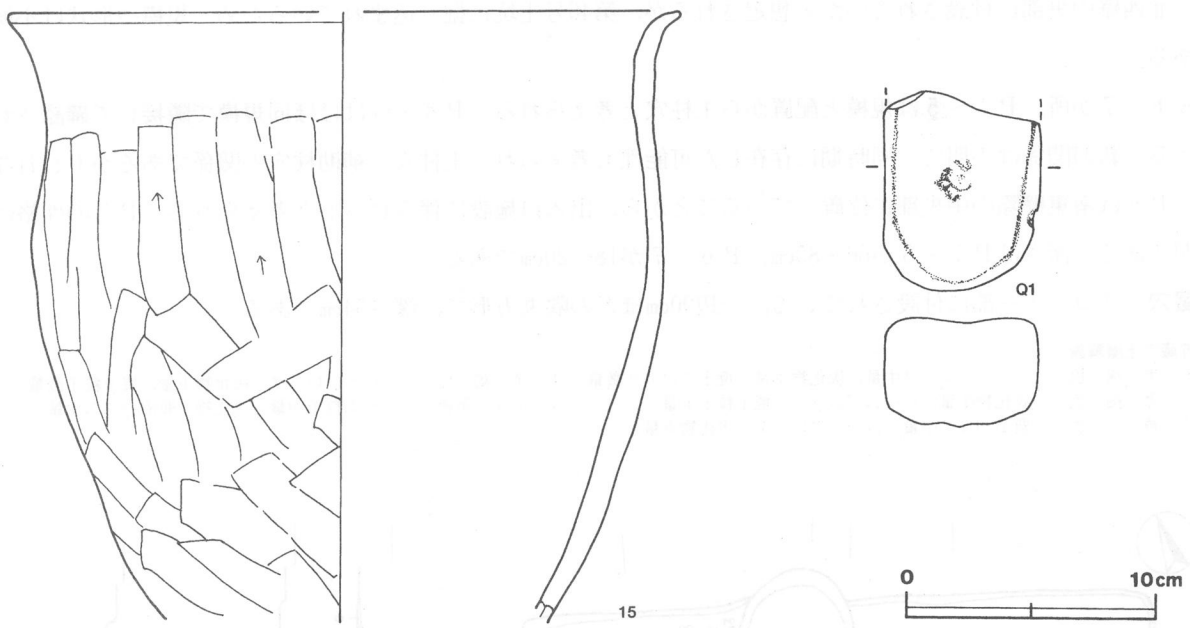
所見　炭化材や焼土粒子が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形の遺物が多いことや多量の炭化材が貼り付いていることから，持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第30図　第1号住居跡実測図



第31図　第1号住居跡出土遺物実測図（1）



第32図　第１号住居跡出土遺物実測図（２）

第１号住居跡出土遺物観察表（第31・32図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	12.2	4.5	－	長石・金雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ　内・外面黒色処理	中央部床面	100%　PL11
2	土師器	坏	12.8	4.9	－	長石・金雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ　内・外面黒色処理	北西部床面	95%　PL11
3	土師器	坏	12.8	4.6	－	長石・金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	中央部床面	90%　PL11
4	土師器	坏	12.4	4.4	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	中央部床面	90%　PL11
5	土師器	坏	13.7	4.5	－	石英・長石・金雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ　内・外面黒色処理	中央部床面	90%　PL11
6	土師器	坏	13.5	4	－	長石・金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ　内・外面赤彩	中央部床面	80%
7	土師器	坏	14.5	3.7	－	長石・金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	中央部床面	70%
8	土師器	坏	12.9	4.3	－	長石・金雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ　内・外面黒色処理	中央部床面	60%
9	土師器	鉢	17.6	13.7	9.8	石英多・長石多・雲母	褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	北コーナー部床面	95%　PL11
10	土師器	小形甕	8.8	12.6	6.1	石英多・長石多・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	北コーナー部床面	100%　PL11
11	土師器	小形甕	11.1	17	6.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	北コーナー部床面	100%　PL11
12	土師器	甕	[22.8]	(9.0)	－	石英多・長石多	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ	北コーナー部床面	20%
13	土師器	甑	19.3	13	5.1	石英多・長石多・雲母	にぶい褐	普通	口縁部指頭による押圧　孔部ヘラ削り	北コーナー部床面	100%　PL12
14	土師器	甑	24.4	27.1	9.4	石英・長石	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ　孔部ヘラ削り	北コーナー部床面	90%　PL11
15	土師器	甑	[26.8]	(24.4)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	中央部覆土下層	35%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q１	磨石	(8.0)	6.2	(4.3)	(336.6)	砂岩	自然石を素材とし，１面に磨り痕跡	北西部床面	

第２号住居跡（第33・34図）

位置　調査Ｅ区の南西部，B5d4区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係　北西壁の中央部を第46号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.38m，短軸5.16mの方形である。壁は高さ４～10cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－20°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。床全面に貼り付くように炭化材が確認されている。

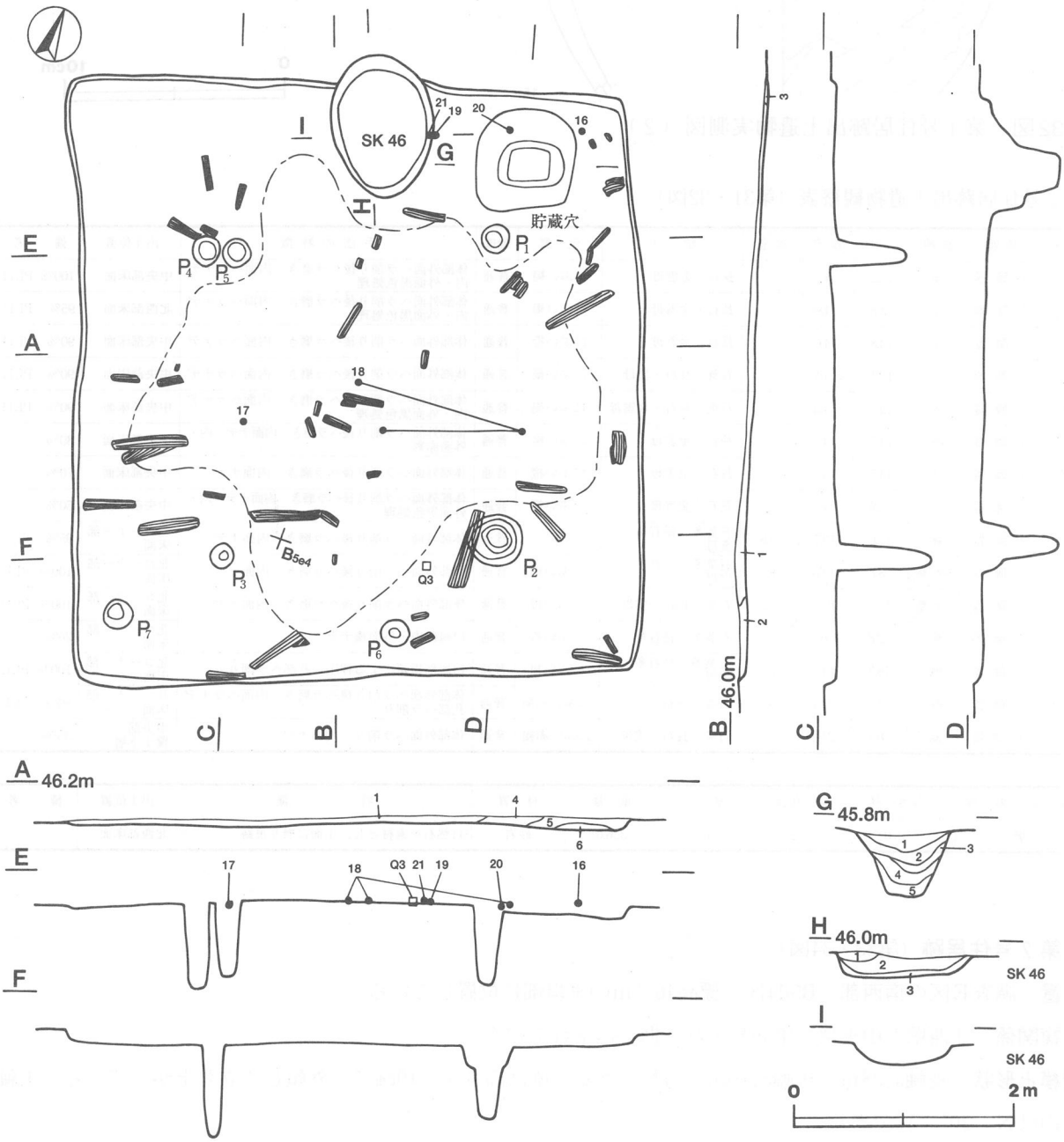
竈　北西壁中央部に付設されていたと想定されるが，第46号土坑に掘り込まれているため，規模や形状は不明である。

ピット　7か所。P 1～5は規模と配置から主柱穴と考えられる。P 4・5はほぼ同規模で隣接して確認されている。新旧関係は不明で，同時期に存在した可能性も考えられ，主柱穴・補助柱穴の関係であるかもしれない。P 6は南東壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P 7の性格は不明である。深さはP 1～5が66～85cm，P 6・7が18～20cmである。

貯蔵穴　北コーナー部に付設されている。一辺90cmほどの隅丸方形で，深さ54cmである

貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	ロームブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量	4	黄褐色	ロームブロック・炭化物少量，焼土粒子微量
2	黒褐色	炭化物中量，ロームブロック・焼土粒子少量	5	にぶい黄色	ローム粒子中量，炭化物・鹿沼パミス少量
3	黄色	鹿沼パミス中量，ロームブロック・炭化物少量			



第33図　第2号住居跡，第46号土坑実測図

覆土　6層からなる。各層にロームブロックや炭化粒子が含まれていることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

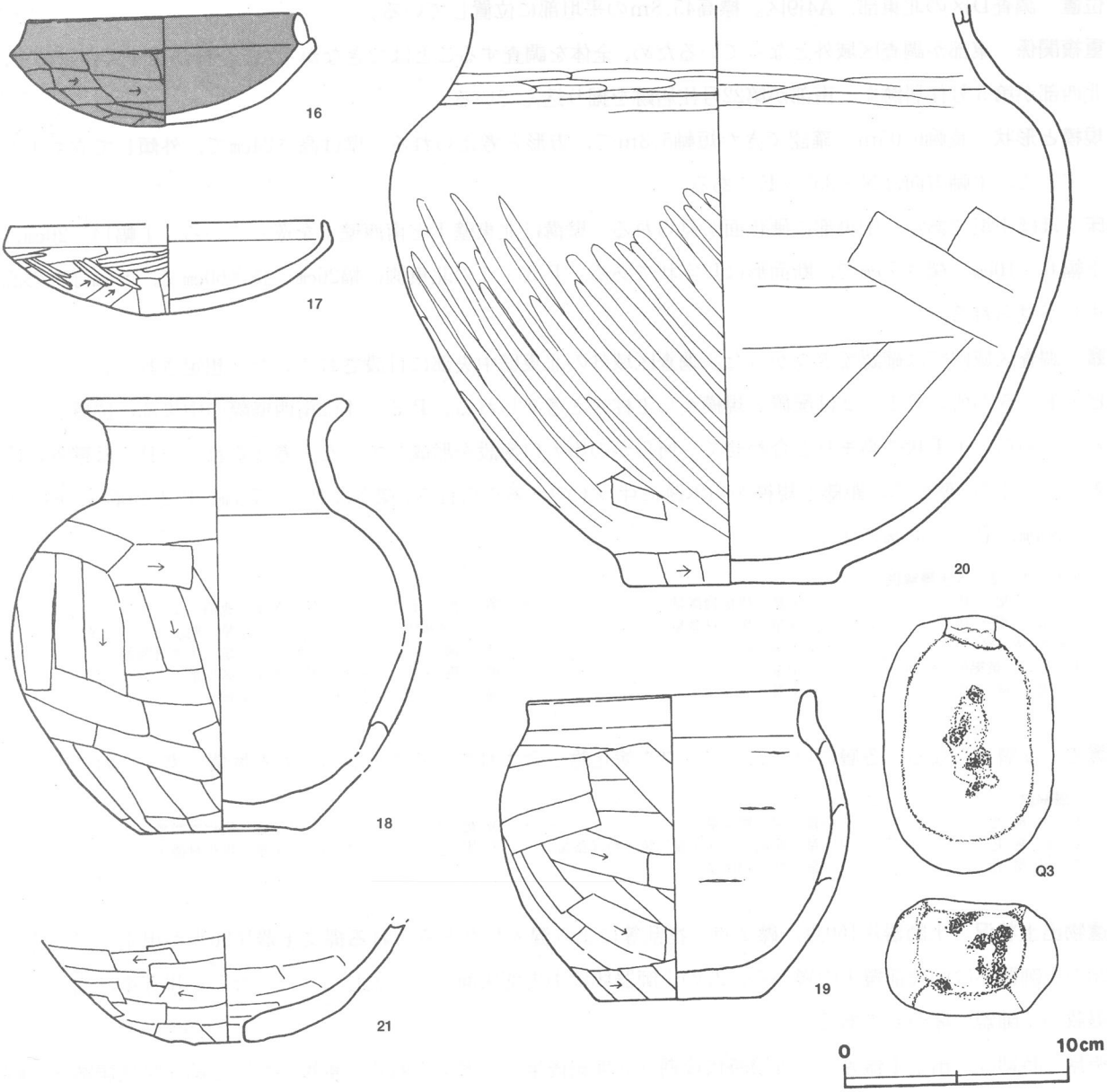
1	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化材・鹿沼パミス少量	4	黒褐色	ロームブロック少量，炭化物微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	5	黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量，炭化物微量
3	黒褐色	ロームブロック微量	6	黒褐色	鹿沼パミス中量，ロームブロック少量，炭化物微量

第46号土坑土層解説

1	褐色	鹿沼パミス中量，焼土粒子少量，ロームブロック微量	3	明褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量			

遺物出土状況　土師器片167点，磨石1点，礫1点，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片23点が出土している。遺物は中央部から北コーナー部にかけて出土している。完形に近い遺物が多い。16の土師器坏，19の土師器小形甕と20の土師器甕は北コーナー部から，18の土師器壺は中央部から出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏2点がある。

所見　炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことや多量の炭化材が貼り付いていることから，持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第34図　第2号住居跡出土遺物実測図

第２号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
16	土師器	坏	12.2	4.8	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内・外面黒色処理	北コーナー部覆土中層	90%　PL12
17	土師器	坏	[14.2]	4	－	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	中央部床面	50%
18	土師器	壺	11.2	19.2	7.3	石英・長石・金雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	中央部床面	75%　PL12
19	土師器	小形甕	12.5	13.5	7.3	石英多・長石多・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	北コーナー部床面	95%　PL12
20	土師器	甕	－	(25.5)	9.4	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	北コーナー部床面	30%
21	土師器	甑	－	(4.9)	3	石英多・長石多	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	北コーナー部床面	20%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q３	磨石	11.3	7.7	5.1	598.7	安山岩	自然石を素材とし，４面に磨りの痕跡	南東部床面	

第３号住居跡（第35・36図）

位置　調査Ｄ区の北東部，A4j9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係　東部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。全体が第４号住居跡を，北西部が第５号住居跡を，南部が第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸6.05m，確認できた短軸5.3mで，方形と考えられる。壁は高さ24cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－35°－Ｅである。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。壁溝は北東壁下と南西壁下を巡っている。上幅14～20cm，下幅６～10cm，深さ７cmで，断面形はＵ字状である。Ｐ３・４の北東側に幅26cm，長さ60cmで，８cmほどの高まりが見られる。

竈　調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北東壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット　５か所。Ｐ１・２は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ３・４は南西壁際の中央部に位置していることから，土手状の高まりと合わせて，何らかの出入口施設を形成していたと考えられる。Ｐ５は壁外に位置しているが，壁からの距離と規模から本跡に伴うものと考えられる。深さはＰ１が74cm，Ｐ２が66cm，Ｐ３・５が30cm，Ｐ４が52cmである。

Ｐ１・２・３・５土層解説

1　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
2　暗褐色　ロームブロック少量，炭化材微量
3　明黄褐色　ロームブロック中量
4　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
5　黒褐色　ロームブロック中量
6　黄褐色　ローム粒子多量，鹿沼パミス少量
7　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，鹿沼パミス少量
8　黒褐色　ロームブロック少量，炭化材微量
9　黄褐色　ローム粒子多量，砂少量
10　褐色　ロームブロック少量

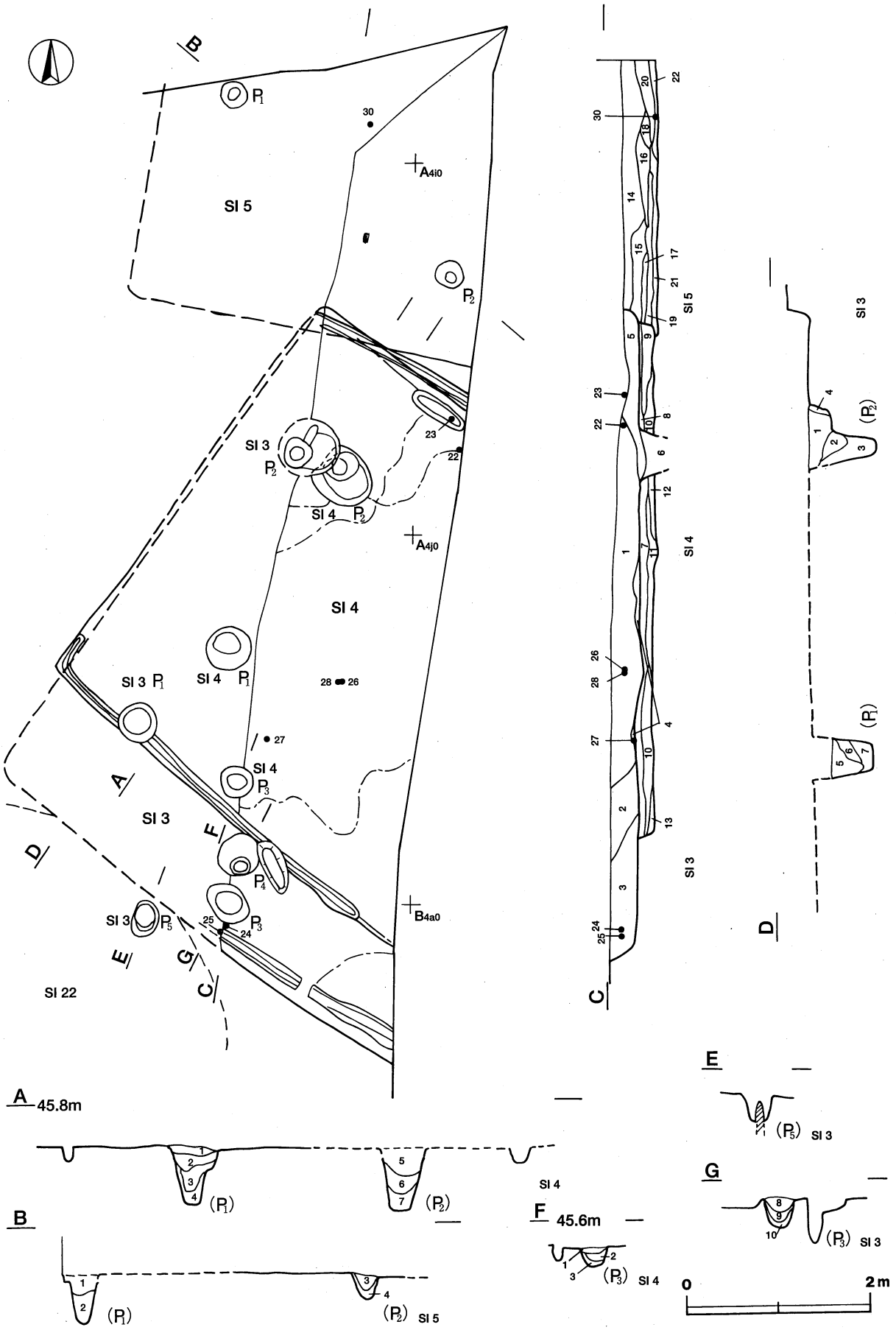
覆土　５層からなる。各層にロームブロックや炭化物が含まれていることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

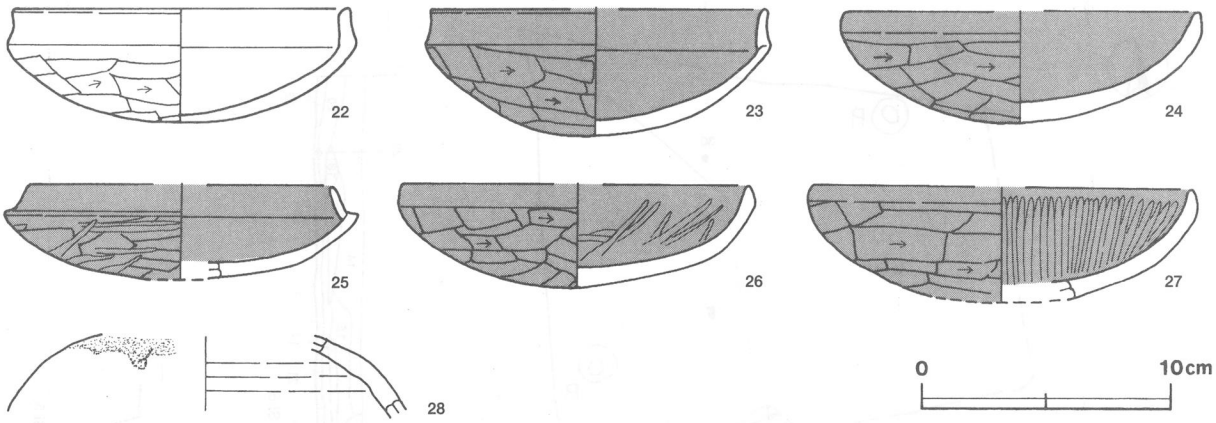
1　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　暗褐色　ロームブロック中量，鹿沼パミス少量，焼土粒子微量
3　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物微量
4　黒褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
5　黒褐色　ロームブロック少量，炭化材微量

遺物出土状況　土師器片160点，礫２点，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片26点が出土している。26の土師器坏は中央部覆土中層から，27の土師器坏は中央部床面から出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏が６点ある。

所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（６世紀後半）と考えられる。重複している第４号住居跡との時期差はほとんどないと思われる。



第35図　第３・４・５号住居跡実測図



第36図　第３号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	13.3	4.5	－	金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	北東部 覆土上層	95%
23	土師器	坏	[13.4]	5.0	－	金雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北東部 覆土上層	60%
24	土師器	坏	[14.2]	4.4	－	雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	南西部 覆土中層	60%
25	土師器	坏	[12.2]	(3.7)	－	金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内・外面黒色処理	南西部 覆土中層	50%
26	土師器	坏	[14.0]	4.1	－	雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ後ヘラ磨き　内・外面黒色処理	中央部 覆土中層	45%
27	土師器	坏	[15.2]	(4.4)	－	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	中央部床面	40%
28	須恵器	壺	－	(3.3)	－	長石	黄灰	普通	体部ロクロナデ　外面自然釉付着	中央部 覆土中層	5%

第４号住居跡（第35・37図）

位置　調査Ｄ区の北東部，A4j9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係　東部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。北西部は第５号住居跡を掘り込み，大部分を第３号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.2m，確認できた短軸4.64mで，方形と考えられる。壁は高さ18cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－36°－Eである。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。北西壁は削平されているが，壁溝は全周していると考えられる。上幅10～18cm，下幅４～８cm，深さ18cmで，断面形はU字状である。

竈　調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北東壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット　３か所。Ｐ１・２は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ３は南西壁際に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。深さはＰ１が68cm，Ｐ２が60cm，Ｐ３が22cmである。

Ｐ１・２土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
2　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
3　明黄褐色　ロームブロック少量，炭化物微量
4　明黄褐色　ローム粒子多量
5　黒　褐　色　焼土粒子少量，ロームブロック微量
6　黄　褐　色　ロームブロック多量
7　明黄褐色　ロームブロック多量

Ｐ３土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量
2　暗　褐　色　ロームブロック中量
3　明黄褐色　ロームブロック多量

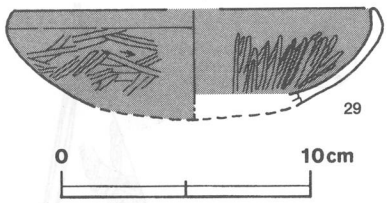
覆土　８層からなる。ロームブロックを含んでいることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

6　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量
7　暗　褐　色　ロームブロック多量，炭化物微量
8　にぶい黄褐色　ロームブロック・砂中量，炭化物微量
9　黒　褐　色　ロームブロック少量
10　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量，礫微量
11　黄　褐　色　ロームブロック多量
12　にぶい黄褐色　ローム粒子多量
13　黒　褐　色　ロームブロック中量，鹿沼パミス少量

遺物出土状況　土師器片15点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片４点が出土している。

所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（６世紀後半）と考えられる。重複している第３号住居跡との時期差はほとんどないと思われる。



第37図　第４号住居跡出土遺物実測図

第４号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
29	土師器	坏	[14.4]	(3.8)	－	雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き 内・外面黒色処理	覆土中	10%

第５号住居跡（第35・38図）

位置　調査Ｄ区の北東部，A4i9区。標高45.8mの平坦部に位置している。

重複関係　東部と北部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。南部を第３・４号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状　確認できた長軸3.82m，短軸3.56mの方形と考えられる。壁は高さ５cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向は〔N－10°－E〕と考えられる。

床　ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。

竈　調査区域内では確認できなかった。

ピット　２か所。Ｐ１は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ２は南壁際に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。深さはＰ１が52cm，Ｐ２が25cmである。

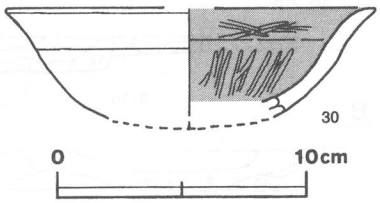
Ｐ１・２土層解説
1　黒褐色　ロームブロック中量，炭化物少量
2　暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
3　黒褐色　ロームブロック少量
4　黄褐色　ローム粒子多量

覆土　９層からなる。各層にロームブロックや炭化物が含まれていることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
14　黒　褐　色　ロームブロック・砂少量，炭化物微量
15　暗　褐　色　ロームブロック・炭化材微量
16　暗　褐　色　炭化物少量，ロームブロック微量
17　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物少量
18　暗　褐　色　炭化材少量，ロームブロック微量
19　黒　褐　色　ロームブロック少量
20　黒　褐　色　ロームブロック微量
21　にぶい黄褐色　ロームブロック中量
22　暗　褐　色　ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片49点，礫１点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片３点が出土している。30の土師器坏は中央部床面から出土している。

所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（６世紀前半）と考えられる。



第38図　第５号住居跡出土遺物実測図

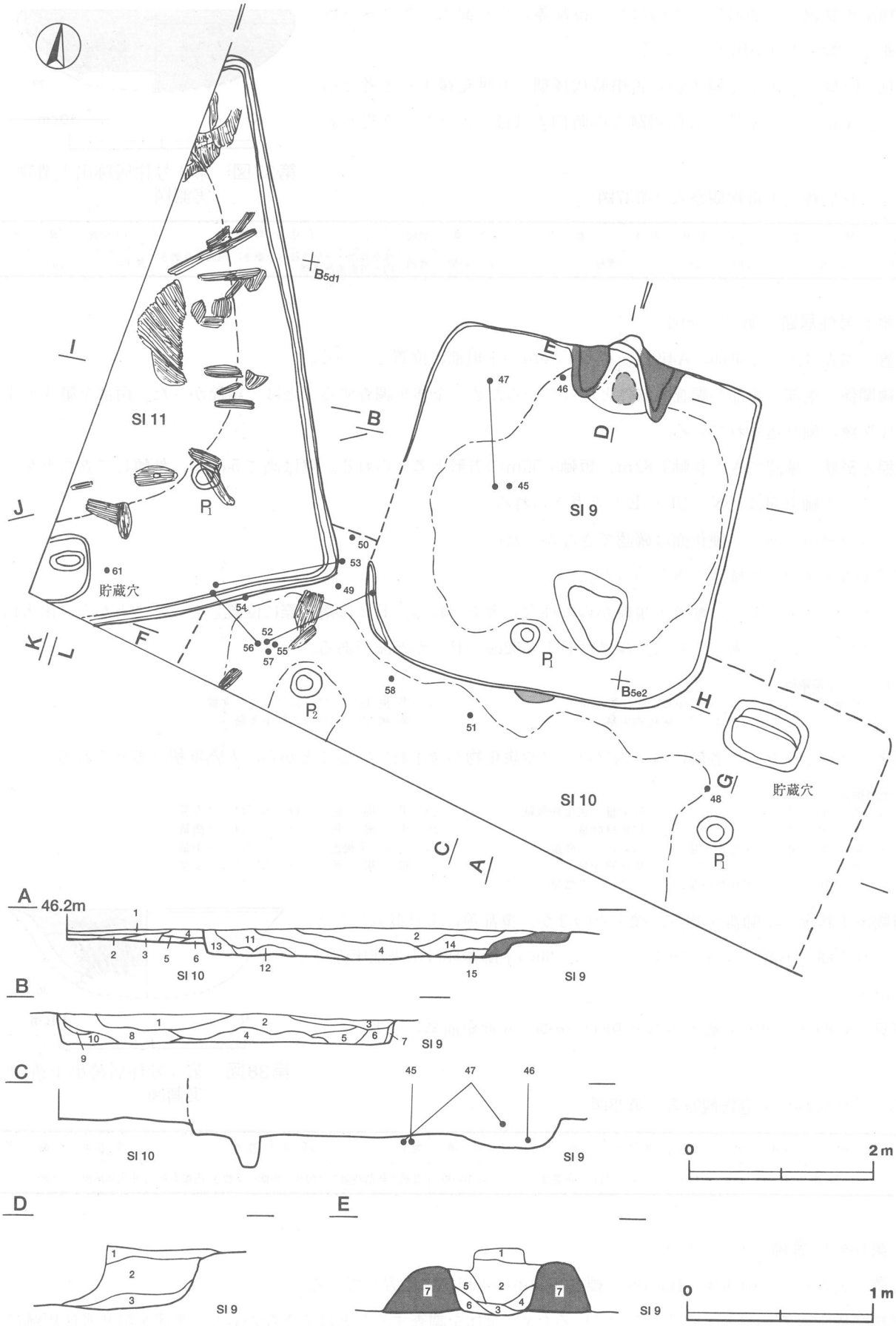
第５号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
30	土師器	坏	[14.8]	(4.3)	－	長石・金雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き 内面赤彩	中央部床面	10%

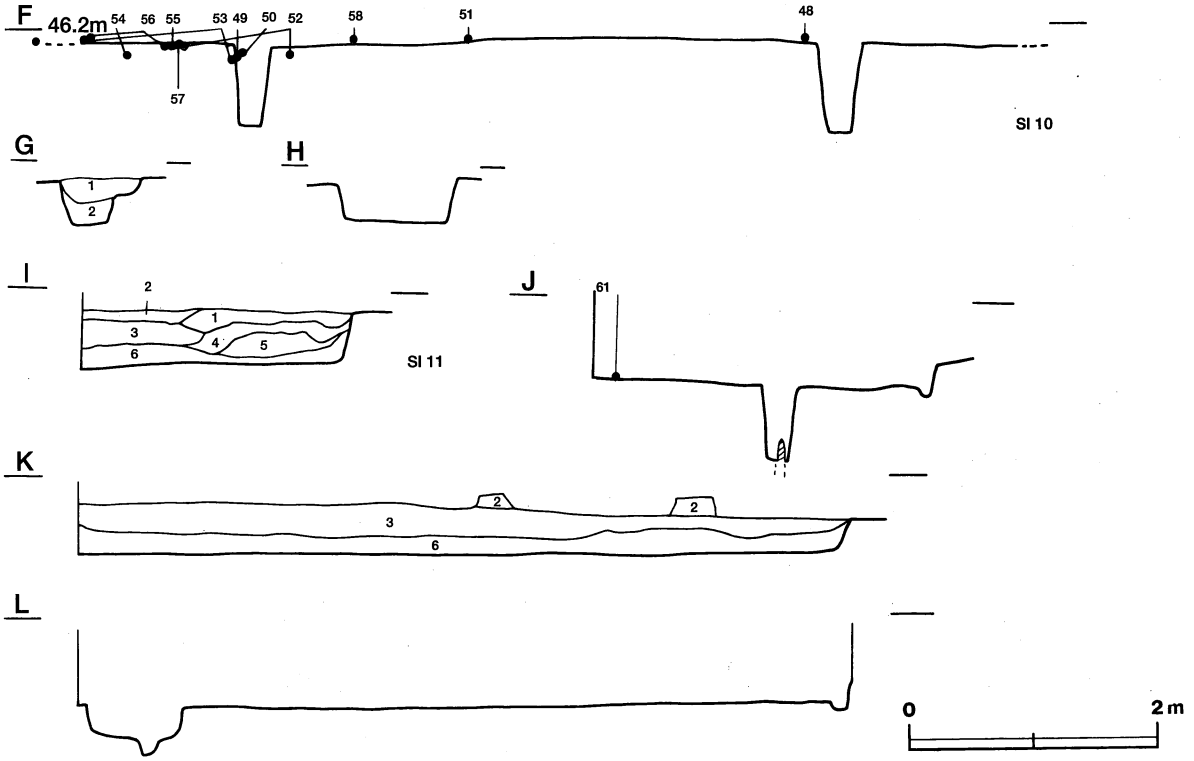
第10号住居跡（第39～42図）

位置　調査Ｅ区の南西部，B5e1区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係　南部が調査区域外になっているため，全体を調査することはできなかった。北部を第９号住居跡に，北西部を第11号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。



第39図　第9・10・11号住居跡実測図



第40図　第10・11号住居跡実測図

規模と形状　壁は削平されているが，推定長軸7.0m，確認できた短軸2.8mで，方形あるいは長方形と考えられる。主軸方向はN－18°－Eと推定される。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。床面に貼り付くように炭化材が確認されている。

竈　北部を第9号住居跡に掘り込まれているが，北東壁際の中央部に焼土が確認されることから，ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット　2か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。深さはP1が72cm，P2が65cmである。

貯蔵穴　北東部に付設されている。長軸91cm，短軸62cmの長方形で，深さは44cmである。

貯蔵穴土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量	2	灰黄褐色	ロームブロック少量

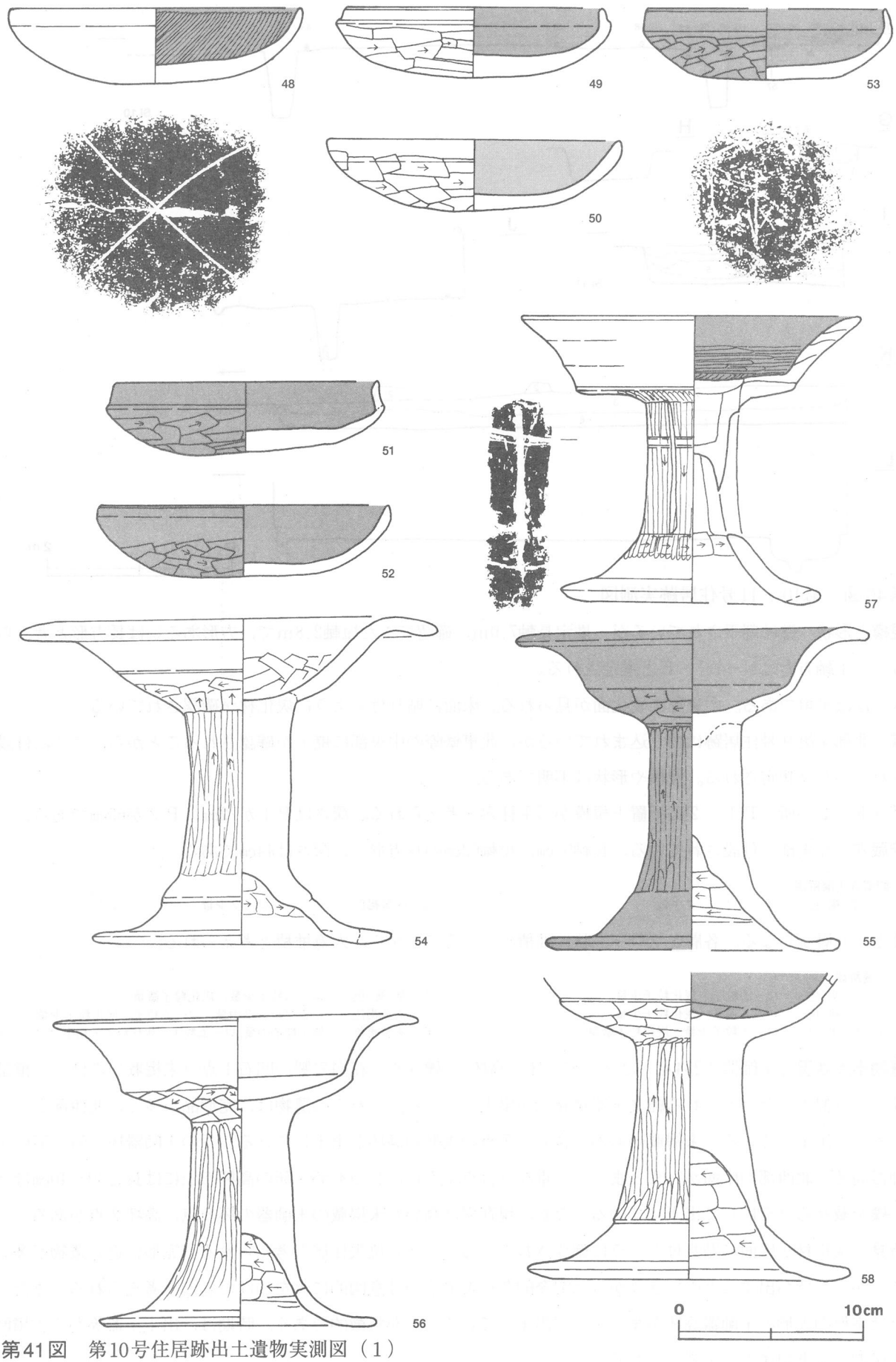
覆土　6層からなる。各層がブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

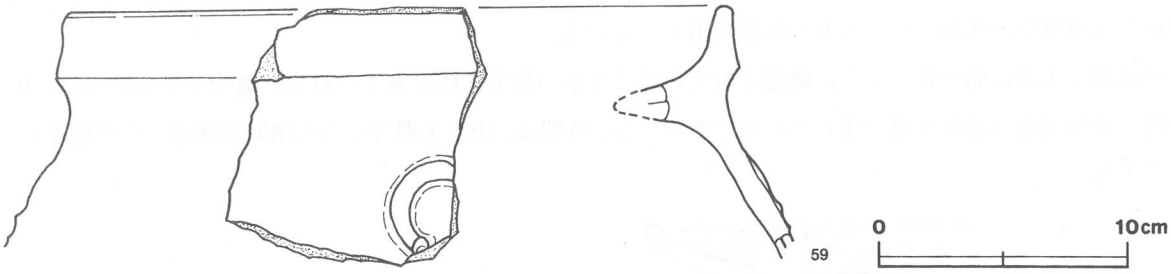
1	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	4	暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	5	灰黄褐色	粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子少量
3	暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量	6	灰黄褐色	焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・粘土ブロック少量

遺物出土状況　土師器片234点（ほとんどが坏・高坏），礫5点，花崗岩製の凹石1点（未掲載）のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片48点が出土している。これらの遺物は，完形品が多く，北西部からまとまって出土している。未掲載のものを含めて7点の大形の高坏が出土している。49の土師器坏，54～57の土師器高坏が北西部の床面からまとまって，重なり合うように，しかも55～56の高坏の上には長さ30～40cmほどの礫を載せるようにして出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏6点，高坏2点がある。

所見　炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことから，持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。また，ほぼ完形の大形の土師器高坏がまとまって出土していることが特徴的である。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第41図　第10号住居跡出土遺物実測図（1）



第42図　第10号住居跡出土遺物実測図（2）

第10号住居跡出土遺物観察表（第41・42図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
48	土師器	坏	15.6	4.0	－	長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理　底部に「×」のヘラ記号	北東部床面	100% PL12
49	土師器	坏	14.0	3.8	－	石英多・長石多・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ナデ　内面黒色処理　外面被熱痕強	北西部床面	100% PL13
50	土師器	坏	16.0	3.8	－	雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ　内面ナデ　内面赤彩	北西部床面	95% PL13
51	土師器	坏	14.1	3.8	－	長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北部床面	70% PL13
52	土師器	坏	15.7	3.9	－	石英・長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北西部床面	55%
53	土師器	坏	[12.8]	3.8	－	長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北西部床面	60%
54	土師器	高坏	19.0	17.7	14.0	長石・金雲母多	にぶい赤褐	普通	坏部内・外面横ナデ　下位外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き，内面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ	北西部床面	90% PL12
55	土師器	高坏	18.1	17.3	[15.0]	石英・長石・雲母	明褐灰	普通	坏部内・外面横ナデ　下位外面ヘラ削り　内面ナデ　脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ削り　裾部内外面横ナデ　坏部内・外面及び脚部外面黒色処理	北西部床面	80% PL13
56	土師器	高坏	19.8	16.7	15.1	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部内・外面横ナデ　下位外面ヘラ削り　内面ナデ　脚部外面ヘラ磨き　内面ヘラ削り　裾部内外面横ナデ	北西部床面	60% PL13
57	土師器	高坏	18.3	15.4	12.5	長石	褐灰	普通	坏部外面横ナデ　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ・ヘラ削り脚部中位から下位にかけて4単位の透かし窓状の切れ込み　裾部内・外面横ナデ　坏部内面黒色処理	北西部床面	65% PL13
58	土師器	高坏	－	(16.5)	15.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面下位ヘラ削り　内面ヘラナデ　脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ　坏部内面黒色処理	北部床面	35% PL13
59	縄文土器	壺	[26.5]	(10.0)	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	無文　内・外面ヘラ磨き	覆土中（流れ込み）	5%

第11号住居跡（第39・40・43図）

位置　調査E区の南西部，B4d0区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係　西部が調査区域外になっているため，全体を調査することはできなかった。東部が第10号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸5.74m，確認できた短軸3.34mで，方形あるいは長方形と考えられる。壁は高さ20～38cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－21°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されている。壁溝は全周している。上幅10～14cm，下幅6～10cm，深さ8cmで，断面形はU字状である。

竈　調査区域内では確認できなかった。

ピット　1か所。P1は配置と規模から主柱穴と考えられる。深さは60cmである。

貯蔵穴　南東壁際中央部に付設されている。確認できた長軸70cm，短軸72cmで，方形あるいは長方形と考えられる。深さは26cmである。

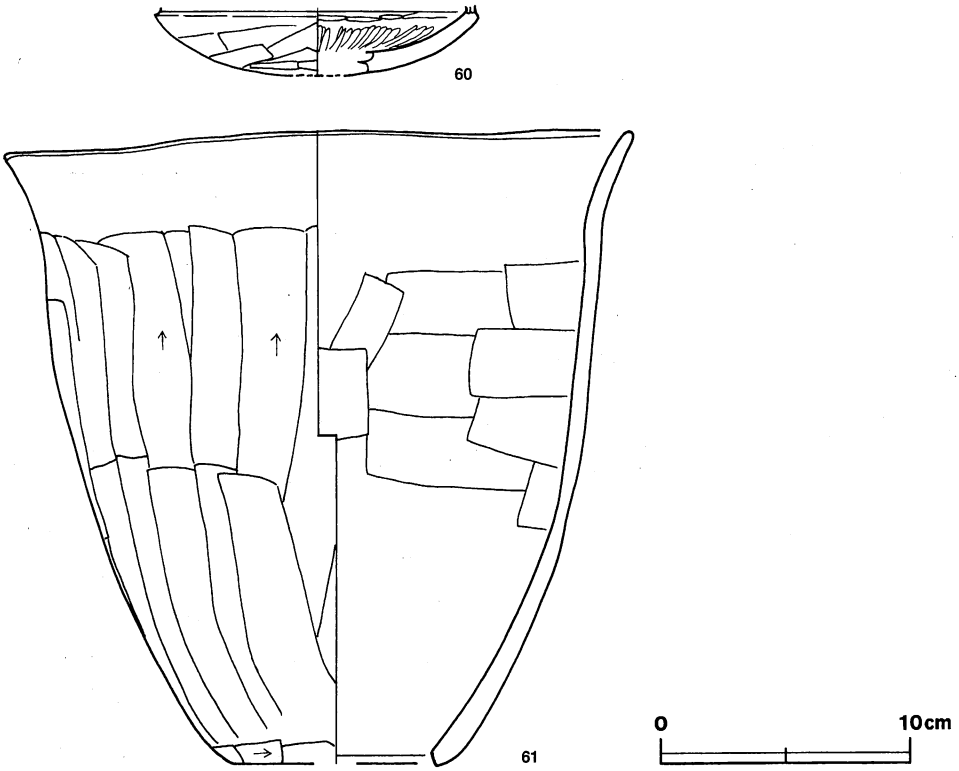
覆土　6層からなる。最下層の6層が人為的に埋め戻された後に，自然に堆積したものと考えられる。

土層解説
1　にぶい黄褐色　砂粒中量，ローム粒子少量
2　暗褐色　ロームブロック・炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　灰黄褐色　砂粒中量，ローム粒子・炭化粒子少量
5　暗褐色　ロームブロック・炭化材少量
6　黒褐色　炭化材多量，ロームブロック・焼土粒子少量

遺物出土状況　土師器片28点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片14点が出土している。61の

土師器甑は南東壁際の床面からつぶれた状態で出土している。

所見　炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。遺物が少ないのは，住居廃絶時に使用可能な遺物を運び出したためであろうか。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第43図　第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
60	土師器	坏	－	(2.7)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	覆土中	20%
61	土師器	甑	25.4	25	[8.0]	石英・長石・雲母・礫	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	南東壁際床面	70%　PL13

第13号住居跡（第44～46図）

位置　調査D区の中央部，B4a6区。標高45.5mの平坦部に位置している。

重複関係　北コーナー部が第14号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸4.05m，短軸4.02mの方形である。壁は高さ14～42cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－27°－Wである。

床　ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。南東壁は削平されているが，壁溝は全周していると考えられる。上幅12～20cm，下幅6～10cm，深さ4～10cmで，断面形はU字状である。P5の北西側に幅34cmで，5cmほどの馬蹄形状の高まりが見られる。この高まりの表面も硬化している。床面に貼り付くように炭化材が確認されている。

竈　北西壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで128cm，袖部幅86cmで，壁外への掘り込みは46cmほどである。焚口部は厚さ12～20cmの角柱状の花崗岩を両側に立て，その上に長さ60cmの角柱状の花崗岩を乗せ構築している。袖部は床面と同じ高さの地山面に少量の炭化粒子と多量の砂の混じった粘土で構築されてい

る。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用して，火熱を受け，赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・砂質粘土少量	4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量	5	褐灰色	砂質粘土中量，焼土粒子・炭化粒子少量
3	灰褐色	砂質粘土中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	6	褐灰色	砂質粘土多量，炭化粒子少量

ピット　9か所。P 1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P 5は南東壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6～8の性格は不明である。P 9は竈の前方部に位置していることから，竈に関わるピットとも考えられる。深さはP 1が36cm，P 2・3が45cm前後，P 4が28cm，P 5が52cm，P 6が25cm，P 7が52cm，P 8・9が15cmである。

貯蔵穴　東コーナー部に付設されている。長径62cm，短径58cmの円形で，深さ42cmである。

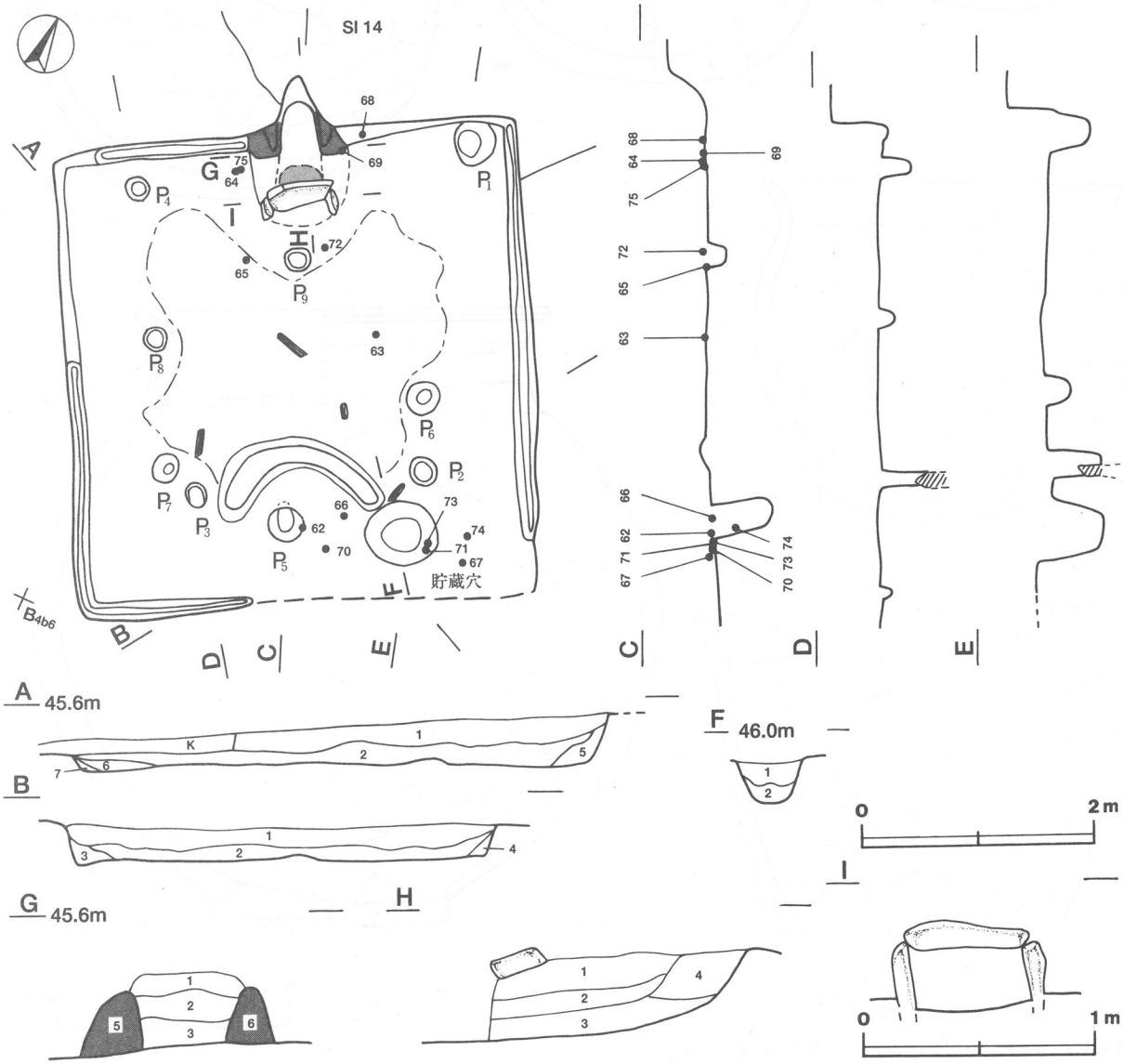
貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	砂中量，ローム粒子少量
2	黒褐色	砂多量，礫中量

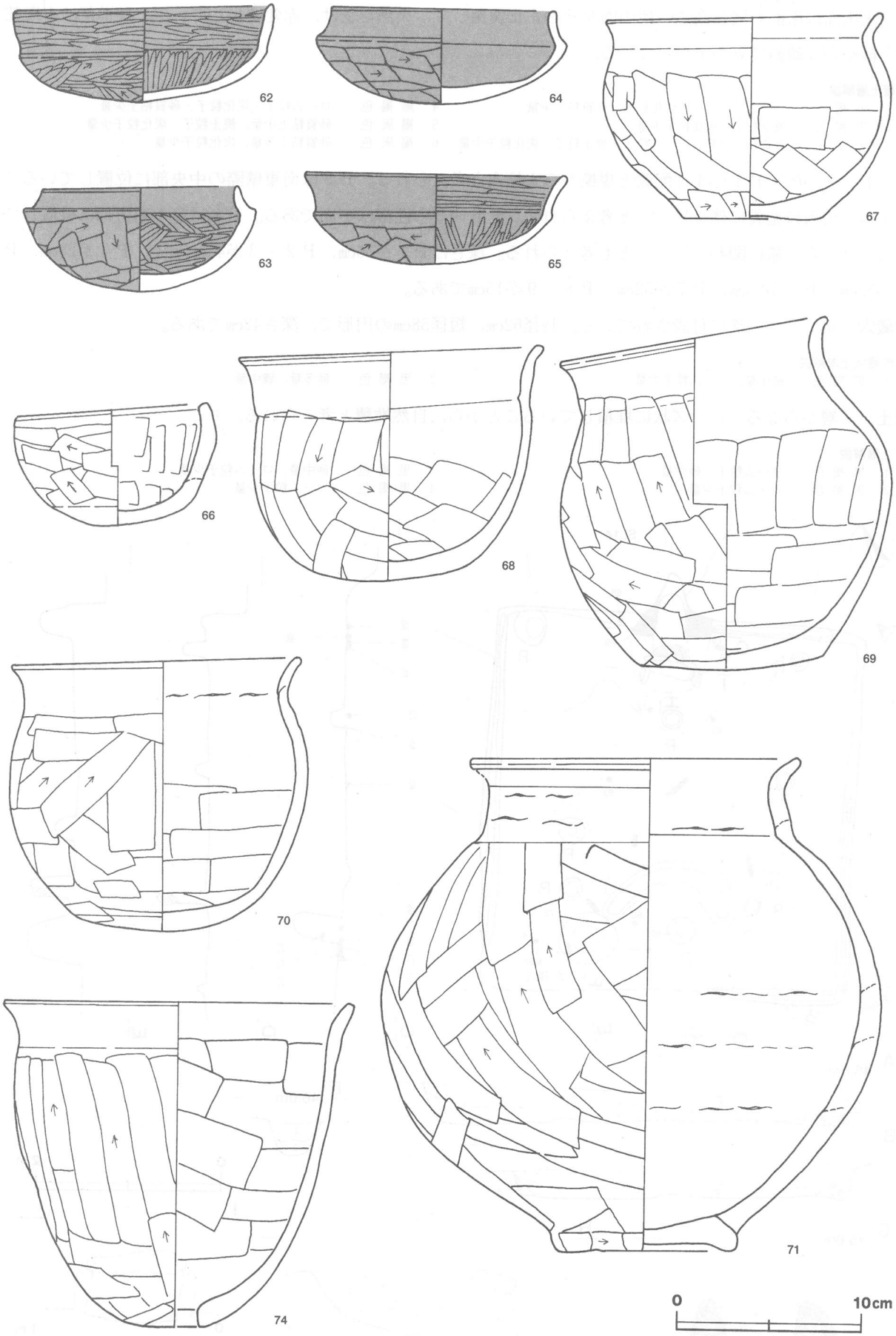
覆土　7層からなる。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

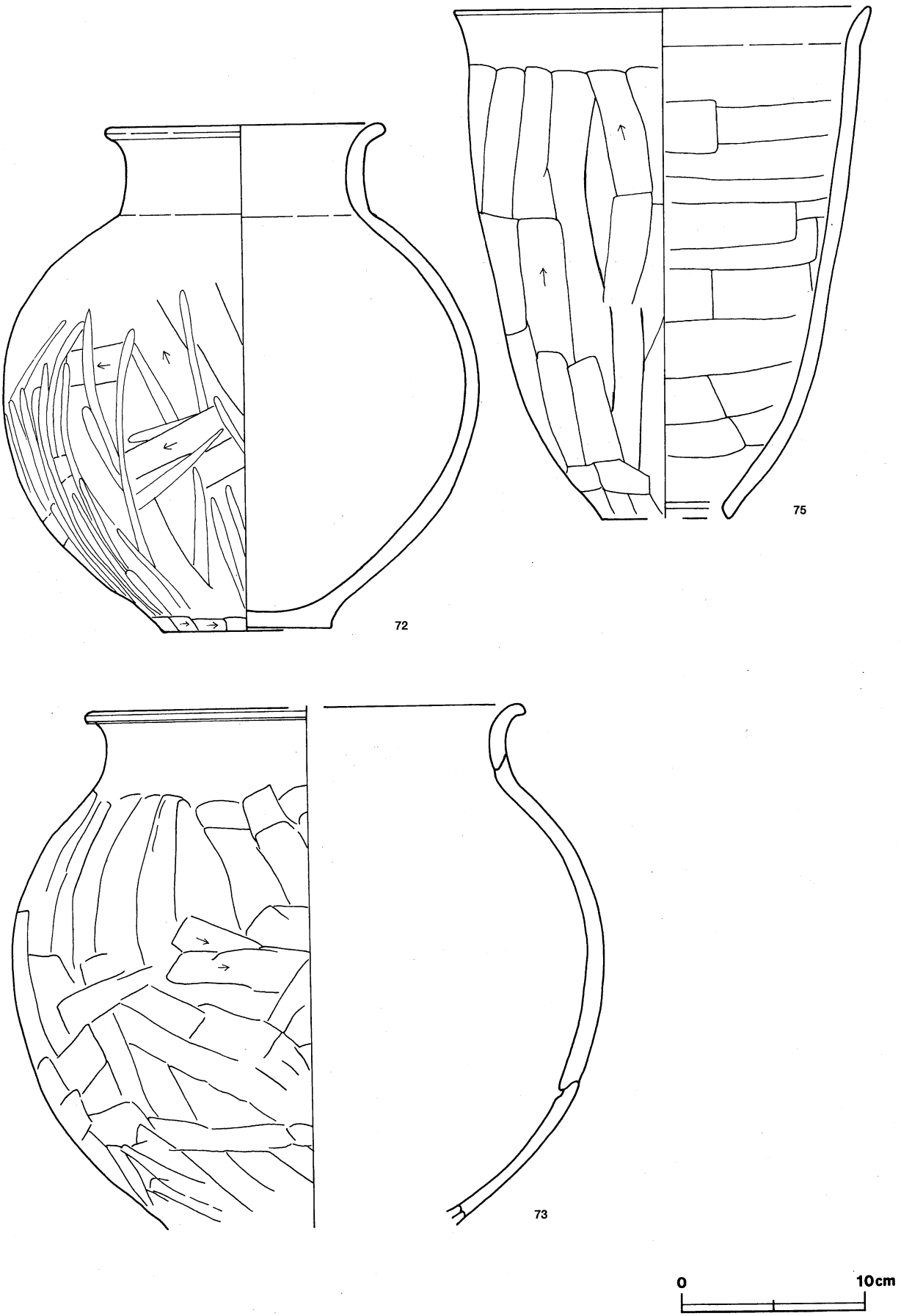
1	黒褐色	ローム粒子・砂少量	3	黒褐色	砂中量，ローム粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子少量	4	黒褐色	ローム粒子少量



第44図　第13号住居跡実測図



第45図　第13号住居跡出土遺物実測図（1）



第46図　第13号住居跡出土遺物実測図（2）

5　黒 褐 色　　ローム粒子・炭化材少量
6　黒 褐 色　　炭化材中量，ローム粒子少量
7　暗 褐 色　　砂中量，ローム粒子少量

遺物出土状況　土師器片234点，礫12点，花崗岩製の凹石１点（未掲載）のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片19点が出土している。62の土師器坏と70の土師器甕は南東中央部の床面から，67の土師器鉢と74の土師器甑は南東部の床面から，72の土師器甕は竈前方部の床面から出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏１点がある。

所見　本跡は，竈の焚口部を角柱状の花崗岩で構築している住居跡で，第20号住居跡と同様な竈の構造である。炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物が多いことから，持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は，出土土器等から古墳時代後期（６世紀後半）と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表（第45・46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師器	坏	14.2	5.2	－	石英・長石・雲母	黒	良好	口縁部内・外面ヘラ磨き　体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	南東中央部床面	100% PL14
63	土師器	坏	10.5	5.6	－	石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	中央部床面	95% PL14
64	土師器	坏	12.0	5.1	－	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	竈左側床面	80%
65	土師器	坏	16.5	12.7	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部内面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き 内・外面黒色処理	竈前方部床面	80%
66	土師器	椀	10.3	6.2	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	南東部床面	100% PL14
67	土師器	鉢	15.0	11.0	7.4	石英・長石・雲母・礫	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	南東部床面	100% PL14
68	土師器	甕	16.5	12.7	9.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	竈右側床面	95% PL14
69	土師器	甕	14.5	18.0	10.0	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	竈右側床面	100% PL14
70	土師器	甕	15.6	14.5	－	長石・雲母	橙	普通	体部外面ヘラナデ・ヘラ削り　内面ヘラナデ	南東中央部床面	90% PL14
71	土師器	甕	17.6	26.7	9.6	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	南東部床面	95% PL14
72	土師器	甕	14.6	27.5	9.2	長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　下位ヘラ削り内面ナデ	竈前方部床面	90% PL14
73	土師器	甕	[23.1]	(28.3)	－	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	南東部床面	45%
74	土師器	甑	18.9	17.3	3.1	石英・長石・小礫・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　孔部ヘラ切り	南東部床面	95% PL15
75	土師器	甑	23.0	27.8	[7.0]	長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　孔部ヘラ切り	竈左側床面	75%

第15号住居跡（第47・48図）

位置　調査Ｅ区の西部，B5b2区。標高46.0mの平坦部に位置している。

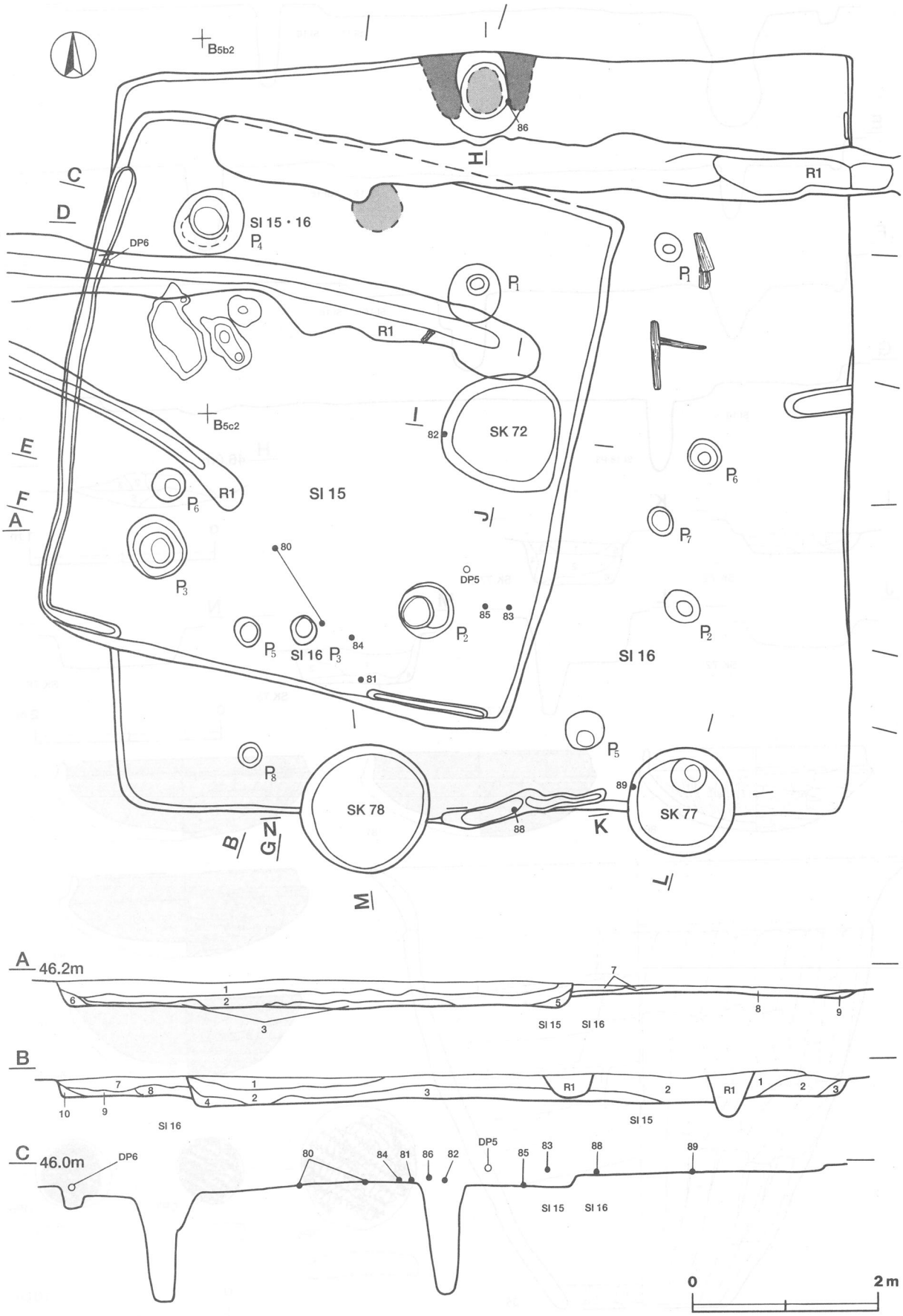
重複関係　第16号住居跡を掘り込み，北壁中央部付近を第１号流路跡に，東部を第72号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状　長軸5.80m，短軸5.60mの方形である。壁は高さ28～35cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－18°－Ｅである。

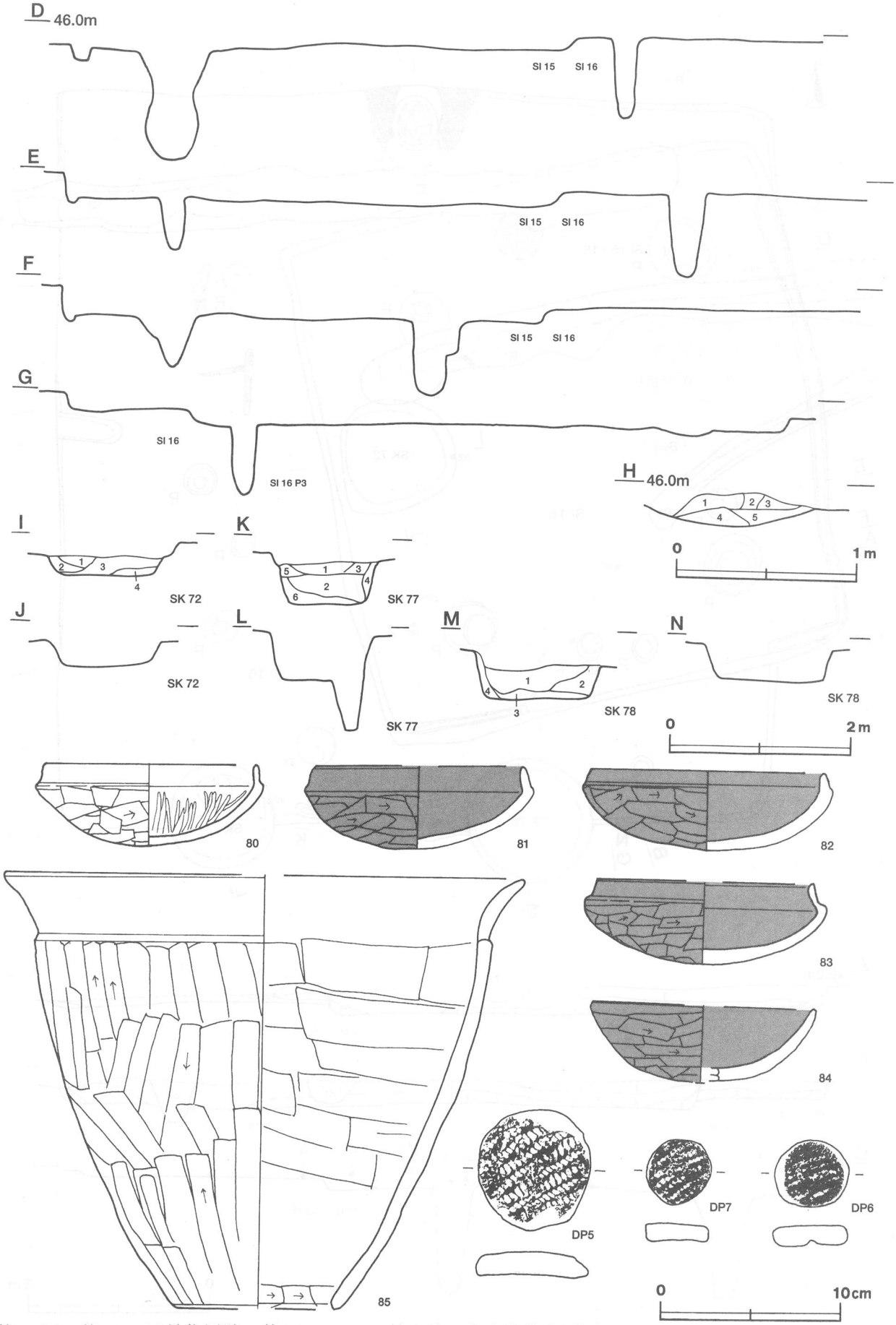
床　ほぼ平坦である。硬化面は確認されなかった。北西壁下と南西壁下を壁溝が巡っている。上幅10～20cm，下幅４～15cm，深さ５～12cmで，断面形は∪状である。

竈　北西壁中央部付近が流路跡に掘り込まれているが，ここに火床面と思われる焼土の痕跡が見られることから，ここに付設されていたと想定される。規模や形状は不明である。

ピット　６か所。Ｐ１～４は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ４は第16号住居跡で使用していたピットの再利用と考えられる。Ｐ５は南西壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６は主柱穴に隣接する位置で確認されていることから，補助柱穴と考えられる。深さはＰ１が120cm，Ｐ２が78cm，Ｐ３が58cm，Ｐ４が116cm，Ｐ５が36cm，Ｐ６が57cmである。



第47図　第15・16号住居跡，第72・77・78号土坑，第1号流路跡実測図



第48図　第15・16号住居跡，第72・77・78号土坑・出土遺物実測図

覆土　8層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化材少量
3　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
4　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量
5　褐　色　ローム粒子・炭化粒子少量
6　黒褐色　ローム粒子・炭化材少量

遺物出土状況　土師器片1372点，礫115点，花崗岩製の磨石1点（未掲載），土器片円盤3点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片91点，平安時代の須恵器片123点（第1号流路跡からの流れ込みと考えられる），陶器片1点が出土している。80の土師器坏は南部の床面から，81と84の土師器坏や86の土師器甑は，南東部の床面から出土している。礫は床面全体から若干浮いて散在したような状態で出土しているので，屋根材の押さえ等にでも利用したものが落下した可能性が考えられる。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏7点がある。

所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

第15号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
80	土師器	坏	11.6	4.5	－	石英・長石・雲母	灰白	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き	南部床面	60%
81	土師器	坏	[11.6]	4.6	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	南東部床面	50%
82	土師器	坏	12.9	4.4	－	石英・長石・雲母	明褐灰	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	中央部床面	50%
83	土師器	坏	[11.9]	4.5	－	長石・雲母・赤色粒子	褐灰	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	南東部覆土中層	30%
84	土師器	坏	[12.4]	(4.2)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	南東部床面	20%
85	土師器	甑	[29.0]	23.7	[8.6]	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　孔部ヘラ削り	南東部床面	30%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP5	土器片円盤	6.7	6.3	1.3	57.9	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	覆土中（流れ込み）	PL19
DP6	土器片円盤	3.7	4.1	1.1	17.9	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	覆土中（流れ込み）	PL19
DP7	土器片円盤	3.1	3.6	1.0	14.1	土	表面単節ＲＬの縄文　側面研磨	覆土中（流れ込み）	PL19

第16号住居跡（第47～49図）

位置　調査Ｅ区の西部，B5c2区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係　西側を第15号住居跡と第72号土坑に，南壁を第77・78号土坑に，北部を第1号流路跡それぞれ掘り込まれている。

規模と形状　東壁と東側の北壁と南壁の一部は削平されているが，長軸8.2m，短軸8.00mの方形である。壁は高さ20cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はＮ－2°－Ｅである。

床　平坦である。硬化面は確認されなかった。南壁下の一部に壁溝が巡っている。上幅20cm，下幅14cm，深さ7cmで，断面形は～状である。幅30cm，深さ5cmほどで，中央に向かって東壁から1条の溝状の落ち込みが見られる。床面に貼り付くように炭化材や焼土が確認されている。

竈　北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで90cm，袖部幅125cmで，壁外への掘り込みはほとんど見られない。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面を8cmほど掘りくぼめており，火熱を受け，赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。4・5層は天井部の崩落土層であろう。

竈土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子・砂質粘土少量
2　黒褐色　ローム粒子・砂質粘土少量
3　にぶい褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
4　褐灰色　砂質粘土多量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子少量
5　褐灰色　砂質粘土多量，ローム粒子・焼土粒子少量

ピット　8か所。P1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P4は本住居の廃絶後に第15号住居跡の主柱穴に利用されたものと考えられる。P5は南壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P7は主柱穴に隣接する位置で確認されていることから，補助柱穴と考えられる。P6・8の性格は不明である。深さはP1・2が90cm前後で，P3が78cm，P4が116cm，P5が30cm，P6～8が38～46cmである。

覆土　4層からなる。各層にロームブロック，焼土粒子や炭化粒子が含まれていることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

7	黒褐色	炭化粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量	9	暗赤褐色	焼土粒子中量，炭化材少量
8	暗赤褐色	焼土粒子中量，ロームブロック・炭化粒子少量	10	暗褐色	ロームブロック少量

第72号土坑土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	3	暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
2	暗褐色	ローム粒子少量	4	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量

第77号土坑土層解説

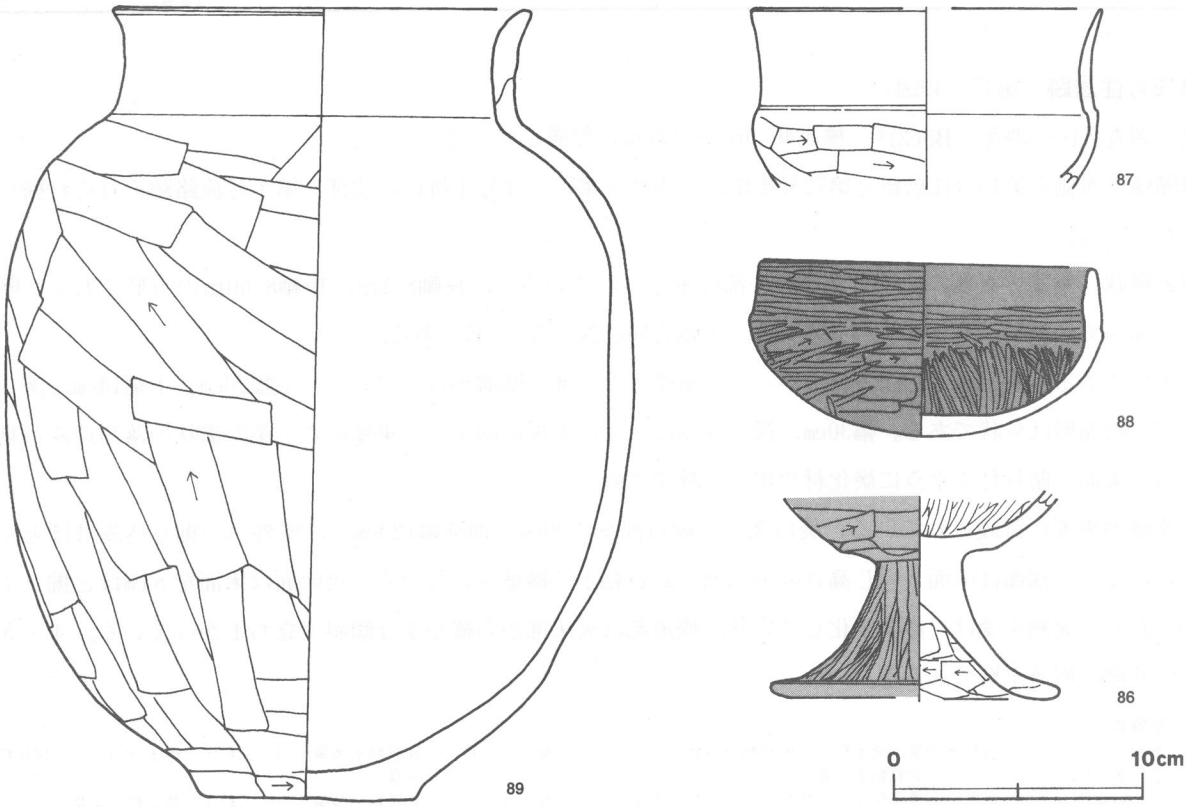
1	暗褐色	ロームブロック少量	4	褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
2	暗褐色	ロームブロック少量，砂・礫微量	5	褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック少量	6	褐色	鹿沼パミス中量，ローム粒子少量

第78号土坑土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量，炭化物微量	3	灰黄褐色	ロームブロック少量，炭化物微量
2	にぶい黄褐色	ロームブロック少量	4	灰黄褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片187点，礫1点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土片9点，平安時代の須恵器片2点が出土している。88の土師器椀が南壁際の床面から正位の状態で，89の土師器壺がつぶれた状態で出土している。

所見　炭化材が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。また，本跡は当遺跡において最大規模の住居跡である。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。



第49図　第16号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
86	土師器	高坏	－	(8.2)	[11.6]	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	坏部外面ヘラ削り　内面ヘラ磨き　脚部外面ヘラ磨き　内面ヘラ削り 外面赤彩	竈内	40%
87	土師器	椀	[14.0]	(7.2)	－	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	覆土中	15%
88	土師器	椀	13.4	6.9	－	長石・雲母	にぶい褐	良好	口縁部外面ヘラ磨き　体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	南壁際床面	90%　PL15
89	土師器	壺	16.7	31.7	8.6	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	南壁際床面	90%　PL15

第19号住居跡（第50～52図）

位置　調査E区の北西部，B5a3区。標高46.0mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸6.00m，短軸5.88mの方形である。壁は高さ14～32cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－20°－Eである。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。東部に撹乱が見られる。壁溝は南西壁下，北西壁下と南東壁下の南側を巡っている。上幅12cm前後，下幅6cm前後，深さ5cmで，断面形は∪状である。床面に炭化材と焼土が貼り付くように確認されているが，炭化材の出土量は少ない。

竈　北東壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで126cm，袖部幅120cmで，壁外への掘り込みは46cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面とほぼ同じ高さの地山面をそのまま使用して，火熱を受け，赤変硬化している。煙道部は火床部から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子少量
2　黒褐色　焼土粒子・砂質粘土少量
3　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土少量
4　黒褐色　ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土少量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
6　黒褐色　焼土粒子・炭化粒子少量
7　褐灰色　砂質粘土多量，焼土粒子少量
8　暗赤褐色　焼土ブロック・砂質粘土中量
9　にぶい暗褐色　焼土ブロック・砂質粘土少量
10　褐色　砂多量，焼土粒子少量
11　灰オリーブ色　砂多量，焼土ブロック中量
12　暗オリーブ色　砂中量，ロームブロック・焼土ブロック微量

ピット　6か所。P1～4は配置と規模から主柱穴と考えられる。P5は南西壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P6の性格は不明である。深さはP1が52cm，P2・3が60cmほど，P4が76cm，P5・6は20cmほどである。

貯蔵穴　東コーナー部に付設されている。長径80cm，短径48cm，深さ30cmである。

覆土　12層からなる。南部に一部人為的な堆積が見られるが，全体としてはレンズ状の堆積を示していることから，自然堆積と考えられる。

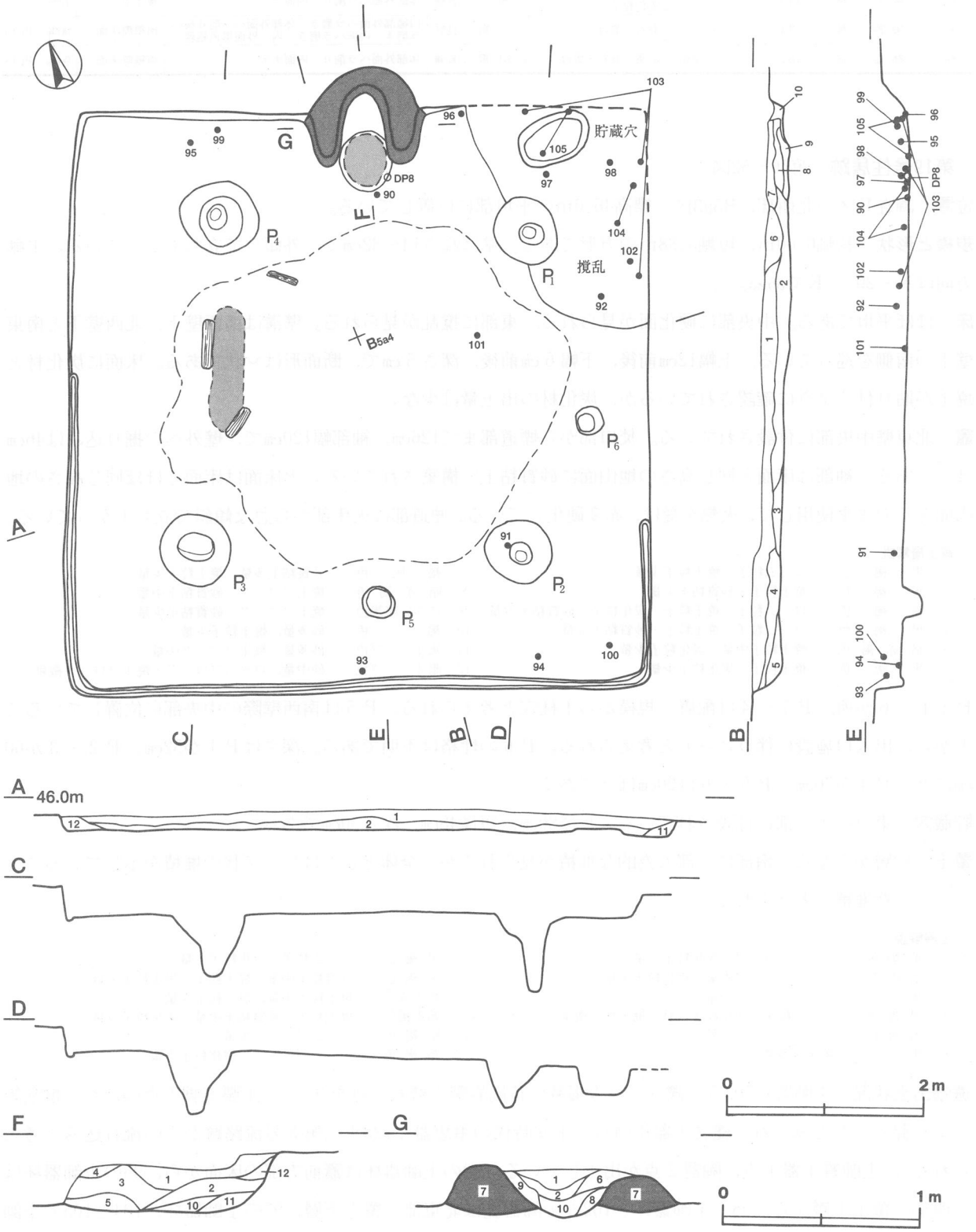
土層解説

1　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量
2　暗褐色　ロームブロック中量，炭化粒子少量
3　褐色　ロームブロック中量
4　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量
5　暗褐色　ロームブロック少量
6　黒色　炭化材多量
7　黒褐色　ローム粒子・炭化粒子少量
8　灰褐色　砂質粘土中量，焼土粒子・炭化粒子少量
9　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化粒子少量
10　暗赤褐色　焼土粒子・砂質粘土中量，炭化粒子少量
11　暗褐色　ロームブロック少量
12　暗褐色　ロームブロック・炭化粒子少量

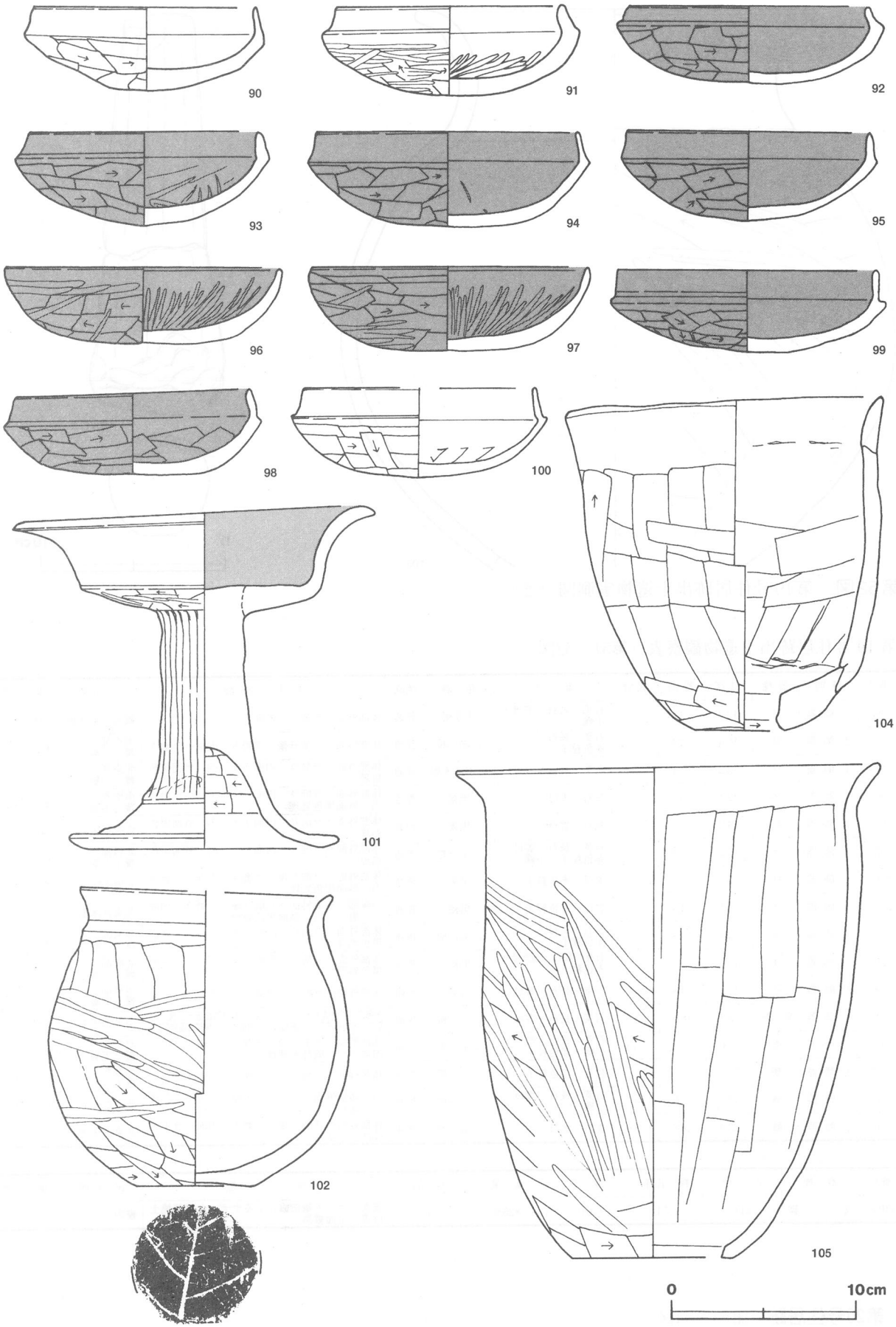
遺物出土状況　土師器片502点，礫5点（未掲載の花崗岩製の磨石1点を含む），土製支脚1点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片54点，平安時代の須恵器片123点（第3号流路跡からの流れ込みと考えられる），土師質土器1点，陶器2点が出土している。90の土師器坏は竈前方部の床面から，95の土師器坏は北西部の覆土下層から，98の土師器坏と102の土師器甕は北東部の覆土下層，97の土師器坏，104と105の土師器甑は北東部の床面から出土している。覆土中からモモの種子が出土している。なお，現存率が高いが未掲載の土師器の坏12点，甕1点がある。

所見　炭化材や焼土が床面に貼り付くように確認されていることから焼失住居と考えられる。完形に近い遺物

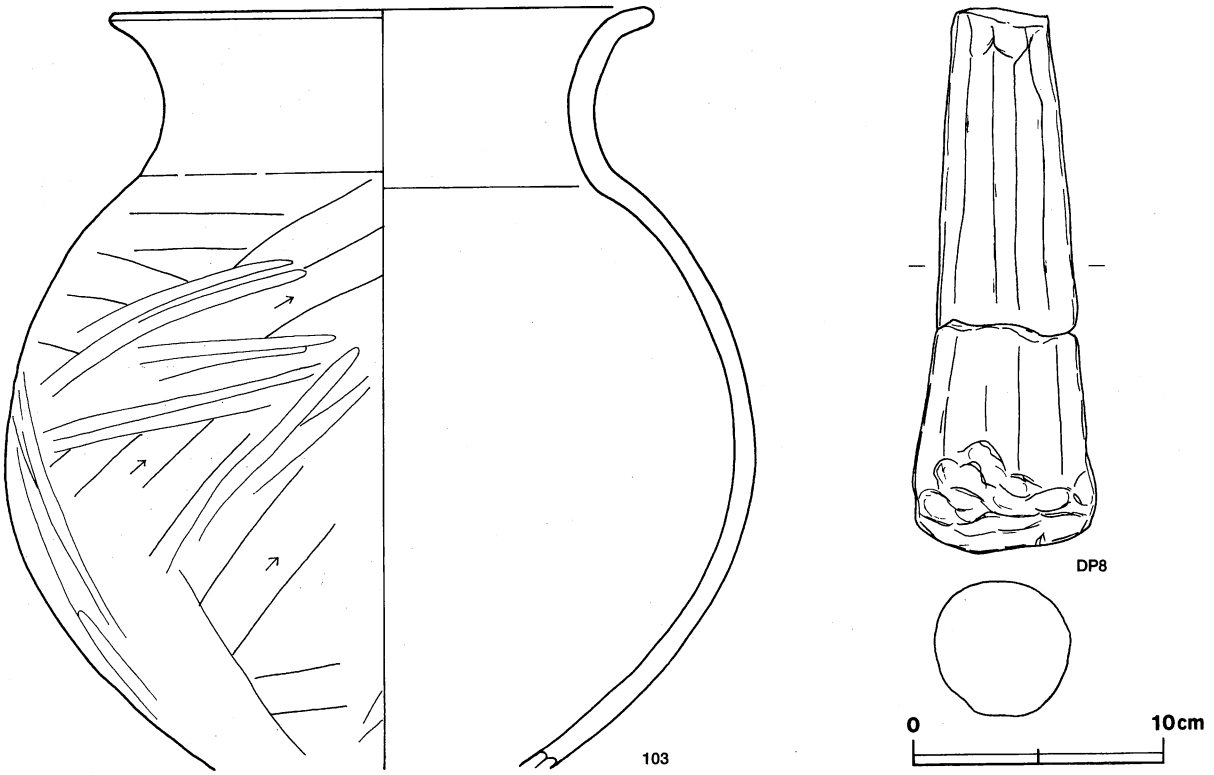
が多いことから，持ち出すことのできなかった突発的な火災あるいは意図的に火をつけたものと考えられる。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。



第50図　第19号住居跡実測図



第51図　第19号住居跡出土遺物実測図（1）



第52図　第19号住居跡出土遺物実測図（2）

第19号住居跡出土遺物観察表（第51・52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	土師器	坏	12.2	4.4	－	石英・長石・雲母・小礫	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ	竈前方部床面	100% PL15
91	土師器	坏	12.4	4.8	－	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き	南東部覆土下層	95% PL15
92	土師器	坏	13.2	4.1	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北東部覆土下層	95% PL15
93	土師器	坏	12.4	5.0	－	長石・雲母	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ・ヘラ磨き　内・外面黒色処理	南壁際覆土中層	95% PL16
94	土師器	坏	14.2	5.1	－	長石・雲母	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	南東部床面	95% PL16
95	土師器	坏	13.2	4.8	－	石英・長石・雲母・赤色粒子・小礫	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北西部覆土下層	95% PL16
96	土師器	坏	15.0	4.1	－	雲母・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	北壁際床面	95% PL16
97	土師器	坏	15.1	4.5	－	雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部・体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ磨き　内・外面黒色処理	北東部床面	95% PL16
98	土師器	坏	12.9	4.4	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　内・外面黒色処理	北東部覆土下層	90%
99	土師器	坏	14.0	4.4	－	石英・長石・金雲母・赤色粒子	黒褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　内・外面黒色処理	北西部覆土下層	90%
100	土師器	坏	12.6	4.8	－	石英・長石・雲母	灰褐	普通	体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ	南東部覆土中層	55%
101	土師器	高坏	18.2	18.5	13.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	坏部内・外面横ナデ　下位ヘラ削り　脚部外面指ナデ後ヘラ磨き　内面ヘラ削り　裾部内・外面横ナデ　坏部内面赤彩	中央部床面	90% PL16
102	土師器	甕	[13.6]	16.3	6.3	石英・長石・雲母・小礫・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　下端ヘラ削り　内面ナデ　底部木葉痕	北東部覆土下層	85% PL16
103	土師器	甕	21.5	(30.5)	－	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ナデ	北東部覆土下層	85% PL16
104	土師器	甑	17.0	18.0	3.7	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口・体部外面ヘラ削り　内面ヘラナデ　孔部ヘラ切り	北東部床面	85% PL17
105	土師器	甑	23.0	26.8	8.6	長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ　孔部ヘラ切り	北東部床面	95% PL17

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP 8	支脚	21.6	7.4	6.0	825.6	土	表面ナデ　下端指頭によるナデ　上端部焼土付着　全面被熱	竈内	PL19

第20号住居跡（第53・54図）

位置　調査D区の南東部，B4b9区。標高46.0mの平坦部に位置している。

重複関係　西部が第71号土坑を，南西部が第73号土坑を，北西部が第22号住居跡をにそれぞれ掘り込んでいる。

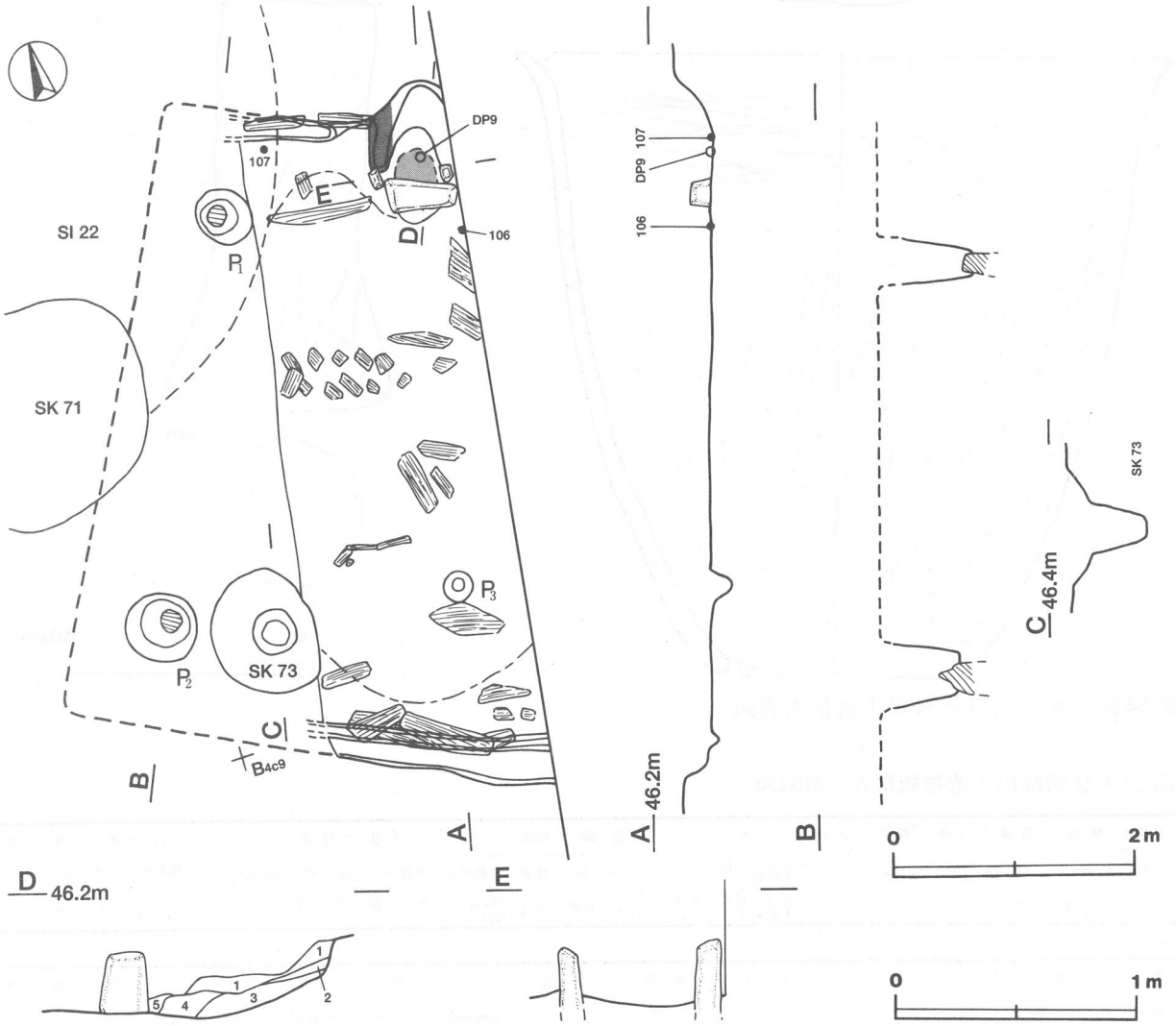
規模と形状　東部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。西壁は削平されているが，長軸5.16m，確認できた短軸4.00mで，方形と考えられる。壁は高さ20cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－26°－Eである。

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。壁溝は，削平されている西壁を除いて，巡っているので，全周していたものと考えられる。上幅12～20cm，下幅6～12cm，深さ10cmで，断面形はU字状である。床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されている。

竈　北西壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで118cm，東部が調査区域外となっているが，袖部幅85cmほどと考えられる。壁外への掘り込みは40cmほどである。焚口部は軸18cm前後の角柱状の花崗岩を両側に立てている。火床部から長さ60cmほどの角柱状の花崗岩が確認されているので，両側の角柱状の花崗岩の上に乗せて構築していたと考えられる。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さで地山面をそのまま使用して，火熱を受け，赤変硬化している。硬化の度合いは強い。煙道部は火床部から緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	オリーブ黒色	砂中量，ローム粒子・焼土粒子微量
2	灰黄褐色	ローム粒子・砂質粘土少量，焼土粒子微量
3	黒褐色	炭化物・灰中量，ローム粒子・焼土粒子少量
4	暗褐色	炭化物・灰中量，ローム粒子少量，焼土粒子微量
5	オリーブ黒色	灰多量，ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量



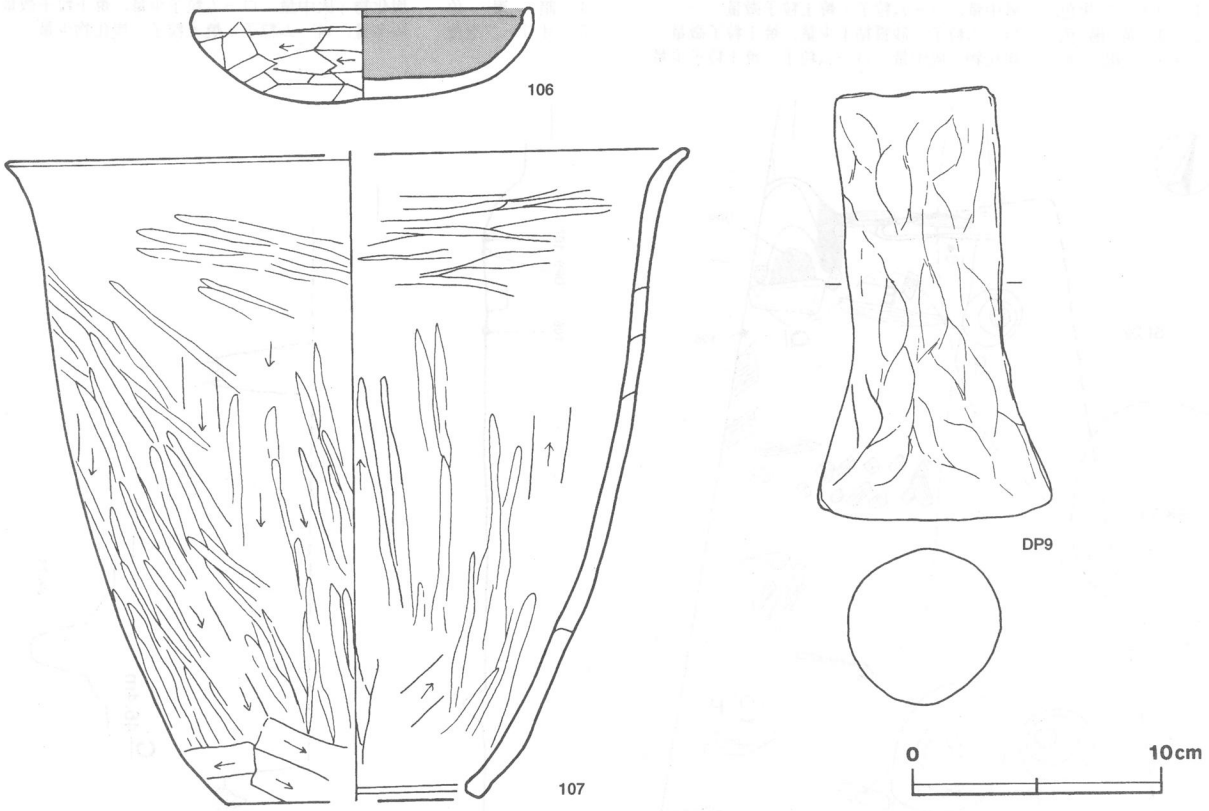
第53図　第20号住居跡，第73号土坑実測図

ピット　3か所。P1・2は配置と規模から主柱穴と考えられる。P3は南西壁の中央部から内側に位置しているが，壁側に傾くような掘り方であることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P1からシロダモの丸木の柱材が，P2からコナラ属アカガシ亜属の丸木の柱材が確認されている。深さはP1が76cm，P2が68cm，P3が18cmである。

覆土　層数は不明であるが，各層が小さなブロック状に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器片85点，礫1点，土製支脚1点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片14点，平安時代の須恵器片10点（第3号流路跡からの），陶器1点が出土している。106の土師器坏は竈右袖前方部の床面から，107の土師器甑は北西部の床面からつぶれた状態で出土している。

所見　床面に貼り付くように多量の炭化材が確認されていることから焼失住居と考えられる。炭化材は多いが，遺物量は少ないことから，住居廃絶時に使用可能な遺物は持ち去り，その後に意図的に火をつけた可能性が考えられる。時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。茨城県内でこの時代の住居跡の柱材としてコナラ属アカガシ亜属の丸木が利用されるのは一般的であるが，シロダモの丸木が利用される例はほとんどみられない。



第54図　第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
106	土師器	坏	13.6	3.7	－	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内面赤彩	竈右前方部床面	95%　PL17
107	土師器	甑	[27.2]	25.7	[13.5]	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部内・外面ヘラ削り後ヘラ磨き　孔部ヘラ切り	北西部床面	85%

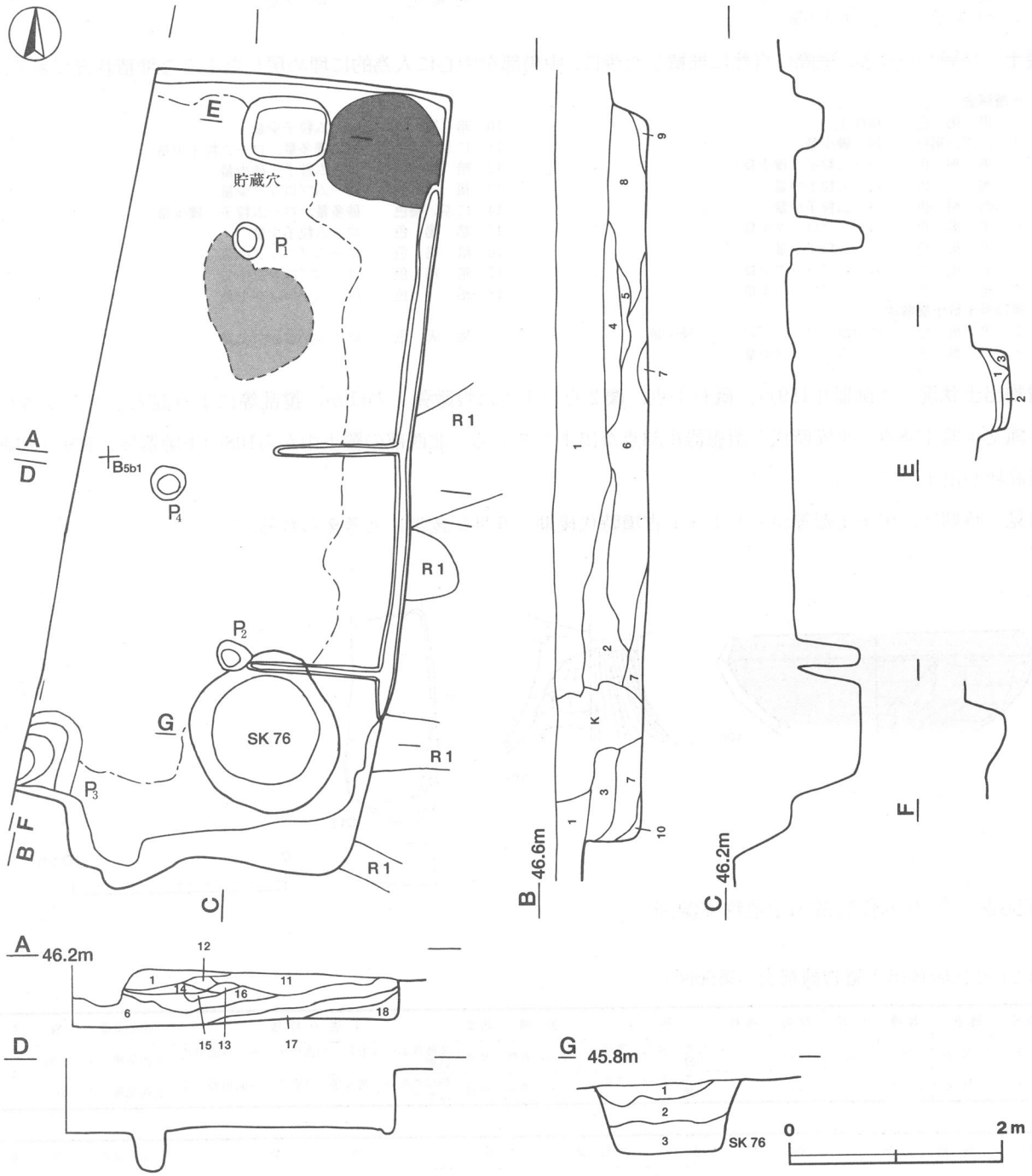
番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP9	支脚	17.1	9.4	9.1	1027	土	表面指頭によるナデ　全面被熱	竈内	PL19

第21号住居跡（第55・56図）

位置　調査E区の西部，B5b1区。標高46.3mの平坦部に位置している。

重複関係　西部が調査区域外となっているため，全体を調査することはできなかった。中央部から南部にかけて第1号流路跡に掘り込まれている。南東部床面で第76号土坑が確認できたので，本跡の方が新しいと考えられる。

規模と形状　長軸6.96m，確認できた短軸3.24mで，方形と考えられる。壁は高さ14～58cmで，外傾して立ち上がっている。主軸方向はN－6°－Eである。南壁東側に幅2.6m，長さ60cmほどの張り出し部が確認されている。



第55図　第21号住居跡，第76号土坑実測図

床　ほぼ平坦である。中央部に硬化面が見られる。東壁下に壁溝が巡っている。上幅12～18cm，下幅６～12cm，深さ６cmで，断面形は∪状である。幅10cm，深さ６cmほどで，中央に向かって東壁から２条の間仕切り溝状の掘り込みが見られる。北東部に焼土が，北東コーナー部に10cmほどの青灰色の粘土の高まりが見られる。

竈　調査区域内では確認できなかった。調査区域外の北壁中央部に付設されていたと想定される。

ピット　４か所。Ｐ１・２は配置と規模から主柱穴と考えられる。Ｐ３は南壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ４の性格は不明である。深さはＰ１・２が62～65cm，Ｐ３が18cm，Ｐ４が36cmである。

貯蔵穴　北東部に付設されている。長軸82cm，短軸64cmの長方形で，深さは30cmである。

貯蔵穴土層解説

1	褐　色	ロームブロック少量
2	明褐色	ローム粒子中量
3	明褐色	ローム粒子多量

覆土　18層からなる。壁際に自然に堆積した後に，中央部を中心に人為的に埋め戻したような堆積状況である。

土層解説

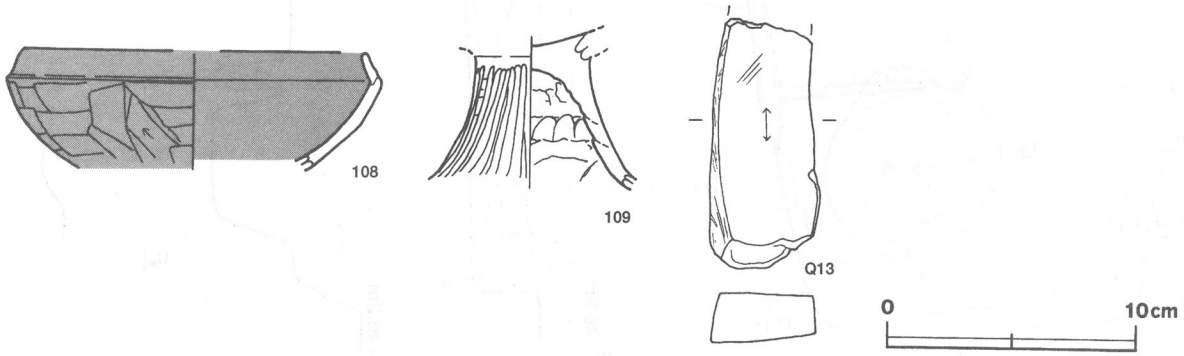
1	黒褐色	耕作土
2	にぶい褐色	砂・礫少量
3	黒褐色	ローム粒子・礫少量
4	褐　色	ローム粒子中量
5	暗褐色	ローム粒子少量
6	黒褐色	ロームブロック少量
7	黒褐色	ローム粒子少量
8	暗褐色	ロームブロック少量
9	褐　色	ロームブロック少量
10	暗褐色	ローム粒子少量
11	にぶい褐色	砂・礫多量，ローム粒子少量
12	暗褐色	ローム粒子・砂少量
13	褐　色	ロームブロック少量
14	にぶい褐色	砂多量，ローム粒子・礫少量
15	暗褐色	ローム粒子少量
16	暗褐色	ロームブロック中量
17	暗褐色	ロームブロック中量
18	褐　色	ロームブロック少量

第76号土坑土層解説

1	黒褐色	砂中量，ロームブロック・礫少量
2	黒褐色	ロームブロック少量
3	褐灰色	ロームブロック少量

遺物出土状況　土師器片189点，砥石１点，礫２点（１点は投敵弾）のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片38点，平安時代の須恵器片33点が出土している。北西部の覆土中から108の土師器坏と109の土師器高坏が出土している。

所見　時期は，出土土器等からトルット古墳時代後期（６世紀後半）と考えられる。



第56図　第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
108	土師器	坏	[13.5]	(4.7)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り　内面ナデ　内・外面黒色処理	北西部覆土中	15%
109	土師器	高坏	－	(6.1)	－	石英・長石・雲母・小礫	にぶい黄橙	普通	脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面指頭によるナデ	北西部覆土中	30%

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	砥石	(9.9)	4.6	3.4	(176.5)	凝灰岩	砥面４面	覆土中	PL20

（2）　土坑

第19号土坑（第57・58図）

位置　調査A区の南東部，C1e0区。標高44.3mの平坦部に位置している。

規模と形状　長軸2.1m，短軸1.78mの不定形で，確認面からの深さは33cmで，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。長軸方向はN－0°である。底面は皿状である。

覆土　3層からなる。ほぼレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　砂中量
2　黒　褐　色　砂中量
3　にぶい黄橙色　砂少量

遺物出土状況　土師器片3点，礫5点のほか，撹乱等により混入したと見られる縄文土器片5点が出土している。116の土師器甕は覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。

第20号土坑（第57・58図）

位置　調査A区の北東部，C1b0区。標高44.6mの平坦部に位置している。

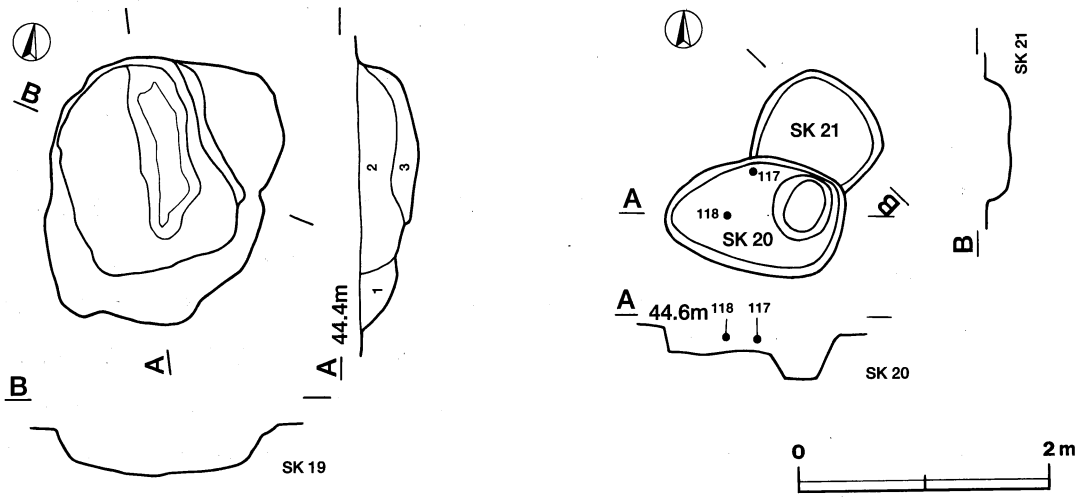
重複関係　北部は第21号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　長径1.0m，確認できた短径0.75mで，楕円形と考えられる。確認面からの深さは20cmで，壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。長径方向はN－50°－W。底面は段状である。北東部に深さ45cmほどのピット状の落ち込みが見られる。

覆土　層数は不明であるが，自然堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器片9点と礫1点が出土している。117土師器坏は北部の覆土下層から，118の土師器高坏は中央部の覆土下層から出土している。

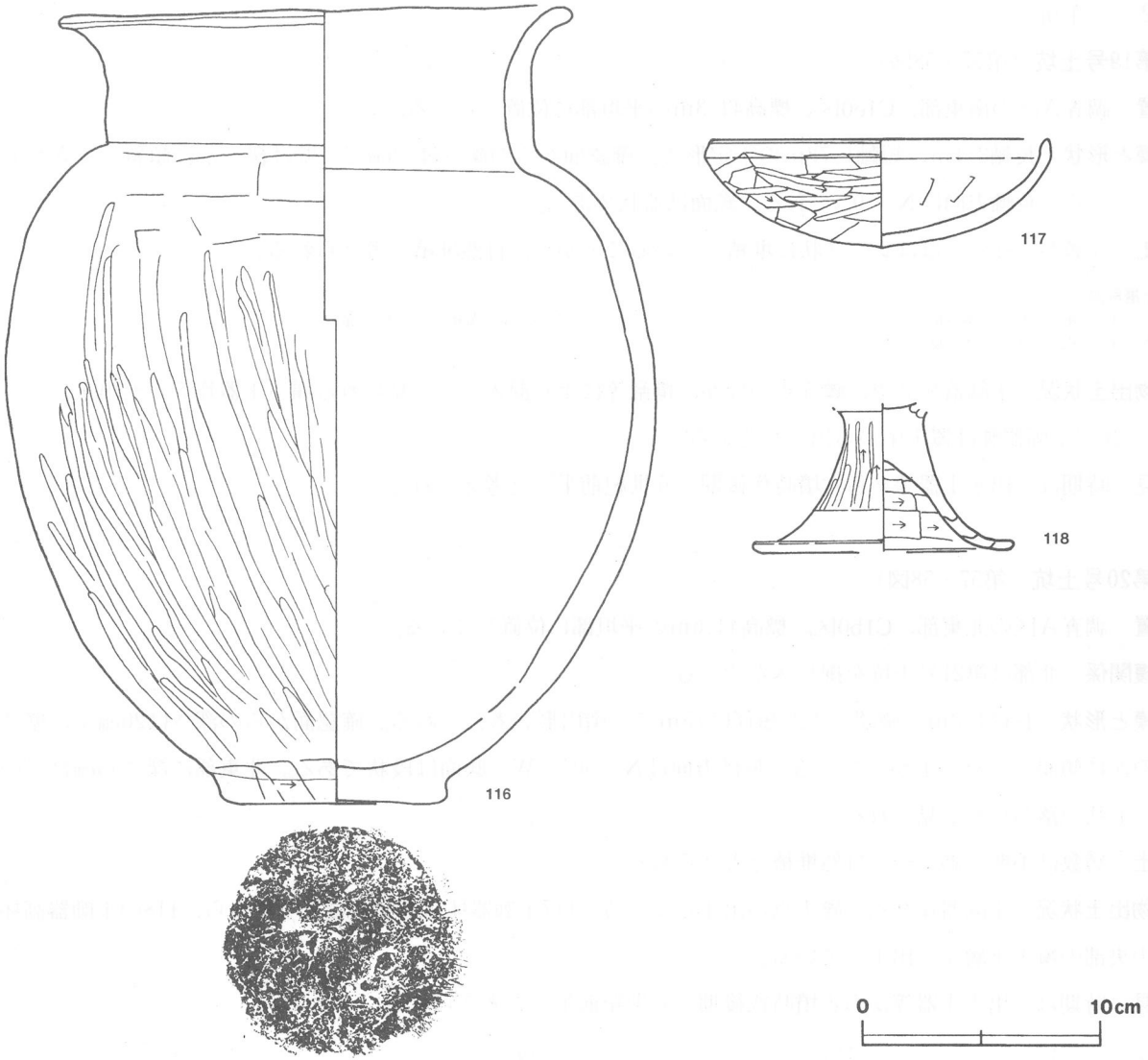
所見　時期は，出土土器等から古墳時代後期（6世紀前半）と考えられる。



第57図　第19・20・21号土坑実測図

古墳時代土坑出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
116	土師器	甕	21.0	33.0	9.4	石英・長石・雲母・小礫	にぶい褐	普通	体部外面ヘラ磨き　下端ヘラ削り　内面ナデ	SK19覆土中	85%　PL16
117	土師器	坏	14.2	4.4	－	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラナデ	SK20北部覆土下層	100%　PL17
118	土師器	高坏	－	(6.2)	[11.0]	石英・長石・雲母	橙	普通	脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き　内面ヘラ削り裾部内・外面横ナデ	SK20中央部覆土下層	40%



第58図　第19・20号土坑出土遺物実測図

3　奈良・平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された奈良・平安時代の遺構は，竪穴住居跡2軒，流路跡3条である。竪穴住居跡は調査区のE区の中央部と南西部から，流路跡は調査区のE区の東部からD区あるいは調査区域外の北西部にかけて流れるように確認されている。この流路跡については，付章に自然科学的分析を掲載している。試料の採取地点のA地点は第1号流路跡に，B地点は第2号流路跡に，C地点は第3号流路跡に対応している。この流路跡周辺からは多量の礫が確認されている。これは，本跡の東部から北東部方向に位置する足尾山や加波山の山麓には扇形の緩斜面が特徴的にみられ，しばしば土石災害が起こっていることによると思われる。それぞれの遺構の特徴と出土した遺物について，記述していく。

（1）　竪穴住居跡

第7号住居跡（第59図）

位置　調査E区の中央部，B5e6区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係　北東壁中央部を第49号土坑に掘り込まれている。

規模と形状　長軸3.30m，短軸3.20mの方形である。壁は高さ4cmで，直立している。主軸方向はN－16°－Eである。

床　ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。北西壁から中央部に向かって，上幅25cm，下幅10cm，深さ10cmほどの間仕切り状の溝が1条確認されている。

竈　北壁中央部に設けられていたと想定されるが，第49号土坑に掘り込まれ，規模等は不明である。

ピット　4か所。P1は南西壁際の中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。P2～4の性格は不明である。深さはP1が20cm，P2～4が10～18cmである。

貯蔵穴　2か所。貯蔵穴1は北コーナー部に，貯蔵穴2は東コーナー部に付設されている。貯蔵穴1は長径70cm，短径58cmの楕円形で，深さは34cmである。貯蔵穴2は長径86cm，短径70cmの楕円形で，深さは22cmである。

貯蔵穴1・2土層解説

1	にぶい褐色	ロームブロック中量	
2	明褐色	ローム粒子多量	
3	暗褐色	ロームブロック少量	
4	褐色	ロームブロック少量	

覆土　2層からなる。層厚が薄く，堆積状況は不明である。

土層解説

1	にぶい黄色	ローム粒子多量，鹿沼パミス中量	
2	黒褐色	鹿沼パミス中量，ロームブロック少量	

第48号土坑土層解説

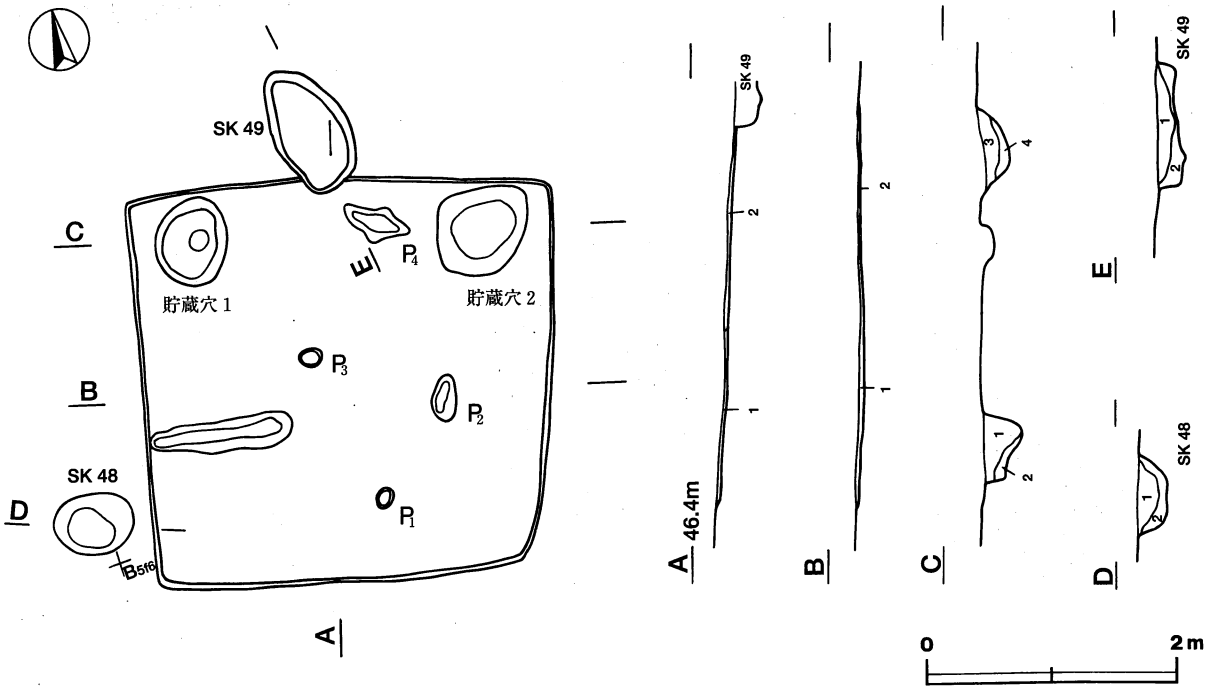
1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	
2	暗褐色	ローム粒子少量	

第49号土坑土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量	
2	明褐色	ローム粒子多量	

遺物出土状況　須恵器細片3点，礫1点が中央部から出土している。

所見　時期は，遺物量が少なく明確ではないが，出土土器から平安時代と考えられる。



第59図　第7号住居跡，第48・49号土坑実測図

第9号住居跡（第39・60図）

位置　調査E区の南西部，B5d1区。標高46.1mの平坦部に位置している。

重複関係　南部が第10号住居跡の北部を掘り込んでいる。

規模と形状　長軸3.80m，短軸3.75mの方形である。壁は高さ26～32cmで，直立している。主軸方向はN－11°

－Eである。

床　ほぼ平坦である。中央部を中心に硬化面が見られる。壁溝は南西コーナー部に一部見られる。上幅14cm，下幅８cm，深さ７cmで，断面形はU字状である。Ｐ１の北東側に長軸100cm，短軸72cmの不定形をした７cmほどの高まりが見られ，表面は硬化している。

竈　北壁中央部に付設されている。焚口部から煙道部まで90cm，袖部幅136cmで，壁外への掘り込みは26cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に礫と炭化材を少量含んだ砂質粘土で構築されている。火床面は床面を５cmほど掘りくぼめ，火熱を受け，赤変硬化している。煙道は火床面から急な傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗　褐　色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗　褐　色	ロームブロック・炭化材少量
3	褐　灰　色	炭化材・砂質粘土中量，焼土粒子少量
4	褐　灰　色	炭化材・砂質粘土中量，焼土粒子少量
5	にぶい赤褐色	炭化材多量，焼土粒子中量，砂質粘土少量
6	褐　灰　色	砂質粘土多量，焼土粒子微量
7	褐　灰　色	砂質粘土多量，炭化材・礫少量

ピット　１か所。Ｐ１は南壁際中央部に位置していることから，出入口施設に伴うピットと考えられる。深さは18cmである。

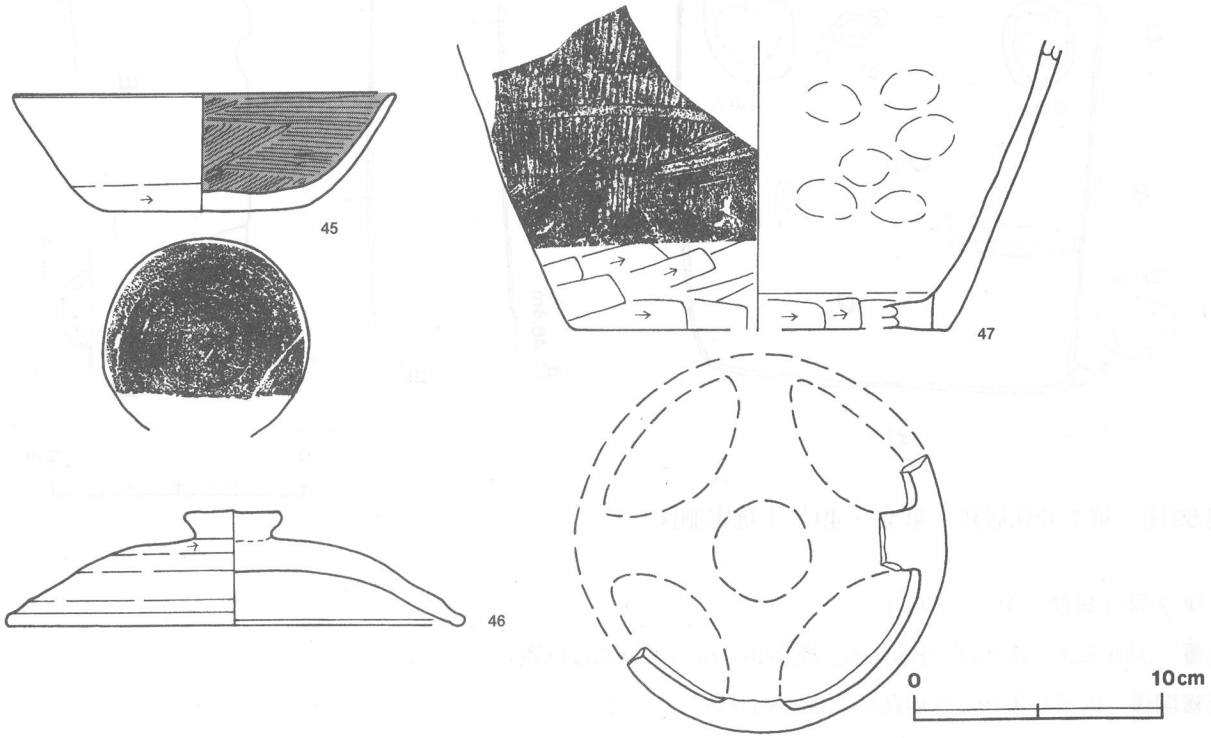
覆土　15層からなる。各層にロームブロックや炭化粒子が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量，炭化粒子少量
3	褐　色	ロームブロック少量，炭化粒子・鹿沼パミス微量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック中量
7	褐　色	ロームブロック中量
8	暗褐色	ロームブロック・炭化材中量
9	暗褐色	ローム粒子少量
10	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
11	暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
12	暗褐色	ロームブロック少量
13	暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子少量
14	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
15	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況　土師器片93点，礫１点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片32点が出土している。45の土師器坏は中央部床面から，46の須恵器蓋は竈の西側床面から出土している。

所見　時期は，出土土器等から８世紀後葉と考えられる。



第60図　第９号住居跡出土遺物実測図

第９号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
45	土師器	坏	15.0	4.6	8.0	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	体部外面下端ヘラ削り　内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り後ナデ　内面黒色処理	中央部床面	50%
46	須恵器	蓋	18.3	4.6	－	石英・長石・金雲母	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ　内面煤付着	竈西側床面	70%
47	須恵器	甑	－	(11.4)	[15.2]	長石・金雲母	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き　下端ヘラ削り　内面指頭による押圧　孔部ヘラ削り	中央部床面	15%

表２　北田遺跡住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模（m）長軸(径)×短軸(径)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設 主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴	覆土	主な出土遺物	時期	備考（旧→新）
1	B4b8	N-42°-W	方形	5.14 × 5.12	10～22	平坦	全周	4	1	4	竈1	1	人為	土師器(坏・鉢・甕・甑)，磨石	古墳時代後期	焼失　SI22・23, SK52・71→本跡
2	B5d4	N-20°-W	方形	5.38 × 5.16	4～10	平坦	－	5	1	1	竈1	1	人為	土師器(坏・壺・小形甕・甕・甑)，磨石	古墳時代後期	焼失　本跡→SK46
3	A4j9	N-35°-W	方形	6.05 ×(5.3)	0～24	平坦	一部	2	2	1	－	－	人為	土師器(坏)，須恵器(壺)	古墳時代後期	SI4・5・22→本跡
4	A4j9	N-36°-E	方形	5.20 ×(4.64)	0～18	平坦	全周	2	1	－	－	－	人為	土師器(坏)	古墳時代後期	SI5→本跡→SI3
5	A4i9	[N-10°-E]	[方形]	(3.82)×(3.56)	5	平坦	－	1	1	－	－	－	人為	土師器(坏)	古墳時代後期	本跡→SI3・4
6	A4i8	N-25°-W	隅丸長方形	[7.0] × 6.2	8～42	やや凸凹	全周	4	－	14	－	－	自然	縄文土器(深鉢・浅鉢・器台・手捏)，土器片円盤，磨石	縄文時代中期中葉	SK61→本跡→SK62
7	B5e6	N-16°-E	方形	3.3 × 3.2	4	平坦	－	－	1	3	－	2	不明	須恵器片	平安時代	本跡→SK49
8	C1f0	N-8°-W	円形または楕円形	5.95 ×(4.60)	－	平坦	－	12	－	3	炉1	－	不明	縄文土器(深鉢・異形土器)，凹石，磨石，敲石	縄文時代中期中葉	
9	B5d1	N-11°-E	方形	3.80 × 3.75	26～32	平坦	一部	－	1	－	竈1	－	人為	土師器(坏)，須恵器(蓋・甑)	8世紀後葉	SI10→本跡
10	B5e1	N-18°-E	方形または長方形	[7.00]×(2.80)	－	平坦	－	2	－	－	竈1	1	人為	土師器(坏・高坏)	古墳時代後期	焼失　本跡→SI9・11
11	B4d0	N-21°-W	方形または長方形	5.74 ×(3.34)	20～38	平坦	－	1	－	－	－	1	人・自	土師器(坏・甑)	古墳時代後期	焼失　SI10→本跡
12	A4i6	不明	円形または楕円形	6.45 ×(2.05)	20	平坦	－	4	－	－	－	－	人為	縄文土器片，剥片	縄文時代中期後葉	
13	B4a6	N-27°-W	方形	4.05 × 4.02	14～42	平坦	ほぼ全周	4	1	4	竈1	1	自然	土師器(坏・椀・鉢・甕・甑)	古墳時代後期	SI14→本跡
14	A4j6	N-55°-W	楕円形	[5.00]×[4.40]	20	やや凸凹	－	8	－	－	炉1	－	自然	縄文土器(深鉢)，土器片円盤，石錐，剥片	縄文時代中期中葉～後葉	本跡→SI13, SK47・59
15	B5b2	N-18°-E	方形	5.8 × 5.6	28～35	平坦	一部	4	1	1	竈1	－	自然	土師器(坏・高坏・甑)，土器片円盤	古墳時代後期	SI16→本跡→R1・SK72
16	B5C2	N-2°-E	方形	8.2 × 8.00	0～20	平坦	一部	4	1	3	竈1	－	人為	土師器(椀・壺)	古墳時代後期	焼失　本跡→SI15, R1・SK72・77・78
19	B5a3	N-20°-E	方形	6.00 × 5.88	14～32	平坦	一部	4	1	1	竈1	1	人・自	土師器(坏・高坏・甕・甑)，土製支脚	古墳時代後期	焼失
20	B4b9	N-26°-E	方形	5.16 ×(4.00)	20	平坦	一部	2	1	－	竈1	－	人為	土師器(坏・甑)，土製支脚	古墳時代後期	焼失　SI22, SK71・73→本跡
21	B5b1	N-6°-E	方形	6.96 ×(3.24)	14～58	平坦	一部	2	1	1	－	1	人・自	土師器(坏・高坏)，砥石	古墳時代後期	SK76→本跡→R1
22	B4a8	不明	円形	[6.56]×[6.12]	－	平坦	－	5	－	5	－	－	不明	縄文土器片，凹石	縄文時代中期後葉	SI23→本跡→SI1・3・20, SK64・71・74
23	B4a7	N-26°-E	円形	[5.1] ×[4.74]	－	やや凸凹	－	8	－	1	炉1	－	自然	縄文土器(深鉢・壺)，石皿	縄文時代中期後葉	SK75→本跡→SI1・22・SK74

（２）　流路跡

第１号流路跡（第61・62図）

位置　調査Ｅ区の東部から西部にかけて，標高46.9～46.0mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認している。

重複関係　西端部は第15・16・21号住居跡を横切っている。

規模と形状　東端が調査区域外に延びているため，規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらも，ほぼN－95°－W，途中N－60°－W，N－57°－Wの方向に変化して延びている。幅25～148cm，深さ18～34cmで，断面形は〜状，U字状や逆台形状で，定形的ではない。B5e9区とB6g4区周辺に深いところがみられる。

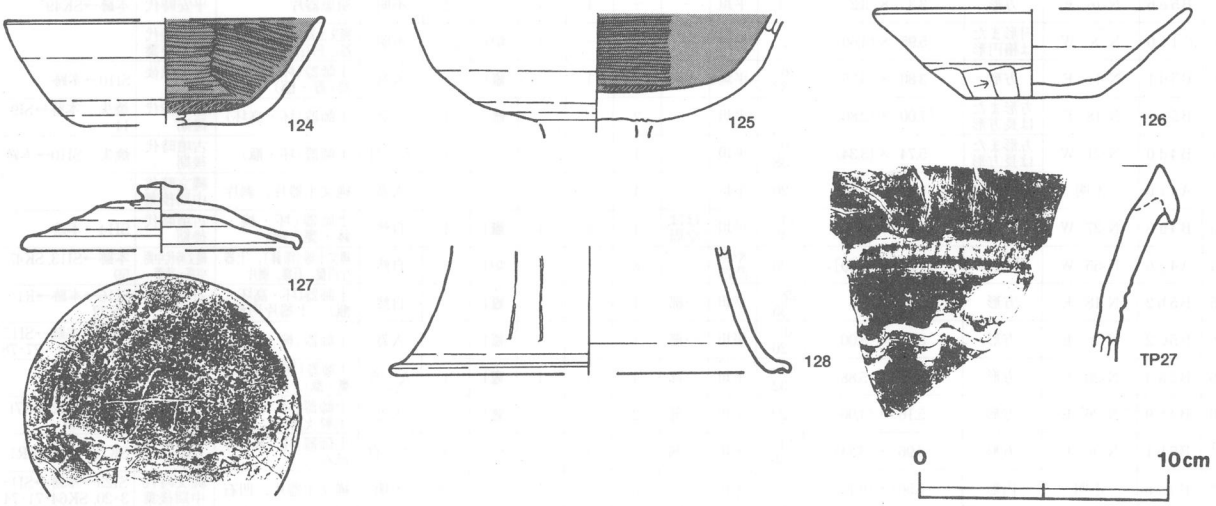
覆土　単一層である（トレンチの第６層）。層厚は薄いが，砂や礫を含んだ自然堆積で，第２・３号流路跡と同様な堆積状況である。

トレンチ土層解説

1	褐　色	黒色土極めて多量，ローム粒子少量
2	黒褐色	ローム粒子少量
3	褐　色	ロームブロック少量
4	褐　色	ロームブロック少量
5	明褐色	ロームブロック中量
6	灰褐色	砂多量，小礫中量（第１号流路跡）
7	黒褐色	ローム粒子少量
8	黒褐色	ローム粒子少量，砂微量
9	暗褐色	ロームブロック少量
10	にぶい褐色	砂多量，中礫中量（第２号流路跡）
11	黒褐色	ローム粒子少量，砂微量
12	黒褐色	ローム粒子・砂少量
13	にぶい褐色	砂多量，小礫中量（第３号流路跡）
14	黒褐色	ローム粒子・小礫少量
15	暗褐色	小礫少量
16	黒褐色	小礫少量
17	にぶい褐色	砂中量，小礫少量
18	褐　色	砂・小礫少量

遺物出土状況　土師器片450点，須恵器片580点，礫43点が出土している。127の「キ」とヘラ書きされた須恵器蓋は底面から，128の須恵器円面硯は覆土中から出土している。なお，現存率は高いが未掲載の土師器の坏３点，高台付坏３点，甕３点，須恵器の坏５点，高台付坏３点，甕２点，蓋１点がある。

所見　時期は，出土土器等から８世紀後葉から９世紀後葉と考えられる。本跡は第２・３号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。



第61図　第１号流路跡出土遺物実測図

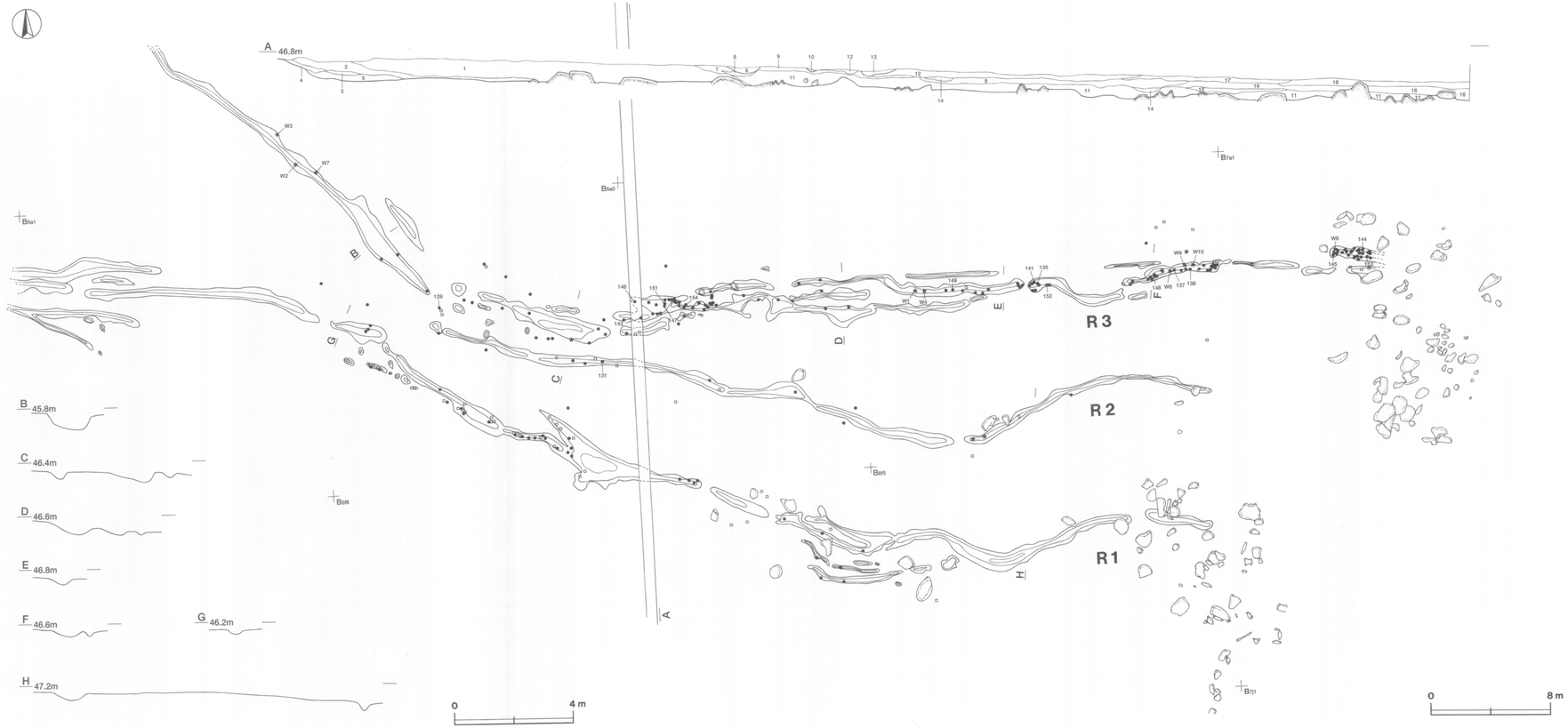
第１号流路跡出土遺物観察表（第61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
124	土師器	坏	[12.6]	4.3	[6.2]	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	底面	30%
125	土師器	高坏	－	(4.6)	－	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	底面	30%
126	須恵器	坏	[12.7]	4.5	5.4	長石・金雲母多	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	底面	40%
127	須恵器	蓋	[11.0]	2.7	－	長石	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ　内面ヘラ記号「キ」	底面	30%　PL18
128	須恵器	円面硯	－	(5.0)	[15.8]	長石	灰	良好	脚部ロクロナデ　脚部にキザミ目	覆土中	5％　PL18
TP27	須恵器	甕	－	(7.8)	－	石英・長石	褐灰	普通	頸部３本櫛歯による波状文	底面	

第２号流路跡（第62・63図）

位置　調査Ｅ区の東部から西部にかけて，標高46.7～46.0mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認でき，B5c8区周辺で第３号流路跡と合流している。第１号流路跡の北側と第３号流路跡の南側に挟まるように位置している。

重複関係　B5c8区周辺で第３号流路跡と合流し，第２号流路跡より古いと考えられる。



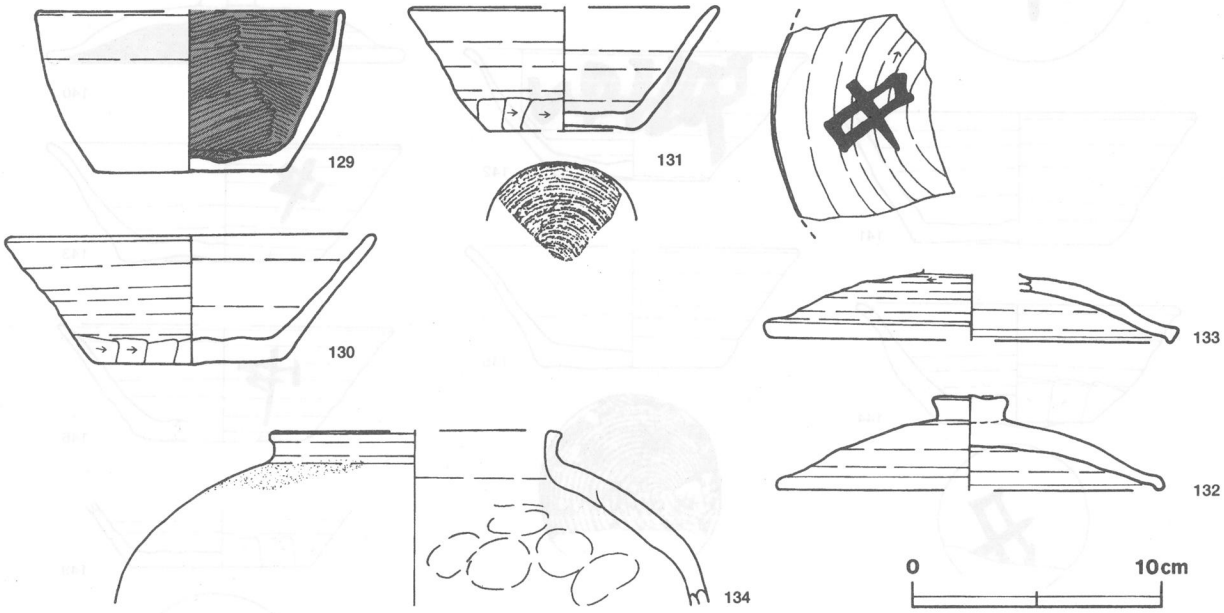
第62図　第1・2・3号流路跡実測図

規模と形状　東端が調査区域外に延びているため，規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらもほぼN－96°－W，途中N－70°－Wの方向に変化した後，第３号流路跡に合流している。幅30～112cm，深さ18～46cmで，断面形は～状，U字状や逆台形状で，定形的ではない。B6e6区周辺に深いところがみられる。

覆土　単一層である（トレンチの第10層）。層厚は薄いが，砂や礫を含んだ自然堆積で，第１・３号流路跡と同様な堆積状況である。

遺物出土状況　土師器片471点，須恵器片496点，礫４点が出土している。130の須恵器坏や133の「中」と墨書された須恵器蓋は底面から出土している。この墨書の字体は第３号流路跡出土の143・147・150の墨書土器の字体と同一である。なお，現存率が高い未掲載の土師器の坏１点，高台付坏１点，高坏１点，須恵器の坏７点，高台付坏２点，甕１点，蓋２点がある。

所見　時期は，出土土器等から８世紀後葉から９世紀後葉と考えられる。本跡は第１・３号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。



第63図　第２号流路跡出土遺物実測図

第２号流路跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	土師器	椀	[12.2]	6.3	7.1	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　底部回転ヘラ削り　内面黒色処理	底面	40%
130	須恵器	坏	14.6	5.1	7.1	石英多・長石多・雲母・小礫多	灰	不良	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部回転ヘラ削り	底面	60%
131	須恵器	坏	[12.3]	4.9	[6.0]	長石	灰オリーブ	良好	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部回転糸切り	底面	25%
132	須恵器	蓋	[15.5]	4.7	－	石英・長石・金雲母	灰黄	不良	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ	底面	30%
133	須恵器	蓋	[16.2]	(2.7)	－	長石・金雲母少	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ	底面	20% 天井部外面墨書「中」
134	須恵器	短頸壺	[11.8]	(7.0)	－	長石	灰オリーブ	良好	口縁部内・外面横ナデ　体部外面ナデ　内面指頭による押圧　外面自然釉付着	底面	10%

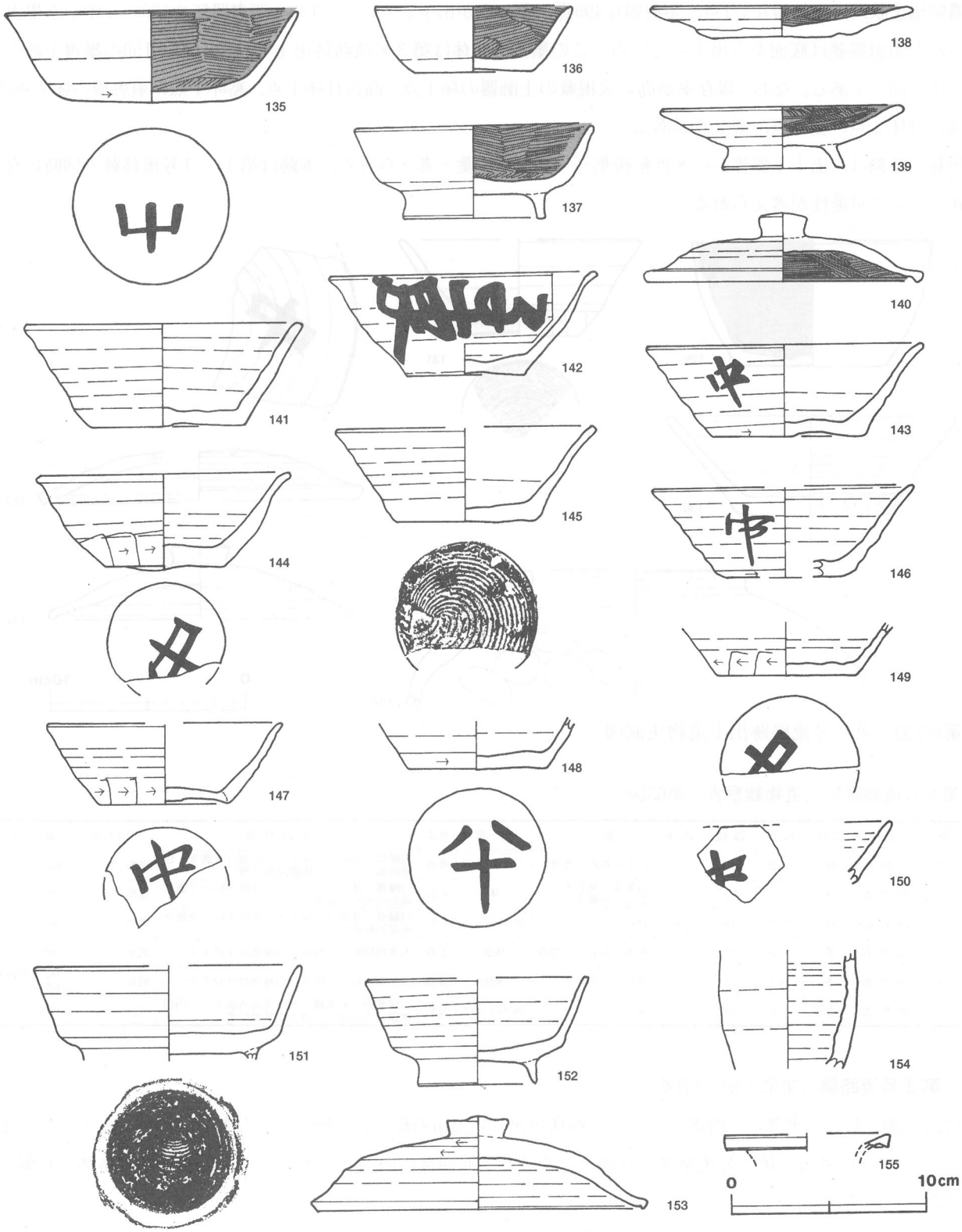
第３号流路跡（第62・64～67図）

位置　調査E区の東部から西部にかけて，標高46.6～45.3mの緩やかな傾斜面をなだらかに流れるように確認でき，B5c8区周辺で第２号流路跡と合流し，そこから北西部に向かって流れている。第２号流路跡の北側に位置している。

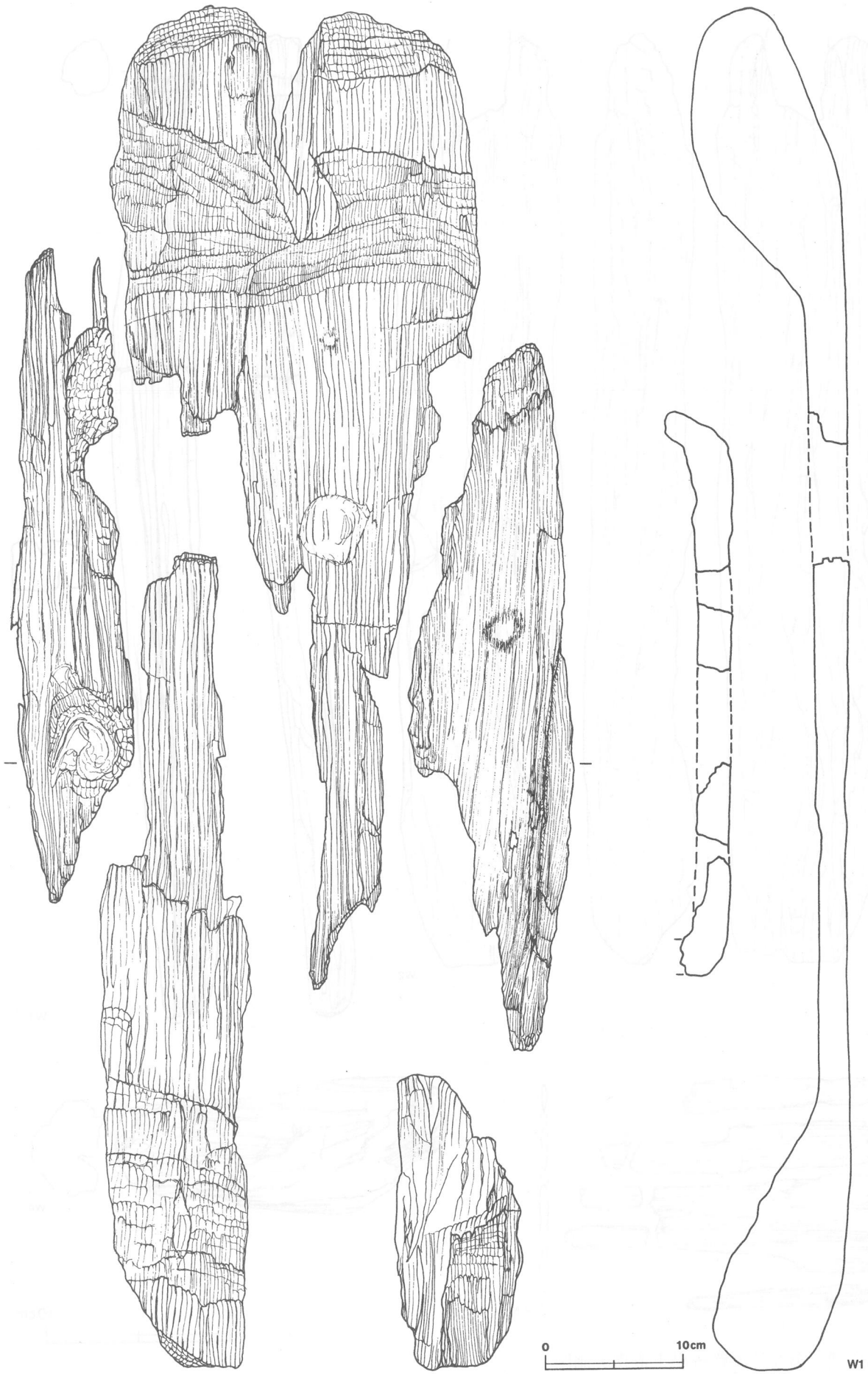
重複関係　B5c8区周辺で第２号流路跡と合流し，第２号流路跡より新しいと考えられる。第19号住居跡の北

東部を掘り込んでいる。

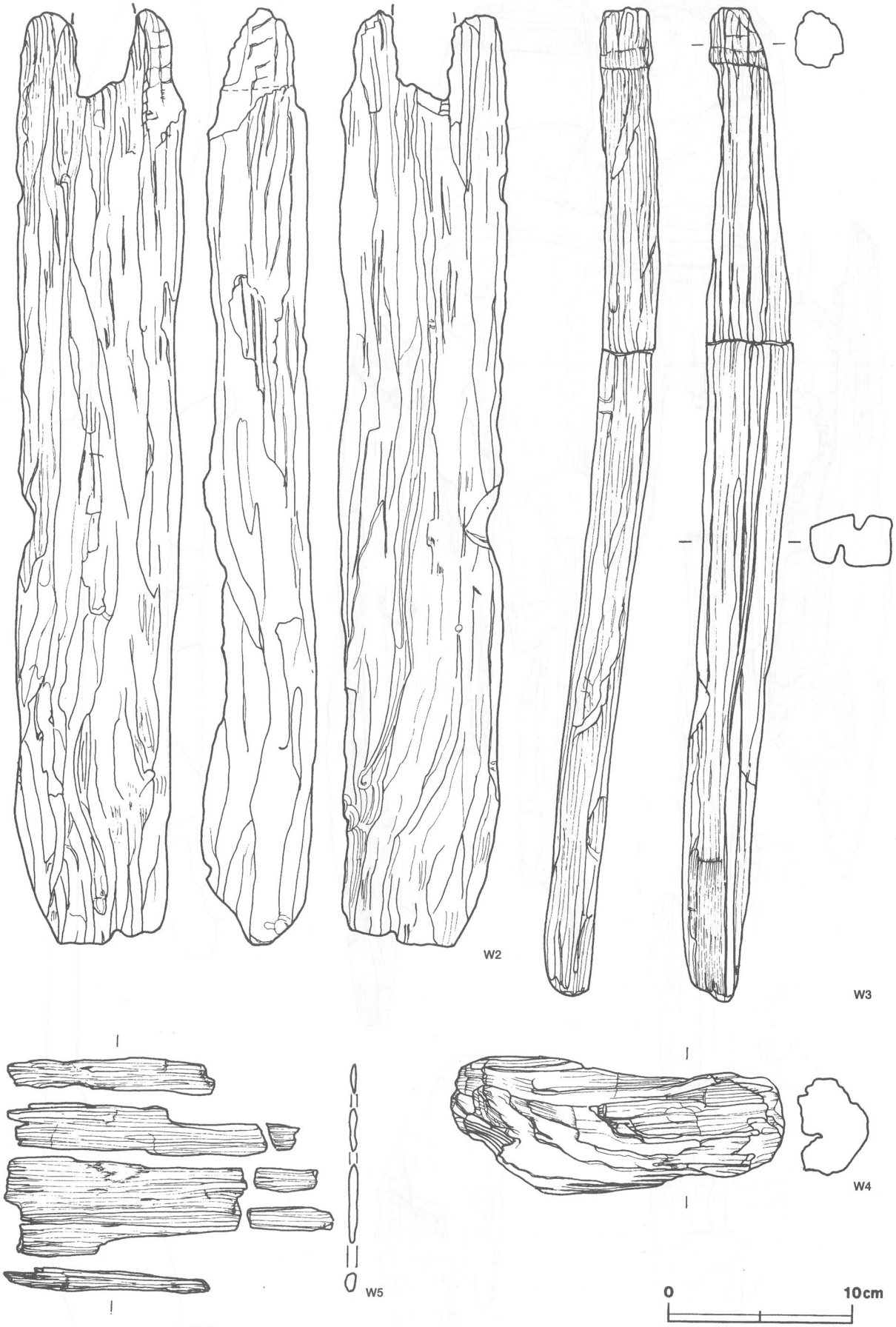
規模と形状　両端が調査区域外に延びているため，規模は不明である。東側から幾分蛇行しながらもほぼN－93°－Wの方向に延びた後，第２号流路跡に合流して，N－57°－Wの方向に延びている。幅25～220cm，深さ20～52cmで，断面形は∪状，U字状や逆台形状で，定形的ではない。B5c9区とB6c1区周辺に深いところがみられる。



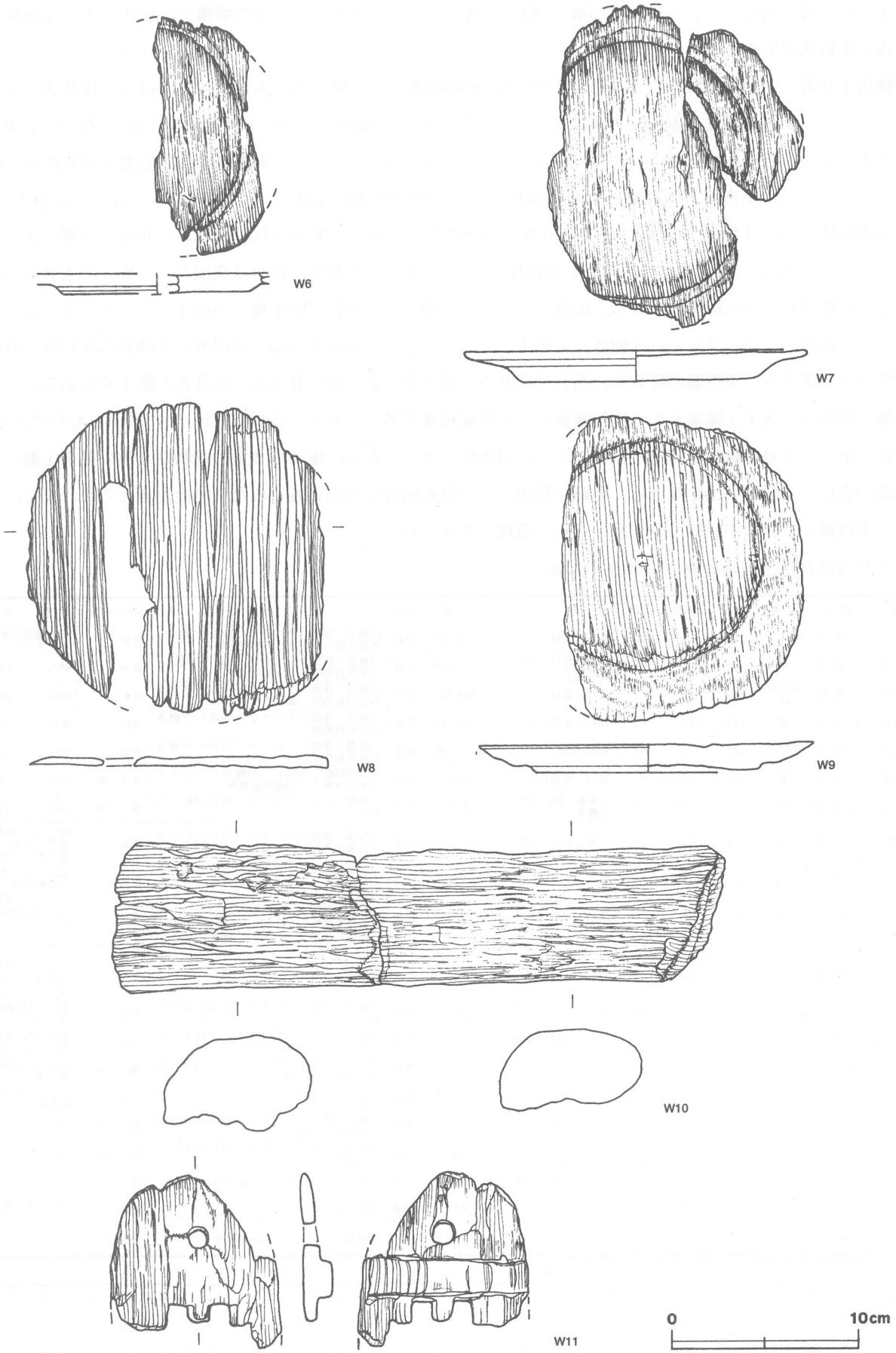
第64図　第３号流路跡出土遺物実測図（１）



第65図　第３号流路跡出土遺物実測図（２）



第66図　第３号流路跡出土遺物実測図（３）



第67図　第３号流路跡出土遺物実測図（４）

覆土　単一層である（トレンチの第13層）。層厚は薄いが，砂や礫を含んだ自然堆積で，第１・２号流路跡と同様な堆積状況である。

遺物出土状況　土師器片1146点，須恵器片795点，灰釉陶器１点，礫11点，木製品10点のほか，撹乱等により混入したとみられる縄文土器片13点が出土している。138の土師器皿，139の土師器高台付皿や142の「子東」と墨書された須恵器坏は底面から出土している。143・147・150の「中」と墨書された須恵器坏は底面から出土している。この墨書の字体は第２号流路跡出土の133の墨書土器の字体と同一である。このほかに144と149の須恵器坏（この２個体の字体は同一）や146の須恵器坏も「中」と墨書されているが，前者とは明らかに異なった字体である（146の墨書は「串」の可能性もある）。Ｗ１の木製品の田舟は底面から，Ｗ３の木製品の挽物高台付盤は底面から出土している。田舟と共にモモの種子（37個体，野生種）が出土している。そのほかスモモ（２個体）やオニグルミ（５個体）も出土している。なお，現存率が高い未掲載の土師器の坏12点，高台付坏９点，甕２点，須恵器の坏42点，高台付坏６点，甕１点，蓋５点，盤３点，五孔式の甑１点がある。

所見　時期は，出土土器等から８世紀後葉から９世紀後葉と考えられる。154の壺はＧ類に属するものである。本跡は第１・３号流路跡と同時に存在していた可能性が考えられる。極めて多量の遺物や多数の墨書土器，須恵器の壺Ｇ，木製品の出土等から，流路を利用しての祭祀的な行為が実施された可能性が考えられ，また，３条の流路跡の中では中心的な意味合いをもつ遺構と考えられる。

第３号流路跡出土遺物観察表（第64～67図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
135	土師器	坏	15.0	4.6	8.0	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　体部下位ヘラ削り　内面黒色処理	底面	80% 底部外面墨書「中」カ「山」
136	土師器	坏	10.2	3.3	6.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理　二次被熱強し	底面	95%　PL18
137	土師器	高台付坏	12.3	4.8	7.2	長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理（漆による）	底面	95%　PL18
138	土師器	皿	13.3	1.6	7.1	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	底面	80%　PL18
139	土師器	高台付皿	12.3	3.2	6.2	長石･雲母	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	底面	95%　PL18
140	土師器	蓋	14.0	3.5	－	長石・金雲母	灰褐	普通	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	覆土下層	40%　PL18
141	須恵器	坏	14.0	5.2	7.8	石英多・長石・雲母・小礫多	黄灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部回転ヘラ切り	覆土下層	100%　PL18
142	須恵器	坏	13.8	5.2	6.1	石英・長石・骨針	灰オリーブ	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	底面	95% 口・体部横墨書「子東」木葉下産　PL18
143	須恵器	坏	14.0	4.7	7.7	石英・長石・雲母・赤色粒子	灰黄	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ　口縁部内面タール付着（灯明皿として使用か）	底面	95%　口・体部外面縦墨書「中」　PL18
144	須恵器	坏	12.7	4.8	7.0	長石・金雲母多	黄灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部回転ヘラ切り後一方向のヘラ削り	底面	60% 底部外面墨書「中」
145	須恵器	坏	[13.4]	4.8	7.2	長石	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部回転糸切り	覆土下層	40%
146	須恵器	坏	[13.3]	4.6	[6.0]	長石・金雲母	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り	底面	35% 口・体部外面縦墨書「中」カ「串」　PL18
147	須恵器	坏	[12.0]	4.1	[6.4]	長石	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り	底面	30% 底部外面墨書「中」
148	須恵器	坏	－	(2.7)	7.0	長石・雲母・小礫	灰	普通	体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部多方向のヘラ削り	底面	30% 底部外面墨書「八十」PL19
149	須恵器	坏	－	(2.7)	7.2	長石	灰	普通	体部ロクロナデ　体部下位ヘラ削り　底部一方向のヘラ削り	覆土下層	20% 底部外面墨書「中」
150	須恵器	坏	－	(3.1)	－	長石・雲母	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ	底面	5％ 口・体部外面縦墨書「中」
151	須恵器	高台付坏	[13.5]	(4.8)	－	長石・小礫多	灰	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部静止糸切り後回転ヘラ削り	覆土下層	60%
152	須恵器	高台付坏	[11.4]	5.4	6.0	長石・雲母	灰白	普通	口縁部・体部ロクロナデ　底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	50%
153	須恵器	蓋	16.9	4.7	－	長石・雲母・小礫	灰	普通	天井部回転ヘラ削り　口縁部ロクロナデ	覆土下層	80%　PL18
154	須恵器	壺	－	(6.0)	－	長石	黄灰	普通	体部ロクロナデ	底面	10% 壺Ｇ類　PL18
155	灰釉陶器	長頸瓶	[8.5]	(0.8)	－	緻密	灰	良好	口縁部ロクロナデ　外面釉付着	底面	5％

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	樹種	特徴	出土位置	備考
Ｗ１	田舟	[97.7]	[40.7]	[10.0]	ケヤキ	一本木作り　中央部から周端部に向けて丁寧に刳っている	底面	
Ｗ２	棒状木製品	50.2	[9.2]	[6.2]	不明	貫通したホゾ穴（方形か長方形で，軸長3.0cm程）が有り	底面	建築材カ
Ｗ３	棒状木製品	53.8	[5.3]	[3.2]	不明	両端部に抉り込み状の加工を施す	底面	紡織機具（布巻具）カ

番号	器　種	長さ（径）	幅（孔径）	厚　さ	樹　種	特　　徴	出土位置	備　考
W 4	棒状木製品	[18.1]	[7.4]	[3.8]	不明	丸木状の木製品	底面	
W 5	板状木製品	[17.9]	[12.8]	0.4	ヒノキ	柾目を利用した板状木製品	覆土中	
W 6	高台付盤	口径　－	高さ（1.0）	底径［10.2］	サクラ属	木取り法は横木取り　挽物　削り出し高台	底面	PL20
W 7	高台付盤	口径　18.2	高さ　1.5	底径　12.4	ケヤキ	木取り法は横木取り　挽物　削り出し高台	底面	
W 8	蓋　カ	16.6	[16.1]	0.8	ヒノキ	木取り法は板目	底面	
W 9	高台付盤	口径　18.0	高さ　1.5	底径　12.2	ムクロジ	木取り法は横木取り　挽物　削り出し高台	底面	
W10	棒状木製品	[32.7]	8.0	[5.1]	ケヤキ	木取り法は芯持ち割材	底面	
W11	下　駄	[9.1]	[9.1]	1.5	不明	端が丸味を帯び，足は低い	底面	

表3　種子（核）計測値一覧表

モモ

番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考	番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考
1	3.13	2.07	1.60		20	2.42	2.00	1.53	
2	2.90	2.19	1.73		21	2.93	2.25	1.64	
3	2.47	2.10	2.09		22	2.79	2.22	1.70	
4	2.65	2.23	1.77		23	2.98	2.11	1.56	
5	2.41	2.07	1.50		24	2.78	2.06	1.55	
6	2.57	1.95	1.70		25	2.57	2.12	1.62	
7	3.09	2.25	1.56		26	2.50	1.91	1.61	
8	2.57	1.88	1.60		27	2.70	2.14	1.62	
9	2.81	2.18	1.77		28	2.49	1.86	1.48	
10	2.94	2.31	1.63		29	2.60	1.76	1.44	側面に抉り有り
11	2.60	2.16	1.51		30	2.70	2.19	1.61	
12	3.18	2.28	1.63		31	2.89	2.14	1.49	
13	2.64	2.18	1.53		32	2.08	1.62	1.39	側面に抉り有り
14	2.14	1.85	1.51		33	2.00	1.56	1.36	
15	2.77	2.21	1.66		34	2.49	1.90	1.45	
16	2.84	2.35	1.72		35	1.85	1.51	1.38	
17	2.59	2.13	1.69		36	2.26	1.92	1.49	上部に抉り有り
18	3.28	2.79	2.55		37	2.27	2.07	1.75	上部に抉り有り
19	2.69	2.01	1.48						

クルミ

番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考	番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考
1	3.60	2.81	2.72		4	2.98	2.47	2.36	
2	3.70	2.87	2.76		5	3.27	2.68	2.53	
3	2.78	2.30	2.17						

スモモ（ミロバラン）

番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考	番　号	縦　径	横　径	厚　さ	備　　考
1	1.19	1.05	0.79		2	1.69	1.12	0.80	側面に抉り有り

4　その他の遺構と遺物

今回の調査で時期不明の土坑32基を確認した。これらの遺構については，全体図に掲載し，一覧表で示すことにする。

（1）　土坑

表4　北田遺跡土坑一覧表

番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模（m）長径(軸)×短径(軸)	深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考（時期・新→旧）
1	C 1 c0	N－64°－E	隅丸長方形	2.16 × 0.92	17	緩斜	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
2	C 1 d0	N－37°－W	楕円形	1.58 × 1.40	16	緩斜	平坦	自然	縄文土器片，凹石	縄文時代中期中葉
3	C 1 d9	N－31°－E	楕円形	1.48 × 1.29	38	緩斜	段状	自然		
4	C 1 d8	N－27°－E	楕円形	2.52 × 2.05	94	緩斜	段状	自然	縄文土器（深鉢・浅鉢）	縄文時代中期中葉
6	C 1 e0	N－67°－W	不定形	1.63 × 1.26	26	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
7	C 1 e9	N－53°－E	不整楕円形	2.88 × 2.50	65	外傾	段状	自然	縄文土器（深鉢）	縄文時代後期前葉　SK 39→本跡
8	C 1 c8	N－44°－W	円形	2.07 × 1.97	50	緩斜	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
9	C 1 c7	N－79°－E	不定形	1.57 × 0.70	75	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
10	C 1 e6	N－47°－E	隅丸長方形	2.10 × 1.50	20	緩斜	段状	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
11	C 6 b7	N－77°－W	不定形	2.14 × 1.77	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
12	C 1 a8	N－62°－W	不定形	2.48 × 1.83	42	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
13	C 1 b9	N－76°－W	楕円形	1.31 × 0.99	17	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
14	C 1 a8	N－77°－W	不整円形	2.55 × 2.10	30	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
15	C 1 a6	N－23°－W	隅丸長方形	2.21 × 0.75	20	緩斜	皿状	自然		
16	C 1 b8	N－10°－E	不定形	2.13 × 1.20	16	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期　SK17→本跡
17	C 1 b8	N－86°－E	［隅丸長方形］	1.83 ×(1.22)	59	外傾	平坦	自然	縄文土器（深鉢）	縄文時代中期　本跡→SK16
18	C 1 a7	N－48°－E	楕円形	1.15 × 0.94	15	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
19	C 1 e0	N－0°	不定形	2.10 × 1.78	33	緩斜	皿状	自然	土師器（甕）	古墳時代後期
20	C 1 b0	N－75°－W	［楕円形］	1.38 ×[0.9]	38	緩斜	段状	自然	土師器（坏・高坏）	古墳時代後期　SK21→本跡
21	C 1 b0	N－50°－W	［楕円形］	1.00 ×(0.75)	20	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期　本跡→SK20
22	C 1 a6	－	円形	0.94 × 0.86	38	緩斜	皿状	自然	縄文土器片，石皿（未掲載）	縄文時代中期
23	B 1 j 7	－	円形	0.70 × 0.63	25	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期
24	B 1 j 8	－	円形	0.62 × 0.58	55	垂直	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期
25	B 1 j 8	－	円形	0.74 × 0.72	38	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期
26	C 1 e0	N－84°－W	楕円形	0.95 × 0.58	23	緩斜	皿状	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
27	C 1 b4	N－45°－E	楕円形	1.37 × 0.55	17	外傾	段状	自然		
28	C 1 a8	N－42°－E	不定形	3.17 × 0.65	20	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
29	C 1 c4	N－5°－E	不定形	1.95 × 1.00	20	緩斜	凹凸	自然		
30	B 1 j 7	N－90°－E	楕円形	0.97 × 0.41	41	外傾	皿状	自然		
31	B 1 i 7	N－19°－E	［楕円形］	(1.34)× 0.96	14	外傾	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期
32	C 1 f 8	N－76°－W	［楕円形］	2.28 ×(1.12)	58	緩斜	平坦	自然	縄文土器片，礫（未掲載の黒曜石２）	縄文時代中期後葉
33	C 1 b9	－	円形	0.63 × 0.61	26	垂直	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期中葉
34	B 1 j 9	N－53°－E	隅丸長方形	1.77 × 0.70	13	緩斜	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期
35	C 1 a7	N－79°－E	楕円形	1.29 × 0.95	36	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期
36	C 1 b6	N－58°－W	不定形	3.25 × 1.09	70	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期
37	C 1 a5	N－44°－W	楕円形	1.68 × 1.48	14	外傾	平坦	自然		
38	B 1 j 6	N－20°－W	楕円形	1.70 × 0.98	11	外傾	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期中葉
39	C 1 d9	N－50°－E	不定形	3.25 × 1.09	70	垂直	平坦	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期　本跡→SK 7
40	B 1 j 5	－	円形	0.80 × 0.76	34	外傾	凹凸	自然		
41	C 1 a0	N－16°－W	楕円形	2.98 × 2.70	40	緩斜	凹凸	自然	縄文土器片，礫（未掲載の磨石１）	縄文時代中期
42	C 1 a9	N－79°－E	不定形	2.35 × 1.84	18	外傾	凹凸	自然	縄文土器片，礫	縄文時代中期
43	B 1 g0	N－60°－W	［楕円形］	2.10 × (0.81)	30	緩斜	皿状	自然	縄文土器片，石鏃	縄文時代中期　第１号遺物包含層と重複
45	A 4 j 7	N－65°－E	楕円形	2.42 × 1.06	54	外傾	皿状	自然		
46	B 5 d3	N－21°－W	楕円形	1.30 × 0.88	18	緩斜	皿状	自然		本跡→SI 2
47	A 4 j 6	N－33°－W	不定形	4.15 × 3.83	50	外傾	凹凸	自然	縄文土器（器台），磨製石斧，剥片，礫（未掲載の凹石３）	縄文時代中期中葉　本跡→SI14

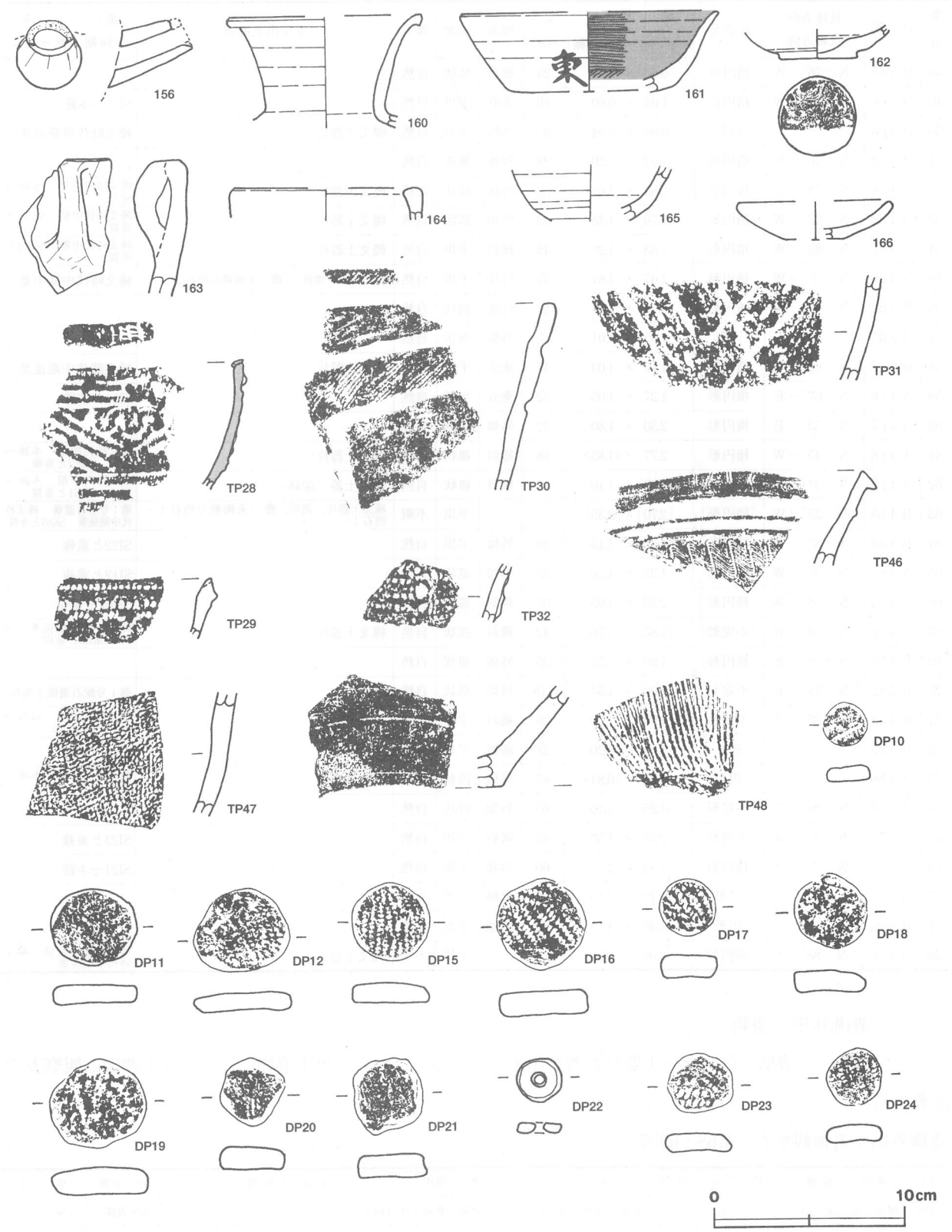
番号	位置	長径方向（長軸方向）	平面形	規模（m）長径(軸)×短径(軸)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考（時期・新→旧）
48	B 5 e5	N－76°－W	楕円形	0.65 × 0.50	25	緩斜	皿状	自然		
49	B 5 e6	N－18°－W	楕円形	1.04 × 0.60	19	垂直	平坦	自然		SI 7 →本跡
50	B 4 c8	－	円形	0.96 × 0.94	60	外傾	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代後期前葉
51	B 4 c8	N－3°－E	楕円形	1.63 × 1.29	28	外傾	皿状	自然		
52	B 4 c8	N－73°－E	楕円形	2.55 × 1.65	52	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期　本跡→SI 1
53	B 4 d8	N－22°－W	[楕円形]	1.70 × 1.48	43	外傾	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期　SK54と重複
54	B 4 d7	N－83°－W	楕円形	1.55 × 1.26	45	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期　SK53と重複
55	B 4 a6	N－2°－W	楕円形	1.67 × 1.61	45	外傾	平坦	自然	縄文土器（深鉢），礫（未掲載の凹石３）	縄文時代中期中葉
56	B 5 d2	N－46°－W	楕円形	1.16 × 1.04	17	外傾	皿状	自然		
57	B 5 d2	－	円形	1.05 × 1.01	15	外傾	皿状	自然		
58	B 4 c5	N－69°－W	楕円形	1.19 × 1.03	47	垂直	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期後葉
59	A 4 j 6	N－67°－E	楕円形	1.27 × 1.05	52	垂直	平坦	自然		SI14→本跡
60	A 4 i 7	N－53°－E	楕円形	2.30 × 1.80	22	外傾	凹凸	自然		
61	A 4 j 8	N－45°－W	楕円形	2.77 ×(1.85)	18	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期　本跡→SI 6　SK62と重複
62	A 4 j 8	N－37°－E	不定形	2.00 × 1.10	25	緩斜	皿状	自然	縄文土器（深鉢）	縄文時代中期　本跡→SI 6　SK61と重複
63	B 4 b5	N－25°－W	[楕円形]	[2.70]×[2.35]	－	－	平坦	不明	縄文土器片，剥片，礫（未掲載の磨石１・凹石１）	第１号集石遺構　縄文時代中期後葉　SK69と重複
64	B 4 a8	N－87°－E	楕円形	1.30 × 1.15	20	外傾	平坦	自然		SI22と重複
65	A 4 i 5	N－8°－W	楕円形	1.35 × 1.26	35	外傾	皿状	自然		SI12と重複
66	A 4 j 5	N－55°－W	楕円形	2.25 × 1.95	35	緩斜	皿状	自然		SK67と重複
67	A 4 j 5	N－54°－W	[不定形]	(1.80)× 1.70	42	緩斜	皿状	自然	縄文土器片	縄文時代中期後葉　SI 14・SK66と重複
69	B 4 b5	N－8°－E	[楕円形]	1.90 × 1.57	25	外傾	皿状	自然		
70	B 5 a2	N－75°－E	不定形	2.00 × 1.54	118	外傾	皿状	自然		第１号配石遺構と重複
71	B 4 b8	N－35°－E	不定形	1.96 × 1.70	28	緩斜	平坦	自然	縄文土器片	縄文時代中期　SI22→本跡→SI 1・20
72	B 5 c2	－	円形	1.30 × 1.20	28	緩斜	平坦	自然		SI15→本跡
73	B 4 b9	－	[円形]	0.95 ×(0.84)	67	外傾	段状	自然	縄文土器片	縄文時代中期　本跡→SI20
74	B 4 a8	N－20°－W	不定形	1.25 × 1.10	65	外傾	段状	自然		SI22・23→本跡
75	A 4 j 7	N－80°－W	不定形	2.53 × 1.50	45	緩斜	平坦	自然		SI23と重複
76	B 5 b1	N－5°－W	楕円形	1.53 × 1.35	60	外傾	平坦	自然		SI21→本跡
77	B 5 d2	－	円形	1.15 × 1.15	50	外傾	平坦	自然		
78	B 5 d2	－	円形	1.40 × 1.34	32	外傾	平坦	自然		
79	B 4 b6	N－88°－E	[楕円形]	[2.90]×[2.50]	－	－	平坦	不明	縄文土器片	第２号集石遺構　縄文時代中期後葉

（２）　遺構外出土遺物

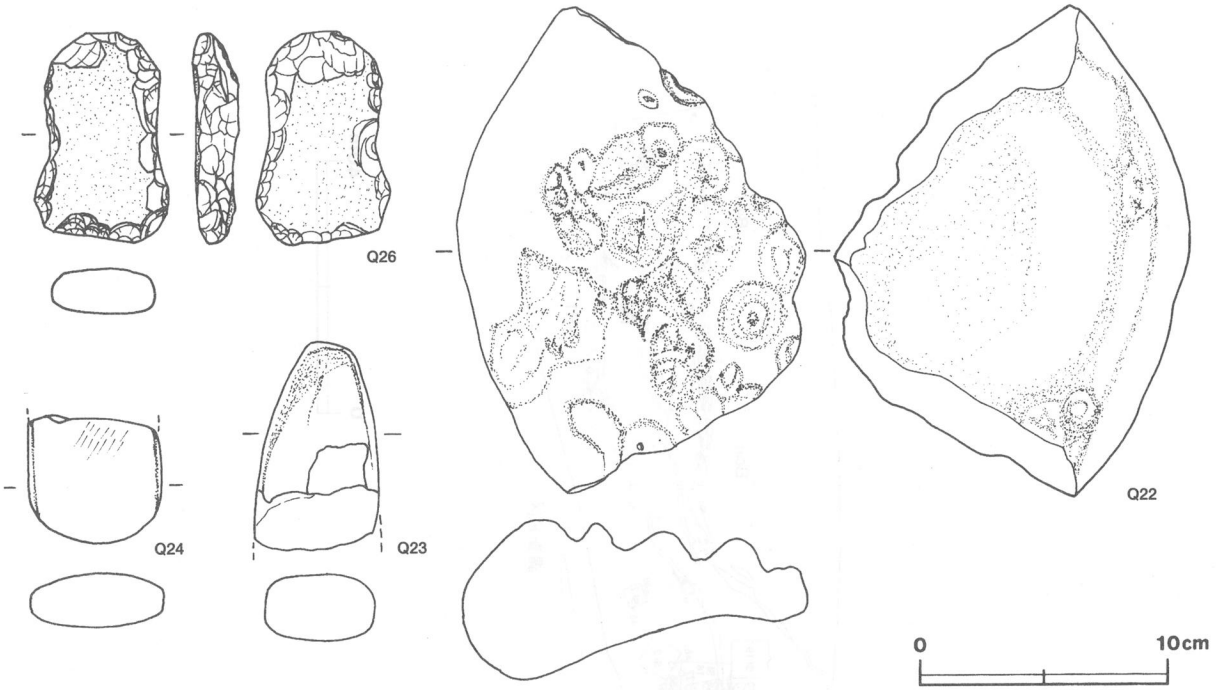
今回の調査で，遺構に伴わない土器や石器が出土している。これらの出土遺物については実測図と観察表で掲載する。

遺構外出土遺物観察表（第68・69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
156	縄文土器	注口	－	(3.5)	－	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	注口部ナデ	A区表採	5％
160	須恵器	長頸瓶	[10.0]	(5.8)	－	緻密	灰	良好	口縁部ロクロナデ　内・外面自然釉付着	D区表採	5％ 猿投産カ
161	土師器	坏	[13.4]	4.1	[8.5]	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部・体部ロクロナデ　内面ヘラ磨き　内面黒色処理	E区表採	10％ 体部外面縦墨書「東」
162	土師質土器	小皿	－	(1.7)	3.0	赤色粒子	浅黄橙	普通	体部ロクロナデ　底部回転糸切り	D区表採	30％
163	土師質土器	内耳鍋	－	(7.0)	－	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	耳部ナデ　外面煤付着	E区表採	5％
164	青磁	碗	[10.0]	(1.7)	－	緻密	灰白	良好	内・外全面施釉（釉は明緑灰色）	E区表採	5％
165	陶器	天目茶碗	－	(3.0)	－	緻密	にぶい褐	良好	体部ロクロナデ　体部外面下位露胎　鉄釉付着	D区表採	5％



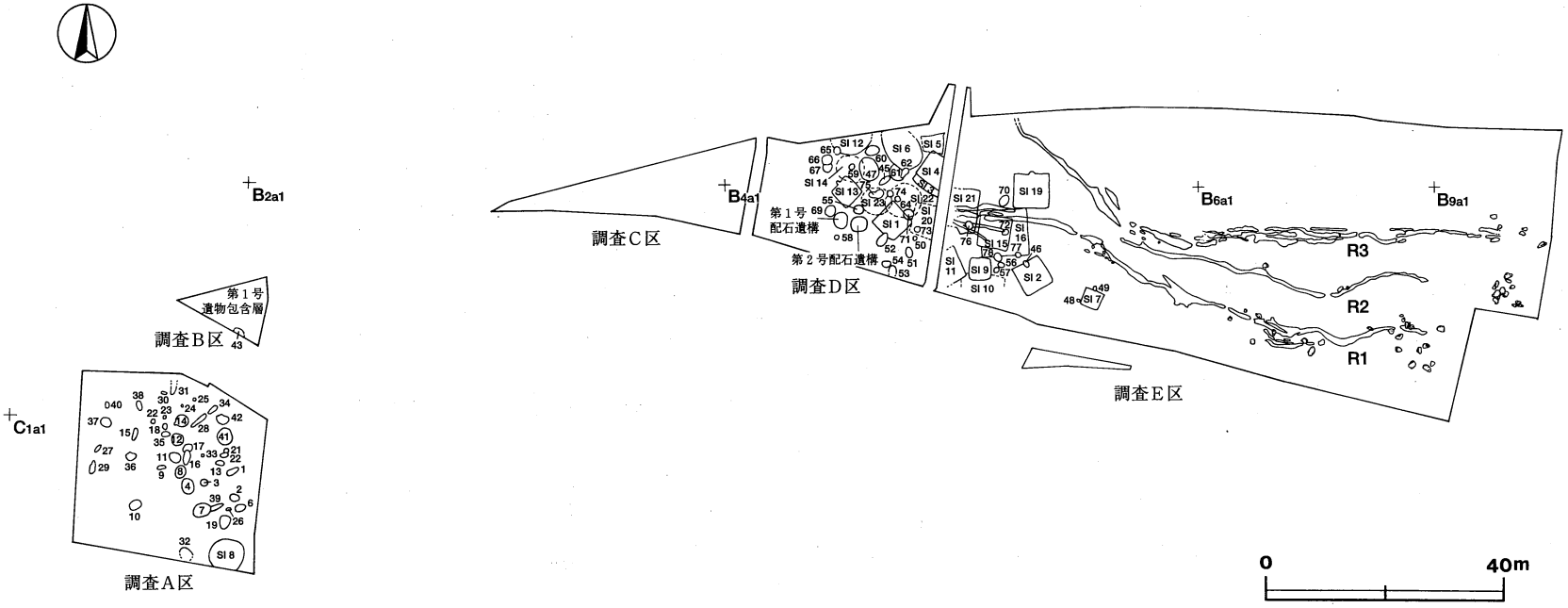
第68図　遺構外出土遺物実測図（1）



第69図　遺構外出土遺物実測図（2）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
166	陶器	小皿	[8.0]	2.0	[3.0]	緻密	灰黄	良好	体部ロクロナデ　体部外面下位露胎　釉付着（釉は灰釉）	E区表採	5％ 瀬戸系カ
TP28	縄文土器	鉢	−	(6.5)	−	石英・長石・雲母・繊維	明赤褐	普通	口唇部に粘土を貼り付け　貼り付け後細かいキザミ目　口縁部に低い隆帯貼り付け　隆帯上に細いキザミ目・円形浮文	A区表採	
TP29	縄文土器	深鉢	−	(3.0)	−	石英・長石・雲母	赤褐	普通	結節沈線文を横位または波状に	A区表採	
TP30	縄文土器	深鉢	−	(9.7)	−	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に無節R　口縁部沈線で区画　区画内に無節Rと磨消縄文	A区表採	
TP31	縄文土器	深鉢	−	(5.2)	−	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	沈線で区画　区画内に刺突列点文と磨消縄文	A区表採	
TP32	縄文土器	深鉢	−	(3.0)	−	石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯上指頭による押圧　沈線と単節縄文（磨滅）	A区表採	
TP46	須恵器	甕	−	(5.0)	−	石英・長石	灰	普通	頸部に9本櫛歯による波状文	D区表採	
TP47	須恵器	甕	−	(6.3)	−	石英・長石・小礫	灰	普通	胴部外面格子状の叩き目	D区表採	
TP48	陶器	擂鉢	−	(5.5)	−	砂粒	赤褐	普通	内面縦方向の擂り目	E区表採	常滑産

番号	器種	長さ（径）	幅（孔径）	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	土器片円盤	2.4	2.2	0.8	4.4	土	表面に沈線　側面研磨	A区表採	
DP11	土器片円盤	4.0	4.5	1.0	20.8	土	表面摩滅　表面に単節RLの縄文か　側面研磨	A区表採	
DP12	土器片円盤	4.3	5.0	0.9	22.0	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	A区表採	
DP15	土器片円盤	4.1	4.1	1.0	20.7	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	D区表採	
DP16	土器片円盤	4.7	4.6	1.2	30.8	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	D区表採	
DP17	土器片円盤	3.0	3.0	1.1	11.0	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	D区表採	
DP18	土器片円盤	4.0	3.8	1.1	16.5	土	表面摩滅のため縄文の施文不明　側面研磨	D区表採	
DP19	土器片円盤	4.7	5.1	1.3	31.3	土	表面摩滅のため縄文の施文不明　側面研磨	D区表採	
DP20	土器片円盤	3.1	3.3	1.2	14.0	土	表面摩滅のため縄文の施文不明　側面研磨	D区表採	
DP21	土器片円盤	3.7	3.6	1.2	17.0	土	表面無文　側面研磨	D区表採	
DP22	土器片円盤	2.3	2.3	0.6	3.0	土	中央部に孔あり　孔径0.4cm　側面研磨	D区表採	
DP23	土器片円盤	3.1	3.4	1.0	10.2	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	E区表採	
DP24	土器片円盤	3.0	2.9	0.9	8.0	土	表面単節RLの縄文　側面研磨	E区表採	
Q22	凹石・石皿	(19.3)	(14.4)	6.3	(1173.5)	安山岩	表面に26穿孔　裏の機能面の周囲に縁を有し，機能面が凹む	A区表採	
Q23	磨製石斧	(8.2)	5.1	2.6	(167.6)	硬砂岩	刃部欠損	A区表採	
Q24	磨製石斧	(5.2)	5.5	2.2	(88.8)	安山岩	基部欠損	A区表採	PL20
Q26	打製石斧	8.3	5.4	1.8	110.5	安山岩	分銅形　押圧による剥離　抉り部は浅い	D区表採	



第70図　北田遺跡全体図

第4節　ま　と　め

北田遺跡の調査成果を時代ごとに述べてまとめとする。

1　縄文時代

竪穴住居跡6軒，土坑45基，配石遺構2基，遺物包含層1か所がこの時代の遺構である。

住居跡の時期は

阿玉台Ⅱ～Ⅲ式期・・・第6号住居跡

加曽利ＥⅠ式期・・・・第8・12・22号住居跡

加曽利ＥⅣ式期・・・・第14・23号住居跡

で，炉は第8・14・23号住居跡で確認されている。第8・14号住居跡は埋甕炉で，第23号住居跡は炉体土器を伴う石組炉であるが，複式炉が退化したような形状である。土坑は縄文時代中期中葉から後葉に位置付けられるものが43基，後期に位置付けられるものが2基である。この時代の遺構はA区の東側，B区全体，D区東側から確認され，E区からは確認されていない。E区からは縄文土器片の出土もないことから，集落や土坑群はA・B・D区を結んだ弧を描くようなラインの内側から南に延びるように広がると思われる。縄文時代中期中葉に位置付けられる県内の土坑にはフラスコ状土坑が数多く見られ，しかも群存化する傾向がある[1)]。しかし，当遺跡ではそのような傾向はみられない。フラスコ状土坑の機能として，貯蔵用の穴と考えるのが一般的であるが，当遺跡の立地する環境（掘ると湧水しがちな場所）が作らさせなかった可能性が考えられる。

遺物は，表採で前期の関山式土器，遺構に伴って中期の阿玉台式土器，加曽利E式土器，後期の称名寺式土器が出土している。阿玉台式土器，加曽利E式土器の中には，東北地方の大木8ａ式土器の影響を受けているものも見られる。第8号住居跡から出土した土偶はハート形土偶の左足と考えられるが，流れ込んだものと思われる。石器類は，敲石を兼ねた磨石や凹石（石皿兼用のものもある），磨製石斧は多数出土しているが，石鏃と打製石斧は調査区内でそれぞれ1点ずつしか出土していない。これはそれぞれの石器の用途と考えられる狩猟や土掘りに，何か別の有機質のものを利用したのではないかと考えられる。

2　古墳時代

竪穴住居跡13軒，土坑2基がこの時代の遺構で，当集落の中心となる時期である。住居跡はD区の東側，E区の西側の限られた範囲の中で，土坑はA区の西側で確認されている。

（1）　集落について

出土土器と重複関係から大きく2期に分けられる。

第1期（6世紀前半）

第5・16号住居跡と第19・20号土坑が該期の遺構である。第5号住居跡の規模は不明である。第16号住居跡は一辺が8～8.2mの方形で，当遺跡で最大の規模で，焼失住居である。赤彩された坏や脚の短く「ハ」の字状に開く高坏が出土している。

第2期（6世紀後半）

第1～4・10・11・13・15・19・20・21号住居跡が該期の遺構である。住居跡の形態や施設等についてみると，規模は大体一辺5～6mの方形である。第13号住居跡が一辺4mの方形で規模は小さく，第10・21号住居跡は一辺7m前後の方形で規模は大きい。壁溝は第2・10・11号住居跡を除いて全周又は一部にみられる。竈

は調査区域外に延びているものや重複しているものがあって明確ではないが，すべての住居に付設されていたと考えられる。第13・20号住居跡は共に，角柱状の花崗岩を両側に立てて，その上に角柱状の花崗岩を乗せて焚き口部としている構造である。時期は当遺構より少し古くなるが，真壁町の南椎尾八幡前遺跡第30号住居跡の竈構造と類似している[2)]。貯蔵穴は確認できなかったものもあるが，竈側のコーナー部に設けられているものが多い。出入口施設の区画の中に設けられているものや，すぐ脇に設けられているものもわずかにある。また，焼失住居が11軒中７軒を占めている。重複関係からさらに２期に細分も可能と考えられるが，土器の形態変化からはさほどの相違は見られない。坏は黒色処理されたものがかなりの比率でみられる。甑は鉢形の大形と小形のものがみられる。第10号住居跡からは，未掲載のものも含めて７点の大形高坏が出土している。また，出土土器のほとんどが土師器の坏と高坏の供膳具であることから，何らかの祭祀的意味合いのある遺構と考えられる。土器はほとんどが土師器で，この時代の可能性がある須恵器片はわずかに１点である[3)]。

（２） 古墳時代の炭化材について

第20号住居跡出土の柱材について樹種同定結果を基に，県内で古墳時代（４世紀～７世紀）に位置付けられた住居跡から出土した炭化材について考えてみたい。その樹種は，次の表５の通りである[4)]。世紀毎に樹種の相違は見られず，クヌギ節とコナラ節が一般的である（７世紀は分析事例が少ないが幾分多様な樹種が確認され，クヌギ節とコナラ節が一般的であるとも言えない）。表５の結果からみると，コナラ亜属クヌギ節が約52％，コナラ亜属コナラ節が約18％，合わせると実に70％の比率で住居構築材を占めている（当遺跡の結果を含めない）。樹種の相違は地域性を表し，沿海周辺では，アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹が多く利用され，内陸部ではクヌギ節・コナラ節等の落葉広葉樹を主とした種類構成が見られるとの指摘がある。また，住居構築材の用材は，基本的に遺跡周辺の植生を反映していると考えられている。当遺跡の第20号住居跡の柱材として，コナラ属アカガシ亜属とシロダモの丸木が利用されている。共に常緑広葉樹で，県内では一般的な材木である。コナラ属アカガシ亜属の出土遺跡は，水戸市の白石遺跡，鉾田町の平出久保遺跡，北浦町の炭焼遺跡・木工台遺跡等が挙げられ，沿岸地域に位置する遺跡である。平安時代と時期は下がるが，やや内陸の常北町の前側遺跡からコナラ属アカガシ亜属の一種が出土している。付章の分析結果によると，平安時代であるが流路跡から木本花粉として，かなりの割合でコナラ属アカガシ亜属の花粉が出土していることから，平安時代においてもこの樹種の植生がみられたと思われる。しかし，住居の柱材としてシロダモの使用例は表からは見られない。既述したように住居構築材は大形であることから現地性の高い遺物といわれ，当遺跡周辺には常緑広葉樹が生育していたことが指摘できる。内陸部が落葉広葉樹を主とした住居構築材の種類構成をとる中で，コナラ属アカガシ亜属とシロダモの共に常緑広葉樹であることは，真壁町のような内陸地内では異質と言える。

表５　古墳時代の炭化材出土住居跡一覧表

４世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用　途	樹　種　名
1	水海道市	奥山Ａ	ＳＩ－２	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	岩井市	北前	ＳＩ－29	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	岩井市	高崎貝塚	ＳＩ－３	柱材	ハンノキ属
				住居構築材	タケ亜属科
4	岩井市	姥ケ谷津	ＳＩ－１	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－12	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	茨城町	南小割	ＳＩ－60	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

5世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用　途	樹　種　名
1	つくば市	島名前野東	ＳＩ－77	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			ＳＩ－79	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	つくば市	谷田部漆	ＳＩ－3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－22	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	牛久市	中久喜	ＳＩ－12	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－15	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－23	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
4	牛久市	ヤツノ上	ＳＩ－13	側壁材又は敷板材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				天井材	タケ亜科
			ＳＩ－19	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－21	不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－23	側壁材	タケ亜科
				側壁材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			ＳＩ－28	建築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			ＳＩ－36	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	牛久市	ヤツノ上	ＳＩ－36	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	牛久市	隼人山	ＳＩ－4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－27	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	牛久市	東山	ＳＩ－65	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
7	牛久市	馬場	ＳＩ－16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－26	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－43	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	鉾田町	平出久保	ＳＩ－38	住居構築材	ムクロジ
				住居構築材	イヌガヤ
				住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
9	阿見町	実穀寺子	ＳＩ－12	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
10	茨城町	南小割	ＳＩ－90	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				住居構築材	ハンノキ属
				住居構築材	クリ
				住居構築材	コナラ属アカガシ亜属

6世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用　途	樹　種　名
1	つくば市	島名境松	ＳＩ－17	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－22	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－28	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	谷和原村	西ノ脇	ＳＩ－1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	水海道市	西原	ＳＩ－11	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			ＳＩ－13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
4	牛久市	馬場	ＳＩ－13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	常北町	上入野	ＳＩ－17	柱材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	北浦町	炭焼	ＳＩ－18	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
			ＳＩ－29	住居構築材	ハンノキ属
7	阿見町	星合	ＳＩ－5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	茨城町	南小割	ＳＩ－10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

7世紀

番号	市町村	遺跡名	遺構名	用　途	樹　種　名
1	水戸市	白石	ＳＩ－1	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
				住居構築材	ヒノキ属類似種
				住居構築材	コナラ属アカガシ亜属クヌギ節
2	北浦町	木工台	ＳＩ－7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			ＳＩ－57	住居構築材	エノキ属
				住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
3	北浦町	木工台	ＳＩ－57	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
				住居構築材	スタジイ
				住居構築材	サクラ属
			ＳＩ－157	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				住居構築材	ムクロジ
				住居構築材	クリ

3　奈良・平安時代

竪穴住居跡2軒と流路跡3条がこの時代の遺構である。第7号住居跡は出土遺物が少なく時期は不明である。第9号住居跡は8世紀後葉，3条の流路跡は若干の時期差が見られるが，8世紀後葉から9世紀後葉の時期と考えられる。3条の流路跡からは，極めて多量の遺物（土師器・須恵器・木製品等）や種子が出土している。遺物数は土師器片2076点，須恵器片2141点，灰釉陶器片1点，流木を含む木器・木製品15点である。また，調査E区の東側を中心にかなり多量の大小様々な礫が出土している。これは奈良・平安時代の項目のところでも触れたが，加波山や足尾山を中心に当遺跡の東側に位置する山々からの土石流によってもたらされたものであろうと考えられる。それがある程度埋まった段階で川筋となったものが今回調査した流路跡と考えられる。群

馬県の日高遺跡[5]や岐阜県の弥勒寺西遺跡[6]，長野県恒川遺跡群[7]等の流路跡はかなり大規模であるが，形態や遺物の出土状況は当遺跡のものに類似している。流路跡の出土遺物について，項目立てをしてまとめとしたい。

（1） 土器

当遺跡から出土した土器は，土師器・須恵器・墨書土器である。須恵器の大部分は新治窯のものであるが，中には，水戸市の木葉下窯のものや，底部が回転糸切りの坏や高台付坏も見られ，他地域からの搬入品と考えられる。また，壺Gや円面硯も出土している。墨書の釈文は「中」「子東」「八十」「串」等が見られる。県内での壺Gの出土例については，箕輪健一氏が集成を実施し，「官衙関連遺跡や奈良・平安時代の拠点的な集落跡から出土している[8]」と捕らえている。

（2） 種子

当遺跡は掘ると湧水しがちな湿地性の場所である。そのため比較的数多くの種子が遺存している。その種子の種類を同定した結果，モモ・スモモ・オニグルミの種子であることが判明した。種子は植物学的には核と言う。モモは核の大きさから栽培されていたものではなく，野生種のものと判断される。古墳時代の第19号住居跡からも出土している。これらの種子はそれぞれ食料として利用されているが，モモは祭祀的な行為でも利用されている。スモモ（ミロバラン）は日本産のものではなく，中国産の種類と判断される。

（3） 木製品

当遺跡出土の木製品は田舟，挽物の高台付盤，蓋，下駄や棒状木製品である。田舟の出土例としては鹿嶋市の豊郷条里遺跡[9]がある。高台付盤の出土例としては水戸市の砂川遺跡第1号井戸遺物[10]がある。当該期の下駄の出土例は鹿嶋市の宮中条里遺跡[11]や豊郷条里遺跡等がある。宮中条里遺跡や豊郷条里遺跡は鹿島郡衙に伴う条里と考えられる。W2・3の棒状木製品は水戸市の大塚新地遺跡第2号井戸状遺構からの出土遺物[12]に類似している。大塚新地遺跡は郷衙と考えられている。W3の棒状木製品は鹿嶋市豊郷条里遺跡出土の紡織機具（布巻具?）[13]に類似しているように思われる。このように，県内での木製品の出土遺跡は，地方官衙（郷衙）や地方官衙に伴う条里遺跡等である。W2・3・4・10は使用目的の不明な棒状木製品と捕らえているが，機織具に関わる遺物の可能性も考えられる[14]。当遺跡出土の木製品の樹種名は田舟がケヤキ，高台付盤がヒノキとケヤキ，ムクロジ，蓋がヒノキ等で，現地で採取可能な木材である。ケヤキは木目が美しく重硬で狂いが少なく，保存性の高い材木である。ヒノキは緻密で水湿に強く加工が容易な良材である。このように木製品を作る時，現地の木材の材質をよく捕らえ，選択して利用していたと考えられる。また，挽物については，飯塚武司氏により「挽物容器を出土する遺跡は，（中略）地方官衙・公的機関や有力集団の居宅に伴う例や，律令的祭祀に伴う出土例，木工生産遺跡からの出土に限られており，一般的な集落遺跡からの出土例はほとんどみられない[15]」との指摘がある。

以上のように，当遺跡から壺Gや円面硯，モモを始めとする種子，木製品等が出土していることを考えると，当遺跡の流路跡も単なる流路と考えるよりも，祭祀的な意味合いを持った遺構と考えられる。また，飯塚氏の指摘の中にある官衙という観点で，当遺跡周辺を見てみる。常陸国は律令制の郡として11郡を数える。当遺跡周辺は，真壁郡（白壁郡）に属していた。真壁郡の下に7郷があり，当遺跡周辺は真壁郷に属していた。豊崎卓氏によると，真壁町付近の条里制について，伊佐々条里・柴尾条里・桜井条里の存在を指摘している[16]。当遺跡周辺は「古城」という地名であるが，この名称が中世まで溯るのは明確であるが，それ以上溯るかはまだ不明である。まだ真壁郡衙の想定場所が分からず，郷と考えられるような調査遺跡も現在のところ存在せず，官衙との関連等については何も言えない。

4　中世

中世の遺構は確認されず，当遺跡の北300mの地点に位置する国指定史跡真壁城との関連は不明である。遺物は，表土から土師質土器の内耳鍋や小皿，常滑産の擂鉢，古瀬戸と考えられる小皿等が出土している。

註

1）　黒澤秀雄　「茨城県の縄文時代中期のフラスコ状土坑について」『研究ノート』3号　茨城県教育財団　1994年6月

2）　吹野富美夫　「(仮称)真壁町南椎尾地区住宅団地事業地内埋蔵文化財調査報告書－小山遺跡・八幡前遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』　第99集　1995年3月

3）　椙山林継　「4　祭器」『古墳時代の研究』3　1991年3月　椙山氏によると「6世紀代になると祭祀遺跡からの須恵器は少なくなり，土師器あるいは手捏土器が使用される」との指摘がある。時期は当遺跡より古くなる(5世紀後半)が，つくば市の谷田部漆遺跡の第1号土坑から高坏17点が出土し，中層まで埋め戻した後に一括投棄したような様相を示しているとしている。この遺跡から古墳時代の須恵器は出土していない。このような点から，在地の土師器の高坏を利用しての祭祀行為が行われると須恵器が遺跡内に入ることを拒否する何らかの意識があったのではないだろうか。

4）　当教育財団が調査した遺跡で，パリノ・サーヴェイ株式会社の分析結果による。

5）　平野進一他　『日高遺跡－関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第5集－』　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982年3月

弥生時代後半の水田跡が確認できた遺跡として著名であるが，9世紀代の溝から，木製の下駄・札・斎串・皿・折敷・曲物・杭等が多数出土している。

6）　関市教育委員会　『弥勒寺西遺跡』　現地説明会資料　2002年7月

当遺跡は，地中に埋没していた谷川から一万数千点の遺物が出土している。その中には，祭祀に用いられた斎串や人形などの木製品や「大寺」「寺」「厨」等の墨書土器，鞴羽口，鉄滓が含まれている。

7）　社団法人長野県史刊行会　『長野県史　考古資料編』　1988年3月

自然流路から木簡や祭祀具とともに挽物皿・曲物・刳物盤・槽等が出土し，祭祀行為の一括廃棄の可能性を指摘している。また，伊那郡衙と考えられている集落である。

8）　箕輪健一　『鹿の子－鹿の子地域の調査報告11－』　石岡市教育委員会　1997年3月

同氏に寄れば，石岡市の鹿の子C遺跡及び周辺の鹿の子遺跡，水戸市の堀遺跡・梶内遺跡，八郷町の半田原遺跡，総和町の北新田A遺跡，江戸崎町の思川遺跡を挙げている。そのほかに，つくば市の柴崎遺跡・熊の山遺跡等がある。熊の山遺跡では胎土分析を実施し，静岡県助宗窯出土土器の分析値が一番近いと指摘している。

萩野谷悟　「研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)－柴崎遺跡Ⅱ区・Ⅲ区」『茨城県教育財団文化財調査報告』　第93集　1994年9月

小島敏他　「(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－熊の山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』　第133集　1998年3月

9）　森下松寿他　「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅱ－豊郷条里遺跡須賀Ⅰ地区－」『鹿島町の文化財』　第31集　茨城県鹿島町教育委員会　1983年3月　この鹿嶋市豊郷条里遺跡からは舟状木製品も出土している。

本田勉他　「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅳ－宮中条里遺跡爪木Ⅰ地区，豊郷条里遺跡須賀Ⅱ地区・七反田遺跡－」『鹿島町の文化財』　第38集　茨城県鹿島町教育委員会　1984年3月　当遺跡出土程度の小形のものは刳物の槽との考え方もある。鈴鹿八重子他「御山千軒遺跡－東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ」『福島県文化財調査報告書』第109

集　1983年３月

10)　佐藤正好他 「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書４－砂川遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第XVI集　1982年３月

11)　田口崇 「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅴ－宮中条里遺跡爪木Ⅱ地区－」『鹿島町の文化財』 第39集　茨城県鹿島町教育委員会　1984年３月

田口崇「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅵ－豊郷条里遺跡沼尾Ⅱ地区－」『鹿島町の文化財』 第47集　茨城県鹿島町教育委員会　1985年３月

田口崇 「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅶ－豊郷条里遺跡沼尾Ⅰ地区－」『鹿島町の文化財』 第48集　茨城県鹿島町教育委員会　1985年３月

12)　石井毅他 「常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書３－大塚新地遺跡他」『茨城県教育財団文化財調査報告』第XI集　1981年３月

13)　本田勉 「鹿島湖岸北部条里遺跡Ⅲ－豊郷条里遺跡須賀Ⅱ地区－」『鹿島町の文化財』 第32集　茨城県鹿島町教育委員会　1983年３月

14)　鈴鹿八重子他 「御山千軒遺跡－東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ」『福島県文化財調査報告書』 第109集　1983年３月

15)　飯塚武司 「関東・甲信の木製容器の推移と生産」 第39回埋蔵文化財研究集会 『古代の木製食器』 1996年３月

16)　豊崎卓 『東洋史上から見た常陸国府・郡家の研究』 1970年３月

付　章　北田遺跡の古環境について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北田遺跡は，縄文時代中期，古墳時代，奈良・平安時代各期の竪穴住居跡をはじめ，古代の河川跡（流路跡）が検出されている。古代の河川跡からは，９世紀の土師器・須恵器などの遺物が多量に出土している。河川跡は，東西方向に伸び，古墳時代の住居跡群を一部削り込んでいる。

桜川流域で行われた古環境復元に関する調査状況をみると，上高津貝塚など霞ヶ浦沿岸地域では行われているが（土浦市教育委員会，1996など），上流域に関する成果は少ない。このことから，河道内の覆土を対象に自然科学分析調査を行うことで，古代の自然環境に関する情報が得られるものと期待された。そこで今回は，河道埋積物について花粉分析と珪藻分析を行い，当時の古植生や河道内水域の様子など古環境に関する情報を得ることを目的とした。

1　試料

試料は，河道を横断する方向に３地点（Ａ～Ｃ地点）で採取された。Ａ～Ｃの順で河道の中心部に向かい，概して堆積物も粗粒になっている。今回は目的や層相などを考慮に入れ，珪藻分析，花粉分析ともに７点を選択した。試料の詳細は表１に示す。

表１　分析試料一覧

地点	深度（cm）	層名	層相	分析項目 珪藻	分析項目 花粉
Ａ地点	0 ～ 5	1	黒色土（植物遺体多量）		
	5 ～ 10				
	10 ～ 15			○	○
	15 ～ 20				
	20 ～ 25				
	25 ～ 30				
	30 ～ 35				
	35 ～ 40				
	40 ～ 45			○	○
	45 ～ 50				
	50 ～ 55				
Ｂ地点	0 ～ 5	3	黒褐色土（植物遺体多量 ロームブロック少量）		
	5 ～ 10			○	○
	10 ～ 15				
	15 ～ 20	4	黒褐色土（植物遺体多量）		
	20 ～ 25			○	○
	25 ～ 30				
	30 ～ 35				
Ｃ地点	0 ～ 10	5	灰褐色砂質シルト層（砂礫、植物遺体混じる）	○	○
	10 ～ 20	6	灰褐色砂質シルト層（砂礫混じる）		
	20 ～ 30			○	○
	30 ～ 40	4	黒褐色土（植物遺体多量）	○	○

2　分析方法

(1)　珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し，過酸化水素水，塩酸処理，自然沈降法の順に物理・化学処理を施して，珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後，カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入して，永久プレパラートを作製する。検鏡は，光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い，メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し，珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は，原口ほか（1998），Krammer（1992），Krammer and Lange－Bertalot（1986，1988，1991ａ，1991ｂ）などを参照する。

同定結果は，淡水～汽水生種，淡水生種の順に並べ，その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお，淡水生種はさらに細かく生態区分し，塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また，環境指標種はその内容を示す。そして，産出個体数200個体以上の試料は，産出率2.0％以上の主要な種類について，主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また，産出化石が現地性か異地性かを判

断する目安として，完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析を行うにあたり，海水～汽水生種は小杉（1988），淡水生種は安藤（1990），陸生珪藻は伊藤・堀内（1991），汚濁耐性は，Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10ｇについて，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表，および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を，草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として，百分率で出現率を算出し図示する。

3 結果

(1) 珪藻分析

結果を表２，図１に示す。Ａ地点の40－45cm，Ｂ地点の５－10cm，25－30cmは，珪藻化石が少なかったが，その他の試料からは珪藻化石が豊富に産出する。また，完形殻の出現率は，Ｃ地点の０－10cmが約30％と低かったが，それ以外は70％前後である。産出分類群数は，合計で28属146種類である。地点別に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・Ａ地点

10－15cmでは，淡水域に生育する水生珪藻（以下，水生珪藻）と陸生珪藻（陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある珪藻）が混在することを特徴とするが，水生珪藻の方が幾分多い。淡水生種の生態性（塩分濃度，水素イオン濃度，流水に対する適応能）の特徴は，貧塩不定性種（小量の塩分には耐えられる種），真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）とｐＨ不定性種（pH7.0付近の中性水域に最もよく生育する種），流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が多産する。水生珪藻には特に多産するものはなく，淡水～汽水生の*Rhopalodia gibberula*，好流水性で中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*，*Fragilaria vaucheriae*，流水不定性の*Cymbella silesiaca*，*Eunotia pectinalis var.minor*，*Gomphonema parvulum*，*Pinnularia microstauron*が産出する。このうち，*Eunotia pectinalis var.minor*は，水深が１ｍ以下で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で多く見られる沼沢湿地付着生種群（安藤，1990）でもある。なお，中～下流性河川指標種群とは，河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘，扇状地，自然堤防，後背湿地などに集中して出現する種群のことである（安藤，1990）。陸生珪藻は，耐乾性の高いＡ群（伊藤・堀内，1991）の*Navicula mutica*が約20％と多産し，同じくＡ群の*Hantzschia amphioxys*，*Orthoseira roeseana*，未区分陸生珪藻（伊藤・堀内，1991）の*Pinnularia schoenfelderi*，水域にも陸域にも生育する陸生珪藻Ｂ群（伊藤・堀内，1991）の*Pinnularia subcapitata*を伴う。また，40－45cmは，上記と同様水生珪藻と陸生珪藻とが混在する群集を示すが，珪藻化石の検出が少ない。

・Ｂ地点

５－10cm，25－30cmともに水生珪藻と陸生珪藻とが混在するが，珪藻化石の産出が少ない。

・Ｃ地点

０－10cm，20－30cm，30－40cmとも水生珪藻が優占し，淡水生種の生態性や産出種の特徴も近似している。

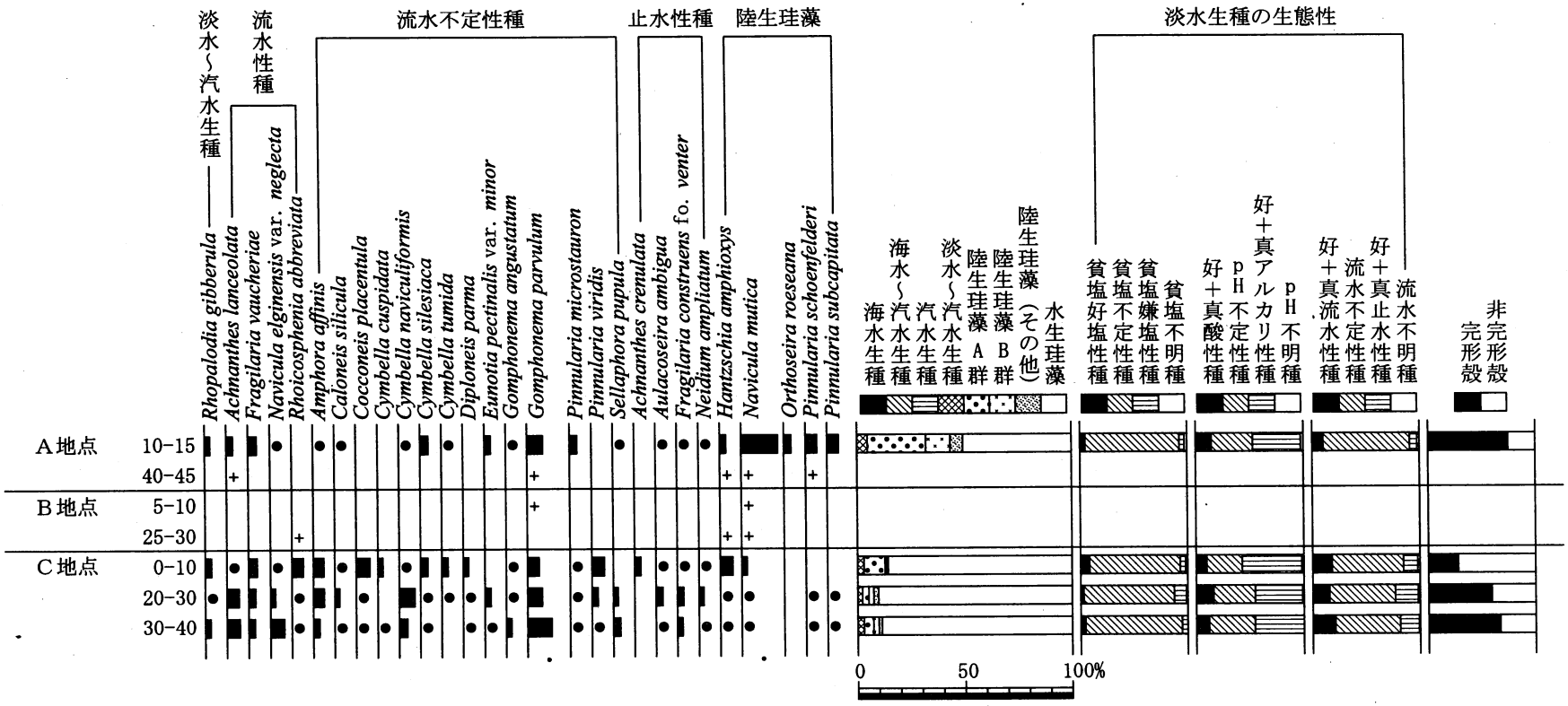


図１　主要珪藻化石群集の層位分布

汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、●は２％未満、＋は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

表2　珪藻分析結果（1）

種　　類	生態性			環境	A地点		B地点		C地点		
	塩分	pH	流水	指標種	10－15	40－45	5－10	25－30	0－10	20－30	30－40
Bacillaria paradoxa Gmelin	Ogh-Meh	al-bi	l-ph	U	1	1	－	－	－	－	－
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	－	1
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	3	－	－	－	－	－	－
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	－
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	1	－	－	－	－	－	－
Rhopalodia gibberula (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		5	－	－	－	6	4	5
Achnanthes clevei Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	－	－	－	－	2	1	－
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	－	－	－	－	6	－	－
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	－	－	－	－	1	1	2
Achnanthes hungarica Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	－
Achnanthes inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	－	－	－	－	1	－	－
Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	6	1	－	－	2	12	12
Achnanthes lapidosa Krasske	Ogh-ind	ac-il	ind	T	－	－	－	－	1	1	2
Achnanthes laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	－	－	－	－	1	－
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	－	1
Achnanthes montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RI,T	－	－	－	－	－	－	1
Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	T	1	－	－	－	3	2	2
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	10	11	6
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	－	－	－	－	－	3
Amphora pediculus (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	－	－	－	－	1	1	1
Anomoeoneis brachysira (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,T	－	1	－	－	－	－	－
Aulacoseira ambigua (Grun.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	1	－	－	－	2	7	4
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	－	1	－	－	－	－	－
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	2	－	－	－	1	1	－
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	－	－	－	2	5	1
Caloneis silicula var. minuta (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	－	2	1
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	13	2	1
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	－	－	－	－	1	－	－
Cocconeis placentula var. lineata (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	－	－	－	－	2	－	－
Craticula cuspidata (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	－	－	－	－	－	1	2
Cymbella amphioxys (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	－	－	－	1	－	－
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	5	－	1
Cymbella gracilis (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	T	－	－	－	－	－	－	2
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	1	－	－	－	3	16	8
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	8	－	－	－	7	3	4
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	－	－	－	2	－	2
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	－	－	－	－	－	1	3
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	－	－	－	6	1	－
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	－	－	－	－	－
Diatomella balfouriana (W.Smith) Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	－	－	1	－	1
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	－	3	1
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	5	1	1
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	1	－	－
Eunotia bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	－	－	－	－	1	－
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	－	－	－	－	－	2	－
Eunotia pectinalis (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	－	－	－	－	1	1	－
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	6	－	－	－	－	6	2
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	－	－	－	－	1	－	1
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	－	－	－	－	－	1	－
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	－	－	－	1	－	－
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	－	－	－	－	－	－	1
Fragilaria capucina var. rumpens (Kuetz.) Lange-B.	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	－	1
Fragilaria construens (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	－	－	－	－	－	2	－
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	1	－	－	－	1	6	5
Fragilaria parasitica (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	－
Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	－	－	－	－	－	1	－
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	1	－	3	－	－
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	8	－	－	－	8	7	6
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	－	－	－	－	1	－
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	－	－	－	4	2	5
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk		1	－	－	－	－	－	－
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	2	－	－	－	－	3	4
Gomphonema olivaceum var. minutissimum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		1	－	－	－	－	－	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	15	4	1	－	11	15	23
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	－	1	－	－	－	－	－
Gomphonema pseudosphaerophorum H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	l-ph		－	－	－	－	－	1	－
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	－	－	－	1	1	4
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.) Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	－	－	－	－	1	－	－
Gomphonema sarcophagus Gregory	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	－	3	2
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	－	－	－	－	－	1	－
Gomphonema subtile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind		1	－	－	－	－	－	－
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	－	－	－	－	－	1	－
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	－	－	－	－	－
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	6	1	－	1	12	3	1
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	2	－	－	－	2	1	1
Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	－	－	－	－	－	－	1
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	－	－	－	－	－	1
Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	2	－	－	－	1	－	2
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	－	－	－	1	5	13
Navicula explanata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	－	1	－	－	－
Navicula ignota var. palustris (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	－	－	－	－	－	－
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	35	4	1	2	5	2	2
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	－	－	－	－	1	－	－
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	1	1	－

表2　珪藻分析結果 (2)

種　　類	生態性			環境	A地点		B地点		C地点		
	塩分	pH	流水	指標種	10－15	40－45	5－10	25－30	0－10	20－30	30－40
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	－	－	－	－	－	－
Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	1	－	－	－	－	－	－
Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	－	－	－	－	－	1	－
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	－	－	－	－	－	1	－
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	－	－	－	－	－	3	1
Neidium affine var. longiceps (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi		1	－	－	－	－	－	－
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	2	－	－	－	－	－	－
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		2	－	－	－	2	5	1
Neidium dubium (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	－	1	－
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	－	－	－	－	－	1	－
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	4	－	－	－	－	－	－
Nitzschia angustata (W.Smith) Cleve	Ogh-ind	al-il	l-bi		－	－	－	－	－	1	－
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	2	－	－	－	－	－	－
Nitzschia hantzschiana Rabenhorst	Ogh-ind	al-bi	ind		1	1	－	－	－	－	－
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	－	－	－	－	－	－
Orthoseira roeseana (Rabh.) O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	7	－	－	－	－	－	－
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	－	－	－	－	4	4	4
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	－	－	1	－	2	－	1
Pinnularia brebissonii (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	－	－	－	－	2
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		－	－	－	－	3	－	－
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	1	－	1
Pinnularia divergentissima (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		－	－	－	－	－	－	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	1	1	－	－	2	3	2
Pinnularia gibba var. dissimilis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	－	1	－
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	－	－	1
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	1	1
Pinnularia intermedia (Largerst.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	－	－	－	－	－	－
Pinnularia lagerstedtii (Cleve) Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind	RI	－	－	－	－	－	1	－
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	3	－	－	－	1	－	2
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	7	－	－	－	2	3	4
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	－	－	－	－	－	1	－
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	－	－	－	－	1	－
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		1	－	－	－	3	2	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	11	1	－	－	－	3	1
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	1	－
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	11	－	－	－	－	3	4
Pinnularia subnodosa Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	－	1	－
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	1	1	－
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph		－	－	－	－	1	1	－
Pinnularia viridiformis Krammer	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	1	－	－
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	－	－	－	－	12	6	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	－	－	－	4	3	－
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.) Lange-B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	－	－	－	1	11	1	3
Rhopalodia gibba (Ehr.) O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		－	－	－	－	－	－	1
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		－	－	－	－	－	－	1
Sellaphora bacillum (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	ind	U	－	－	－	－	－	1	1
Sellaphora laevissima (Kuetz.) Mann	Ogh-ind	ind	ind		2	－	－	－	－	4	1
Sellaphora pupula (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	1	－	－	－	－	5	7
Sellaphora pupula fo. capitata (Skvortzow & Mayer)	Ogh-ind	ind	ind	U	－	－	－	－	－	－	3
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		－	－	－	－	1	－	－
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	－	－	－	1	－	1
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	－	－	－	－	－	1	2
Stauroneis legumen (Ehr.) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	－	1	－
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind		－	－	－	－	1	－	－
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	－	－	－	1	－	－
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	－	－	－	3	1	3
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	－	－	－	－	3	1	1
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		－	－	－	－	－	1	－
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	－	－	－	－	－	1	－
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	3	－	－	－	－	－	1
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	－	－	－	－	－	－	1
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	－	－	－	3	－	2
Surirella tenera Gregory	Ogh-hob	ind	l-bi		1	－	－	－	－	－	－
Tabellaria flocculosa (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	－	1	1	1	－	3	4
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					10	1	0	0	6	5	6
淡水生種合計					193	17	5	6	198	211	198
珪藻化石総数					203	18	5	6	204	216	204

凡　例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
Ogh－Meh　：淡水－汽水生種
Ogh－hil　：貧塩好塩性種
Ogh－ind　：貧塩不定性種
Ogh－hob　：貧塩嫌塩性種
Ogh－unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al－bi　：真アルカリ性種
al－il　：好アルカリ性種
ind　：ph不定性種
ac－il　：好酸性種
unk　：ph 不明種

C.R.：流水に対する適応性
l－bi　：真止水性種
l－ph　：好止水性種
ind　：流水不定性種
r－ph　：好流水性種
unk　：流水不明種

環境指標種群
J：上流性河川指標種，K：中～下流性河川指標種，N：湖沼沼沢湿地指標種，O：不真沼沢湿地付着生種（以上は安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai，K. & Watanabe，T.，1986）
R：陸性珪藻（RA：A 群，RB：B 群，RI 群，伊藤・堀内，1991）

貧塩不定性種，真＋好アルカリ性種とｐＨ不定性種，流水不定性種と真＋好流水性種（流水域に最も良く生育する種）が多産する。主な産出種は，中～下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*，*Fragilaria vaucheriae*，*Rhoicosphenia abbreviata*，好流水性の*Navicula elginensis var. neglecta*，流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Cymbella naviculiformis*，*Pinnularia viridis*，流水不定性の*Amphora affinis*，*Gomphonema parvulum*等である。

(2) 花粉分析

結果を表２・図２に示す。Ａ地点とＢ地点より採取された試料からは，花粉化石・シダ類胞子はほとんど検出されず，わずかにモミ属・マツ属・スギ属・エノキ属－ムクノキ属などが検出された。一報Ｃ地点より採取された試料からは，花粉化石・シダ類胞子が豊富に産出する。検出される花粉化石群集は，いずれも類似する。木本花粉ではモミ属が最も多く産出し，ツガ属・マツ属・ブナ属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属－ケヤキ属などが検出される。草本花粉ではイネ科が多く，カヤツリグサ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節などが産出する。その他に，ガマ属・オモダカ属・イボクサ属・ミズアオイ属などの水生植物も検出される。

4　考察

Ａ地点では，１層から珪藻化石が産出した。その群集組成の特徴は，生育環境を異にする水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。Ａ地点は河道の端に位置し，腐植が多く細粒（シルト）である。水生珪藻は，河川の影響を受けている時期の堆積環境を反映していると考えられる。中～下流性河川指標種群を含む流水性種，沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種などを含むことから，堆積時には流水の影響を受ける沼沢地的な水域環境であったと考えられる。一方で乾いた環境に生育する陸生珪藻Ａ群が多産するが，これは河川の影響を受けなくなったあとの堆積環境を反映しているとみられる。おそらく，氾濫堆積物を母材として土壌化が進み，この時地表面に陸生珪藻が生育したものと考えられる。現在の洪水堆積物の研究によれば，小規模な氾濫の場合，河道の中心に近い場所ではトラフ型の斜交葉理を示すが，その外側には植物片などの浮遊物が集積し，さらに外側では植生は破壊されず薄い泥が堆積する（鈴木，1994）。Ａ地点やＢ地点でみられる黒色土は，氾濫によってもたらされた植物片が河道の縁に集積したものや土壌化が進む際に地上面を覆っていた植物に由来すると考えられる。なお，黒色土の発達するＡ地点とＢ地点では，花粉化石，珪藻化石ともに保存状態が悪い。花粉化石は好気的環境下における風化に弱く（中村，1967），Ａ地点のように地表面が安定し乾燥した状況下では大部分が分解された可能性がある。一方珪藻化石は珪酸質からなるが，類似した化学組成をもつ植物珪酸体は，植物に再び吸収されたり粘土の形成に関与したりして，土壌中では比較的早い段階で消失する可能性が指摘されている（近藤，1988）。珪藻化石の風化のメカニズムは，まだ不明な点が多い。ただし，検出された珪藻化石に風化の痕跡が認められていること，珪藻の骨格を作るシリカは風化を受けて溶脱し，他の鉱物に変化すること（千木良，1995）などを考慮すれば，珪藻化石も風化により消失した可能性がある。これらのことから，黒色土の発達するＡ地点やＢ地点は冠水している期間が短かったといえそうである。

Ｃ地点は，灰色の砂質な堆積物を中心としており，河川の中心に近いと考えられる。珪藻化石群集をみると，中～下流性河川指標種群を含む流水性種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が混在することから，流水下で堆積した堆積物と推測される。このような群集は，堆積物の層相や微地形からみても調和的である。

木本花粉の組成をみると，マツ属，モミ属，ツガ属，トウヒ属など針葉樹の産出が特徴的である。これらの針葉樹は，加波山などの後背山地を中心に分布していたと考えられ，温帯針葉樹林を形成していたものとみられる。また，ブナ属やアカガシ亜属も山地に安定した森林を作る種類であることから，山地を中心に分布していたと考えられる。関東地方の潜在自然植生図（宮脇，1986）によれば，加波山の潜在自然植生は，山頂部は

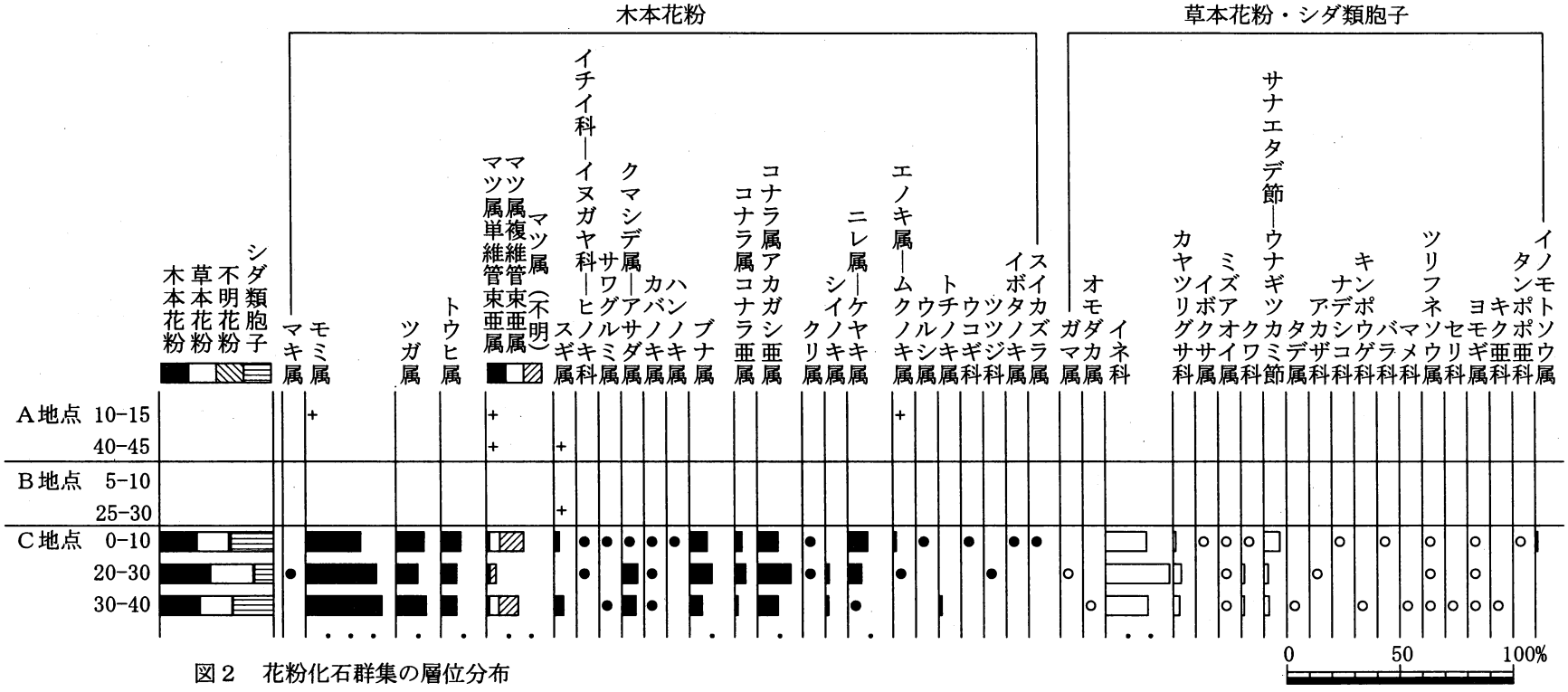


図２　花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

表3　花粉分析結果

種　類	A 地点		B 地点		C 地点		
試料番号	10－15	40－45	5－10	25－30	0－10	20－30	30－40
木本花粉							
マキ属	－	－	－	－	－	1	－
モミ属	1	－	－	－	53	72	48
ツガ属	－	－	－	－	27	22	19
トウヒ属	－	－	－	－	19	16	10
マツ属単維管束亜属	－	－	－	－	3	4	2
マツ属複維管束亜属	2	－	－	－	10	－	6
マツ属（不明）	－	1	－	－	23	6	12
スギ属	－	1	－	1	5	－	6
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	－	－	－	－	1	1	－
サワグルミ属	－	－	－	－	1	－	1
クマシデ属－アサダ属	－	－	－	－	2	16	9
カバノキ属	－	－	－	－	1	2	1
ハンノキ属	－	－	－	－	1	－	－
ブナ属	－	－	－	－	17	23	8
コナラ属コナラ亜属	－	－	－	－	7	11	2
コナラ属アカガシ亜属	－	－	－	－	20	34	13
クリ属	－	－	－	－	1	1	－
シイノキ属	－	－	－	－	－	4	2
ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	－	19	14	1
エノキ属－ムクノキ属	2	－	－	－	3	2	－
ウルシ属	－	－	－	－	1	－	－
トチノキ属	－	－	－	－	－	－	2
ウコギ科	－	－	－	－	1	－	－
ツツジ科	－	－	－	－	－	1	－
イボタノキ属	－	－	－	－	1	－	－
スイカズラ属	－	－	－	－	2	－	－
草本花粉							
ガマ属	－	－	－	－	－	1	－
オモダカ属	－	－	－	－	－	－	1
イネ科	－	－	－	－	119	144	75
カヤツリグサ科	－	－	－	－	8	18	11
イボクサ属	－	－	－	－	1	－	－
ミズアオイ属	－	－	－	－	1	2	1
クワ科	－	－	－	－	2	7	5
サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	－	－	－	45	9	9
タデ属	－	－	－	－	－	－	1
アカザ科	－	－	－	－	－	5	－
ナデシコ科	－	－	－	－	3	－	－
キンポウゲ科	－	－	－	－	－	－	2
バラ科	－	－	－	－	1	－	－
マメ科	－	－	－	－	－	－	2
ツリフネソウ属	－	－	－	－	1	1	1
セリ科	－	－	－	－	－	－	1
ヨモギ属	－	－	－	－	3	4	1
キク亜科	－	－	－	－	－	－	2
タンポポ亜科	－	－	－	－	1	－	－
不明花粉	1	2	－	－	12	7	3
シダ類胞子							
イノモトソウ属	－	－	－	－	7	－	－
他のシダ類胞子	15	3	14	5	243	86	143
合　計							
木本花粉	5	2	0	1	218	230	142
草本花粉	0	0	0	0	185	191	112
不明花粉	1	2	0	0	12	7	3
シダ類胞子	15	3	14	5	250	86	143
総計（不明を除く）	20	5	14	6	653	507	397

ブナを中心とする冷温帯広葉樹林，中腹がモミ属などの中間温帯林，低地に近いところはシイ・カシ類などの常緑広葉樹林になるとされており，花粉分析の結果と調和的である。なお，加波山の山麓には扇形の緩斜面が特徴的にみられ，土石流災害もしばしば起こっている（宮崎ほか，1996）。このように斜面地が不安定で土壌が流出しやすい場合には，カシ類よりも痩地に強いモミが生育する場合が多い。本来遺跡が立地する標高では，シイ・カシ類からなる森林が存在すると思われるが，地形的要因によりモミなどの針葉樹林が本遺跡周辺まで分布を拡大していた可能性もある。花粉分析結果でモミ属が多いのは，このことを示唆するものとみられる。一方，ナラ類やカシ類，ニレ属－ケヤキ属，クマシデ属－アサダ属などの広葉樹は谷部や河道沿いやを中心に生育していたと考えられる。先述した上高津貝塚や宇野沢ほか（1988）などの成果をみると，ナラ類やカシ類，ニレ属－ケヤキ属，クマシデ属－アサダ属などが多く，今回の成果とは異なっている。この理由としては，これらの遺跡の花粉化石群集は，低地や山地縁辺部の植生を強く反映しているのに対し，本遺跡は山地に近いことから，山地の植生を強く反映しているためと思われる。

一方草本花粉をみると，イネ科を中心にサナエタデ節－ウナギツカミ節やカヤツリグサ科などが検出されており，これらは河道周辺に草地を作っていたものと思われる。また，イボクサ属やミズアオイ属など水生植物の花粉化石も検出されることから，これらは河道内に生育していたと思われる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p.73－88.

Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35－47.

千木良雅弘（1995）風化と崩壊.204p.，近未来社.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p.527－600.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23－45.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1－20.

小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析．日本ベントス研究会誌，35／36，p.17－28.

近藤練三（1988）植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代．ペトロジスト，32

Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1－353., BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2 / 1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2 / 2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2 / 3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema. Band 2 / 4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

宮崎一博・笹田政克・吉岡敏和（1996）5万分の1地質図幅　真壁地域の地質.103p. 地質調査所

宮脇　昭編（1986）日本植生誌　関東.641p.，至文堂.

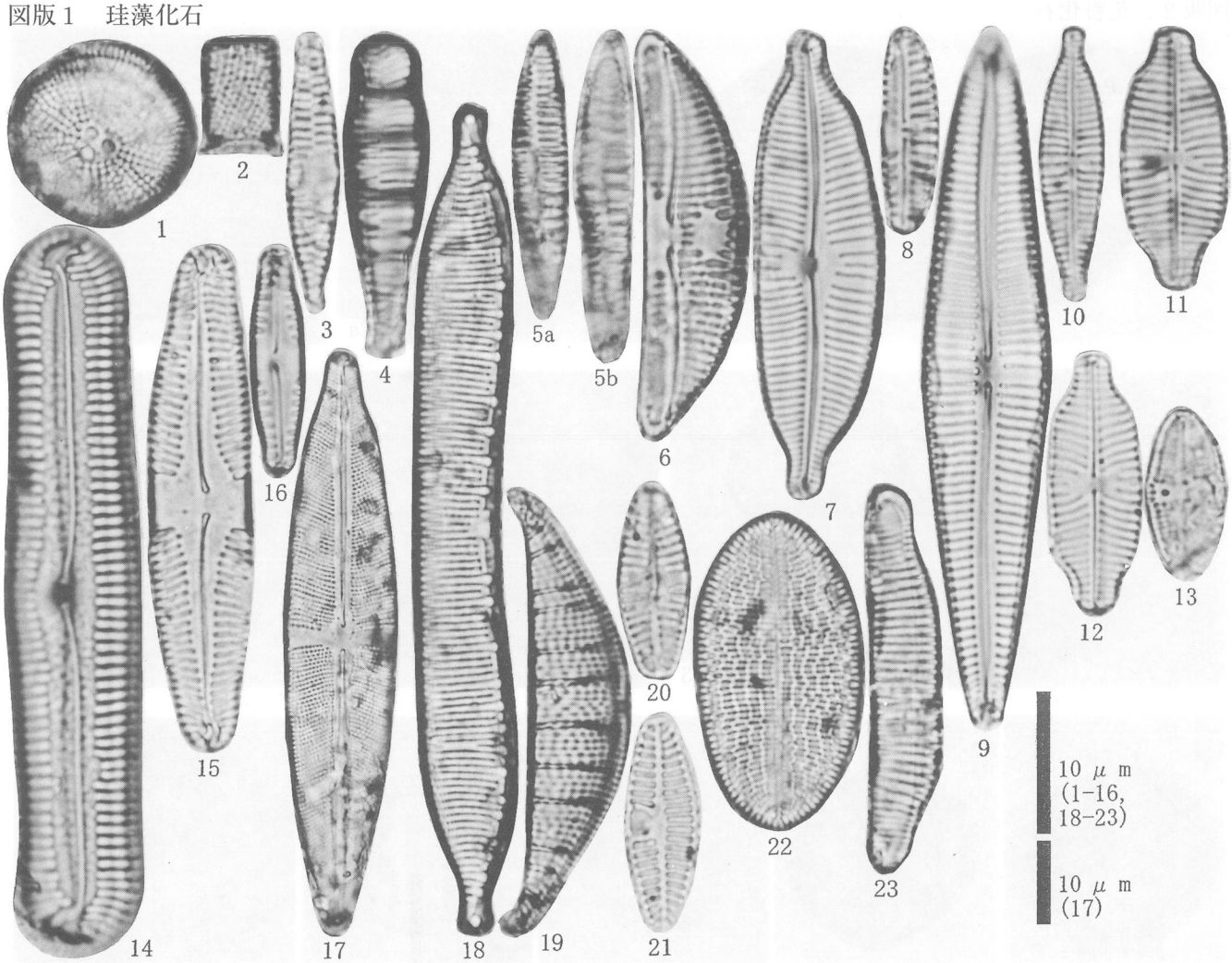
中村　純（1967）花粉分析.232p.，古今書院.

鈴木一久（1994）1993年９月９日野洲川洪水氾濫堆積物の３次元形態と堆積構造：１回の洪水氾濫で形成された複数の逆級化構造ユニット．地質学雑誌，100，p.867－875.

土浦市教育委員会（1996）国指定史跡上高津貝塚整備事業報告書.99p.土浦市教育委員会.

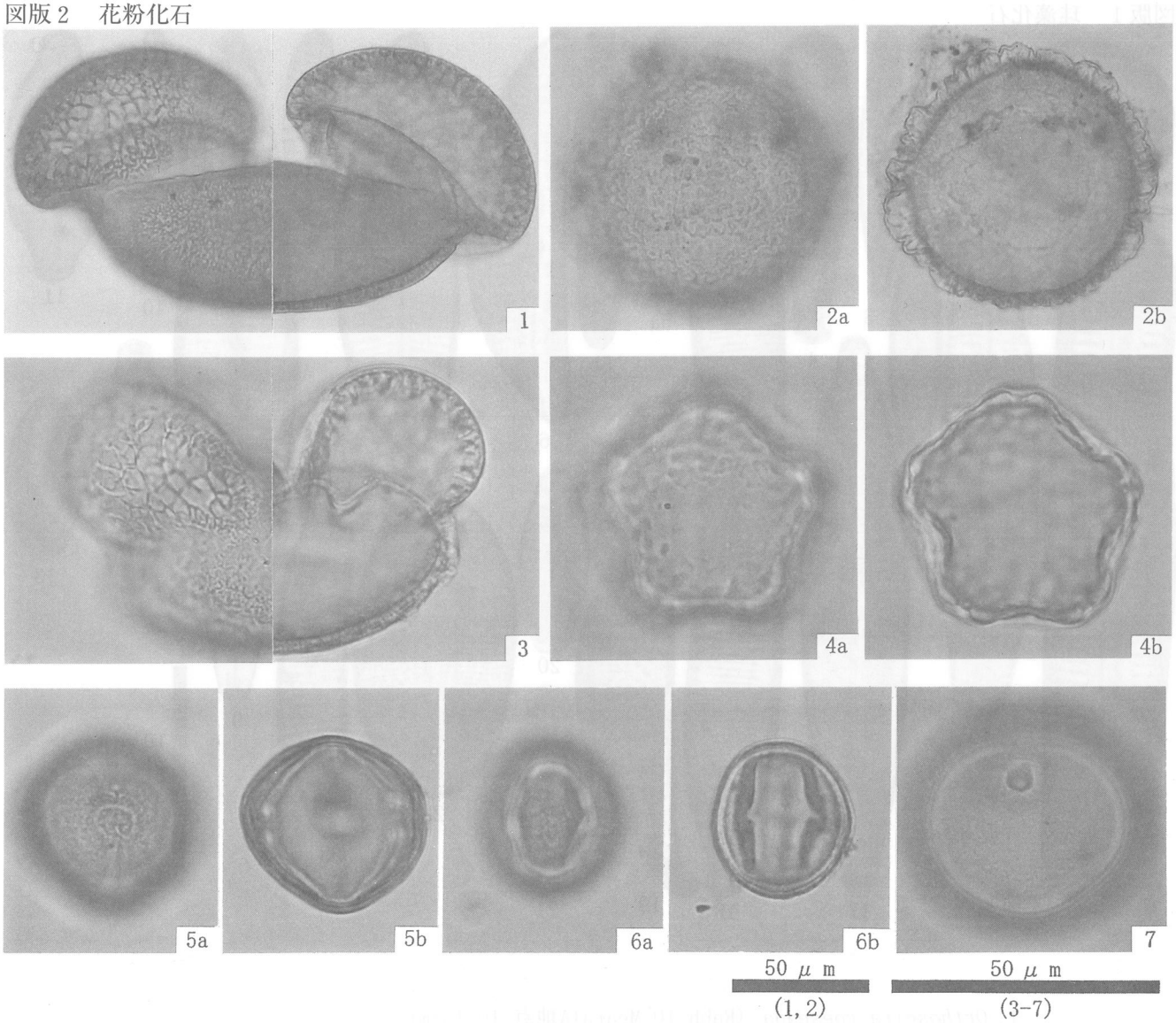
宇野沢　昭・磯部一洋・遠藤秀典・田口雄作・永井　茂・石井武政・相原輝雄・岡　重文（1988）特殊地質図　23－２筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図.139p.，地質調査所.

図版１　珪藻化石



1. *Orthoseira roeseana* (Rabh.)O'Meara(A地点;10-15cm)
2. *Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen(C地点;0-10cm)
3. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.)Petersen(C地点;0-10cm)
4. *Meridion circulae* var.*constrictum* (Ralfs)V.Heurck(C地点;30-40cm)
5. *Rhoicosphenia abbreviata* (Ag.)Lange-Bertalot(B地点;25-30cm)
6. *Amphora affinis* Kuetzing(C地点;0-10cm)
7. *Cymbella naviculiformis* Auerswald(C地点;0-10cm)
8. *Cymbella sinuata* Gregory(A地点;10-15cm)
9. *Gomphonema gracile* Ehrenberg(C地点;30-40cm)
10. *Gomphonema parvulum* Kuetzing(A地点;10-15cm)
11. *Navicula explanata* Hustedt(B地点;25-30cm)
12. *Navicula elginensis* var.*neglecta* (Krass.)Patrick(C地点;30-40cm)
13. *Navicula mutica* Kuetzing(B地点;25-30cm)
14. *Pinnularia acrosphaeria* W.Smith(C地点;30-40cm)
15. *Pinnularia microstauron* (Ehr.)Cleve(C地点;30-40cm)
16. *Pinnularia subcapitata* Gregory(A地点;10-15cm)
17. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.)Ehrenberg(C地点;0-10cm)
18. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(C地点;0-10cm)
19. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(C地点;30-40cm)
20. *Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(C地点;0-10cm)
21. *Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow(C地点;30-40cm)
22. *Cocconeis placentula* var.*euglypta* (Ehr.)Cleve(C地点;0-10cm)
23. *Eunotia pectinalis* var.*minor* (Kuetz.)Rabenhorst(C地点;0-10cm)

図版２　花粉化石

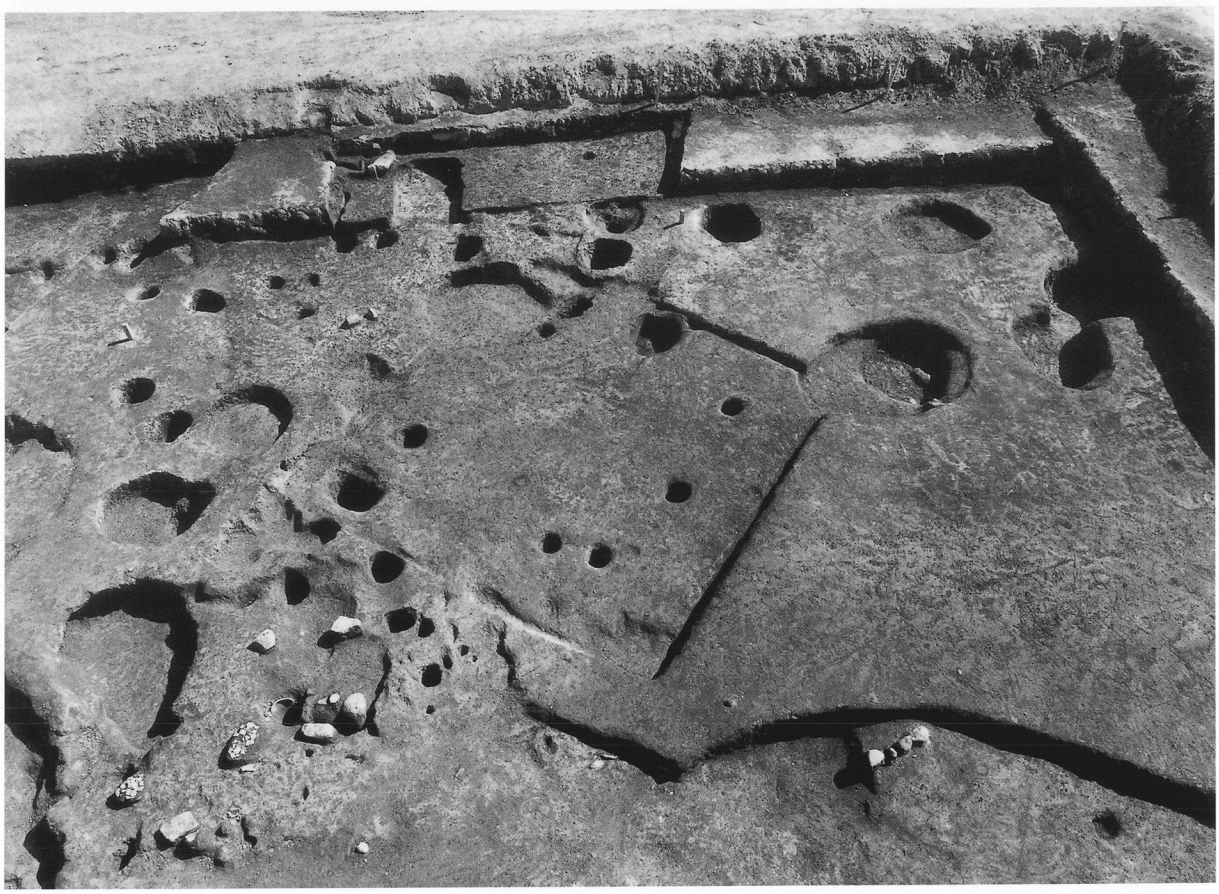


1．モミ属(C地点;0-10cm)　2．ツガ属(C地点;0-10cm)
3．マツ属(C地点;0-10cm)　4．ニレ属ーケヤキ属(C地点;0-10cm)
5．ブナ属(C地点;0-10cm)　6．コナラ属アカガシ亜属(C地点;0-10cm)
7．イネ科(C地点;0-10cm)

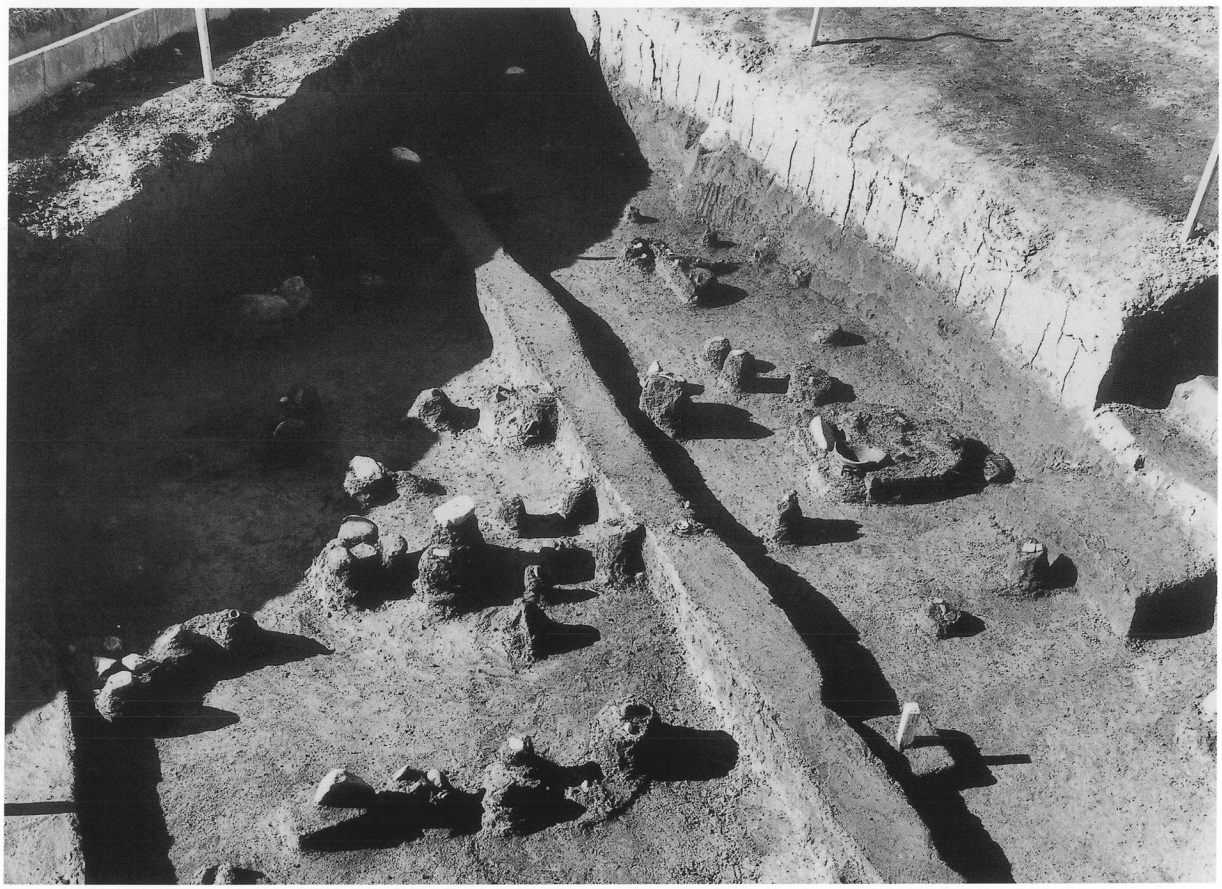
写　真　図　版

上　遺跡遠景（北西から）　下　遺跡遠景（西から）

上　遺跡遠景（真壁城から）　下　調査Ａ区全景



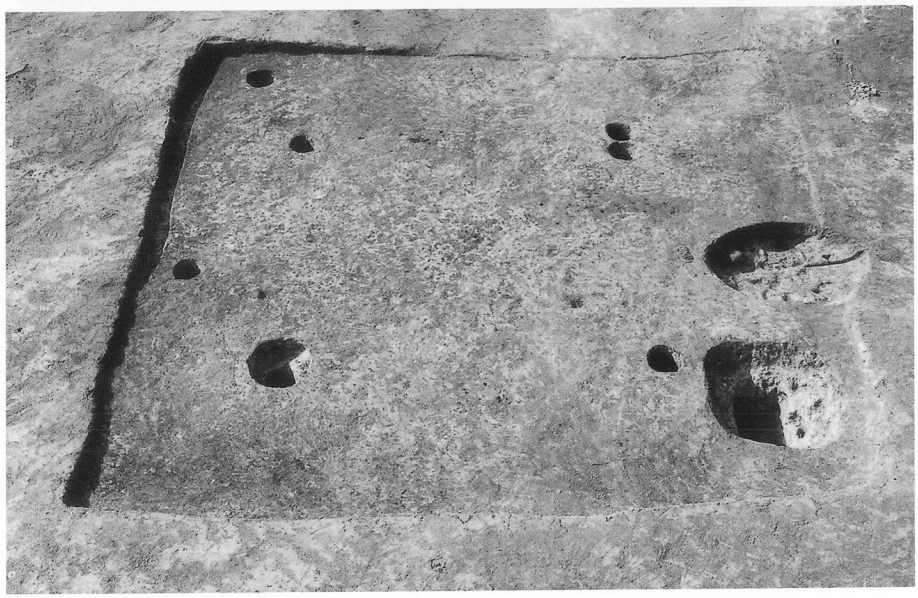
上　調査D・E区全景　下　調査D区東側完掘状況



上　調査Ｅ区完掘状況　下　第１号遺物包含層遺物出土状況

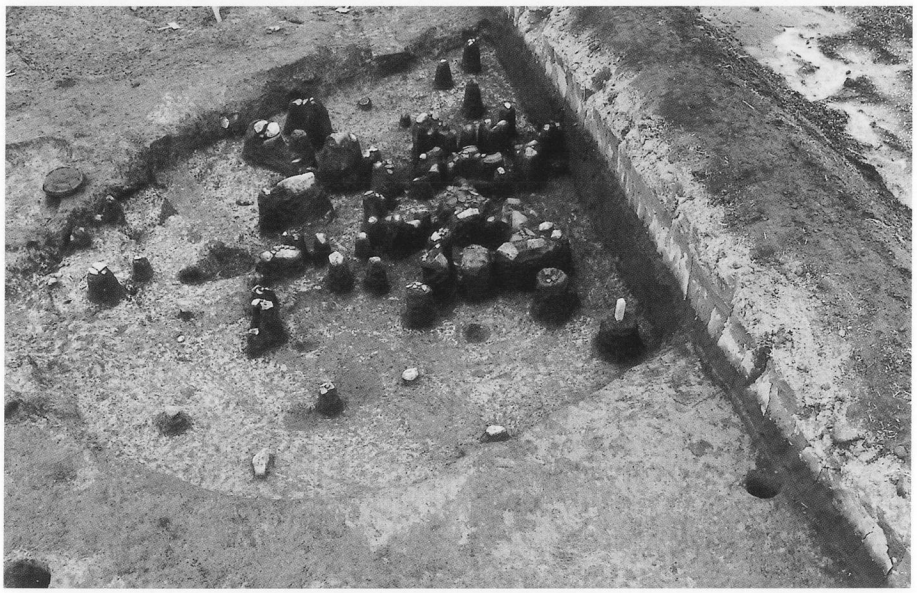
第１号住居跡
完 掘 状 況

第１号住居跡
遺物出土状況

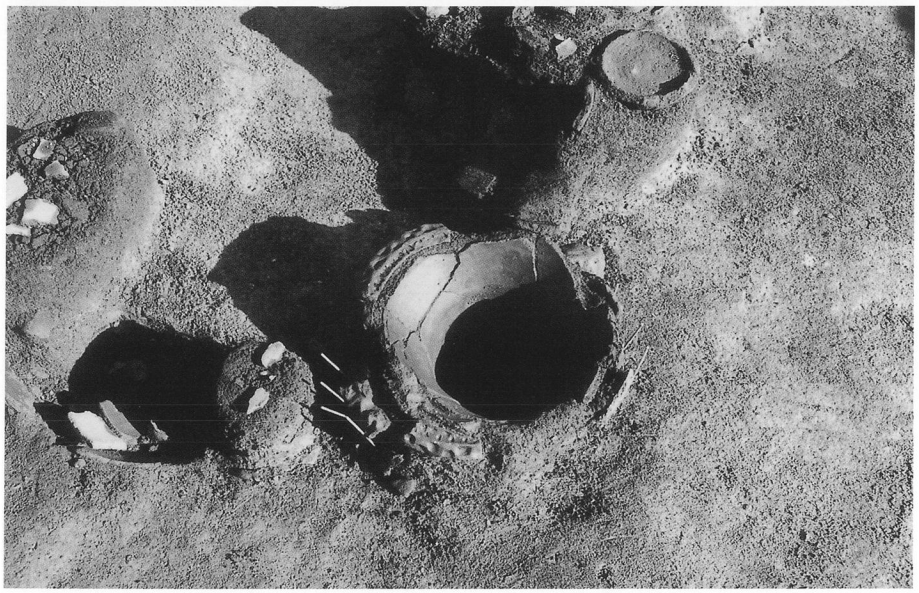


第２号住居跡
完 掘 状 況

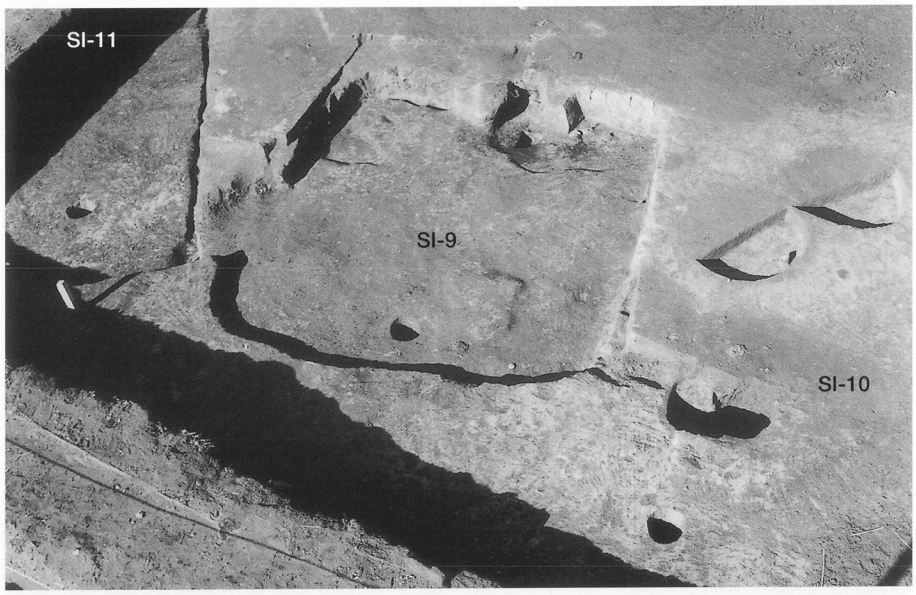
第 2 号住居跡
遺物出土状況



第 6 号住居跡
遺物出土状況



第 8 号住居跡炉
遺物出土状況
（炉体土器）



第9・10・11号住居跡
完　掘　状　況

第10号住居跡
遺物出土状況

第10・11号住居跡
遺物出土状況

第13号住居跡
完 掘 状 況

第13号住居跡
遺物出土状況

第15号住居跡
遺物出土状況

第19号住居跡
遺物出土状況

第19号住居跡
竈遺物出土状況

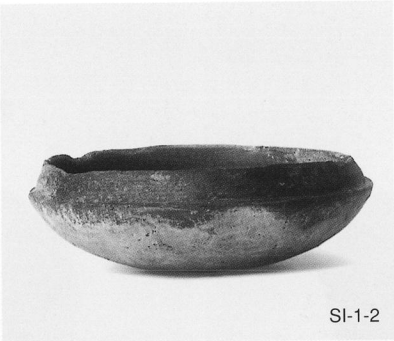
第1号配石遺構
完　掘　状　況

第３号流路跡
遺物（田舟）
出土状況（１）

第３号流路跡
遺物（挽物）
出土状況（２）

第３号流路跡
遺物出土状況（３）

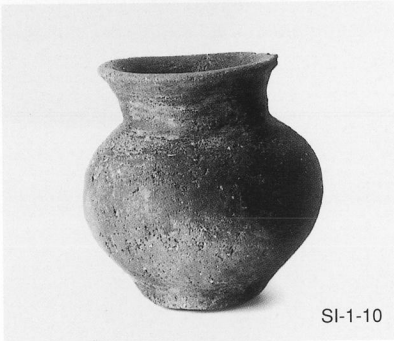
SI-1-1


SI-1-2

SI-1-3

SI-1-4

SI-1-5


SI-1-10

SI-1-9

SI-1-14

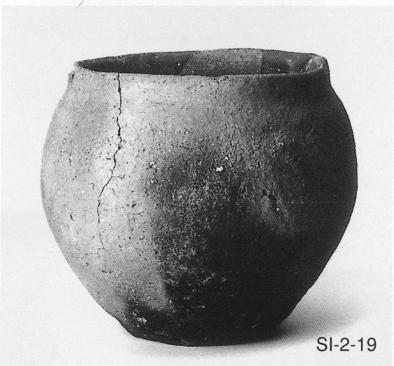
SI-1-11

第１号住居跡出土遺物

SI-1-13

SI-2-18

SI-2-16


SI-2-19

SI-6-41

SI-6-40

SI-10-48

SI-8-43

SI-10-54

第1・2・6・8・10号住居跡出土遺物

SI-10-49

SI-10-50

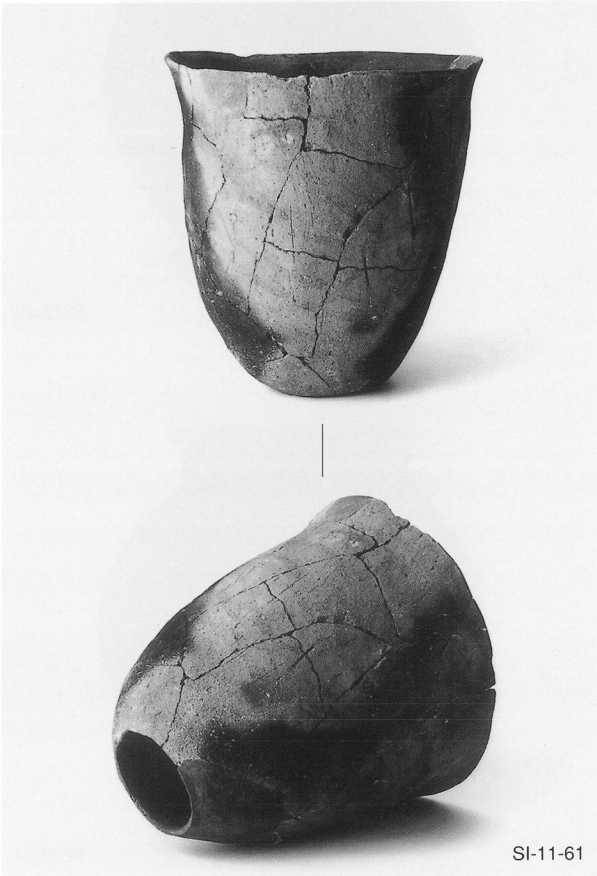
SI-10-51

SI-10-56

SI-10-57

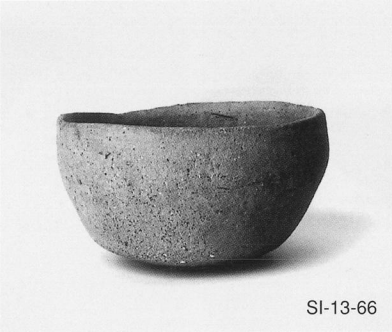
SI-10-55

SI-10-58


SI-11-61

第10・11号住居跡出土遺物

SI-13-63


SI-13-66

SI-13-67

SI-13-62

SI-13-68

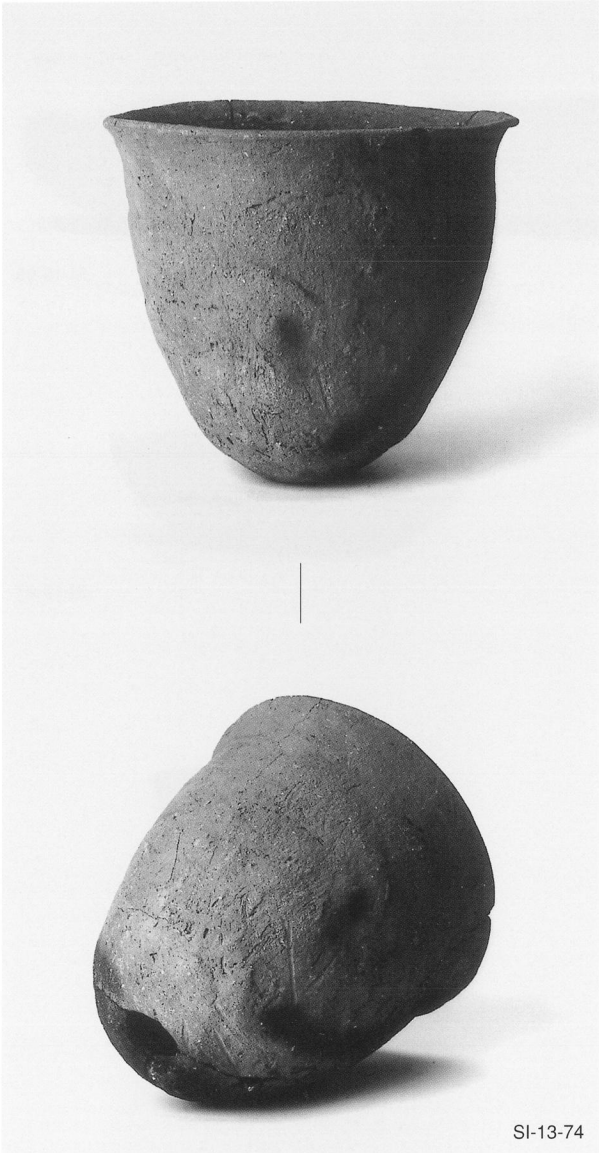
SI-13-69

SI-13-70

SI-13-71

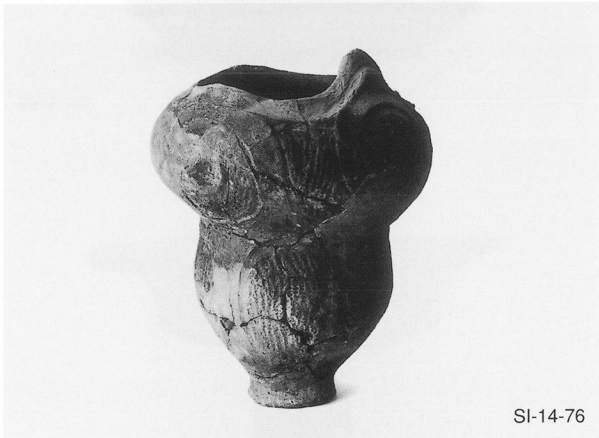
SI-13-72

第13号住居跡出土遺物



SI-13-74

SI-14-78

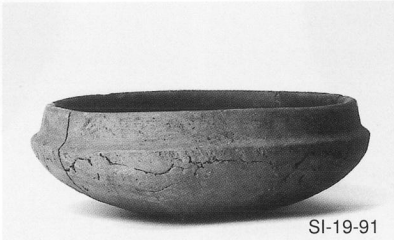


SI-14-76

SI-16-88

SI-16-89

SI-19-90



SI-19-91

SI-19-92

第13・14・16・19号住居跡出土遺物

SI-19-93

SI-19-94

SI-19-95

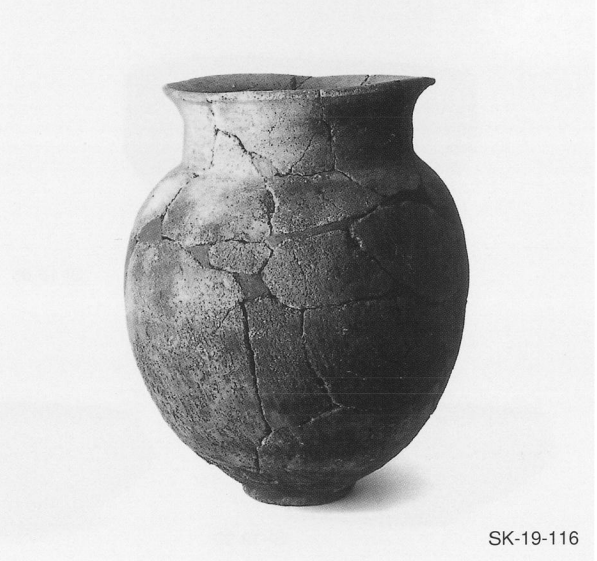
SI-19-96

SI-19-97

SI-19-101

SI-19-102

SI-19-103


SK-19-116

第19号住居跡，第19号土坑出土遺物

SI-19-104

SI-19-105

SI-20-106

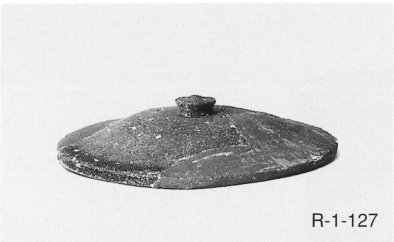
SK-20-117

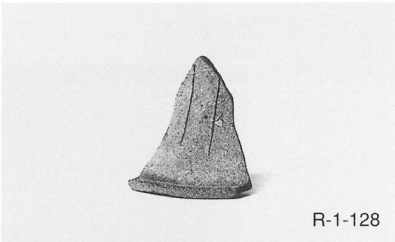
SI-23-111

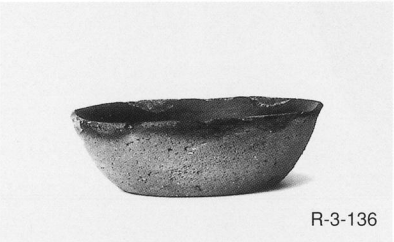
SK-7-114

第19・20・23号住居跡，第7・20号土坑出土遺物

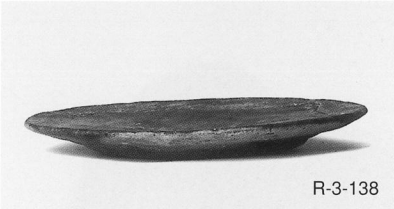
SK-32-119


R-1-127


R-1-128

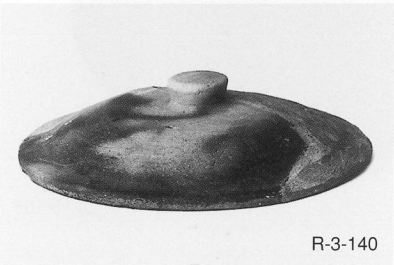

R-3-136

R-3-137

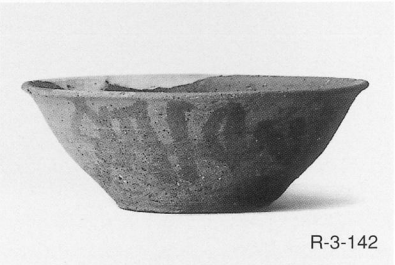

R-3-138

R-3-139

R-3-154


R-3-140

R-3-141


R-3-142

R-3-143

R-3-153

R-3-146

第1号遺物包含層-157

第1号遺物包含層-158

第32号土坑，第1・3号流路跡，第1号遺物包含層出土遺物

R-3-148

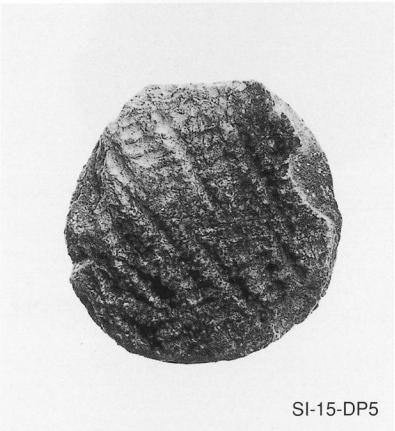
SI-14-DP2

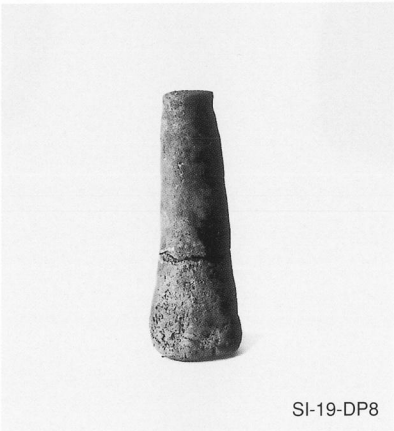
SI-14-DP3

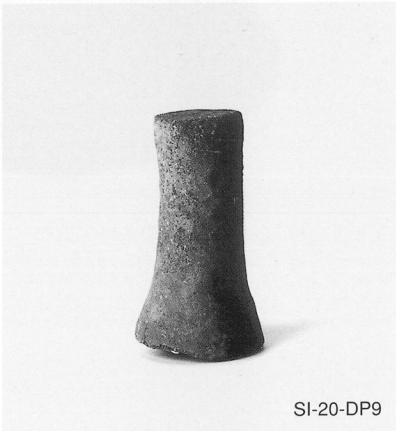
SI-6-DP1

SI-15-DP6

SI-15-DP7


SI-15-DP5


SI-19-DP8


SI-20-DP9

SI-8-Q8

SI-14-Q11

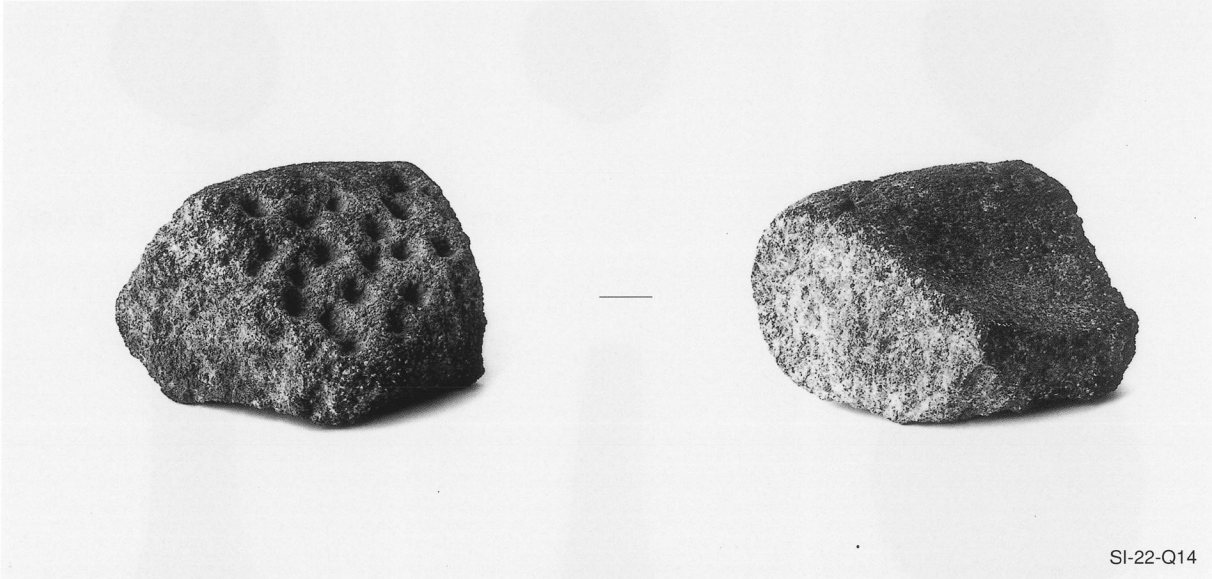
SI-14-Q12

第6・8・14・15・19・20号住居跡，第3号流路跡出土遺物

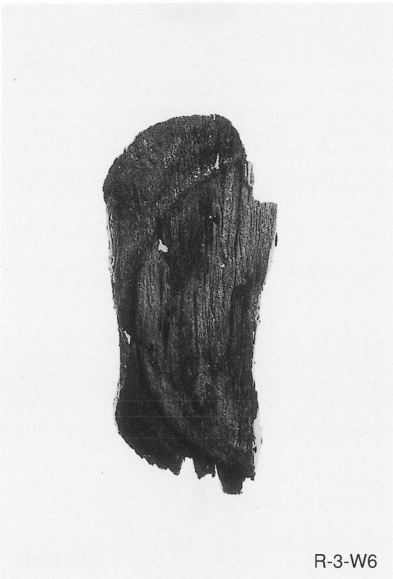
SI-21-Q13

SK-47-Q19

SK-47-Q20


SI-22-Q14

SK-43-Q18


R-3-W6

A区表採-Q24

第21・22号住居跡，第43・47号土坑，第3号流路跡，A区表採出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第206集

北田遺跡

平成15（2003）年3月20日 印刷
平成15（2003）年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310－0911 水戸市見和1丁目356番2号
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029－225－6587

印刷 ㈲平電子印刷所
〒970－8024 いわき市平北白土字西ノ内13
TEL 0246－23－9051